

一般国道
10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第9集

大塚本遺跡

福岡県築上郡大平村大字下唐原所在遺跡の調査

1998

福岡県教育委員会

おお つか もと
大 塚 本 遺 跡

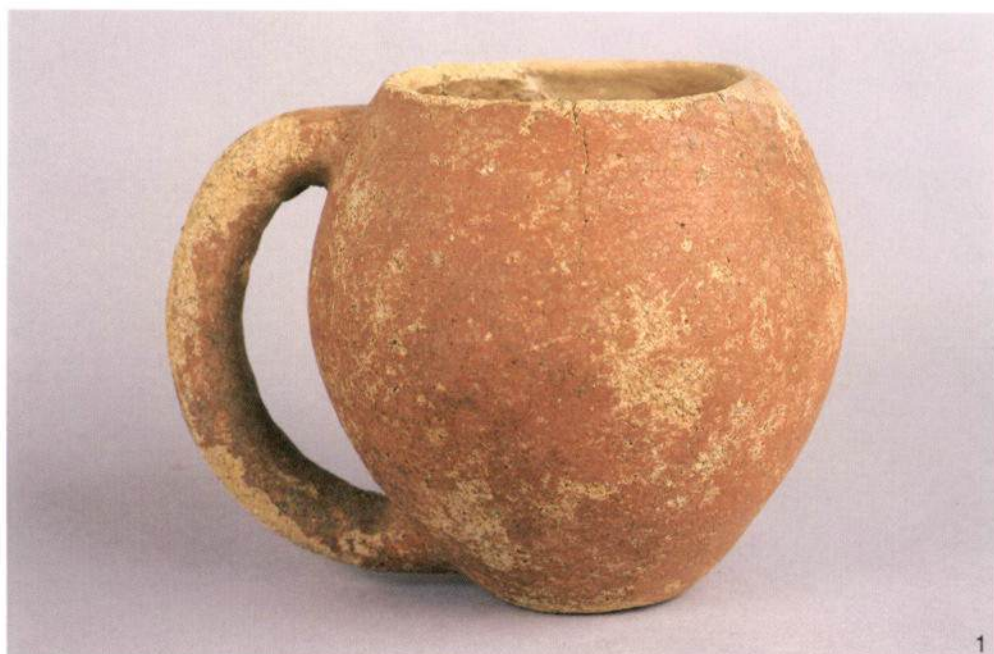
福岡県築上郡大平村大字下唐原所在遺跡の調査



1. 1号墳丘墓と1～5号祭祀土坑（空中写真、南東から）



2. 1号墳丘墓（空中写真、上空から）



1



2



3

1. 1号祭祀土坑出土土器
2. 同穿孔部分
3. 下野地2号墳出土玉類

序

福岡県教育委員会では、建設省九州地方建設局の委託を受け、昭和62年度から一般国道10号豊前バイパス建設に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は平成6年度に終了し、豊前バイパスは平成7年3月に全線開通いたしました。

今回ここに報告する築上郡大平村所在の大塚本遺跡は、平成3年度に調査を行ったもので、本書は豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第9集目にあたります。

大塚本遺跡の特徴は、現在のところこの地域で最古の墳丘墓と一般群集墓の2者を調査できたことで、弥生中期の2階級の身分が墓制から確認できました。

報告書として十分に満足のいくものではありませんが、地域の文化財に対する認識と理解ならびに文化財愛護思想の普及などに活用していただければ幸甚に存じます。

なお、発掘調査および整理・報告に当たり、御協力いただいた方々に深甚の謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

例 言

1. この報告書は、平成3（1991）年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道10号豊前バイパスの建設予定地のうち、第4地点についての埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本書は、一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第9集で、福岡県築上郡大平村大字下唐原に所在する「大塚本遺跡」に関する報告書である。
3. 出土遺物は、九州歴史資料館において、土器類を岩瀬正信氏、金属器を横田義章氏が、それぞれ指導してその整理を行った。
4. 本書に掲載した遺構の実測図は、副島邦弘・小川泰樹の調査担当者と犬塚カヲル・植山智保子・木下秀子・友田鈴香・是石美知子・原田和代・川野礼子・椋田幸子・園田喜代美・中井美代子・横山康子が、遺物は堀之内久美子・古田千穂・岡由美子・副島・小川が作成し、製図を豊福弥生・原カヨ子が行った。
5. 本書に掲載した写真は、遺構を副島・小川が、遺物については九州歴史資料館において、石丸洋と北岡伸一の各氏が担当した。また、気球写真は南空中写真企画に委託した。
6. 本書に使用した方位は、座標北（G.N）の他、特記しないものは磁北である。
7. 本書の執筆は、Ⅳについては中橋孝博（九州大学）、Ⅰ-1・2・Ⅱ-4の2）・3）・4）とⅢ-2を副島が、Ⅰ-3を末永浩一（大平村教育委員会）が、その他を小川が行い、担当箇所は文末に明記してある。また、編集は各担当者が行い、小川が取りまとめた。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査の経過と調査組織	1
2. 調査の組織と関係者	7
3. 遺跡の位置と環境	7
II. 遺構と遺物	15
1. 縄文時代	15
1) 埋甕	15
2. 弥生時代	16
1) 墳墓	16
2) 祭祀土坑	35
3) 土坑	53
4) 墳丘墓	53
3. 古墳時代	63
1) 古墳	63
2) 住居跡	71
4. 歴史時代	73
1) 掘立柱建物跡	73
2) 近世墓	74
3) 焼土壙	94
4) 小結	99
5. その他の遺構と遺物	103
1) 落とし穴	103
2) その他出土の遺物	105
III. おわりに	106
1. 弥生時代墳墓について	106
2. 常世の国へ	109
IV. 科学的分析	120
1. 福岡県築上郡大平村大塚本遺跡出土の近世人骨	120
2. 福岡県築上郡大平村金居塚遺跡出土の近世人骨	123

巻頭図版目次

- 巻頭図版 1 1. 1号墳丘墓と1～5号祭祀土坑（空中写真、南東から）
2. 1号墳丘墓（空中写真、上空から）
- 巻頭図版 2 1. 1号祭祀土坑出土土器
2. 同穿孔部分
3. 下野地2号墳出土玉類

図版目次

- 図版 1 1. 1区全景（空中写真、北西から）
2. 2区全景（空中写真、上空から）
- 図版 2 1. 3～5区全景（空中写真、南東から）
2. 弥生時代墳墓群（空中写真、上空から）
- 図版 3 1. 1号埋甕（北から）
2. 1号墓（東から）
- 図版 4 1. 2号墓（東から）
2. 3号墓（南西から）
- 図版 5 1. 4号墓（東から）
2. 5号墓（南西から）
- 図版 6 1. 6号墓（東から）
2. 7号墓（北から）
- 図版 7 1. 8号墓（東から）
2. 9号墓（南西から）
- 図版 8 1. 10号墓（西から）
2. 11号墓（南から）
- 図版 9 1. 12号墓（西から）
2. 13号墓（西から）
- 図版10 1. 14号墓（西から）
2. 15号墓（北西から）
- 図版11 1. 16号墓（西から）
2. 17号墓（西から）
- 図版12 1. 18号墓（西から）

2. 19号墓 (南西から)
- 図版13
1. 20号墓 (西から)
 2. 21号墓 (北東から)
- 図版14
1. 22号墓 (東から)
 2. 23・24号墓 (東から)
- 図版15
1. 25号墓 (北東から)
 2. 26号墓 (北東から)
- 図版16
1. 27号墓 (北西から)
 2. 28号墓 (西から)
- 図版17
1. 29号墓 (南西から)
 2. 30号墓 (北西から)
- 図版18
1. 30号墓 (蓋石除去後、北西から)
 2. 30号墓 (石棺部分、北西から)
- 図版19
1. 31・32号墓 (北東から)
 2. 31・32号墓 (蓋石除去後、北東から)
- 図版20
1. 33号墓 (北東から)
 2. 34号墓 (南から)
- 図版21
1. 35号墓 (西から)
 2. 36号墓 (西から)
- 図版22
1. 37号墓土器出土状況 (東から)
 2. 37号墓 (東から)
- 図版23
1. 1号祭祀土坑 (北から)
 2. 1号祭祀土坑土器出土状況 (北から)
- 図版24
1. 2号祭祀土坑 (北東から)
 2. 3号祭祀土坑 (北から)
- 図版25
1. 4号祭祀土坑 (西から)
 2. 5号祭祀土坑 (南西から)
- 図版26
1. 1号土坑 (東から)
 2. 1号墳丘墓と1～5号祭祀土坑 (空中写真、南東から)
- 図版27
1. 1号墳丘墓周溝南東辺 (南西から)
 2. 1号墳丘墓周溝南西辺 (南東から)
- 図版28
1. 1号墳丘墓周溝Cベルト土層 (南から)
 2. 1号墳丘墓周溝Dベルト土層 (北東から)

- 図版29 1. 1号墳丘墓周溝Eベルト土層（南東から）
2. 1号墳丘墓周溝Fベルト土層（北西から）
- 図版30 1. 下野地2号墳全景（空中写真、上空から）
2. 下野地2号墳全景（空中写真、南から）
- 図版31 1. 石室全景（調査前、東から）
2. 石室全景（調査前、南から）
- 図版32 1. 石室入口と閉塞石（南から）
2. 閉塞石除去後（南から）
- 図版33 1. 石室奥壁（南から）
2. 石室玄門部（北から）
- 図版34 1. 石室玄門上部（北から）
2. 石室腰石と掘形（南から）
- 図版35 1. 1号住居跡（南から）
2. 2号掘立柱建物跡（南から）
- 図版36 1. 3号掘立柱建物跡（東から）
2. 2号落とし穴（南から）
- 図版37 1. Ⅲ区近世墓群全景（東から）
- 図版38 1. 1号近世墓（南東から）
2. 2号近世墓（北東から）
- 図版39 1. 3号近世墓（東から）
2. 4号近世墓（南東から）
- 図版40 1. 5・6号近世墓（東から）
2. 7号近世墓（南東から）
- 図版41 1. 8号近世墓（東から）
2. 9・10号近世墓（東から）
- 図版42 1. 11号近世墓（北西から）
2. 12号近世墓（北東から）
- 図版43 1. 13号近世墓（南東から）
2. 14・15号近世墓（東から）
- 図版44 1. 16号近世墓（南東から）
2. 17号近世墓（東から）
- 図版45 1. 18・19号近世墓（東から）
2. 20号近世墓（東から）

- 図版46 1. 21・22号近世墓（東から）
2. 23号近世墓（北から）
- 図版47 1. IV区近世墓群全景（空中写真、上空から）
- 図版48 1. 24号近世墓（南から）
2. 25号近世墓（東から）
- 図版49 1. 26号近世墓（北から）
2. 27号近世墓（南東から）
- 図版50 1. 28号近世墓（東から）
2. 29号近世墓（東から）
- 図版51 1. 30号近世墓（北から）
2. 31号近世墓（南東から）
- 図版52 1. 32号近世墓（東から）
2. II区全景（空中写真、上空から）
- 図版53 1. 33号近世墓
2. 35号近世墓
- 図版54 1. 34号近世墓（南西から）
2. 34号近世墓（蓋石除去後、南西から）
- 図版55 1. 34号近世墓（蔵骨器、南西から）
2. 34号近世墓（蔵骨器内部状況、南西から）
- 図版56 1. 1号焼土壙（北から）
2. 2号焼土壙（西から）
- 図版57 1. 3号焼土壙（南西から）
2. 4号焼土壙（南から）
- 図版58 1. 5号焼土壙（西から）
2. 6号焼土壙（北西から）
- 図版59 1. 7号焼土壙（南東から）
2. 8号焼土壙（東から）
- 図版60 1号埋甕・5・35・37号墓出土土器
- 図版61 1号祭祀土坑出土土器①
- 図版62 1号祭祀土坑出土土器②・2号祭祀土坑出土土器①
- 図版63 2号祭祀土坑出土土器②・3号祭祀土坑出土土器①
- 図版64 3号祭祀土坑出土土器②・4号祭祀土坑出土土器①
- 図版65 4号祭祀土坑出土土器②・5号祭祀土坑出土土器①

- 図版66 5号祭祀土坑出土土器②・周溝出土土器①
- 図版67 周溝出土土器②
- 図版68 周溝出土土器③
- 図版69 周溝出土土器④・石器・下野地2号墳出土土器①
- 図版70 下野地2号墳出土土器②
- 図版71 下野地2号墳出土土器③
- 図版72 下野地2号墳出土土器④・装身具・鉄器・1号住居跡出土土器・2号掘立柱建物跡出土土器
- 図版73 4号近世墓出土遺物
- 図版74 7号近世墓出土遺物
- 図版75 11号近世墓出土遺物
- 図版76 12号近世墓出土遺物
- 図版77 1. 14号近世墓出土遺物
2. 17号近世墓出土遺物①
- 図版78 1. 17号近世墓出土遺物②
2. 20号近世墓出土遺物①
- 図版79 1. 20号近世墓出土遺物②
2. 24号近世墓出土遺物①
- 図版80 1. 24号近世墓出土遺物②
2. 28号近世墓出土遺物①
- 図版81 1. 28号近世墓出土遺物②
2. 34号近世墓蔵骨器・34号近世墓蓋石・1号焼土壙出土遺物・2号焼土壙出土遺物
- 図版82 表採資料

挿 図 目 次

第1図	豊前バイパス路線図 (1:500,000)	1
第2図	豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/20,000)	2
第3図	周辺の遺跡分布図 (1/50,000)	8
第4図	大塚本遺跡地形図 (1/2,000)	14
第5図	1号埋甕実測図 (1/20)	15
第6図	1号埋甕出土縄文土器実測図 (1/3)	16
第7図	弥生時代墳墓群配置図 (1/300)	折込
第8図	1～4号墓実測図 (1/30)	17
第9図	3号墓出土土器実測図 (1/4)	18
第10図	5～8号墓実測図 (1/30)	19
第11図	5号墓出土甕棺実測図 (1/6)	20
第12図	9～13号墓実測図 (1/30)	22
第13図	14～18号墓実測図 (1/30)	24
第14図	19～22号墓実測図 (1/30)	25
第15図	23～28号墓実測図 (1/30)	26
第16図	29・30号墓実測図 (1/30)	28
第17図	31・32号墓実測図 (1/30)	30
第18図	33・34号墓実測図 (1/30)	31
第19図	35・36号墓実測図 (1/30)	32
第20図	35号墓出土土器実測図 (1/4)	33
第21図	37号墓実測図 (1/30)	34
第22図	37号墓出土土器実測図 (1/4)	35
第23図	1号祭祀土坑実測図 (1/40)	36
第24図	1号祭祀土坑出土土器実測図① (1/4)	37
第25図	1号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)	38
第26図	2・3号祭祀土坑実測図 (1/40)	40
第27図	2号祭祀土坑出土土器実測図① (1/4)	41
第28図	2号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)	42
第29図	3号祭祀土坑出土土器実測図① (1/4)	43
第30図	3号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)	44
第31図	4・5号祭祀土坑実測図 (1/40)	46

第32图	4号祭祀土坑出土土器实测图① (1/4)	47
第33图	4号祭祀土坑出土土器实测图② (1/4)	48
第34图	5号祭祀土坑出土土器实测图① (1/4)	49
第35图	5号祭祀土坑出土土器实测图② (1/4)	50
第36图	5号祭祀土坑出土土器实测图③ (1/4)	51
第37图	5号祭祀土坑出土土器实测图④·1号土坑出土土器实测图 (1/4)	52
第38图	1号土坑实测图 (1/40)	54
第39图	1号墳丘墓实测图 (1/150)	折込
第40图	1号墳丘墓周溝土層实测图 (1/40)	55
第41图	1号墳丘墓周溝出土土器实测图① (1/40)	57
第42图	1号墳丘墓周溝出土土器实测图② (1/40)	58
第43图	1号墳丘墓周溝出土土器实测图③ (1/40)	59
第44图	1号墳丘墓周溝出土土器实测图④ (1/40)	60
第45图	1号墳丘墓周溝出土土器实测图⑤ (1/40)	61
第46图	1号墳丘墓周溝出土土器实测图 (1/3·2/3)	62
第47图	下野地2号墳地形测量图 (1/100)	折込
第48图	下野地2号墳石室实测图 (1/60)	折込
第49图	下野地2号墳出土土器实测图① (1/3)	65
第50图	下野地2号墳出土土器实测图② (1/3)	67
第51图	下野地2号墳出土土器实测图③ (1/4)	68
第52图	下野地2号墳出土装身具实测图 (1/1)	69
第53图	下野地2号墳出土鉄器实测图 (1/2)	70
第54图	1号住居跡实测图 (1/40)	71
第55图	1号住居跡出土土器实测图 (1/3)	71
第56图	1·2号掘立柱建物跡实测图 (1/60)	72
第57图	2号掘立柱建物跡出土土器实测图 (1/3)	73
第58图	3号掘立柱建物跡实测图 (1/60)	74
第59图	Ⅲ区近世墓配置图 (1/100)	76
第60图	1~3号近世墓实测图 (1/20)	79
第61图	4~6号近世墓实测图 (1/20)	80
第62图	7~10号近世墓实测图 (1/20)	81
第63图	11~14号近世墓实测图 (1/20)	82
第64图	15~18号近世墓实测图 (1/20)	84

第65図	12号近世墓出土遺物実測図 (1/2)	86
第66図	24号近世墓出土遺物実測図 (1/1)	86
第67図	19～23号近世墓実測図 (1/20)	87
第68図	Ⅳ区近世墓配置図 (1/100)	88
第69図	24～27号近世墓実測図 (1/20)	89
第70図	28～31号近世墓実測図 (1/20)	90
第71図	31号近世墓出土遺物実測図 (1/1)	91
第72図	Ⅱ区近世墓配置図 (1/100)	92
第73図	32～35号近世墓実測図 (1/20)	93
第74図	34号近世墓出土遺物実測図 (1/4)	94
第75図	表採遺物実測図 (1/5)	95
第76図	1～6号焼土壙実測図 (1/30)	96
第77図	7・8号焼土壙実測図 (1/30)	97
第78図	焼土壙出土遺物実測図 (1/3)	99
第79図	火葬土壙実測図 (1/1,000)	101
第80図	1・2号落とし穴実測図 (1/30)	104
第81図	出土石器実測図 (1/3・2/3)	105
第82図	出土六道銭拓影図①	110
第83図	出土六道銭拓影図②	111
第84図	出土六道銭拓影図③	112
第85図	大塚本遺跡・金居塚遺跡焼土壙・近世墓配置図 (1/1,250)	117
第86図	ノヤキ コモカブリ	118
付 図	大塚本遺跡遺構配置図 (1/400)	

表 目 次

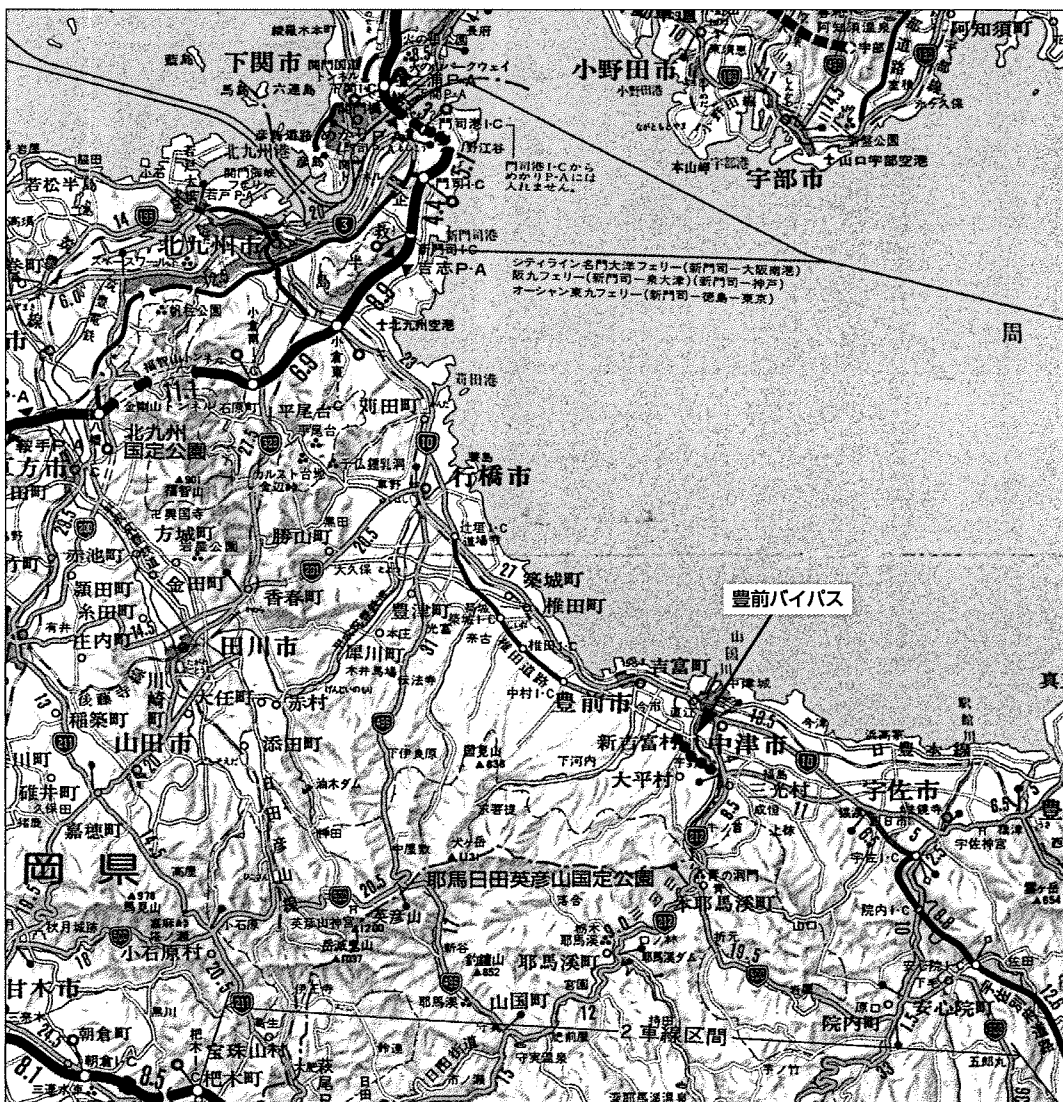
表 1	一般国道10号豊前バイパス関係遺跡一覧表	6
表 2	下野地 2号墳出土土玉類計測表	69
表 3	近世墓一覧表	77
表 4	焼土壙一覧表	97
表 5	六道銭出土土壙一覧表	109

I はじめに

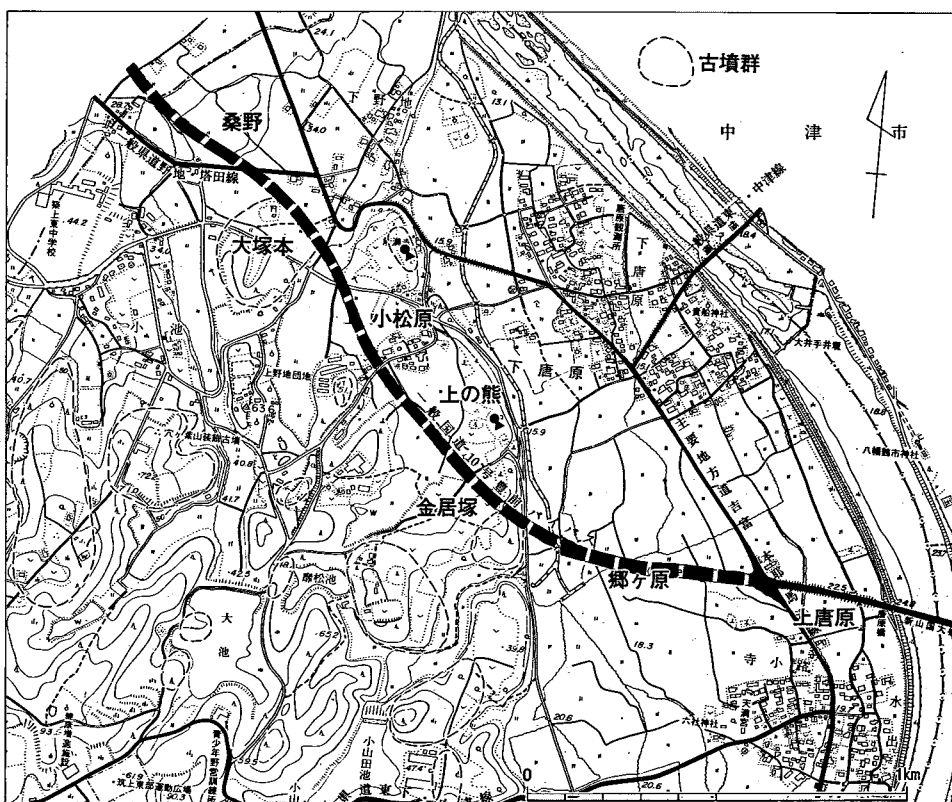
1. 調査の経過と調査組織

道をとおして人々は、常に人と人、集団と集団との交流をはかり、生活・産業・文化の発達をなしとげてきた。

一般国道10号は、九州の本州に対する玄関口の北九州市を起点として、東九州の主要な都市の行橋市・豊前市・中津市・別府市・大分市・延岡市・宮崎市・都城市を結んで鹿児島市に至る延長450kmの大動脈で、東九州地域の経済・社会・文化活動の発展に重要な役割を果たして



第1図 豊前バイパス路線図 (1 : 500,000、道路施設協会「九州自動車道」1994.10を改変)



第2図 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/20,000)

いる。

近年経済発展に伴い、北九州市に近い沿線の急激なベッドタウン化による人口増加が著しく、これに伴う国道の交通量の激増が見込まれていた。このような状況の中で、国道10号線に走行所要時間を約半分に短縮するため「北大道路」の整備が計画された。

福岡県内の国道10号線のバイパス建設については、その用地内に含まれる埋蔵文化財の取扱いについて、建設省九州地方建設局と福岡県教育委員会文化課との協議がもたれることになった。

昭和47年1月31日の協議によって、ルート決定後に、埋蔵文化財の分布調査を実施し、以後の協議資料とすること、以下年次を追って記述してみる。

昭和48年3月26日 一部路線の予備調査を実施。

昭和48年6月6日 北九州国道事務所に回答した。

昭和55年11月10日 豊前バイパス路線内の文化財によるルート変更の可能性と所在地の追加の有無の問い合わせが有り。

昭和55年11月18日 ルート選定については問題がないことを回答する。

昭和59年9月19日 北九州国道事務所に回答、豊前バイパスは上唐原地区には遺跡が考え

られるが、他地区について試掘調査が必要である由を伝える。

昭和60年3月28日 国道10号線全線に対する昭和60年度埋蔵文化財事前発掘実施計画書を北九州国道事務所に提出。

昭和60年7月20日 昭和59年9月19日付の全線の再確認分布調査依頼に対する回答を提出した。

昭和60年7月26日 北九州国道事務所は文化課に対して、昭和60年度中の調査実施が不可能で、61年度実施に向けて努力する旨文書にて回答書を提出した。

結局、豊前バイパスの発掘調査は第8A地点の上唐原遺跡の発掘調査を昭和62年11月2日から昭和63年5月6日まで実施した。

次いで第8B地点の郷ヶ原遺跡の発掘調査を平成元年4月11日から9月12日まで実施した。

平成2年2月3日 北九州国道工事事務所は、文化課に国道10号線全線の埋蔵文化財の発掘調査依頼を提出した。

同年7月13日 豊前バイパスの第1・2地点以外の試掘調査結果を北九州国道工事事務所に通知した。

発掘調査は、第7地点の金居塚（旧カネツキ）遺跡を平成2年5月14日から平成3年4月30日まで実施した。

第5地点の小松原遺跡は、平成3年1月14日から5月1日まで発掘調査を実施した。

今回報告する第4地点の大塚本遺跡は、平成3年5月1日から10月31日までの期間発掘調査を実施したものである。

2. 調査の組織と関係者

発掘調査を実施した平成3年、および本報告書を作成した9年度の関係者は以下のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	平成3年度	平成9年度
所 長	森 久	徳永 和幸
副所長	久谷 秀明	高崎 寿男
建設専門官	田中 陸憲	入部 秀信
建設監督官	田中 常美	児玉 敏幸
工務課長	溝上 利毅	田中 常美
係長	浅田 敏光	徳重 栄紀
調査課長	松崎 安則	大塚 法晴

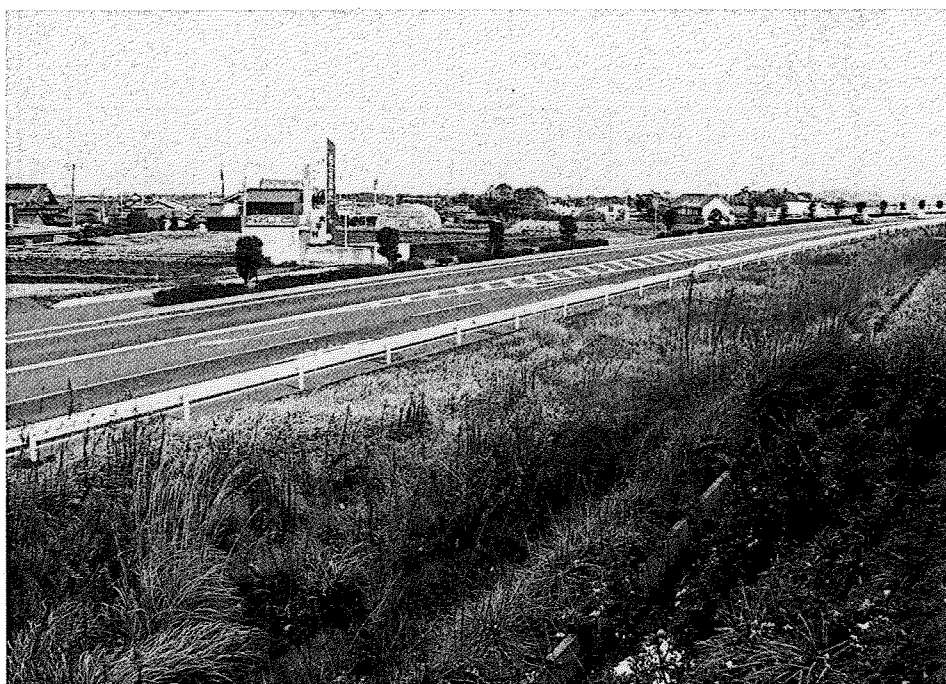
係長	荒瀬 美和	竹下 卓宏
建設技官	杓掛 孝	田辺 稔
用地課長	竜口 登	加藤 彌
福岡県教育委員会		
(総 括)	平成 3 年度	平成 9 年度
教育長	御手洗 康	光安 常喜
教育次長	光安 常喜	松枝 功
指導第二部長	月森清三郎	竹若 幸二
文化課長	森山 良一	石松 好雄
参 事	森本 精造	
	石松 好雄 (兼文化財保護室長)	柳田 康雄 (兼文化財保護室長)
課長補佐	国武 康文	城戸 秀明
	松尾 正俊	
課長技術補佐		井上裕弘 (兼文化財保護室長補佐)
参事補佐	柳田 康雄	橋口 達也 (調査班総括)
	井上 裕弘	木下 修
	石山 勲	中間 研志
	清水 圭輔	新原 正典
	濱田 信也	
	副島 邦弘	
(庶 務)		
管理係長	岸本 実	黒田 一治 (参事補佐兼)
事務主査	東 勇治	鶴我 哲夫
(調査担当)		
参事補佐	副島 邦弘	副島 邦弘 (現福岡県立美術館)
主任技師		小川 泰樹
技 師	小川 泰樹	

平成9年度整理関係者

整理指導員	岩瀬 正信 (接合復元)	平田春美 (土器実測)
	北岡 伸一 (写真撮影)	豊福弥生 (製図)
整理作業員	原 カヨ子 関 久江	土山真弓美 山田 智子
	安永 啓子 岡 由美子	堀之内久美子 古田 千穂

整理作業については九州歴史資料館・文化課太宰府事務所で実施した。

調査のおりには、九州大学西谷正先生をはじめとし、京築地区の文化財保護指導員の一川淳江・川本義継・濱嶋三司・宮本工氏や京築教育事務所等にご指導を受けた。 (副島)



現在の豊前バイパス大塚本遺跡

地点	遺 跡 名	所 在 地	内 容	分布面積 (㎡)	調 査 面 積 (㎡)						報告書			
					62年度	63	平成元	2	3	4		5	6	
1-A	池ノ口遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落	40,000							3,500	2,000	3	
1-B		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落								4,000	1,800		3
1-C		新吉富村垂水	弥生～古墳 集落								3,200			3
1-D	三ツ溝遺跡	新吉富村垂水	古墳～平安 集落							3,500			6	
1-E	長田遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落									5,000	1,900	6
1-F	宇野垂水遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落									4,000	500	6
1-G	竹ノ下遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落								3,000		500	6
1-H	宇野代遺跡	新吉富村垂水	縄文～平安 集落・墓地他							2,000	5,000			1
2-A	上桑野遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落・墓地	4,000						700	3,000		8	
2-B	上桑野遺跡	新吉富村垂水	近世	1,600						1,600			8	
3	桑野遺跡	大平村下唐原	弥生 集落	4,800						4,800			6	
4	大塚本遺跡	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	16,000						16,000			9(本書)	
5	小松原遺跡	大平村下唐原	縄文～近世	11,200						10,000			6	
6	上の熊遺跡	大平村下唐原	旧石器～古墳 集落地	4,500						4,500			6	
7	金居塚遺跡 (旧分奈ツキ)	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	14,000				13,000					4・7	
8-A	上唐原遺跡	大平村上唐原	縄文・弥生～奈良 集落	18,000	10,000	2,000							2・5	
8-B	郷ヶ原遺跡	大平村上唐原	弥生～古墳 集落	6,500			6,500						10	
計				120,600	10,000	2,000	6,500	13,000	39,600	21,700	14,300	4,900		

表1 一般国道10号豊前バイパス関係遺跡一覧表

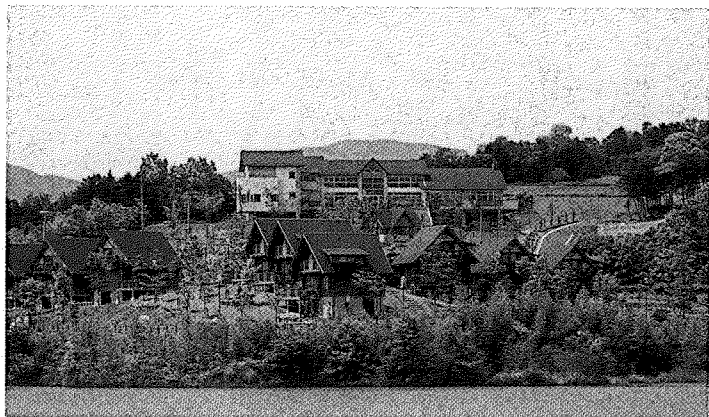
3. 遺跡の位置と環境

1) 地理的環境

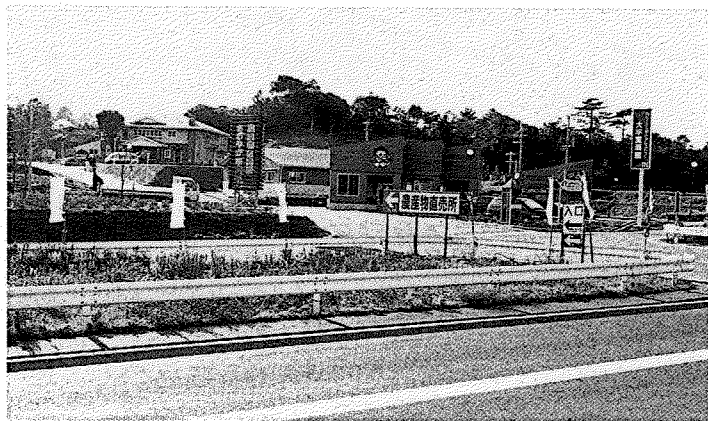
大塚本遺跡の所在する築上郡大平村は福岡県最東端に位置しており、東は名勝耶馬溪の眺めを有する一級河川山国川を境に大分県中津市、下毛郡三光村・本耶馬溪町と接している。南は耶馬日田英彦山国定公園の一角をなす標高1199.6mの英彦山から派生した犬ヶ岳、経読岳からさらに東へ連なる雁股山(807.1m)、大平山(597.4m)を介し下毛郡耶馬溪町と接している。また西は雁股山から北東へ派生する松尾山(471.0m)などの山峰により豊前市、北は新吉富村と県内外を合わせた6市町村と境を接している。人口は4,500人ほど、南北8.3km、東西11.5km、面積は48.96km²あり、うち69.2%を山林が占め、農業及び林業を基幹産業とする自然豊かな農村である。平成7年3月の国道10号豊前バイパス(現国道10号)の全線開通後、沿線にふれあいの里ログハウスや農産物直売所、地ビール工場が相次いでオープンし、交通の利便性を生かした観光資源の充実に力を入れている。経済圏はほぼ中津市に収斂されるが、先のバイパスの開通により、北九州方面や大分方面へ通勤する者も少なくない。

気候は瀬戸内海型気候に属し、年間降雨量は1,500mm前後と比較的少なく、平均気温は15.2℃と温暖な気候である。平成7年における就業形態は第一次産業23.4%、第二次産業33.5%、第三次産業43.1%となっており、農業は米作を中心とした兼業農家が大半を占めている。他に特産品として柿、柚子、茶、椎茸があげられる。

周辺の地形は山国川の水系に大きく影響されており、その下流域にあたる大字百留から下唐原にかけての地域と中津市の沖代平野に



大池公園ふれあいの里ログハウスと県立ふれあいの家京築



地ビール工場・レストラン「大平麦酒館」と農産物直売所「さわやか市大平」



第3図 周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

1. 楡山古墳 2. 小石原泉遺跡 3. 巨石塚古墳 4. 大ノ瀬下大坪遺跡 5. 垂水廃寺 6. 牛頭天王(中桑野)遺跡
7. 下唐原伊柳遺跡B地点 8. 能満寺古墳群 9. 西方古墳 10. 甚吾久保遺跡 11. 穴ヶ葉山古墳 12. 穴ヶ葉山遺跡
13. 恵良古墳群 14. 土佐井遺跡 15. 土佐井ミソヅ遺跡 16. 友枝瓦窯跡 17. 照日遺跡群 18. 山田1号墳 19. 山田窯跡群
20. 今蔵遺跡 21. 縄手遺跡 22. 百留横穴墓群 23. 佐知遺跡 24. 上ノ原横穴墓群 25. 相原廃寺 26. 古代官道推定線
27. 高知遺跡 A. 垂水地区遺跡群 B. 宇野代遺跡 C. 上桑野遺跡 D. 桑野遺跡 E. 大塚本遺跡 F. 小松原遺跡
- G. 上の熊遺跡 H. 金居塚遺跡 I. 郷ヶ原遺跡 J. 上唐原遺跡

は沖積地が広がる。この沖積地は山国川によって形成された扇状地的な性格を反映し、流路跡や自然堤防が発達している。唐原地域ではこの自然堤防上に百留・梶屋・重吉・水出・寺小路・下唐原などの集落が形成されており、その西側には中津面とよばれる比高差20mほどの低位段丘が発達する。さらに西側は中津面や安雲面とよばれる低位段丘を一級河川水系友枝川が開析し、その左岸に小規模な沖積地と垂水面とよばれる低位段丘を形成し山国川へ流入する(註1)。

大塚本遺跡は山国川左岸、標高37mほどの河岸段丘上(中津面)に立地し、いわゆる地山は赤褐色粘質土である。さらに下層では安山岩の風化礫が混じる。

2) 歴史的環境

明治4年の「廃藩置県」により、旧中津藩に属した唐原地区は中津県、旧小倉藩に属した友枝地区は豊津県となった。同年に千束県を含めた三県は合併し小倉県となる。明治9年に小倉県と福岡県が合併し現在の福岡県が誕生した。明治22年の「市制・町村制」施行により合併がおこなわれ、友枝地区の土佐井村・東下村・東上村・西友枝村の4ヶ村が友枝村、唐原地区の原井村・百留村・上唐原村・下唐原村の4ヶ村は唐原村としてそれぞれ誕生した。また、築上郡は明治29年に築城郡・上毛郡の両郡が合併したもので、友枝村・唐原村は上毛郡に属していた。

大平村は昭和30年の「町村合併促進法」により友枝村と唐原村が合併し発足したもので、村名は両村の南になだらかな山容を見せる標高597.4mの大平山に由来する。

この地域はこれまで開発が遅れていたため遺跡の空白地帯といわれていたが、近年の圃場整備事業や国道10号豊前バイパス建設事業、その他の各種開発事業に伴う発掘調査の急増により大平村やその周辺でも新たな遺跡の発見が相次いでいる。以下にそれらの一部を略述する。

縄文時代以降

村内では旧石器時代の遺跡とよべるものは未発見であるが、豊前バイパスにかかわる桑野遺跡(註2)・上の熊遺跡(註3)・金居塚遺跡(註4)の調査で、遺構に伴わない状態でナイフ形石器、剥片尖頭器が採集されている。また、下唐原のにごり池畔や百留の池田池畔からもナイフ形石器などが採集されている(註5)。周辺では圃場整備事業に伴って事前調査された豊前市青畑向原遺跡で、黒曜石製・水晶製ナイフ形石器、安山岩製剥片尖頭器などが出土している(註6)。

縄文時代の遺跡では草創期に遡るものは未発見であるが、早期の遺跡では押型文土器がまとまって出土した豊前市吉木遺跡(註7)がある。また、別府大学・長崎大学により本耶馬溪町粉砕洞穴遺跡の合同学術調査が行われ、前期から後期にかけての生活跡と多数の埋葬人骨が発見された(註8)。後期の遺跡については集落跡の発掘例が急増しており、大平村の上唐原遺跡(註

9)・原井三ツ江遺跡(註10)・土佐井遺跡(註11)、新吉富村垂水遺跡(註12)、大分県三光村の佐知遺跡(註13)、豊前市の中村石丸遺跡(註14)・小石原泉遺跡(註15)などが調査された。晩期の遺跡は調査例が乏しいが、大平村川下遺跡(註16)で採集された鉢や打製石斧が紹介されている。他に後期から晩期にかけての遺物が出土した遺跡として、中津市上万田遺跡・高瀬遺跡・高畑遺跡(註17)などがある。上唐原遺跡・川下遺跡・佐知遺跡・上万田遺跡・高瀬遺跡・高畑遺跡はいずれも自然堤防上に立地する遺跡である。

弥生時代

前期の集落については今後の研究にまつものが多いが、上唐原や下唐原の堤防工事に係る調査等で土器が出土している。中期から後期にかけての遺跡は発掘例が増加傾向にあり、次第に内容が充実してきている。中期の代表的な遺跡は新吉富村牛頭天王(中桑野)遺跡(註18)で、中期前半頃と思われる大型の掘立柱建物跡や中期後半の環濠が調査されており、この地域の拠点集落と考えられる。豊前バイパスに関連する遺跡では、ここで報告する大塚本遺跡や集落跡である桑野遺跡(註19)などが調査された。また、圃場整備事業に関連して下唐原伊柳遺跡B地点(註20)が調査され集落跡が発見された。いづれも牛頭天王遺跡を中心に形成された遺跡と考えられる。その他の中期の遺跡としては土佐井ミソンデ遺跡(註21)で若干の住居跡が調査されている。後期の遺跡は上唐原での山国川堤防工事や豊前バイパス工事に伴い調査され、内容が最も充実している。上唐原遺跡(註22)・郷ヶ原遺跡(註23)、三光村の佐知遺跡などが自然堤防上・微高地上で発見・調査された。特に郷ヶ原遺跡は弥生時代終末から古墳時代前期に至る遺跡で、環濠を有する集落遺跡という点で重要な発見となった。後期の墓地は段丘上の金居塚遺跡(註24)、その西の丘陵上に存在した穴ヶ葉山遺跡(註25)などがある。穴ヶ葉山遺跡では81基の石蓋土壙墓、2基の土壙墓が検出され、舶載内行花文鏡片1点、素環刀を含む39点の鉄製品、各種玉類などの副葬品が出土し、ほとんどの主体部にベンガラが施されていた。

村内出土の青銅器は先の穴ヶ葉山遺跡の鏡片、金居塚遺跡の細形銅剣片の他、古く東下で出土したという中広銅戈1点がある。

古墳時代

これまで築上郡内で前期の古墳は未確認であったが、段丘縁辺部で平成2年に西方古墳(前方後円墳)(註26)が、次ぐ平成5年には能満寺古墳群(円墳・方墳・前方後円墳)(註27)が発見・調査された。中期の有力な前方後円墳は吉富町の楡生山古墳(註28)や既に消滅した中津市亀山古墳がある。後期になると穴ヶ葉山古墳群(註29)・百留横穴墓群(註30)に代表される大規模な群集墳が山国川の段丘上及び法面に築かれる。中でも穴ヶ葉山1号墳は葉・鳥などの線刻画を有する装飾古墳として国指定史跡となった円墳で、近年環境整備に先立つ調査により、墳

丘及び墓道から特異な器台を含む多量の土器や、二段築成の段築をもち30mを超える大規模な墳丘形態が明らかになった。周辺の穴ヶ葉山3号墳(註31)・穴ヶ葉山南3号墳(註32)、新吉富村山田1号墳(註33)等にも線刻壁画がみられるなど注目される地域である。他に金居塚遺跡(註34)・上の熊古墳群(註35)・土佐井遺跡(註36)で古墳群が発見・調査され一部は消滅している。また、横穴墓は百留横穴墓群(村指定・46基)(註37)・金居塚遺跡(12基)(註38)、これと対峙する位置に大分県三光村の上ノ原横穴墓群(註39)があり、それぞれ段丘法面を掘り込み築造されている。

古墳時代の集落で前期に属するものは弥生時代後期以降、連続して営まれたものである。中期に属する遺跡は乏しく、新吉富村字野・垂水地区で発見されたもののみである(註40)。後期の集落は上唐原遺跡(註41)・佐知遺跡(註42)など自然堤防上に立地し、弥生時代の集落跡が発掘された位置と重なる。

生産遺跡は須恵器の窯として新吉富村山田(註43)・照日窯跡群(註44)があり、やがて瓦窯へと移行する。

歴史時代

奈良正倉院文書にある大宝2(702)年の戸籍断簡にある「豊前国上毛郡塔里」が著名で、秦氏などの渡来系の姓が多くみられる。「塔里」は現在の大平村大字上・下唐原に比定され、先の上唐原遺跡では奈良時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見されており、今後の調査が期待される。

豊前国では旧京都・仲津・上毛・下毛・宇佐の各郡で古代寺院の存在が確認され、大宰府系・高句麗系・新羅系・百済系といった多様な瓦が出土していることから、渡来系工人が広く進出していたことが想定される。上毛郡には垂水廃寺(註45)、山国川を挟んだ下毛郡には相原廃寺(註46)がある。垂水廃寺は昭和48年から50年にかけての調査により、7世紀後半に創建されたとされ、新羅系や百済系の瓦が出土しているが、伽藍配置など判然としない部分が多い。推定寺域の南に隣接する小学校講堂の改築工事に伴い調査された垂水高木遺跡(註47)では、垂水廃寺に使用された軒平瓦を利用した竪穴住居跡などが発見されたが、伽藍配置などの詳細については今後の調査を待たなければならない。

垂水廃寺に瓦を供給した窯については大平村の友枝瓦窯跡(註48)、新吉富村の桑野窯跡(註49)・山田窯跡(註50)などがある。友枝瓦窯跡は凝灰岩の岩盤を掘り込み、焼成部に17の階段状の段をもつ地下式有階有段登窯で国指定史跡となっている。

近年調査されたもので、新吉富村の池ノ口遺跡(註51)からは、従来から推定されていた付近で古代官道と思われる遺構が、大ノ瀬下大坪遺跡(註52)では官道推定線に隣接して上毛郡の郡衙と思われる遺構がそれぞれ発見された。また、中津市の古代官道推定線に隣接する長者屋敷

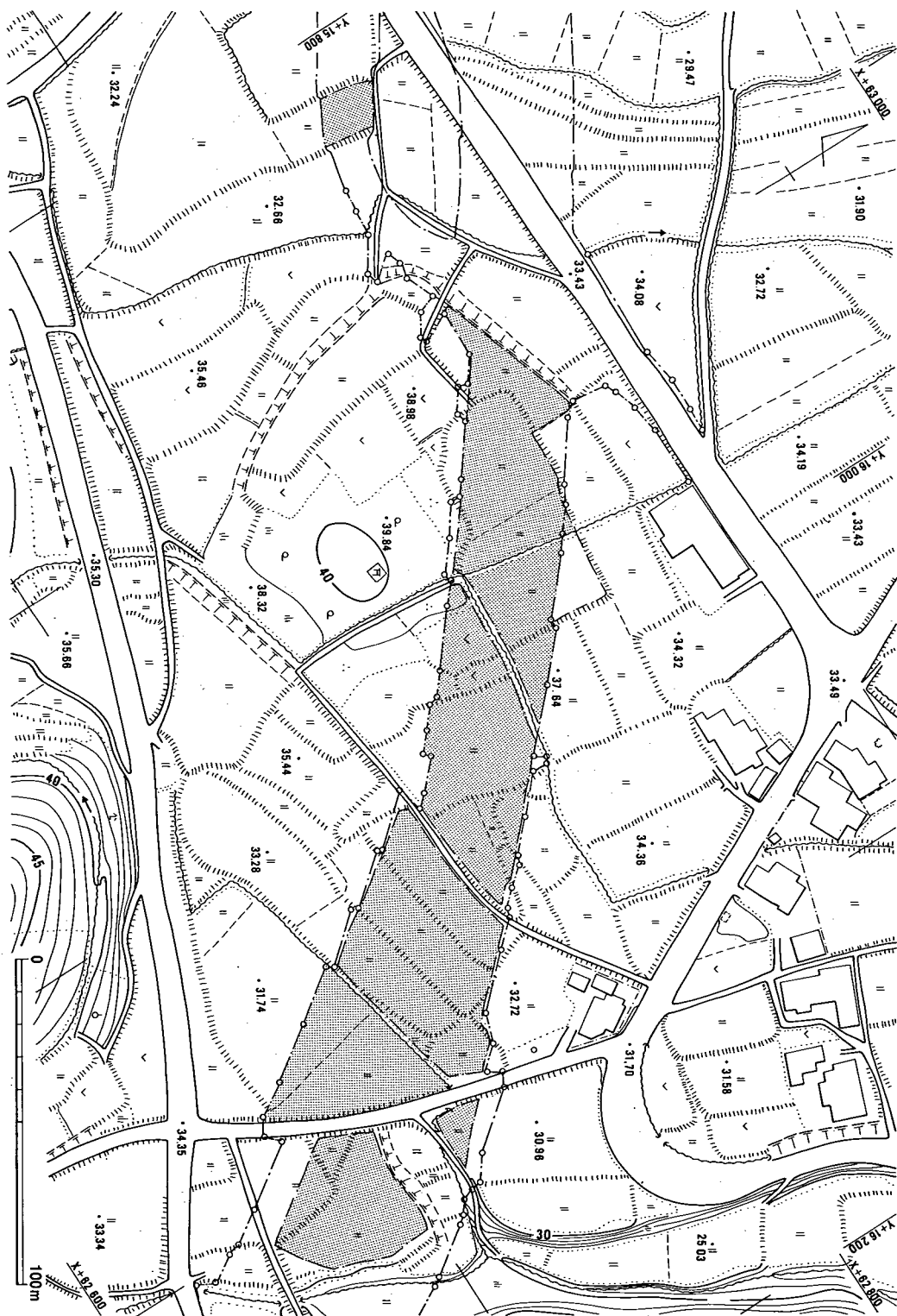
遺跡(註53)からも下毛郡の郡倉が発見されるなど、奈良時代の重要な遺跡の発見が相次ぎ、この時代の上毛郡の歴史が明らかになりつつある。

平安時代から鎌倉時代にかけて豊前一円が宇佐八幡宮の荘園であったと考えられている。鎌倉時代以降には関東公方宇都宮氏が仲津郡木井郷(現京都郡犀川町木井馬場)に入り、豊前一带に一族を配し支配体制を固める。それと前後する時期の中世山城が村内の各所に残っている。近年の調査により居館やそれに関連する遺跡の発見が相次いでいる(註54)。

また、大字西友枝の標高471.0mの松尾山にはかつて彦山六峰の一つに数えられた松尾山医王寺があり、豊前市の求菩提山と並ぶ修験道場であった。起源については諸説あるが、平安時代頃と考えられている。現在、松尾山の関係で大平村に伝わるものは、中宮にある護摩壇(県指定)、修験板笈(県指定)と松会保存会により伝承されるお田植え祭り(県指定)、経塚山遺跡出土の銅製経筒・合子などがある(註55)。(末永浩一)

- 註 1 千田 昇他「山国川流域の地形」(『山国川—自然・社会・教育—』 大分大学教育学部 1989)
- 註 2 福岡県教育委員会「桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告』第6集 下巻、1997)
- 註 3 註2文献に同じ。
- 註 4 福岡県教育委員会「金居塚遺跡 II」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集 1997)
- 註 5 小池史哲「豊前地方の旧石器」(『豊前市史』上巻 1991)
小池史哲「豊前地方の旧石器時代遺跡」(『豊前市史』考古資料 1993)
- 註 6 註5文献に同じ。
- 註 7 福岡県教育委員会「吉木遺跡」(『福岡県文化財報告書』第83集、1989)
- 註 8 賀川 光夫「原史」(『本耶馬溪町史』 1987)
- 註 9 福岡県教育委員会「上唐原遺跡 II」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集 1996)
- 註 10 大平村教育委員会「原井三ツ江遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第5集 1989)
- 註 11 大平村教育委員会「土佐井遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第5集 1990)
- 註 12 渡辺正気「福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告」(『古文化談叢』第11集 1983)
- 註 13 大分県教育委員会「佐知遺跡」(『大分県文化財調査報告書』第81輯 1989)
- 註 14 福岡県教育委員会「中村石丸遺跡」(『一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集 1996)
- 註 15 小池 史哲「小石原泉遺跡」(『豊前市史』考古資料 1993)
- 註 16 宮本 工・村上 久和・城戸 誠「山国川流域の縄文時代後・晩期の遺跡」(『九州考古学』59 1984)
- 註 17 賀川 光夫「高畑遺跡」(『中津市史』 1965)
- 註 18 新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第3集 1978)
新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集 1994)
- 註 19 註2文献に同じ。
- 註 20 大平村教育委員会が1997年に県営団地整備事業に先立ち調査を実施した。
- 註 21 大平村教育委員会「土佐井ミソンド遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第7集 1991)
- 註 22 福岡県教育委員会「上唐原遺跡 I」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 1995)
- 註 23 福岡県教育委員会が1989年に豊前バイパス建設に先立ち調査を実施した。
- 註 24 註4文献と同じ。

- 註 25 大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第8集 1993)
- 註 26 福岡県教育委員会「金居塚遺跡 I」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集 1996)
- 註 27 大平村教育委員会「能満寺古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第9集 1994)
- 註 28 吉富町教育委員会「楡生山古墳」(『吉富町文化財調査報告書』第3集 1991)
- 註 29 大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第3集 1985)
- 註 30 宮本 工「先史・原始時代」(『大平村誌』 1986)
- 註 31 註29文献に同じ。
- 註 32 大平村教育委員会「穴ヶ葉山南古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第2集 1984)
- 註 33 北代茂ほか「山田古墳」(『新吉富村誌』1990)
- 註 34 註26文献に同じ。
- 註 35 大平村教育委員会「上ノ熊古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第1集 1978)
- 註 36 註11文献に同じ。
- 註 37 註30文献に同じ。
- 註 38 註21文献に同じ。
- 註 39 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群Ⅰ～Ⅲ」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告(2)～(4)』1989～91)
- 註 40 福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集 1996)
- 註 41 註22文献に同じ。
- 註 42 註13文献に同じ。
- 註 43 新吉富村教育委員会「垂水廃寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第2集 1976)
- 註 44 新吉富村教育委員会「照日遺跡群」(『新吉富村文化財調査報告書』第9集 1995)
- 註 45 森田 勉「垂水廃寺」・「友枝瓦窯跡・山田窯跡」(『九州古瓦図録』九州歴史資料館編 1981)
他註43文献に同じ。
- 註 46 中津市教育委員会「相原廃寺Ⅰ～Ⅲ」(『中津市文化財調査報告』第7・8・10集 1989～91)
賀川 光夫「相原廃寺」(『中津市史』 1965)
- 註 47 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集 1994)
- 註 48 大平村教育委員会「友枝瓦窯跡」 1976
大平村教育委員会「友枝遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第4集 1988)
- 註 49 註45文献に同じ。
- 註 50 註43・44・45文献などと同じ。
- 註 51 註40文献に同じ。
- 註 52 新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第10集 1997)
- 註 53 平成7年度、中津市教育委員会が市営住宅改築に伴い調査。現地説明会資料、九州古代官衙シンポジウム発表資料等。
- 註 54 今蔵遺跡・今蔵遺跡B地点・縄手遺跡・土倉地区遺跡などがある。大平村教育委員会が1993年に役場庁舎建設・1994年に特別養護老人ホーム建設・1995・1996年に県営圃場整備事業に先立ちそれぞれ調査。
- 註 55 宮本 工「古代史」(『大平村誌』 1986)
藤井較一「松尾山」(『大平村誌』 1986)



第4図 大塚本遺跡地形図 (1/2,000)

Ⅱ 遺構と遺物

大塚本遺跡は、築上郡大平村大字下唐原1342他に所在し、標高31m～37mの間の低丘陵上に立地する。調査面積は約9,100㎡であるが、調査区は幅約30～55mで長さが300m以上と狭長であるため、便宜的に現在使用している道路等の地境でⅠ～Ⅵ区に分けた。以下、時代順に検出した遺構・遺物の報告を行う。

1. 縄文時代

1) 埋甕

形態的にはいわゆる甕棺墓であるが、人骨等の出土もなく墓とする根拠は特にない。埋甕というと、胞衣壺等の特定の用途に使用されたものをさす場合があり混乱を招く恐れもあるが、ここでは埋設土器という意味で一応埋甕としておく。

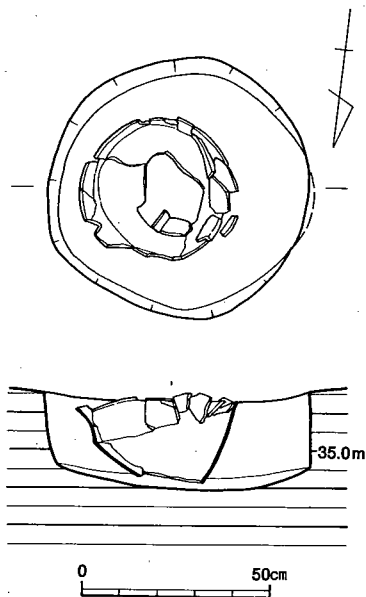
1号埋甕（図版3、第5図）

Ⅲ区の東隅部分で検出した。周囲にはこれと関連した遺構はない。掘形は平面形が径70cmの円形で、深さは20～25cmが残存しており、周壁は垂直に近く立ち上がる。掘形の中央やや東寄りに深鉢を直立状態から15°程傾けて埋設する。土器の底部は割れた状態で埋土中から出土したが、底が抜けた状態で下部が掘形底に接していることから意識的に打ち欠いたものと考えられる。

出土遺物

縄文土器（図版60、第6図）

深鉢 胴部は「く」の字形に稜を持って屈曲し、頸部は内彎して口縁部で再び開く器形で、胴部最大径と口径はほぼ等しくなる。底部は小さくすぼまり、厚めで上げ底になる。外面には二枚貝条痕を施す。口径40.0cm、胴部最大径39.5cm、器高30.5cm。



第5図 1号埋甕実測図（1/20）

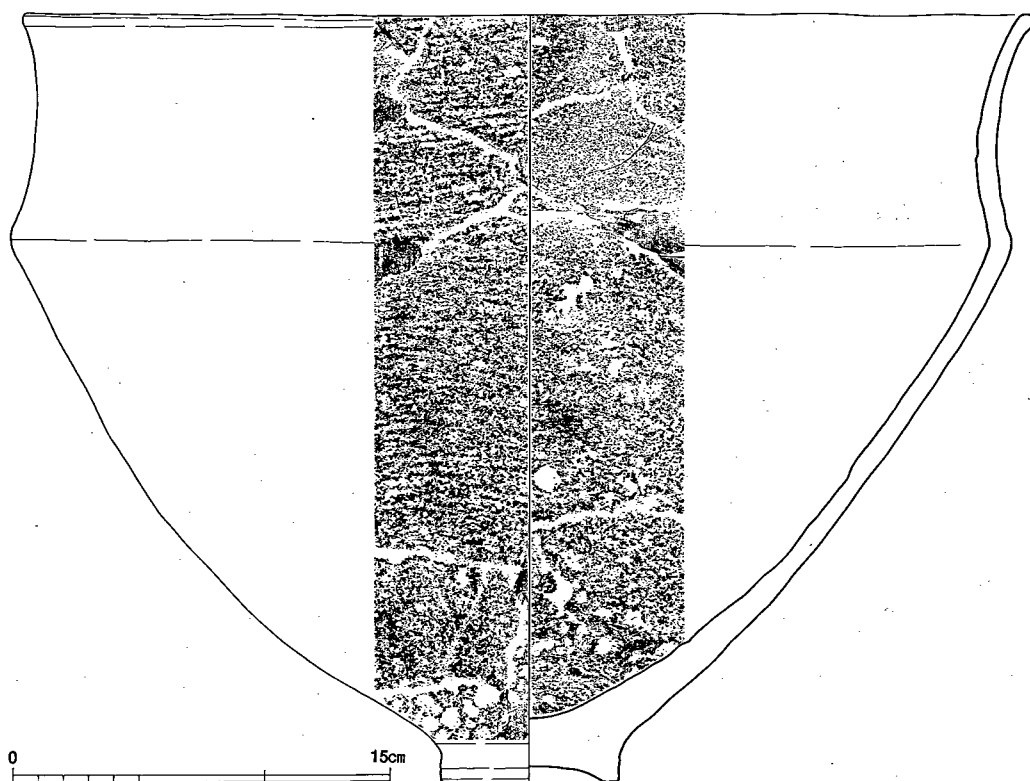
2. 弥生時代

Ⅲ区からⅣ区にかけて37基の弥生時代墳墓を検出した。墳墓群は土墳墓が中心で、ほぼ等高線に沿って南東から北西方向に帯状に連なって造営されており、北西端部には周溝を巡らせた墳丘墓（方形周溝墓）とその周囲に5基の祭祀土坑がある。墳墓群はさらに両側に調査区外に伸びるものと思われ、また全体に削平を受けており残存状況は良好ではないため、調査区内でも既に失われたものもあったであろう。

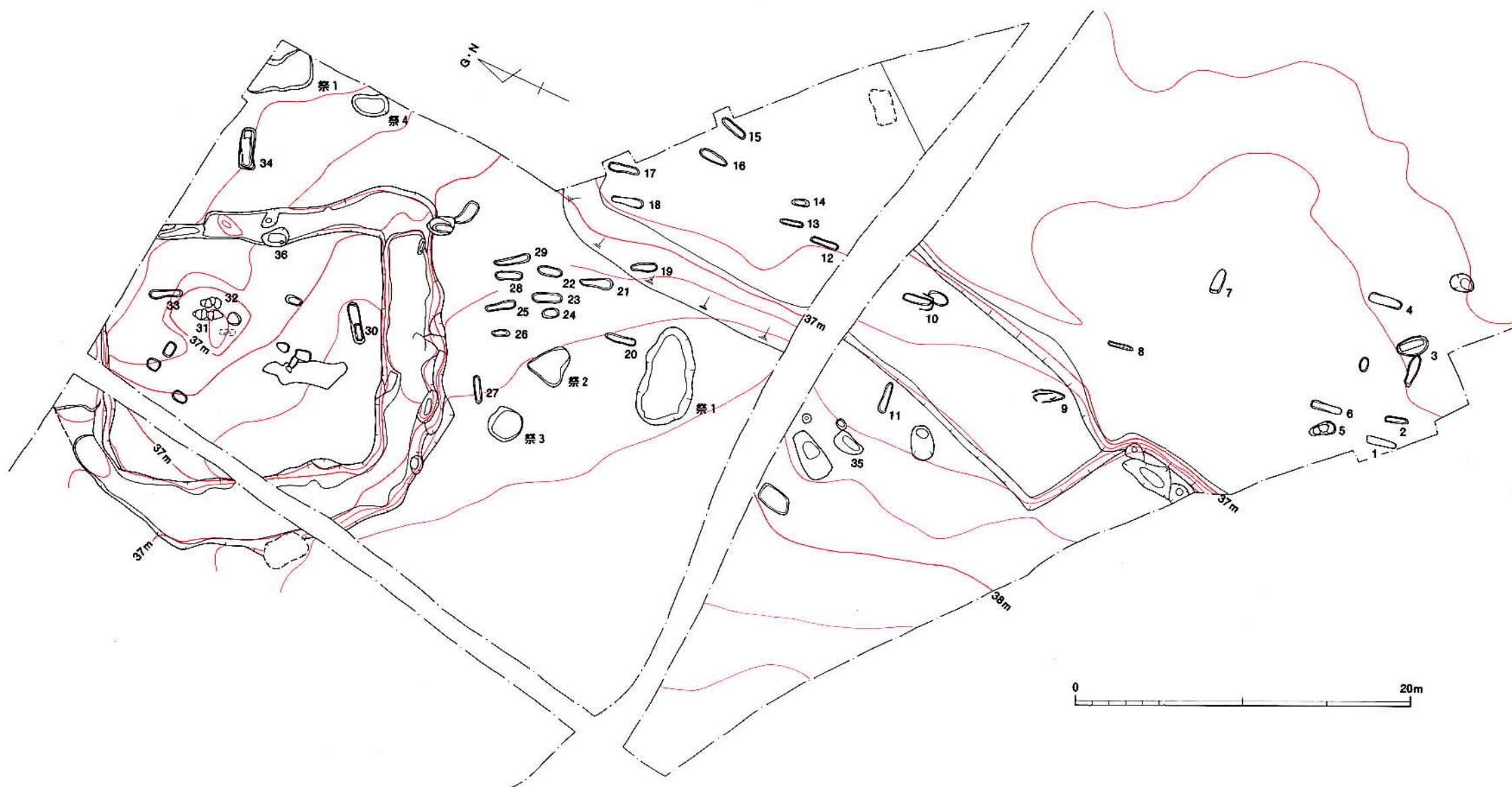
1) 墳墓

1号墓（図版3、第8図）

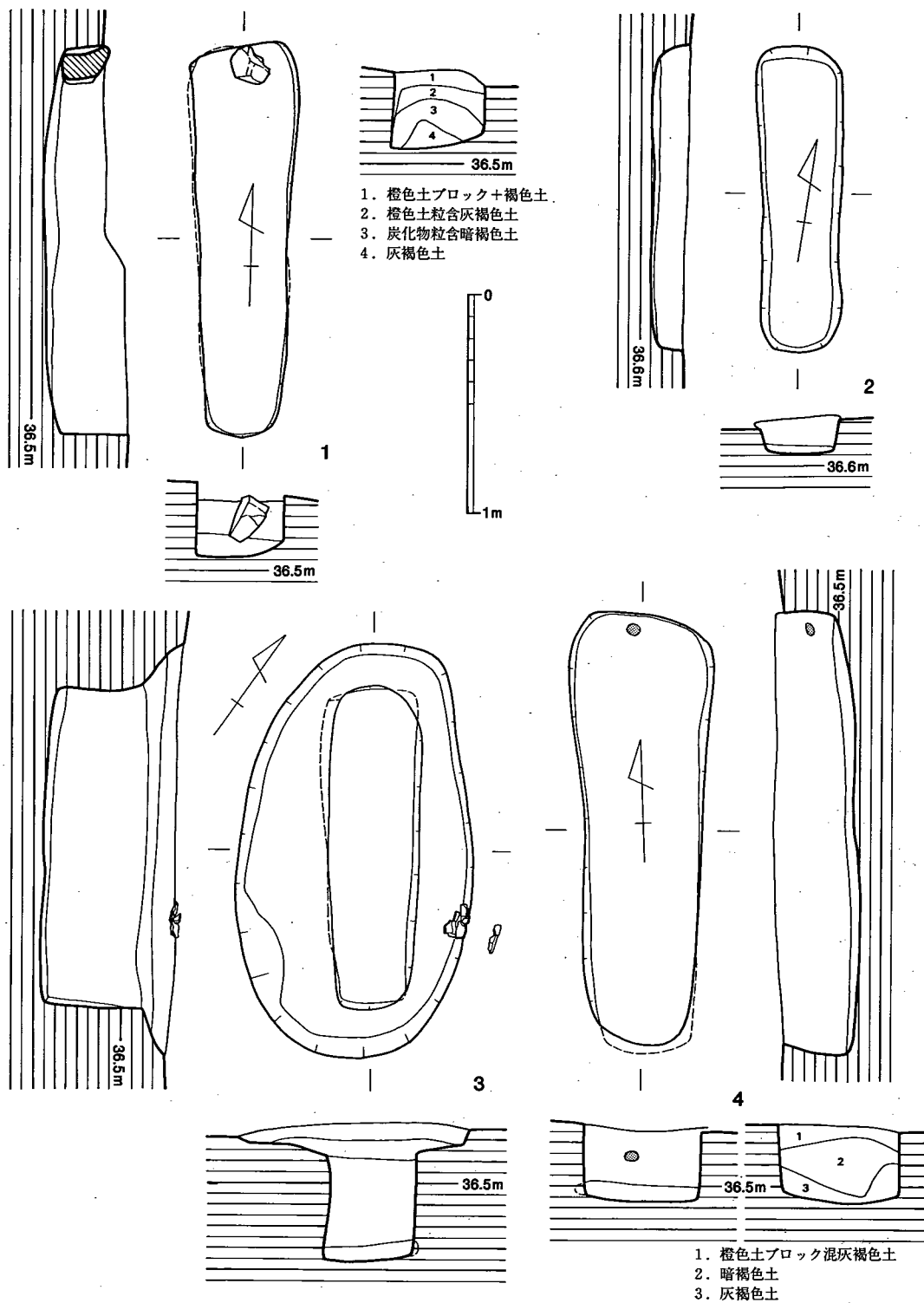
1・2・5・6号墓は密集してⅢ区南西端に造営される。1号墓はその中でも最も南西にあり、調査区境と接する。平面形は北側が幅の広い隅丸長方形で、形状から頭位は北側と考えられ、



第6図 1号埋甕出土縄文土器実測図 (1/3)



第7図 弥生時代墳墓群配置図 (1/300)



第8図 1～4号墓実測図 (1/30)

頭の位置に自然石1個が立て掛けられた状態で出土した。主軸方位はN-2°-Wで、長さ1.8m、最大幅0.5m、中央部幅0.4m、深さ0.35m。

2号墓（図版4、第8図）

1号墓から1m離れて東に位置する。平面形が隅丸長方形の土墳墓で、北側がわずかに幅が広い。主軸方位はN-8°-Wで、長さ1.4m、最大幅0.4m、中央部幅0.35m、深さ0.15m。

3号墓（図版4、第8図）

2号墓の東3.7m離れた所にあり、2段掘りの墓墳が残る。墓墳は現状で楕円形をしており、長さ1.9m、幅1.1m、深さ0.15m。墓墳東肩部から弥生土器が出土した。土墳は北西側が幅の広い隅丸長方形の平面形で、主軸方位はN-35°-W。長さ1.5m、最大幅・中央部幅ともに0.4m、深さは0.5mで比較的深く、壁は垂直に近く立ち上がる。木蓋土墳墓と考えられる。

出土遺物

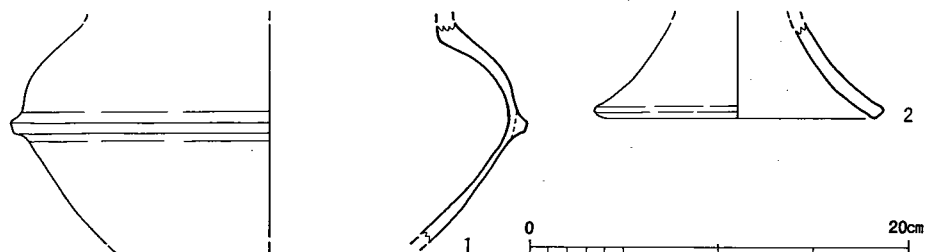
弥生土器（第9図）

壺（1） 壺の体部で、最大径が上位にあるやや肩の張った器形。肩部は器壁が薄くなり、この部分に断面台形の突帯1条を付す。

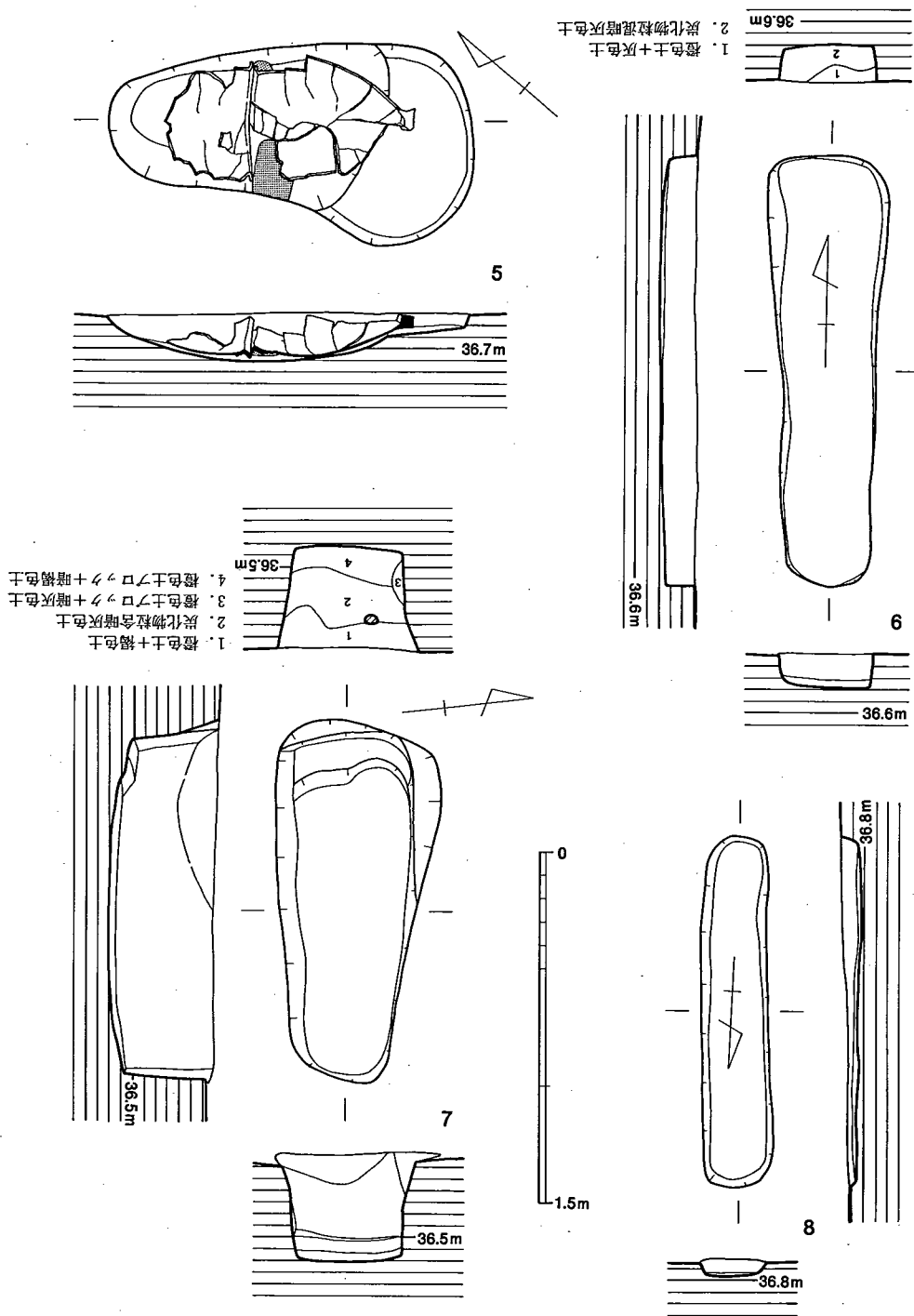
高杯（2） 高杯の脚部であろう。外彎して開く。

4号墓（図版5、第8図）

3号墓の北西1.8m離れた位置にある。土墳墓で、平面形は北側の広い隅丸長方形で、主軸方位はN-2°-E、長さ2.0m、最大幅0.65m、中央部幅0.55m、深さ0.35m。北端中央部の頭の位置付近に粘土塊が床から浮いた状態で出土した。蓋の目張り等に使用した粘土が落ち込んだものであろうか。



第9図 3号墓出土土器実測図（1/4）



第10図 5～8号墓実測図 (1/30)

5号墓(図版5、第10図)

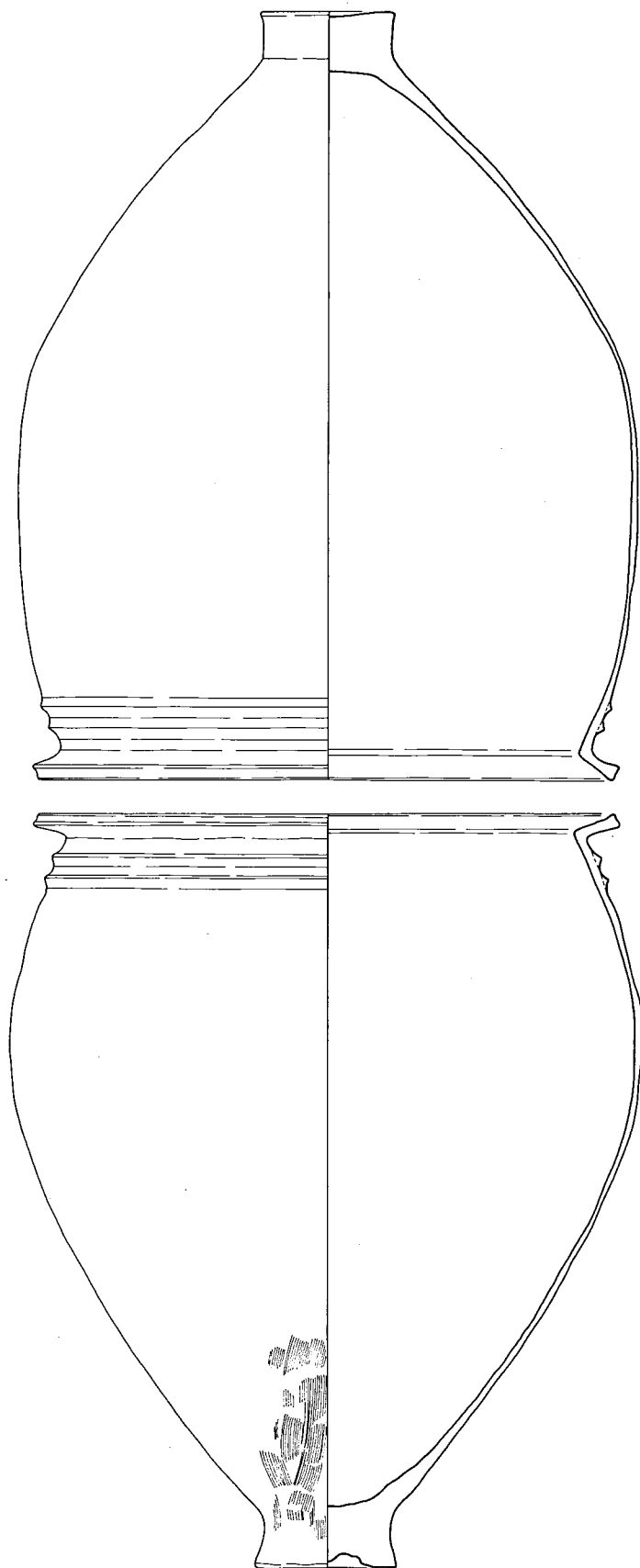
1号墓の北側1.9m離れて位置する。唯一の甕棺墓である。墓壙は2段掘りで、長さ1.55m、最大幅0.85m、中央部幅0.6m、深さは1段目が0.1m、2段目中央部は0.2m。甕棺は合口式の中型棺で主軸方位はN-140°-Eである。埋置角度はほぼ水平で、目張りの粘土は接合部というよりも上甕口縁部下に敷く。

出土遺物

甕棺(図版60、第11図)

2点ともほぼ同形同大で、大きさから判断して棺専用に使われたものであろう。南東側の上甕は、く字形の口縁部で、端部は厚くなり外側が若干凹む。胴部は丸味をもち、最大径は口径を上回る。胴部の器壁はきわめて薄く、中央部では2~3mmしかない。底部は厚く、わずかに上げ底になる。また、口縁部下には断面三角形突帯2条を付す。内面はナデ調整で、外面は風化が著しく不明。復元して、口径50.0cm、胴部最大径52.8cm、底径11.2cm、器高67.0cm。

下甕もく字形口縁だが、端部を若干跳ね上げる。上甕同様口縁部下には2条の突帯を



第11図 5号墓出土甕棺実測図 (1/6)

付し、胴部は器壁がきわめて薄く、最大径は口径を上回り、底部は厚い。内面はナデ調整、外面は風化が激しいが、下部には刷毛目が残る。復元口径50.0cm、胴部最大径54.0cm、底径12.1cm、器高66.0cm。

6号墓 (図版6、第10図)

5号墓の東側0.5m離れて隣接する。平面形は隅丸長方形で、北側が広い。主軸方位はN-1°-Wで、長さ1.85m、最大幅0.5m、中央部幅0.4m、深さは0.15mが残る。

7号墓 (図版6、第10図)

Ⅱ区の中央部に位置する。1～6号墓からはやや離れ、7～9号墓が比較的近接して南東から北西方向に並ぶ。7号墓は土壙墓で、平面形は隅丸長方形を呈し西側の幅が広い。西端床面の頭の位置には長さ0.1m程の1段高い枕を削り出す。主軸方位は帯状に並ぶ墳墓群の方向に直行してN-84°-Wで、長さ1.5m、最大幅・中央部幅ともに0.55m、深さ0.45m。

8号墓 (図版7、第10図)

7号墓の北西側に5.8m離れて造営される。土壙墓で、平面形は長円形を呈し、頭位は不明だが一応北側と考えて主軸方位はN-3°-W。長さ1.5m、幅0.3m、深さ0.1mが残る。

9号墓 (図版7、第12図)

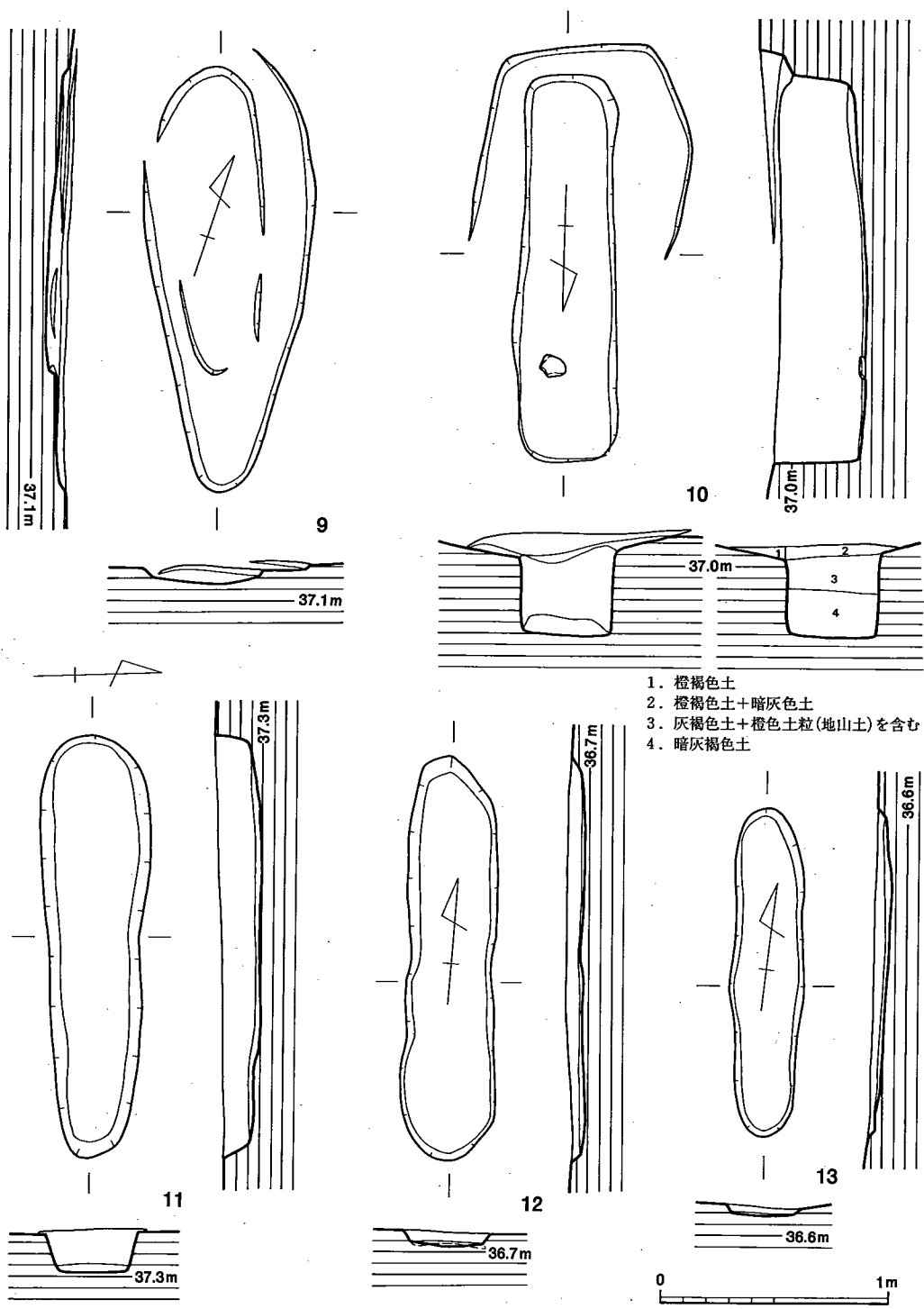
8号墓の北西側にあり、間隔は4.0m。削平されており形状も判然としないが土壙墓と考えられ、現状では2段掘り状になる。1段目は長さ1.9m、幅0.75m、2段目は長さ1.35m、幅0.45m、深さは5cmで、主軸方位はN-18°-W。

10号墓 (図版8、第12図)

Ⅲ区の北端部にあり、10・11・35号墓が東西に並ぶ。2段掘りの土壙墓で、墓壙は南側だけが残る、現状で長さ0.95m、幅0.9m。土壙は隅丸長方形の平面形で北側がわずかに広く、長さ1.7m、最大幅0.45m、中央部幅0.4m、深さ0.4mで、主軸方位はN-2°-W。また北側の底面に接して径10cm、厚さ3cm程度の扁平な河原石1個が出土した。

11号墓 (図版8、第12図)

Ⅲ区の北端部にあり、10号墓からは西側に4.7m離れている。平面形は長円形の土壙墓で、西側の幅が広く、主軸方位は墳墓群の方向に直行してN-89°-W。長さ1.85m、最大幅0.5m、中央部幅0.4m、深さ0.2m。



第12図 9～13号墓実測図 (1/30)

12号墓 (図版9、第12図)

Ⅳ区の南端部のⅢ区との境に位置する。12～14号墓がまとまって近接する。平面長円形の土壙墓で、主軸方位はN-4°-W、長さ1.8m、幅0.5m、深さは削平のため5cm程しか残らない。

13号墓 (図版9、第12図)

12号墓の北側に0.8mの間隔であり、削平を受けて遺構の残存状況は悪い。平面形は長円形を呈する土壙墓で、現状で長さ1.45m、中央部幅0.4m、深さ5cm、主軸方位はN-7°-W。

14号墓 (図版10、第13図)

13号墓の東側に1.0mの間隔を開けて隣接する土壙墓で、12・13号墓同様に遺構の残り具合は良くない。平面形状が長円形の土壙墓で、長さ1.1m、幅0.4m、深さ0.1m。主軸方位はN-13°-W。

15号墓 (図版10、第13図)

Ⅳ区東側の調査区境にある土壙墓で、12～14号墓からは北側にやや離れており、16号墓と近接して並んで造営される。主軸方位はN-22°-Eで、平面長円形を呈し、長さ1.8m、幅0.45m、深さは比較的残りの良い北側で0.15mある。

16号墓 (図版11、第13図)

15号墓の西側1.6mに位置する土壙墓。平面形は長円形で、北側が若干広い。主軸方位はN-11°-Eで、長さ1.8m、最大幅0.55m、中央部幅0.5m、深さは5cm程度しか残らない。

17号墓 (図版11、第13図)

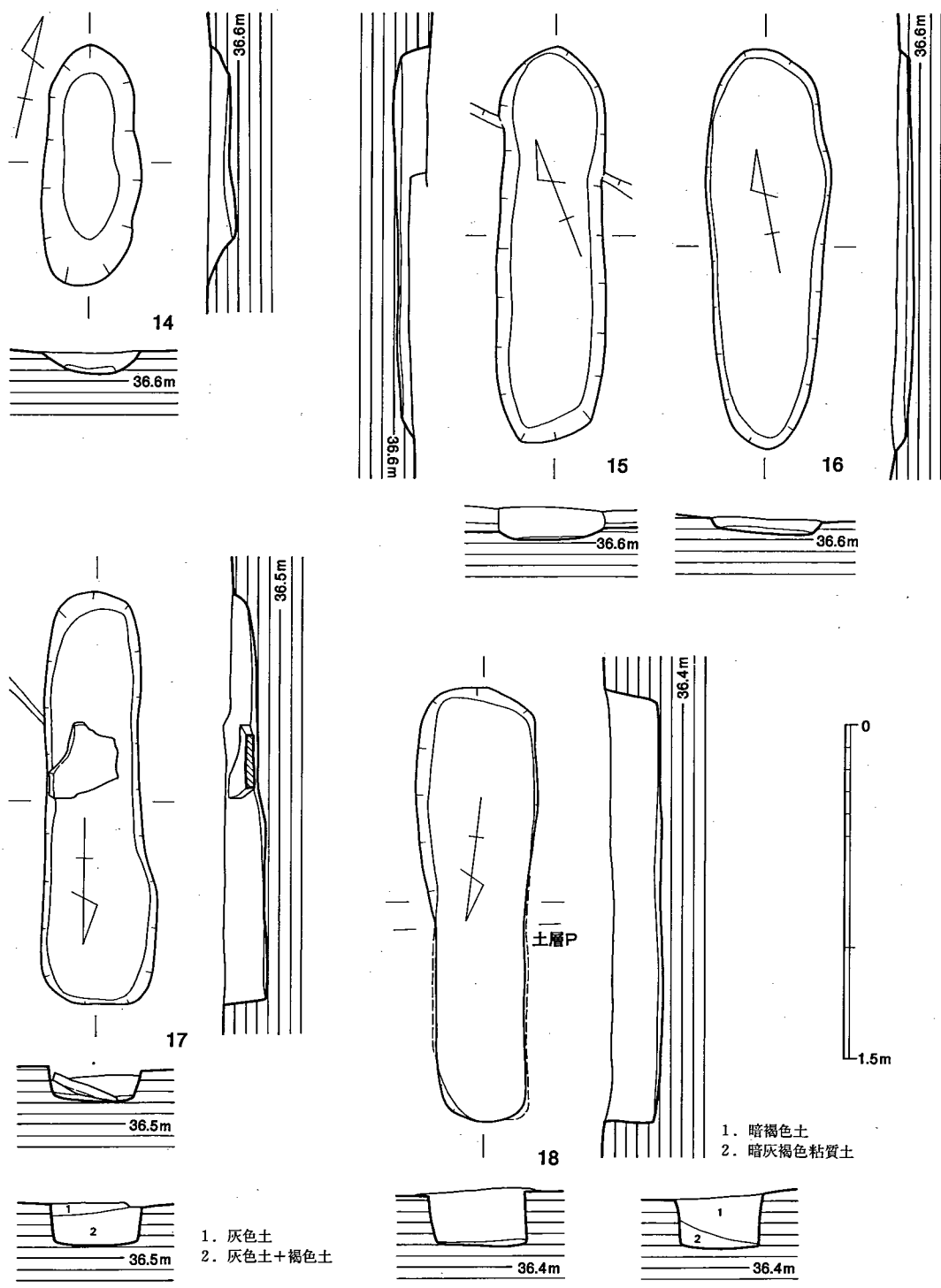
15・16号墓の北西側の調査区境にあり、18号墓と近接して並ぶ。平面形は隅丸長方形で北側が広く、主軸方位はN-1°-Wで、長さ1.85m、最大幅0.5m、中央部幅0.4m、深さ0.2m。中央部に板石1個が落ち込んでおり、石蓋土壙墓と考えられる。

18号墓 (図版12、第13図)

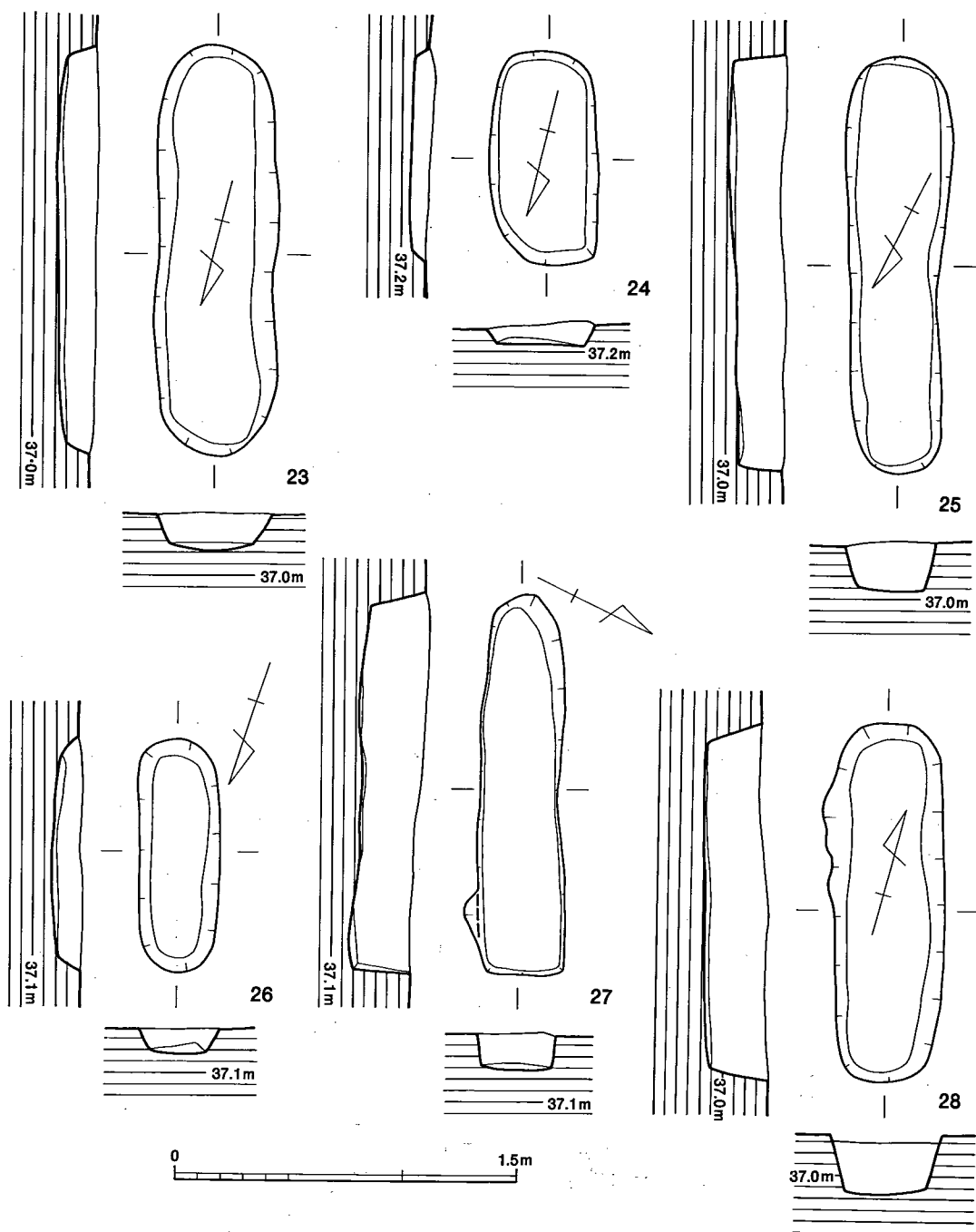
17号墓の西側1.6mの間隔で並ぶ。平面形が隅丸長方形の土壙墓で、17号墓とは逆に南側の幅が広い。主軸方位はN-174°-Wで、長さ1.95m、最大幅0.55m、中央部幅0.4m、深さ0.25m。

19号墓 (図版12、第14図)

19～26・28・29号墓は、20号墓が若干南西側に外れるが、ほぼまとまっており主軸の方向も



第13図 14~18号墓実測図 (1/30)



第15図 23～28号墓実測図 (1/30)

揃う。19号墓は其中最も南西に位置する土壙墓である。平面形は隅丸長方形で、南側の幅が広い。主軸方位はN-162°-Eで、長さ1.6m、中央部幅0.5m、深さ0.3m。

20号墓 (図版13、第14図)

19号墓の西側に4.0mの間隔を開けて作られ、1号祭祀土坑のすぐ北側に位置する。土壙墓で、平面形は長円形を呈し、主軸方位はN-4°-W。長さ1.95m、中央部幅0.4m、深さ0.25m。

21号墓 (図版13、第14図)

19号墓の北西1.4mに位置する土壙墓である。平面形は長円形を呈して南側が広く、主軸方位はN-166°-Eで、長さ1.9m、最大幅0.6m、中央部幅0.45m、深さは0.1mが残る。

22号墓 (図版14、第14図)

21号墓の北側1.1mに位置し、23・24号墓と並ぶ。平面形長円形の土壙墓で、主軸方位はN-9°-W、長さ1.45m、中央部幅0.55m、深さ0.15m。

23号墓 (図版14、第15図)

22・24号墓に挟まれる。平面長円形の土壙墓で、主軸方位はN-14°-W、長さ1.8m、中央部幅0.55m、深さ0.15m。

24号墓 (図版14、第15図)

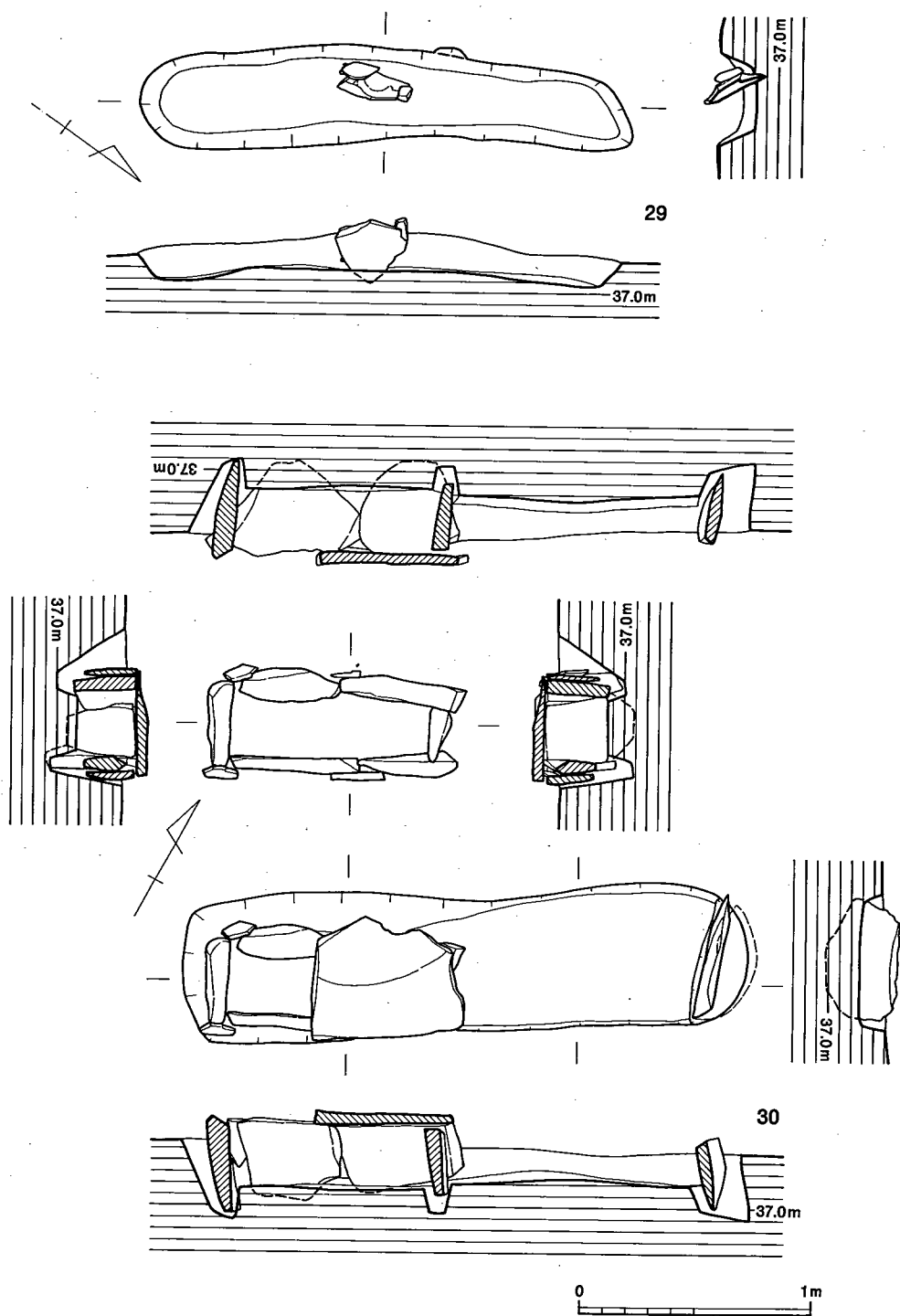
平行して並ぶ22～24号墓の中で最も南西側にあり、削平のために遺構の残存状況は悪い。平面形は長円形で、主軸方向はN-14°-W、長さ0.95m、中央部幅0.45m、深さ0.1m。土壙墓。

25号墓 (図版15、第15図)

25・26・28・29号墓は平行して並んでおり、帯状に延びてきた土壙墓群はこの4基の土壙墓の先で1号墳丘墓の南東側周溝に到達する。25号墓は26・28号墓に挟まれる。平面形は長円形で南側が幅が広い土壙墓で、主軸方位はN-154°-W、長さ1.8m、最大幅0.45m、中央部幅0.4m、深さ0.25m。

26号墓 (図版15、第15図)

並んでいる4基の土壙墓の中で西端に位置する小型の土壙墓。平面長円形で、主軸方位はN-19°-W、長さ1.0m、中央部幅0.35m、深さ0.1m。



第16図 29・30号墓実測図 (1/30)

27号墓 (図版16、第15図)

26号墓からは西側に2.6m離れており、1号墳丘墓の南東側周溝と3号祭祀土坑の間にあって、周溝と方向が揃っている。平面形は隅丸長方形で北東側の幅が広く、主軸方位N-65°-E、長さ1.65m、最大幅・中央部幅はともに0.35m、深さは0.3m。土壙墓。

28号墓 (図版16、第15図)

25・29号墓に挟まれる。平面長円形で、主軸方位はN-15°-W、長さ1.55m、中央部幅0.5m、深さ0.25m。土壙墓。

29号墓 (図版17、第16図)

並んだ4基の土壙墓の中で東端に位置する。平面形はややいびつな長円形で、主軸方位はN-145°-E、長さ2.1m、最大幅・中央部幅ともに0.4m、深さ0.15mで、細長い形状である。土壙の中央部に石が落ち込んでおり、石蓋土壙墓であろう。

30号墓 (図版17・18、第16図)

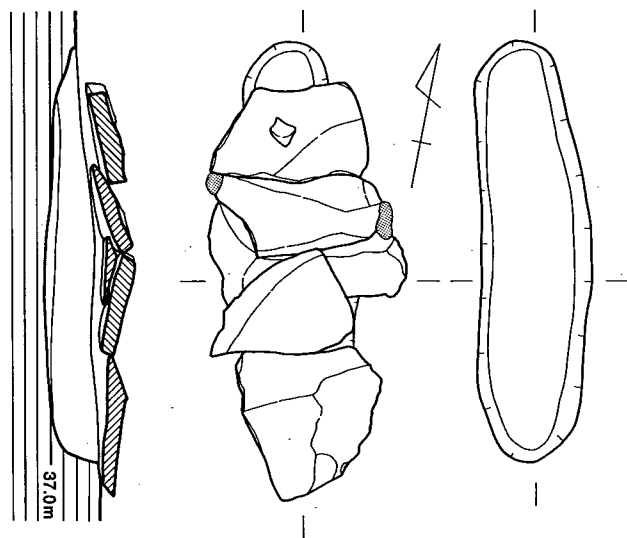
1号墳丘墓内の南東端に位置する。一つの長い墓壙内に石棺墓と小口に板石を立てた土壙墓が縦に2基並んだ状態で検出した。2基の墓が一つの墓壙を共有したものか、あるいは切り合いは確認できなかったものの2基は時期の違う別の墓である可能性もある。2体を同時に埋葬したのであれば、石棺の北東側小口石も共有したことになる。石棺の小口石と、土壙墓の北東側小口石の高さが揃っており、2基の墓は床面のレベルも合うことから、一応一連のものと考えたい。墓壙の平面形は隅丸長方形で、主軸方位はN-59°-E、長さ2.45m、幅は南西側の最大部で0.65m、中央部で0.55m、深さは南西側の最大部で0.2mである。

南西側の石棺は、両小口に各1枚、両側に各2枚の安山岩板石を立てて組合せ、その隙間を外側から小型の板石で塞ぐ箱式石棺墓で、蓋石は板石1枚が残るが、本来は南西側にさらに1枚あったものと考えられる。石棺の内側で長さ0.85m、南西側の頭部幅0.25m、足元幅0.2m、深さ0.3mで、主軸方位はN-118°-Wである。

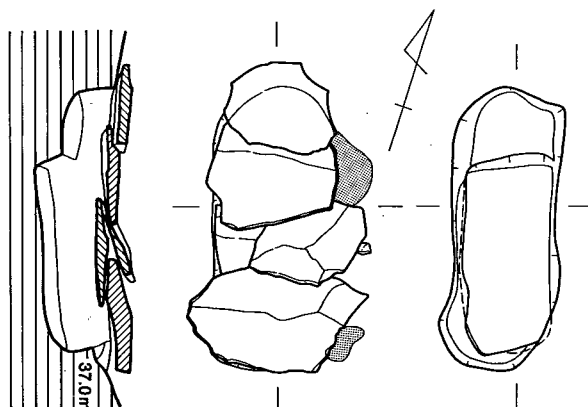
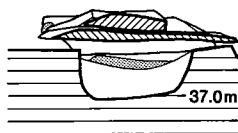
北東側土壙墓は、墓壙の北東端の小口部分に安山岩板石1枚を立てる。石棺の北東側小口石との間の長さは1.1m弱で、また墓壙は北東側の幅が広く0.6mあり、こちらが頭位であろうか。規模からみて2基とも小児墓であろう。

31号墓 (図版19、第17図)

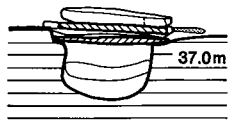
1号墳丘墓内の北寄りの部分で31～33号墓を検出した。3基は密集しており、さらに31・32号墓の2基は隣接して並ぶ。31号墓は石蓋土壙墓で、平面形は長円形を呈し、主軸方位N-11°



31



32



-W、長さ1.65m、中央部幅0.45m、深さは最大で0.2mと蓋石まで残存している割には浅い。

蓋石には安山岩板石 5 枚を使用し、一部に目張りの粘土が残る。北側の墓壇が蓋石からはみ出しているが、断面形状からみて本来蓋石内におさまっていたものが崩れたと考えられる。

32号墓 (図版19、第17図)

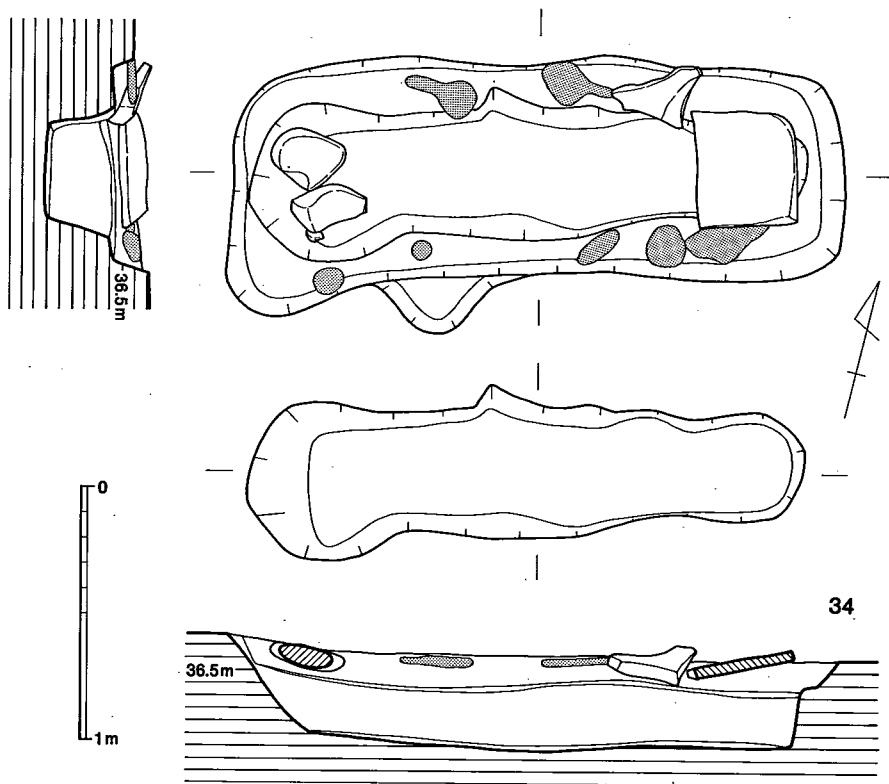
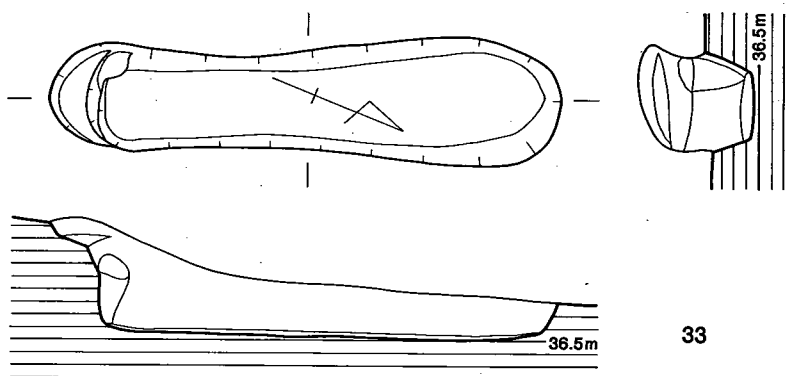
31号墓の北東側隣にある。同じく石蓋土墳墓で、墓壇は平面長円形を呈し、周壁はオーバーハング気味に立ち上がる。また、北側床面には長さ0.25m高さ0.1mの枕を削り出す。主軸方位は $N-19^{\circ}-W$ で、長さ1.05m、北側の最大部で幅0.45m、中央部幅0.4m、深さは最大で0.3m。規模から小児墓と考えられる。

蓋石は、安山岩板石 5 枚を使用しており、目張りの粘土が残る。

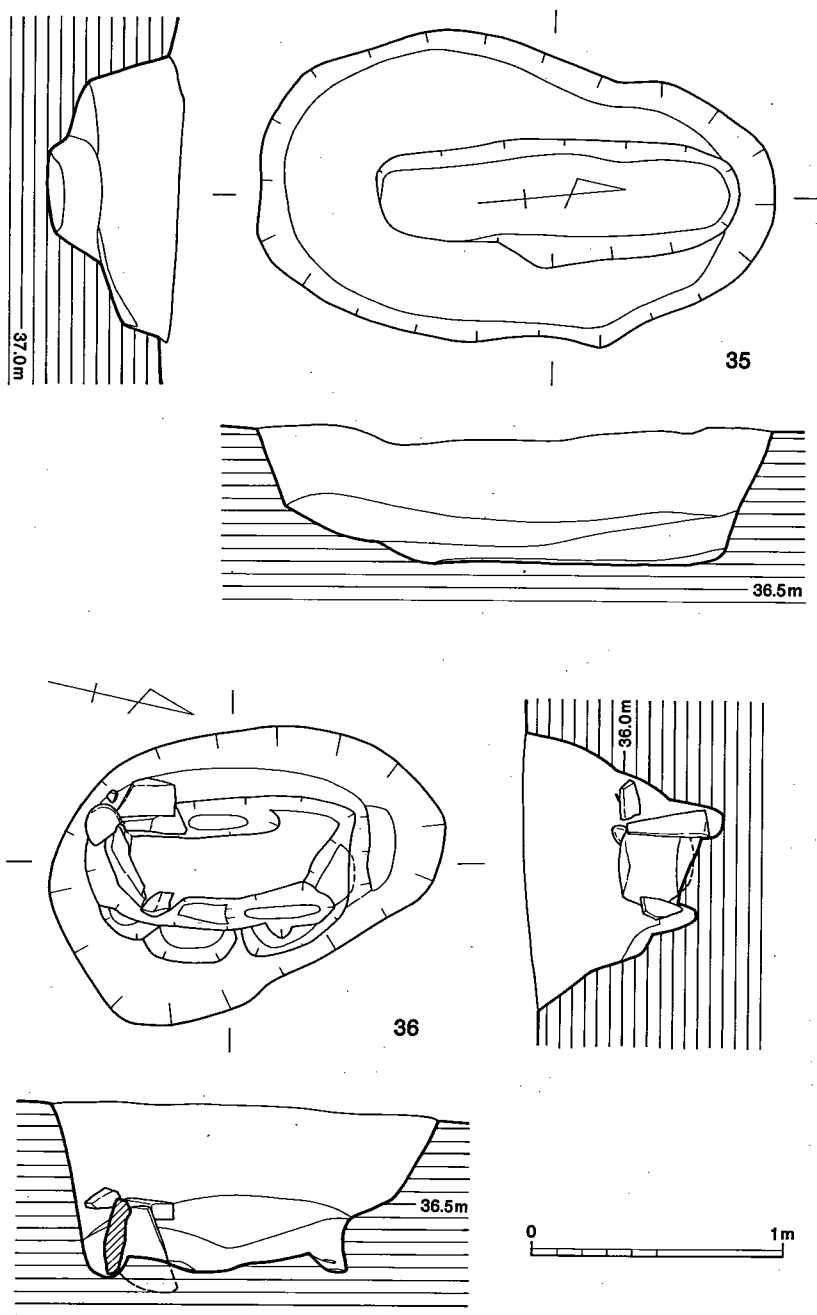
33号墓 (図版20、第18図)

32号墓の北側に2.4mの間隔を開けて検出した土墳墓である。平面長円形で、北西側が幅が広く、主軸方位は $N-23^{\circ}-W$ 。長さは現状で2.0m強あるが、南東側は崩れているため本来は1.8m程であろう。幅は北西側の最大部で0.5m、中央部で0.4m、深さは最大0.35m。

第17図 31・32号墓実測図 (1/30)



第18図 33・34号墓実測図 (1/30)



第19図 35・36号墓実測図 (1/30)

34号墓 (図版20、第18図)

墳丘墓の北東側周溝の外側に位置する。石蓋土壙墓と考えられ、2段掘りの墓壙を持つ。1段目の墓壙は平面隅丸長方形を呈し、長さ2.4m、幅0.85m、深さ0.1m。土壙は長円形で、西側の幅が広くなる。主軸方位はN-104°-Wで、長さ2.2m、最大幅0.6m、中央部幅0.5m、深さ0.35m。

蓋石は東側に安山岩板石1枚が掛かっており、その脇にも小型の板石1枚が残る。西側の頭の位置の上層から出土した河原石は蓋石に使用したものとは考えにくく、あるいは標石等が陥没したものであろうか。また、土壙の周囲には目張りの粘土が多く残る。

35号墓 (図版21、第19図)

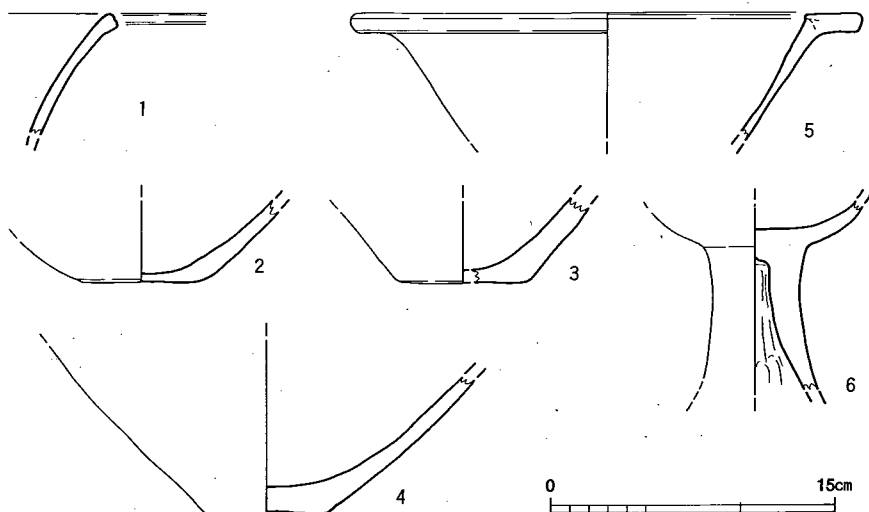
Ⅲ区の11号墓から西に2.3mの場所にある。2段掘りになっており、墓壙は平面楕円形で、長さ2.05m、幅1.2m、深さは0.3~0.4m。土壙は墓壙の北側に寄っており、長円形の平面形で、主軸方位N-6°-E、長さ1.45m、中央部幅0.5m、深さ0.2m。墓壙の東側上縁部の脇から弥生土器が出土した。墓に直接伴うものと断言することはできない。

出土遺物

弥生土器 (図版60、第20図)

壺 (1~4) 1は外反して開く素口縁の壺の口頸部。2~4は底部。

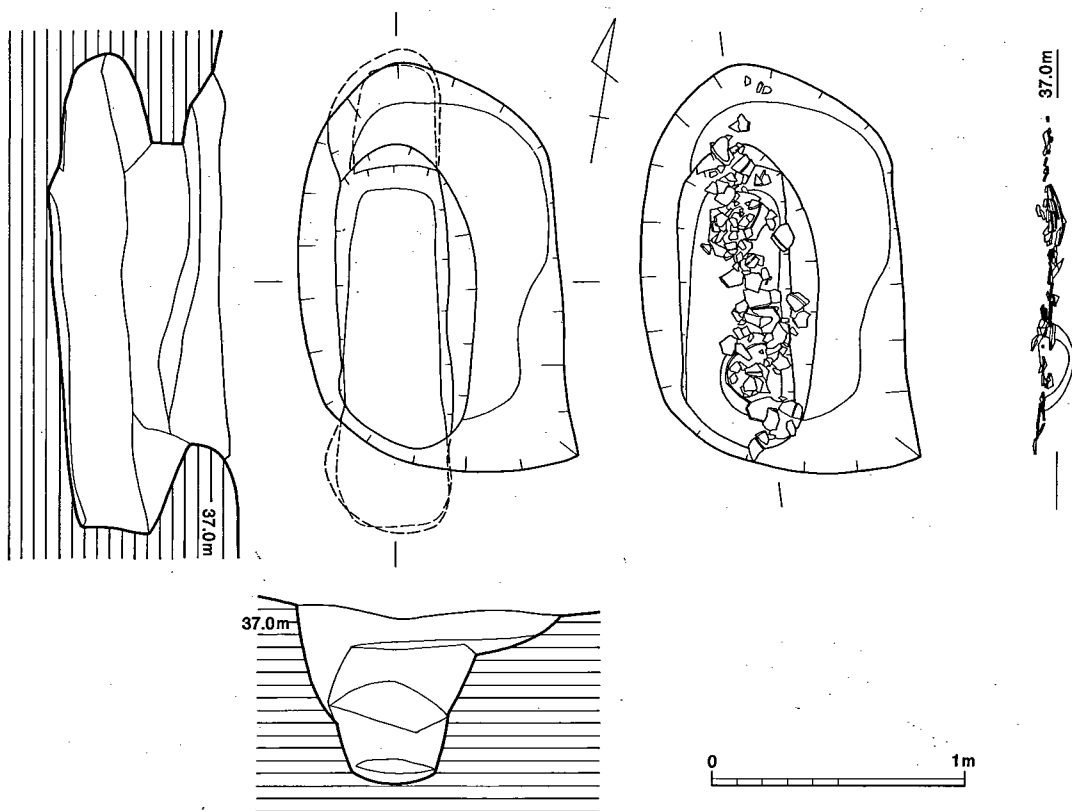
高杯 (5・6) 5は鋤先状口縁を有する高杯で、内側の突出がほとんどない。6は高杯の杯部から脚部の破片で、杯部が直線的に開くタイプであろう。



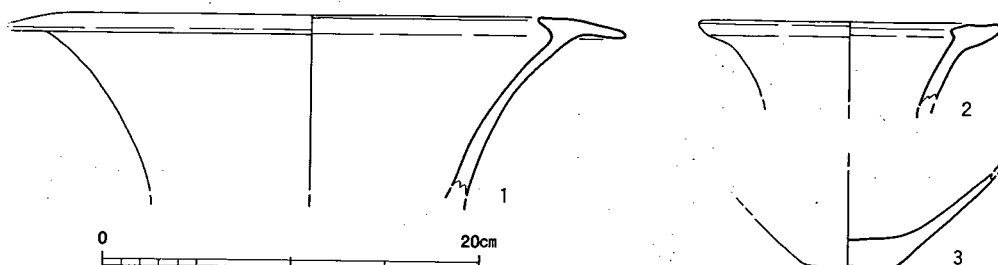
第20図 35号墓出土土器実測図 (1/4)

36号墓 (図版21、第19図)

1号墳丘墓の北東側周溝を切っており、周溝埋没後に造営されたものであろう。箱式石棺墓で、墓壙は現状では平面卵形をしており、長さ1.55m、幅1.1m、深さは石棺の底面まで測って0.6~0.65m。石棺の石材は既に大半が抜き取られており埋土中からも出土したが、墓壙の南側にある数個の石が原位置を保っている。それによると、石棺は安山岩板石を両小口に各1枚、両側に2~3枚ずつを立て、隙間を塞ぐために小型の板石も使用したようである。立石と抜き取り痕から推定する石棺の規模は内側で長さ0.75m、幅0.25m程で、深さは0.2m。小児棺であろう。主軸方位はN-13°-W。



第21図 37号墓実測図 (1/30)



第22図 37号墓出土土器実測図 (1/4)

37号墓 (図版22、第21図)

1号墳丘墓の南東側周溝を切っており、周溝埋没後あるいは埋没途中で造営されたものである。墓壙は長さ1.6m、幅1.05mで、土壙はその南寄りの長さ1.2m、幅0.55mの部分掘り下げて、前後を横方向に掘り込んで頭と足の位置を作り、さらに北側底面には枕を削り出す。しかし、枕の長さは約40cmと長過ぎ、また小口部分をこれほどに掘り込む例は知らない。調査時に掘っていて確信が持てなかったことから、本来オーバーハングして立ち上がる程度であったものを誤って掘り過ぎた可能性がある。土壙の主軸方位はN-9°-Wで、現状で長さ1.85m、中央部幅0.45m深さは墓壙底から測って0.55m。

墓壙の上面からは弥生土器破片が多数出土し、その範囲は土壙の掘り込みとほぼ一致する。土器の形状と出土したレベルから、土器蓋とは考えにくく、埋納後に置いたものであろう。

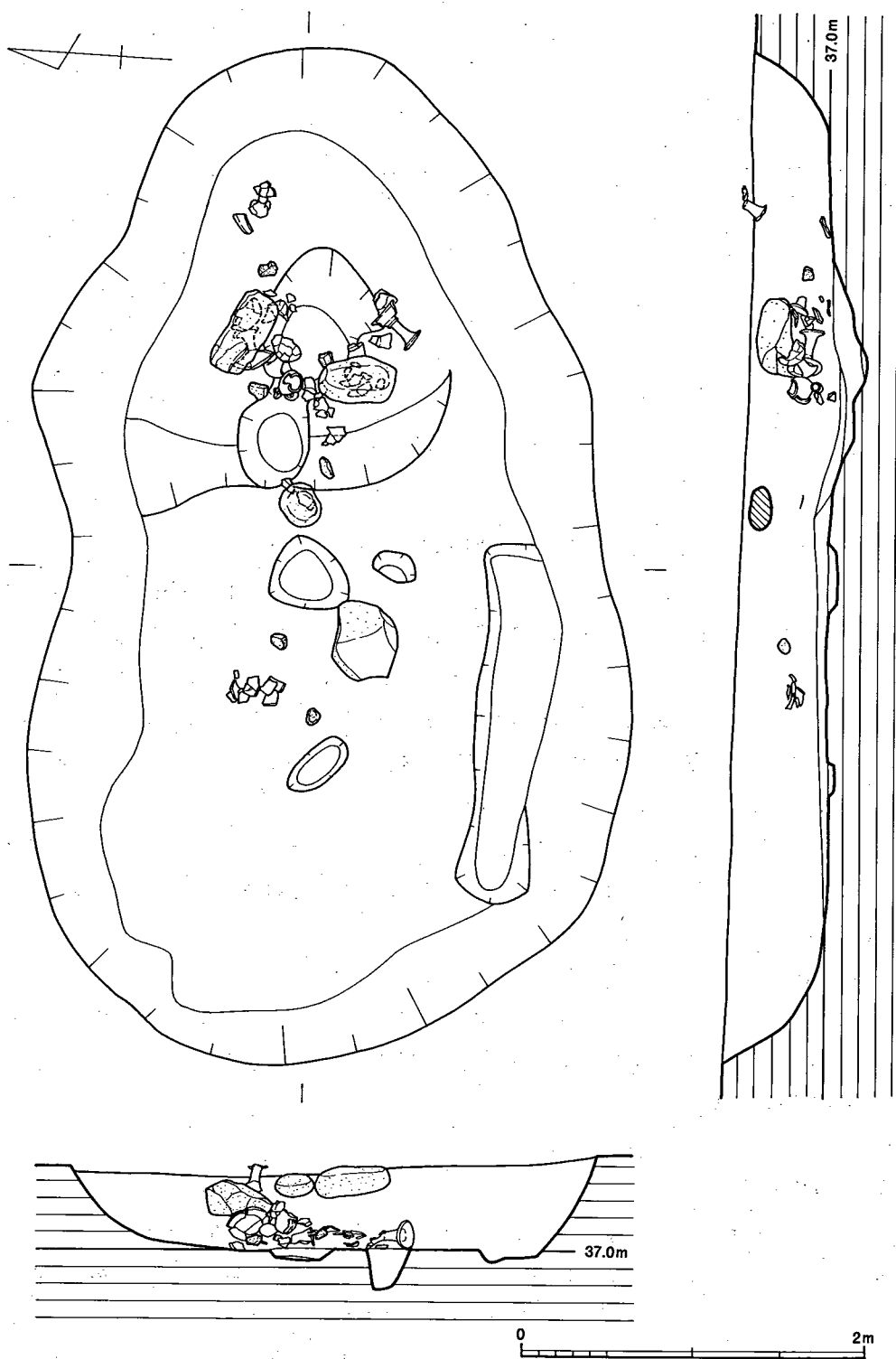
出土遺物

弥生土器 (図版60、第22図)

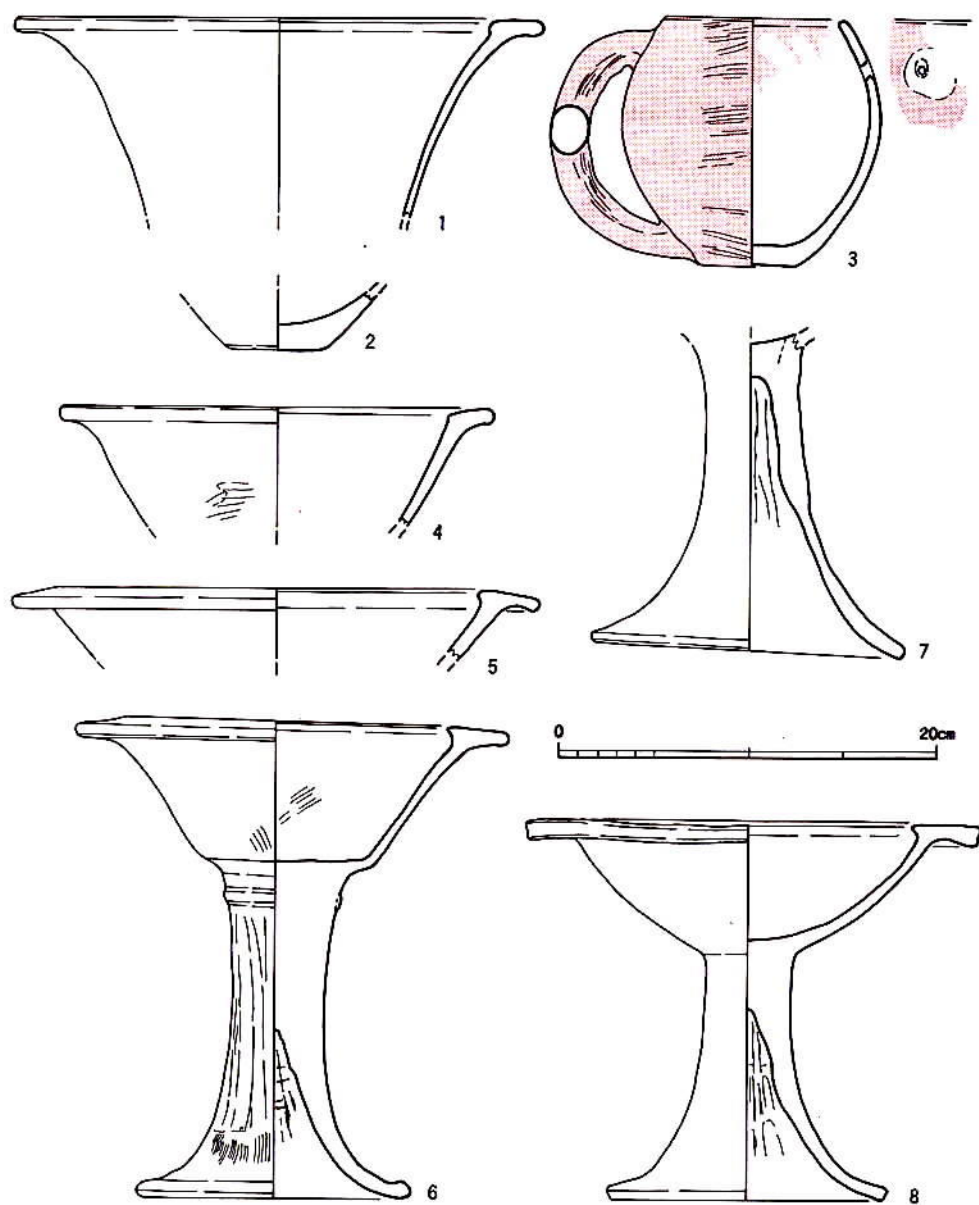
壺 (1~3) 1・2は鋤先状口縁を有する口頸部で、1は口縁上面の平坦面が広く外傾する。2は復元口径16.0cmの小型のもので、口縁部は内側の突出が未発達で内傾する。3は底部に比べて胴部の器壁が薄くなる。

2) 祭祀土坑

不定形の土坑内に多量の土器を投棄した、いわゆる祭祀土坑を1号墳丘墓の南東側で3基、北東側で2基検出した。南東側の1~3号祭祀土坑は、19~27号墓を避けるように墳墓群の南西側に寄って作られており、両者が関連しあって造営されたことは明らかであろう。一方、北東側の4・5号祭祀土坑は調査区隅で検出したこともあって、そうした関係は不明である。いずれの土坑も多量の土器を伴う。



第23図 1号祭祀土坑実測図 (1/40)



第24图 1号祭祀土坑出土土器实测图① (1/4)

1号祭祀土坑 (図版23、第23図)

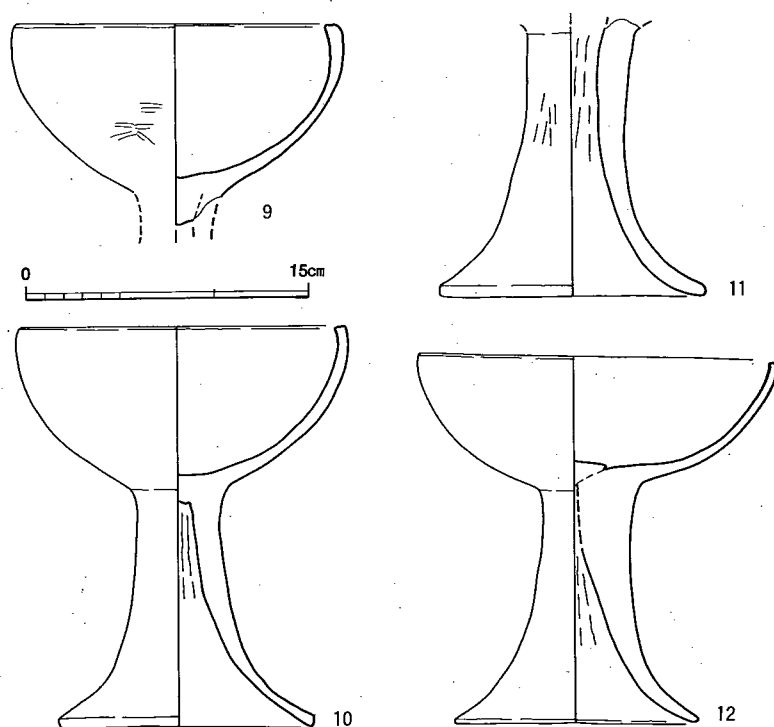
墳丘墓の南東にあり、5基の土坑の中で最も南にある。土坑の平面形は卵形に近い不整形で、底面は多少の凹凸はあるがほぼ水平である。長軸長5.95m、短軸の最大幅3.55m、深さ0.45～0.6mで、長軸の方位はN-86°-E。土器は高杯の比率が高く、中央部からも若干出土しているが、土坑の東側に偏っている。また、埋土の上層からは土器に混じって径20～50cmの自然石も出土した。

出土遺物

弥生土器 (図版61・62、第24・25図)

壺 (1・2) 1は鋤先状口縁を有し、内側の突出はほとんどなく、上部の平坦面は水平になる。2は底径5.0cmで、小型のものであろう。

ジョッキ形土器 (3) 体部は弧を描いて彎曲し、最大径は中位にある。把手は大きく、断面は楕円形を呈する。外面の全面と口縁部内面には丹塗りを施し、体部外面は横方向に、把手は縦方向に丁寧な篋磨きで仕上げる。さらに、把手の反対側の口縁部下には焼成前の穿孔があり、外面のこの部分の周囲には丹塗りが見られない。注口があったものが剥離した可能性があると考えられる。口縁部・底部の角・把手の外面が磨滅しているのは、ある程度使用されたこ



第25図 1号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)

とを示すものであろう。口径9.5cm、体部最大径13.7cm、底径5.0cm、器高13.2cm。

高杯（4～12） 鋤先状口縁のもの（4～6・8）と、素口縁のもの（9・10・12）がある。4は口縁部内側の突出がほとんどなく、鋤先状というよりも口縁部を屈曲させた程度で、杯部は深くなる。5・8は口縁部上面が外傾し、杯部は半球形を呈して浅めとなる。6は杯部が直線的に開き、口縁部上面はやや外傾する。脚部は高く、下部で外彎して開き、また脚部の上半部は中実となる。杯・脚部の境よりやや下には低い突帯1条を付す。器面は風化のため不明瞭であるが、杯部は内外面とも横および斜め方向に、脚部外面は縦方向に篋磨きを施すが、裾付近には縦方向の刷毛目が残る。9・10・12は素口縁で杯部が半球形を呈し、口縁部は内彎する。9の外面にはわずかに篋磨きの痕跡が残る。7・9・12では、杯部の外側と脚部を連続して作り、最後に杯部の底を充填した痕跡が観察できる。

2号祭祀土坑（図版24、第26図）

1号墳丘墓の南東側にあり、1・3号祭祀土坑に挟まれる。平面形は隅丸三角形で、南東側隅の下部は横穴状に横方向に50cm程掘り込む。北西-南東方向が2.5m、掘り込み部分まで含めると3.05m、北東-南西方向2.05m、深さは0.6～0.7m。土器は主に土坑の中央部から北側に集中する。

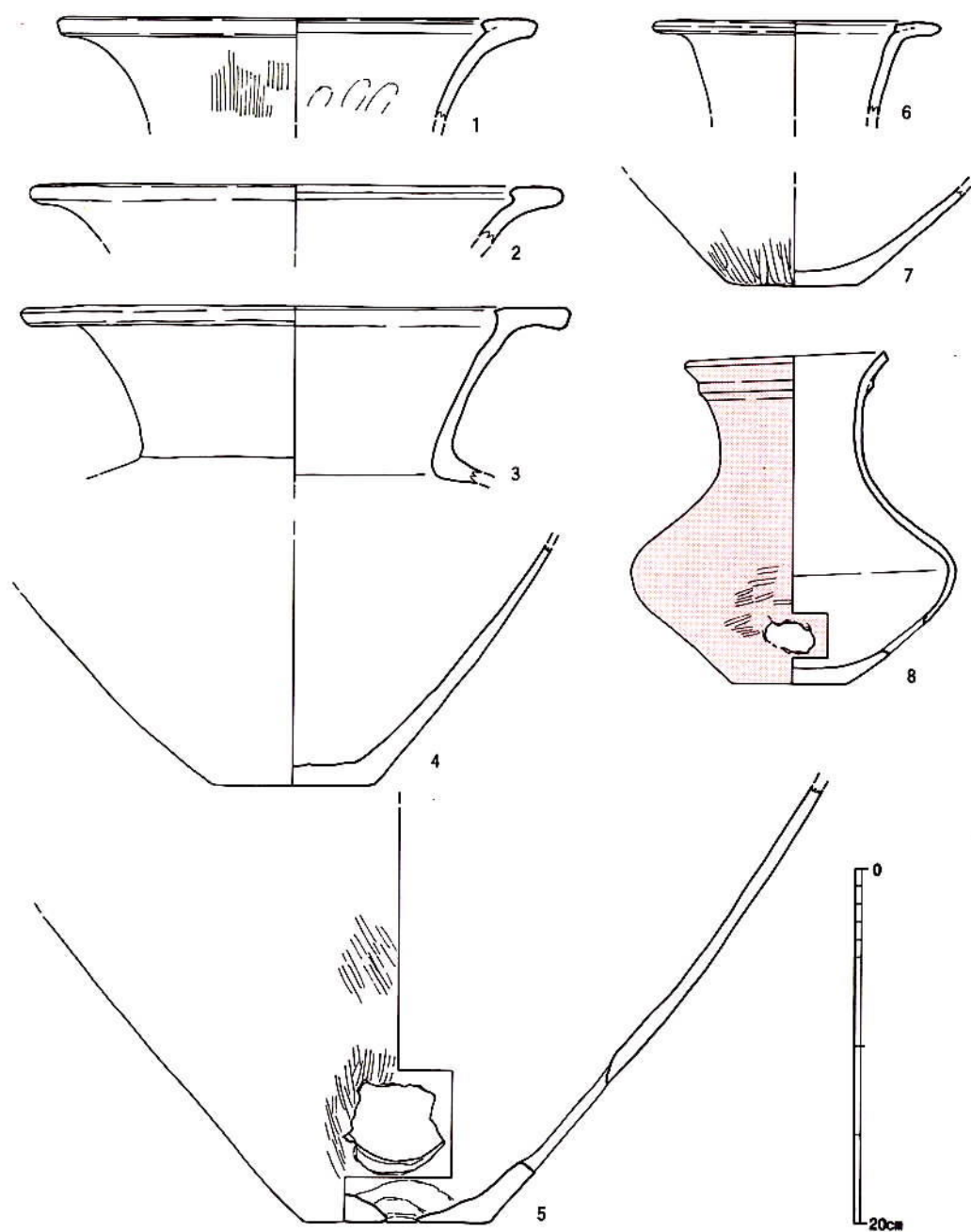
出土遺物

弥生土器（図版62・63、第27・28図）

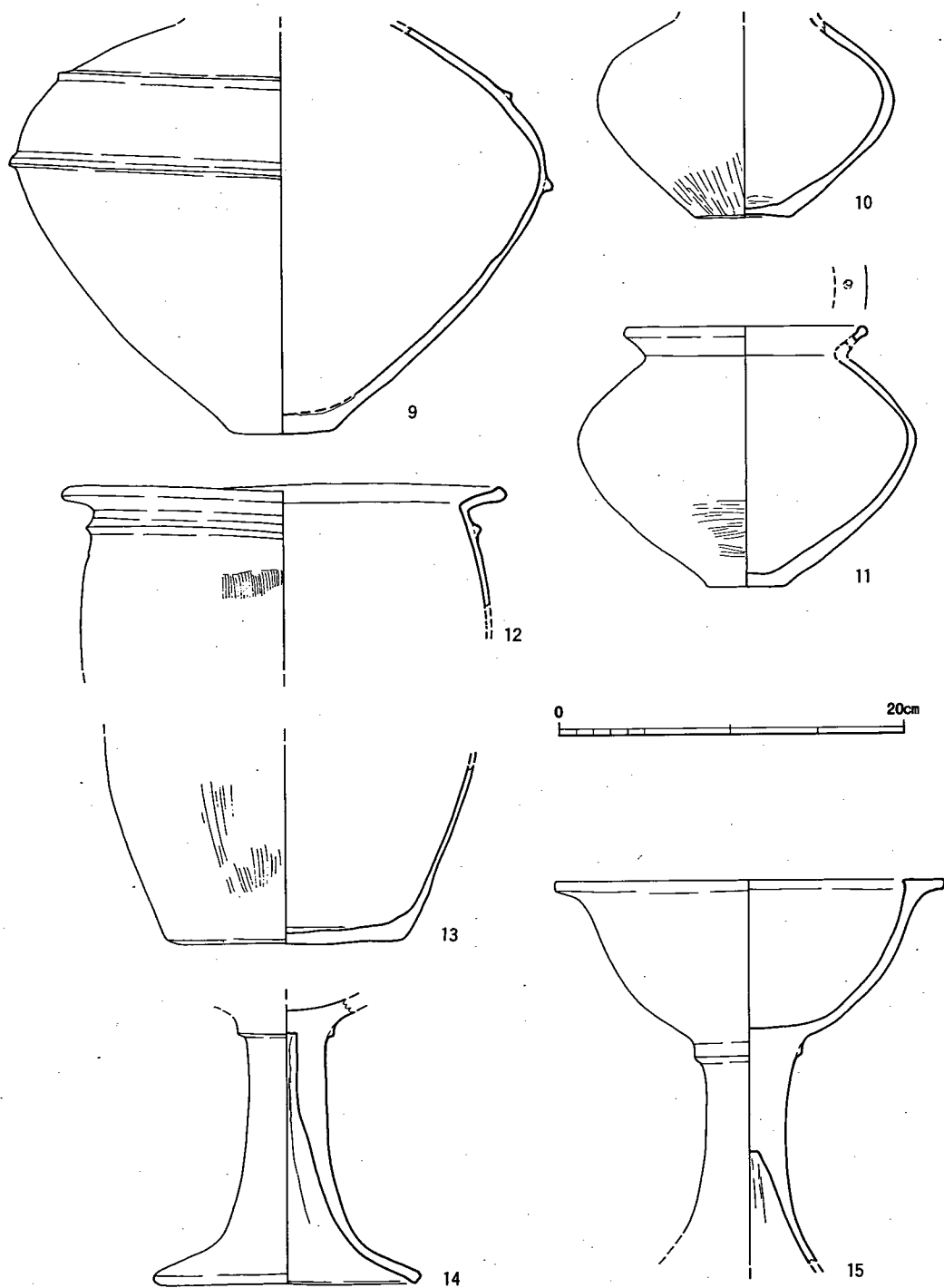
甕（1～11） 1～3・6は鋤先状口縁を有する広口壺の口頸部。4点とも口縁部上面の平坦面は水平となるが、内側の突出が小さく、1・2は幅も狭い。1の頸部外面には縦方向の刷毛目が残る。5は大型壺の胴部下半で、外面には縦・斜め方向の篋磨きの痕跡が残り、底部および胴部下位の2箇所を外側からの穿孔がある。7は底部で、下部に縦方向の篋磨きを施す。9・10は広口壺の胴部で、2点とも最大径は上位にあり、9は肩部に断面三角形の、最大径部分に断面台形の突帯を各1条付す。10の下部には縦方向の篋磨きの痕跡が残る。8は長頸壺で、胴部の最大径は中位にあって胴張りが著しく、なだらかに頸部に移行して、口縁部で再び外彎して開く。口縁部下には断面三角形の突帯1条を付して口縁部と頸部とを分ける。外面は全面に丹塗りを施すが、剥落してほとんど残らない。胴部には横方向篋磨きがわずかに残る。また、胴部下位には穿孔がある。11は短頸壺で、口縁部には穿孔がある。本来は2個一対の紐孔であろう。器面は風化しているが、下部の一部では横方向の篋磨きが観察できる。

甕（12・13） 12は口縁部がくの字に屈曲して端部を跳ね上げる。口縁部下には断面三角形の突帯1条があり、体部の器壁はきわめて薄い。胴部外面には刷毛目が残る。13は底部が広く、胴部の器壁は12と同様にきわめて薄く、胎土の状態等もあたかも同一個体のようであるが、径が一致しない。

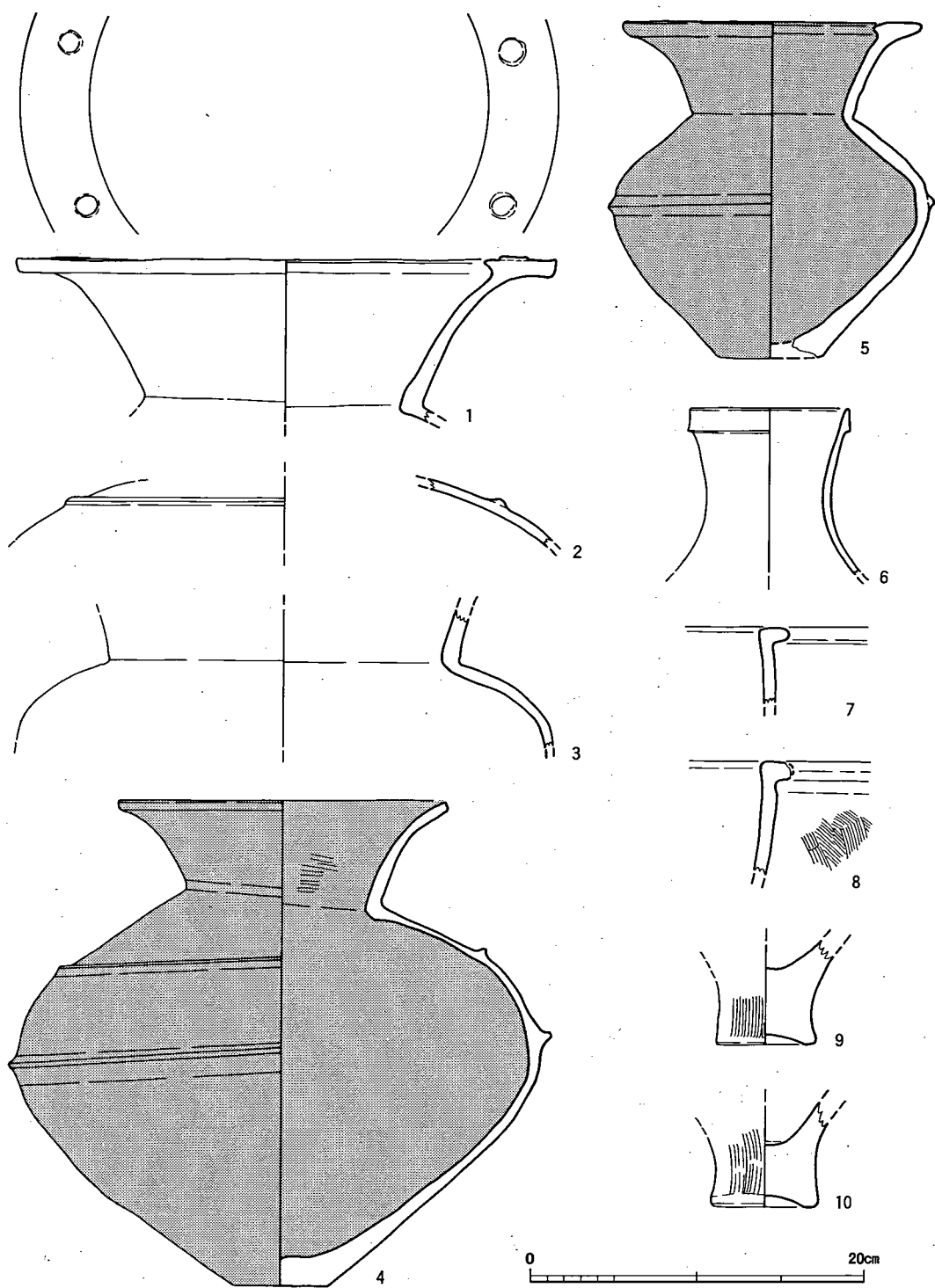
高杯（14・15） 14は脚部が裾で屈曲して開く。15は杯部が半球形で、短い鋤先状口縁を有



第27图 2号祭祀土坑出土土器实测图① (1/4)



第28図 2号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)



第29图 3号祭祀土坑出土土器实测图① (1/4)

する。2点とも杯・脚の境に断面三角形の低い突帯を付す。

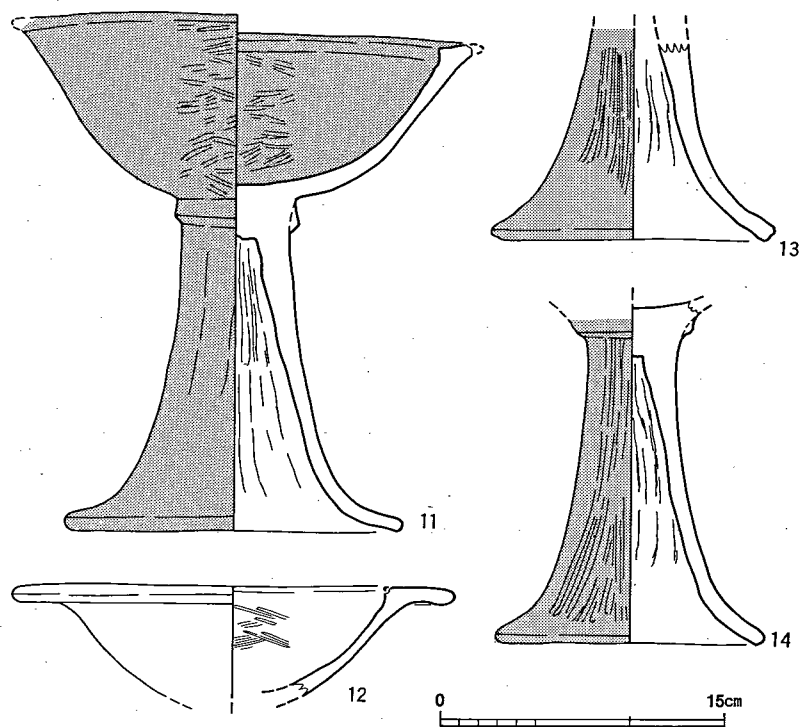
3号祭祀土坑 (図版24、第26図)

1号墳丘墓の南東側にあり、1～3号祭祀土坑の中で最も周溝に近い。土坑の平面形は円形で、径2.0～2.05m、深さ0.45m。土器は壺の口頸部1個が西側から出土した以外は、中央部に集中する。黒彩と考えられる土器は、この土坑からのみ出土している。

出土遺物

弥生土器 (図版63・64、第29・30図)

壺 (1～6) 1は鋤先状口縁を有し、口縁上面は水平でここに2個一対の浮文をもつ。2は肩部破片で、断面台形の突帯1条が巡る。3は頸部から肩部の破片で、胴部の最大径が上位にある器形と思われる。4は短めに外反する頸部をもち、素口縁である。胴部は中位よりやや上に最大径があり、この部分と肩部に各1条の突帯がある。器面は内外面ともに黒く彩色し、外面と頸部内面は篋磨きで仕上げたようである。胴部内面の黒は意識的に塗ったものかは不明。5は小型の広口壺で、鋤先状口縁を有し、胴部の最大径部分には突帯1条を付す。4と同様内



第30図 3号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)

外面全面に黒彩を施す。6は長頸壺で、器壁は薄く、口縁部下を肥厚させて口縁部を三角形につくり端部はシャープに仕上げる。

甕 (7~10) 7・8は短く屈折する口縁部をもつ甕で、7は風化しているが、8の外面には刷毛目調整がみられる。9・10は厚く、上げ底になる底部。

高杯 (11~14) 11は杯部が半球形で、鋤先状口縁を有するが内側の突出は少ない。脚部は杯部との境に低い突帯を付し、また裾部で外反して開く。外面と杯部内面は黒く彩色し、杯部は横方向に篋磨きを施し、脚部は風化のため不明瞭だが縦方向の篋磨きで仕上げたようである。13・14も同様に黒彩を施したもので、脚部外面を縦方向に丁寧に磨く。12の杯部は半球形であるが浅く、鋤先状口縁部は長く発達する。

4号祭祀土坑 (図版25、第31図)

1号墳丘墓の東側にあり、調査区東境界に接する。土坑は平面形が楕円形で、底面はほぼ水平になる。土坑の大きさは、長軸が2.3m、短軸は最大部分で1.4m、深さは0.5mで、主軸方位はN-9°-W。土器は中央部から南側にかけての部分から主に出土したが、1~3号祭祀土坑が床面から若干浮いた状態で出土したのに対して、4号祭祀土坑はほぼ床面に接して出土した。土坑を掘削してから土器を投棄するまでの期間に関係があるのかもしれない。

出土遺物

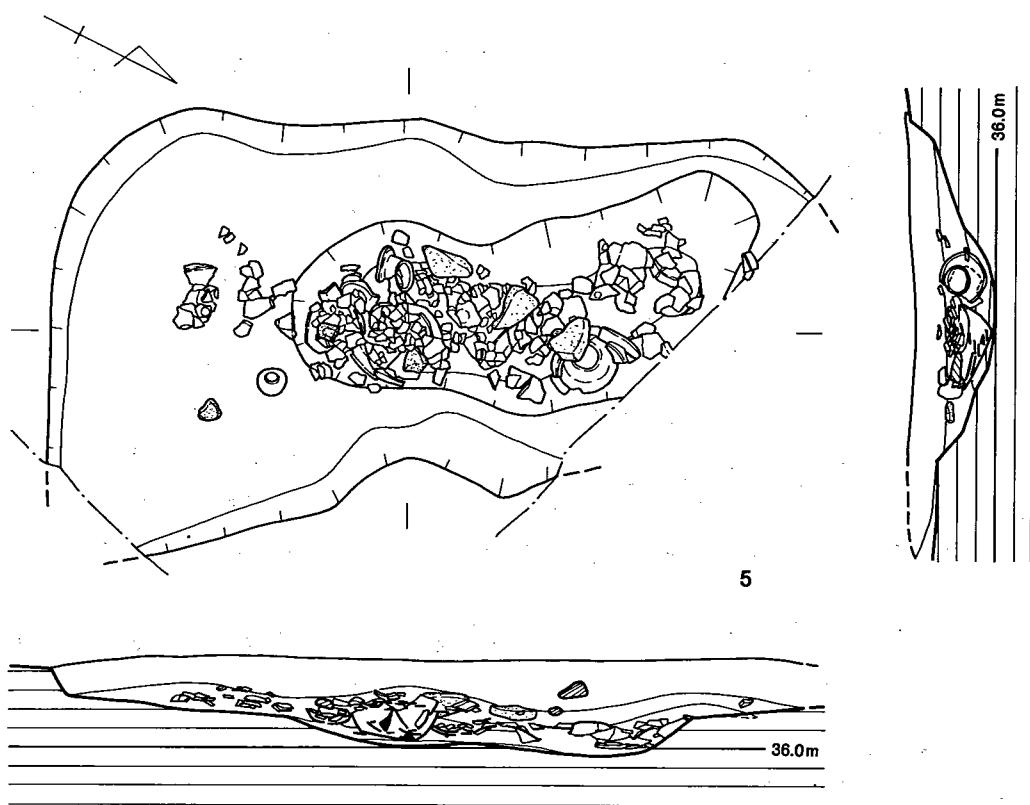
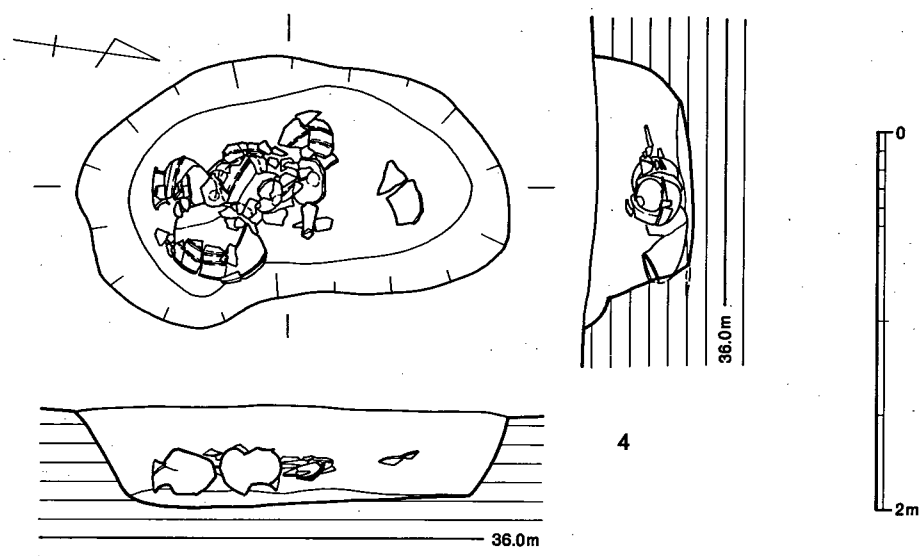
弥生土器 (図版64・65、第32・33図)

壺 (1~7) 1・2は大型のもの。1は胴部の最大径が上位にあり、肩部から胴部最大径部分に等間隔に低い突帯3条を巡らせる。1・2とも外面は横・斜め方向の篋磨き調整。3~5・7は中型の広口壺で、頸部が締め短く開く口頸部をもつもの(3)と、頸部が広くて口頸部が長く大きく開くもの(4・5)がある。3は肩部と胴部最大径部分に断面三角形突帯各1条を付し、口頸部内面は横方向、胴部外面は横方向だが下部のみ縦方向に篋磨き調整を行う。口頸部外面は風化しており不明であるが、おそらく縦方向に磨いたのであろう。4は口径が胴部最大径を上回り、胴部の上位にある最大径部分に断面台形の突帯1条がある。口頸部内面と胴部外面は横方向に、口頸部外面は縦方向に篋磨き調整を施す。6は短頸壺で胴張りが強く、口頸部には2個一対の紐孔がある。

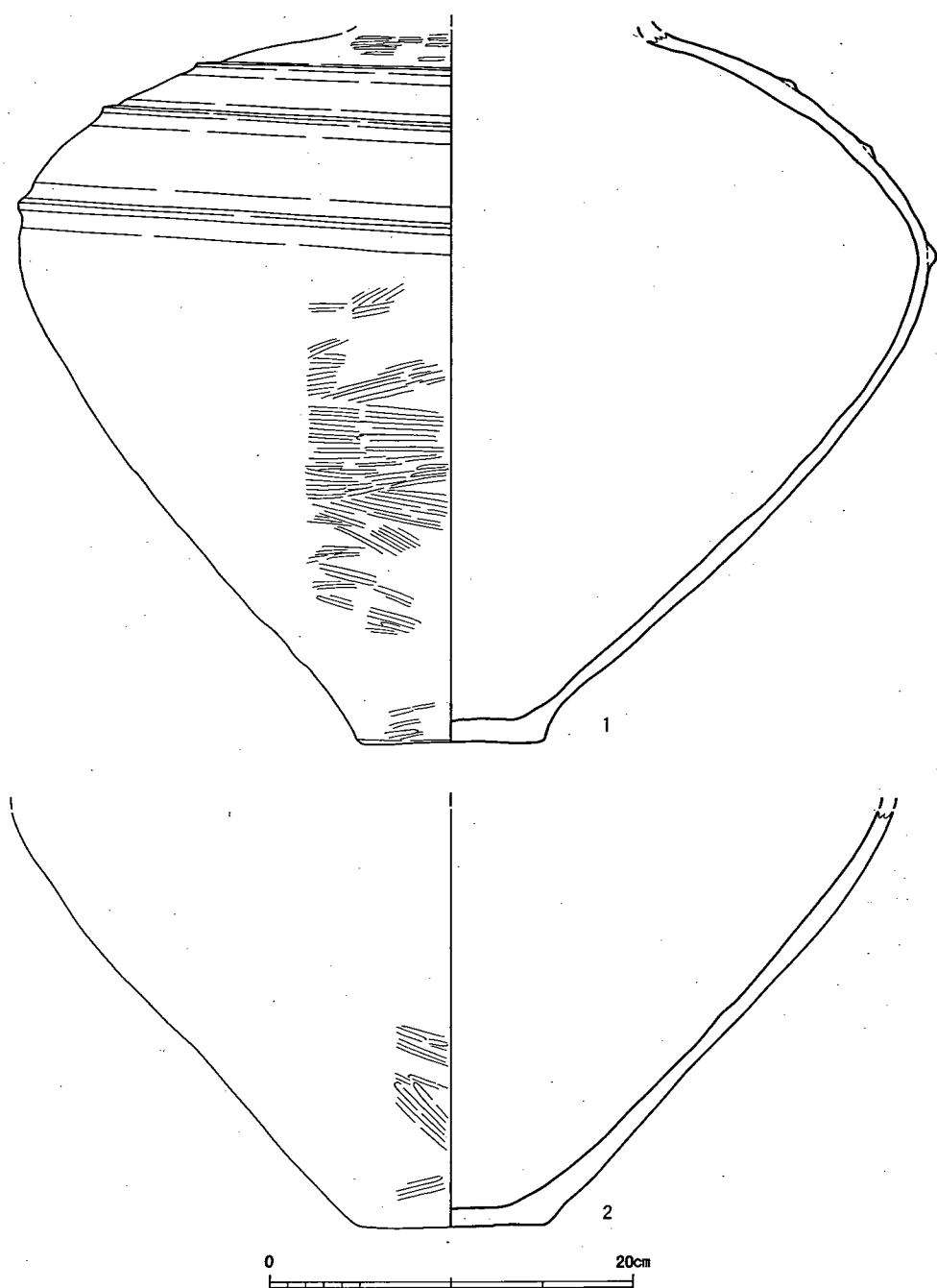
高杯 (8・9) 8は杯部が半球形で、鋤先状口縁部は長く、上面は内傾する。9は長脚で、杯部の底は最後に塞いだものであろう。

5号祭祀土坑 (図版25、第31図)

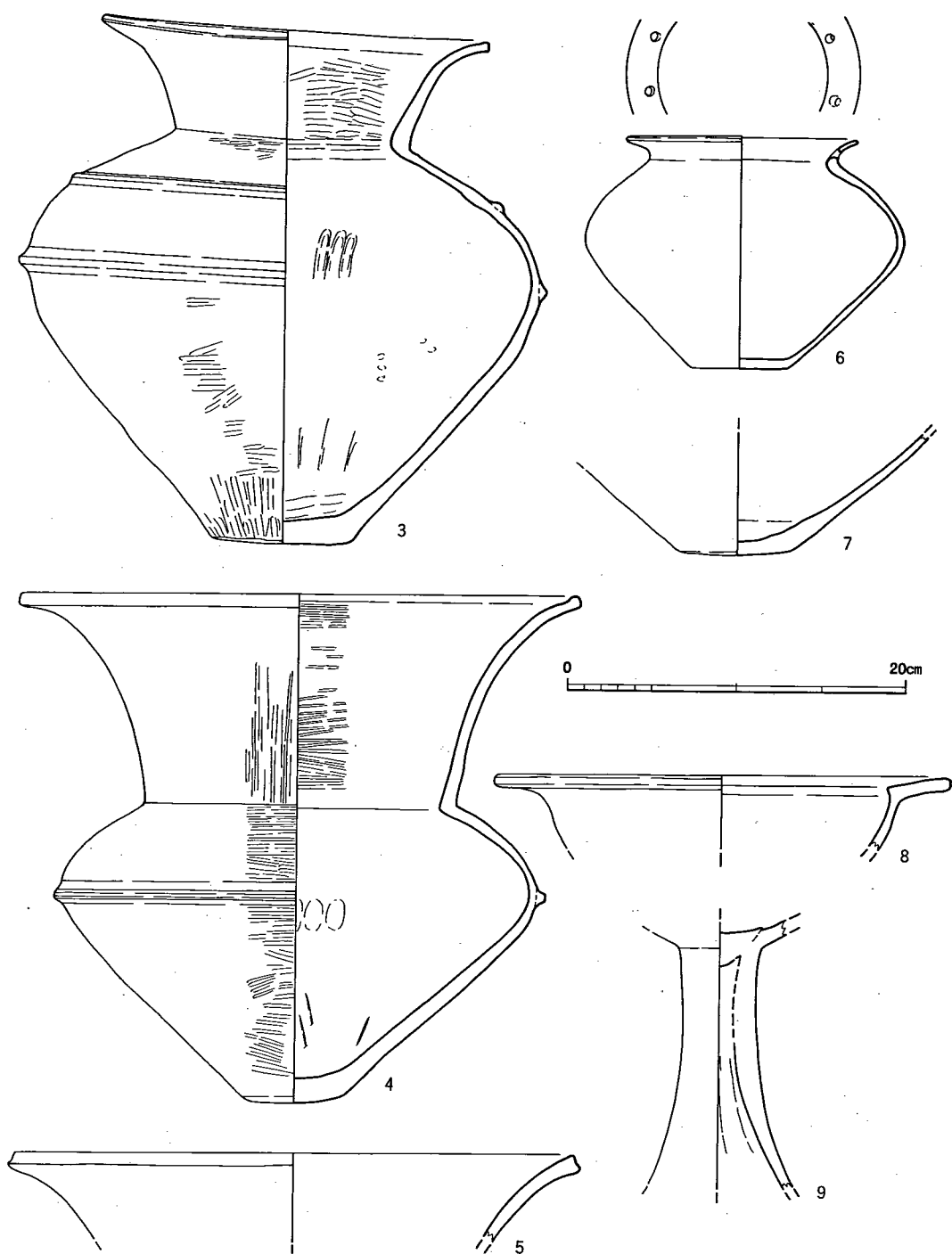
1号墳丘墓の北東側で、4号祭祀土坑の北に位置する。調査区の北東隅部であるため、土坑の北側と東側の一部は未調査で、全体の形状は不明である。調査をした範囲から推定する土坑



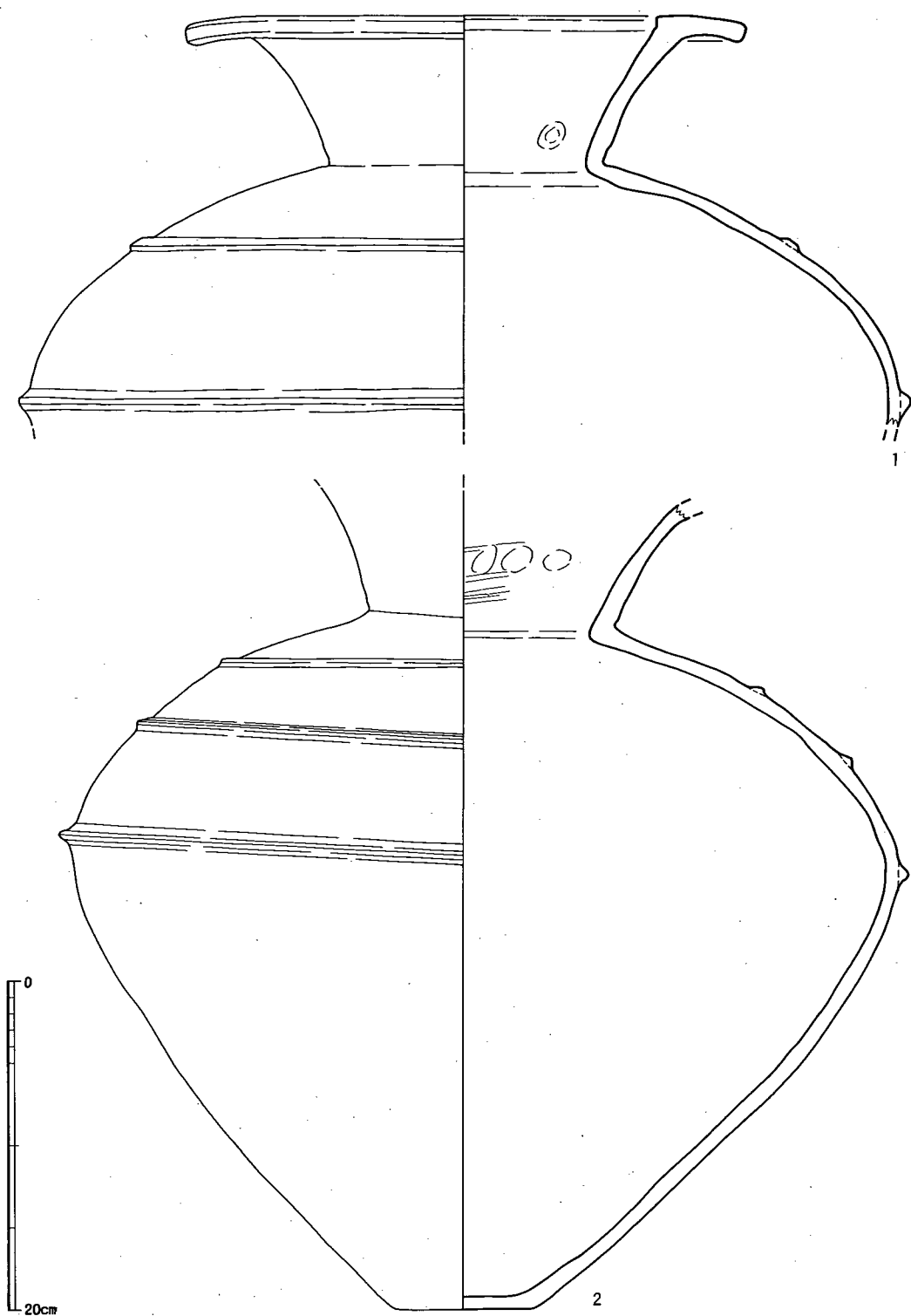
第31図 4・5号祭祀土坑実測図 (1/40)



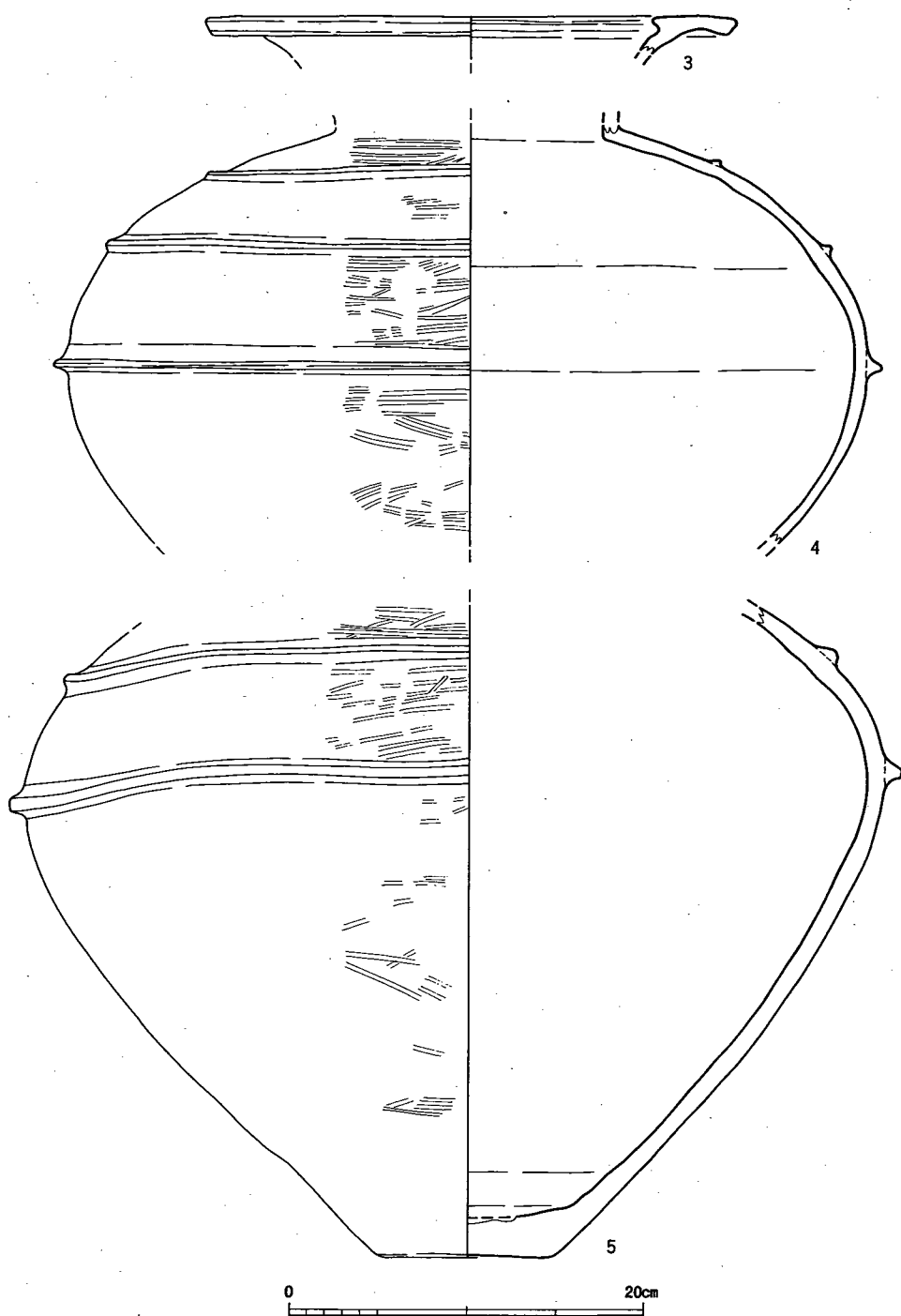
第32図 4号祭祀土坑出土土器実測図① (1/4)



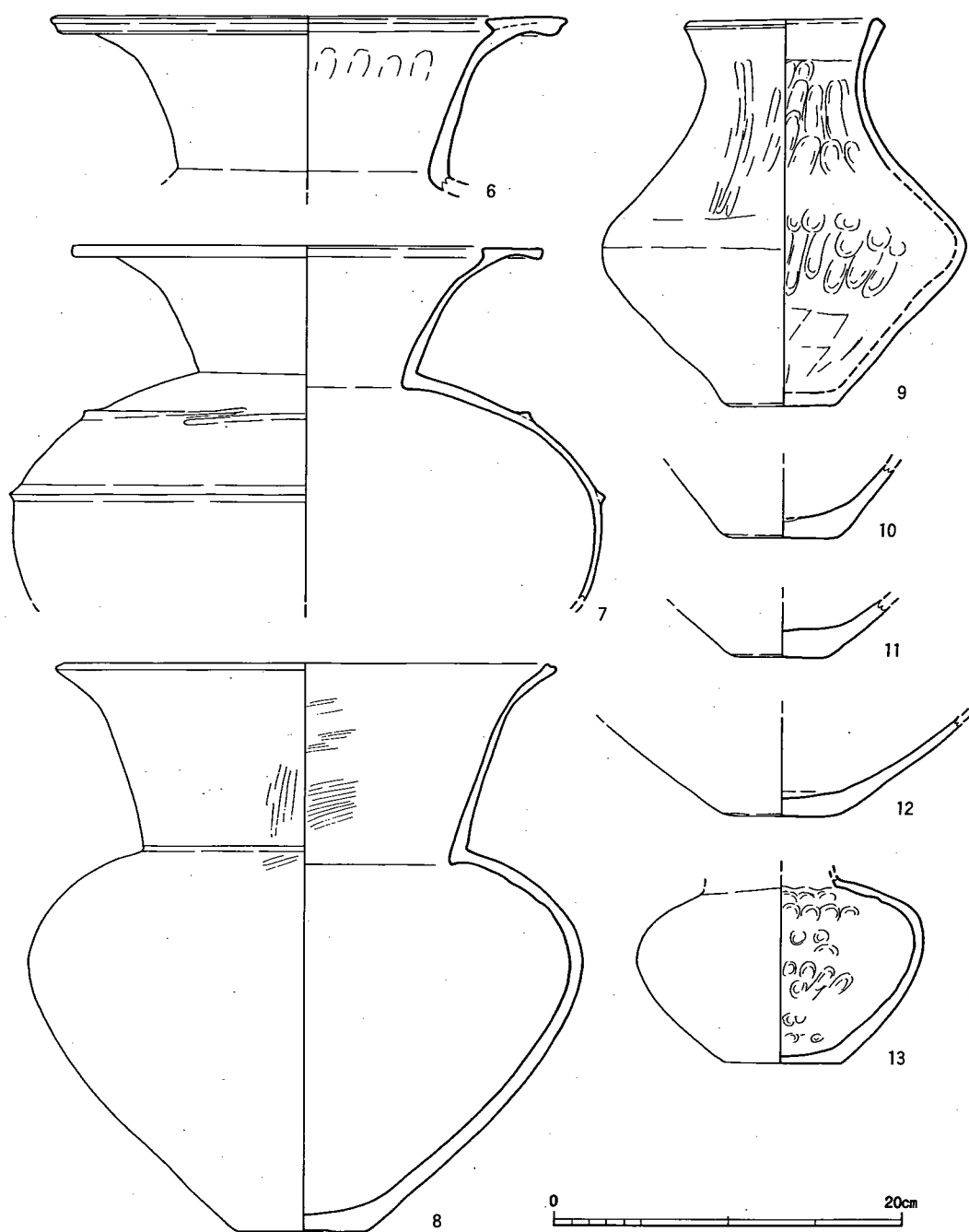
第33图 4号祭祀土坑出土土器实测图② (1/4)



第34図 5号祭祀土坑出土土器実測図① (1/4)



第35図 5号祭祀土坑出土土器実測図② (1/4)



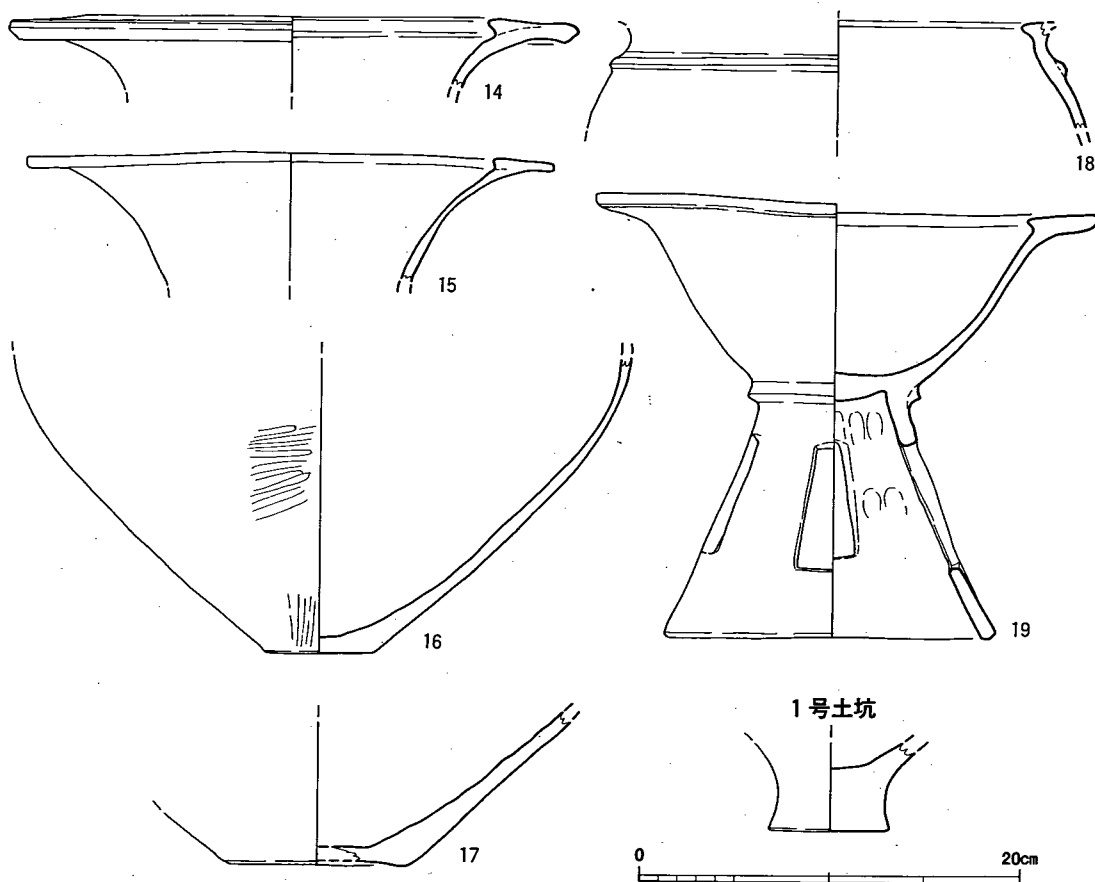
第36图 5号祭祀土坑出土土器实测图③ (1/4)

の形状は隅丸長方形に近い不整形で、底面は土坑の長軸線に沿って一部が1段低くなっており、土器もこの部分から多く出土した。調査区内の最大部分で、長さ3.9m、幅2.3m、深さ0.5m。土器は4号祭祀土坑と同様にほぼ底面に接して出土した。

出土遺物

弥生土器（図版65・66、第34～37図）

壺（1～18） 1～5は大型の広口壺。1・3の鋤先状口縁部は長く発達して、外側が下がる。頸部は小さく締め、胴部の最大径は上位にあって底部は小さく、肩部から最大径部に2～3条の突帯を付す。2の頸部内面と4・5の胴部外面には篦磨きが残る。6～8・12・14～17は中型のもので、鋤先状口縁を有して頸部が締まるタイプ（6・7・14・15）と、素口縁で頸部が



第37図 5号祭祀土坑出土土器実測図④・1号土坑出土土器実測図（1/4）

広く長く延びて口径が胴部最大径を上回るタイプ (8) がある。6・7・14・15の鋤先状口縁は上部の平坦面がほぼ水平になる。7は肩部と胴部最大径部分に断面三角形の突帯を巡らす、肩部の突帯は上下に食い違った部分がある。9は長頸壺で、胴部が張って屈曲し、頸部は最小径が上位にあって短い。また、口縁部には突帯をもたない。13は小型の壺で、胴部の最大径が上位にある。18は無頸壺で鋤先状口縁を有し、口縁部下には断面台形の突帯1条を付す。

高杯 (19) 杯部は深くS字状に立ち上がり、鋤先状口縁をもつ。底部は最後に充填したものである。脚部は、直線的に開き、4方向に長方形透孔を有する。

3) 土坑

1号墳丘墓上の南東寄りほぼ中央部で不整形の土坑1基を検出した。

1号土坑 (図版26、第38図)

土坑の形状は北西-南東方向に細長い不整形で、底部は南東側から凹凸を持ちながら徐々に下がり、北西寄りの部分が最も深くなり、その北側に浅い掘り込みが接続する。

土坑の最深部の埋土中層からは人骨が出土し、上面には標石状に石が置かれる。この部分に周辺にあるものと同様な近世墓が作られているのを、それと気付かずに土坑の埋土と一緒に掘り下げてしまったものと考えられ、人骨の出土したレベルあたりが近世墓の底であろう。

土坑の規模は、最大部分で長さ4.85m、幅1.5m、深さ0.75mで、土坑の主軸はN-16°-W。土坑の埋土は締まりが無くて脆く、人為的に一気に埋めたものと思われ、埋土を見る限りでは攪乱状であるが、遺構の時期は少なくとも近世墓以前である。土坑の主軸が墳丘墓の主軸とは揃っていることから、ここに弥生時代墳墓があったものを近世以前に盗掘したものである可能性もあると考えられる。

出土遺物

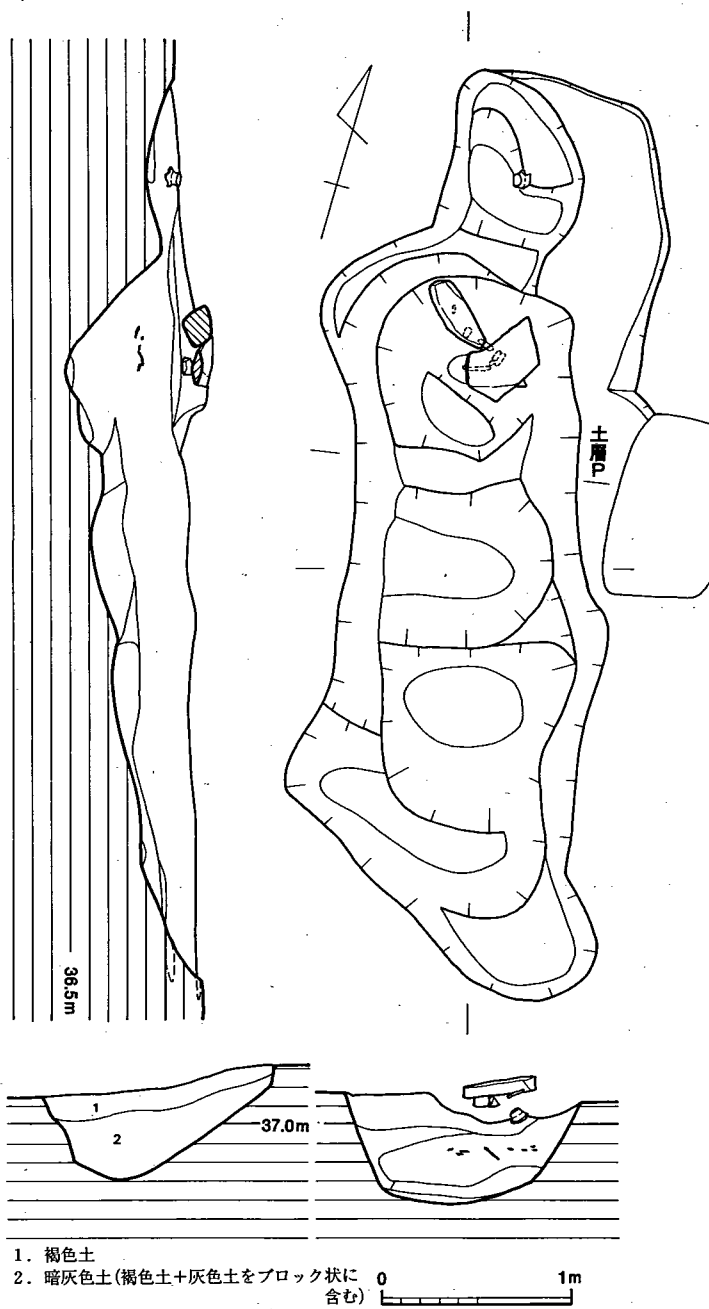
弥生土器 (第37図)

甕 厚味のある底部で、裾が若干開いており平底。内外面は赤灰色を呈し、2次的に火を受けたものか。

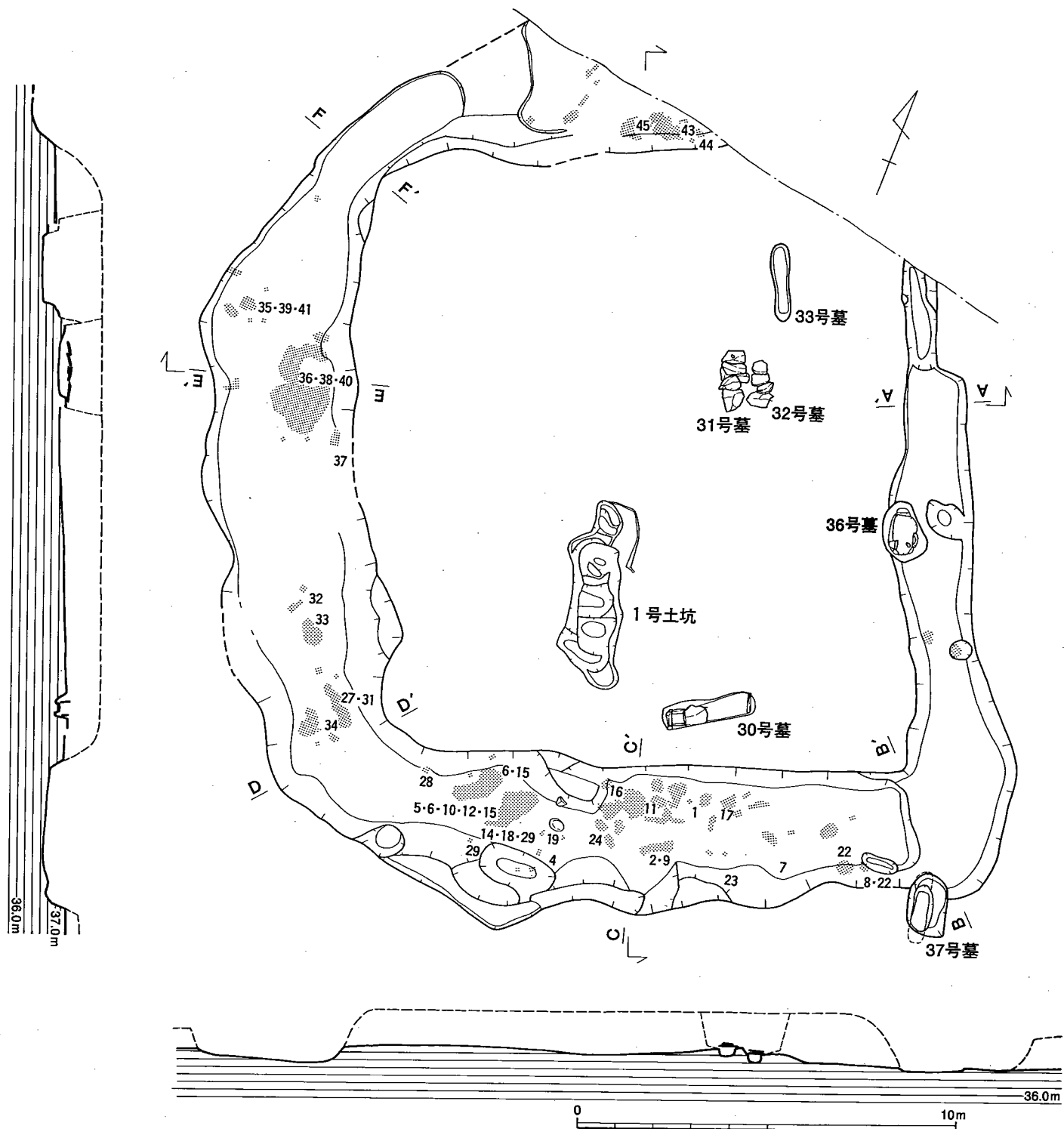
4) 墳丘墓

1号墳丘墓 (巻頭図版1・図版26～29、第39・40図)

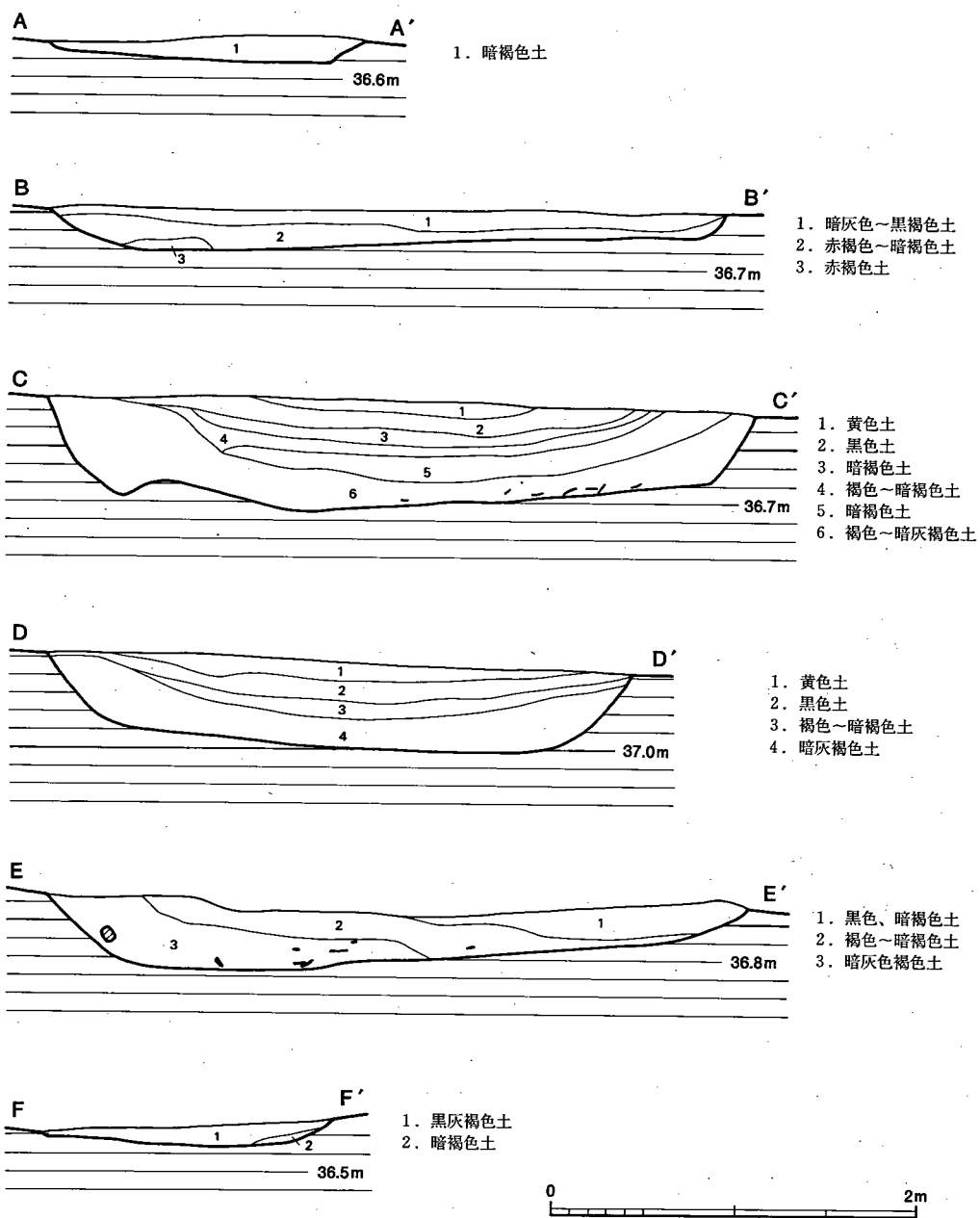
Ⅳ区の北西端から一部はⅤ区に掛かる。Ⅲ区から帯状に連なって延びる墳墓群の北西端に位置する。



第38図 1号土坑実測図 (1/40)



第39図 1号墳丘墓実測図 (1/150)



第40图 1号墳丘墓周溝土層実測図 (1/40)

墳丘

墳丘は既に削平されて失っているが、近世墓がこの場所に集中して営まれていることから、近年まで墳丘が残り、周辺の地形より一段高くなっていたことは間違いないものと考えられる。北側の一部分が調査区外のために調査ができなかったものの、墳丘部分の平面形は長方形で周囲には溝を巡らせる。墳丘の規模は、周溝の内側で測って北西-南東方向が15.7～16.2m、北東-南西方向では13.8～14.4mで、長軸の方位はN-23°-W。墳丘内には現在30～33号墓があるが、4基とも位置が墳丘の北東半部に偏っており、本来はさらに数基の墳墓がここに存在したものと考えられる。

周溝

周溝は墳丘の全面に巡るが、削平のために北東側は細くなり、また北西側では一部途切れる。最も残存状態の良い南東辺部では幅4.0mで、深さは50～60cmである。南東辺と南西辺の周溝内からは多量の弥生土器が出土し、北西辺では少なく、北東辺からはほとんど出土していない（第39図スクリーントーンは出土位置を、数字は遺物番号を示す）。なかでも南東辺周溝内からの出土が最も多く、墳丘墓の正面観によるものと思われる。またこの部分の埋土の上層からは30～40cm大の自然石が20個弱出土しており、墳墓の標石等に使用したものであろうか。

出土遺物

周溝内出土の土器は、出土場所から五つに分けた。

北東辺出土土器

弥生土器（図版66、第41図）

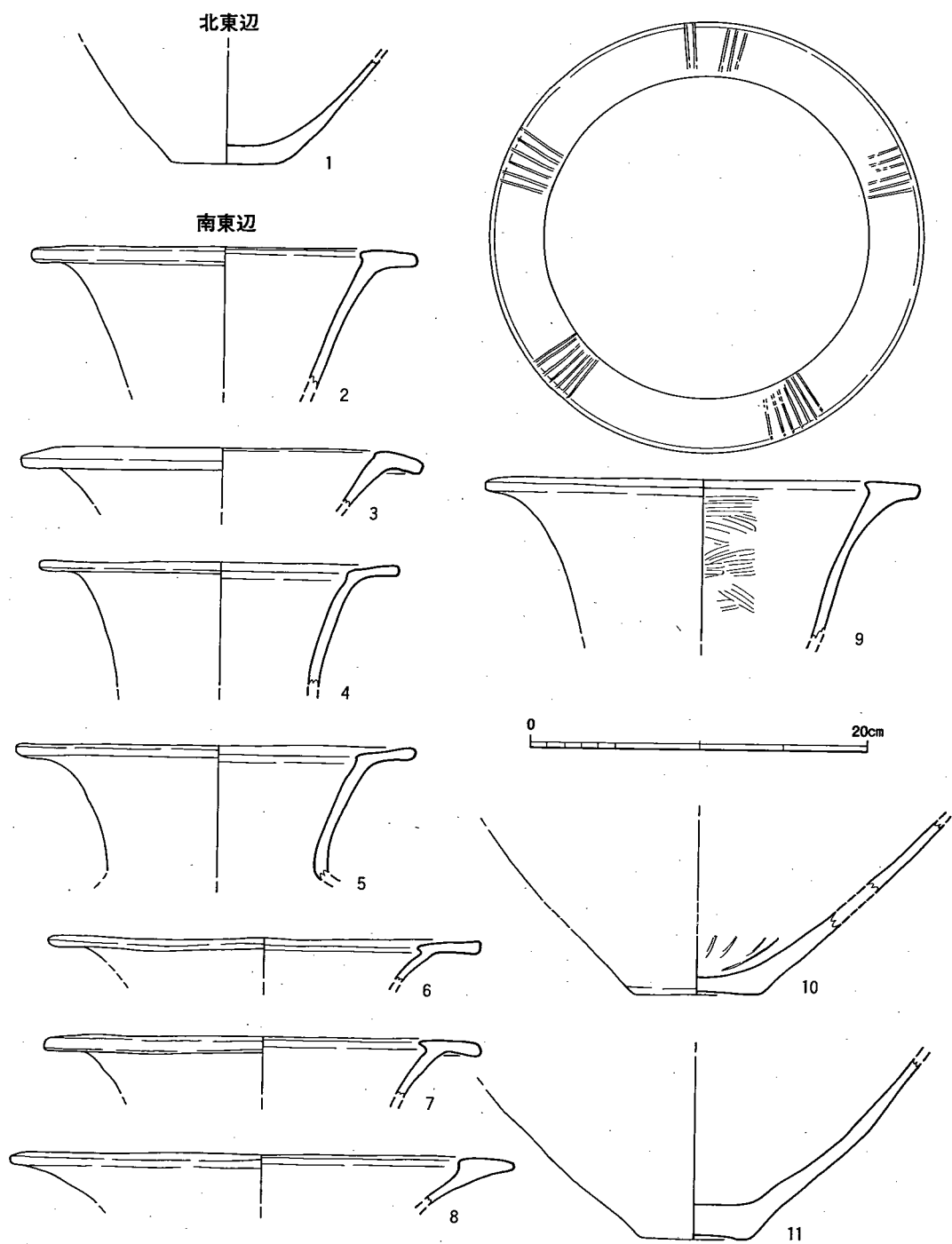
壺（1） 壺の底部で、胴部に向かって薄くなる。

南東辺出土土器

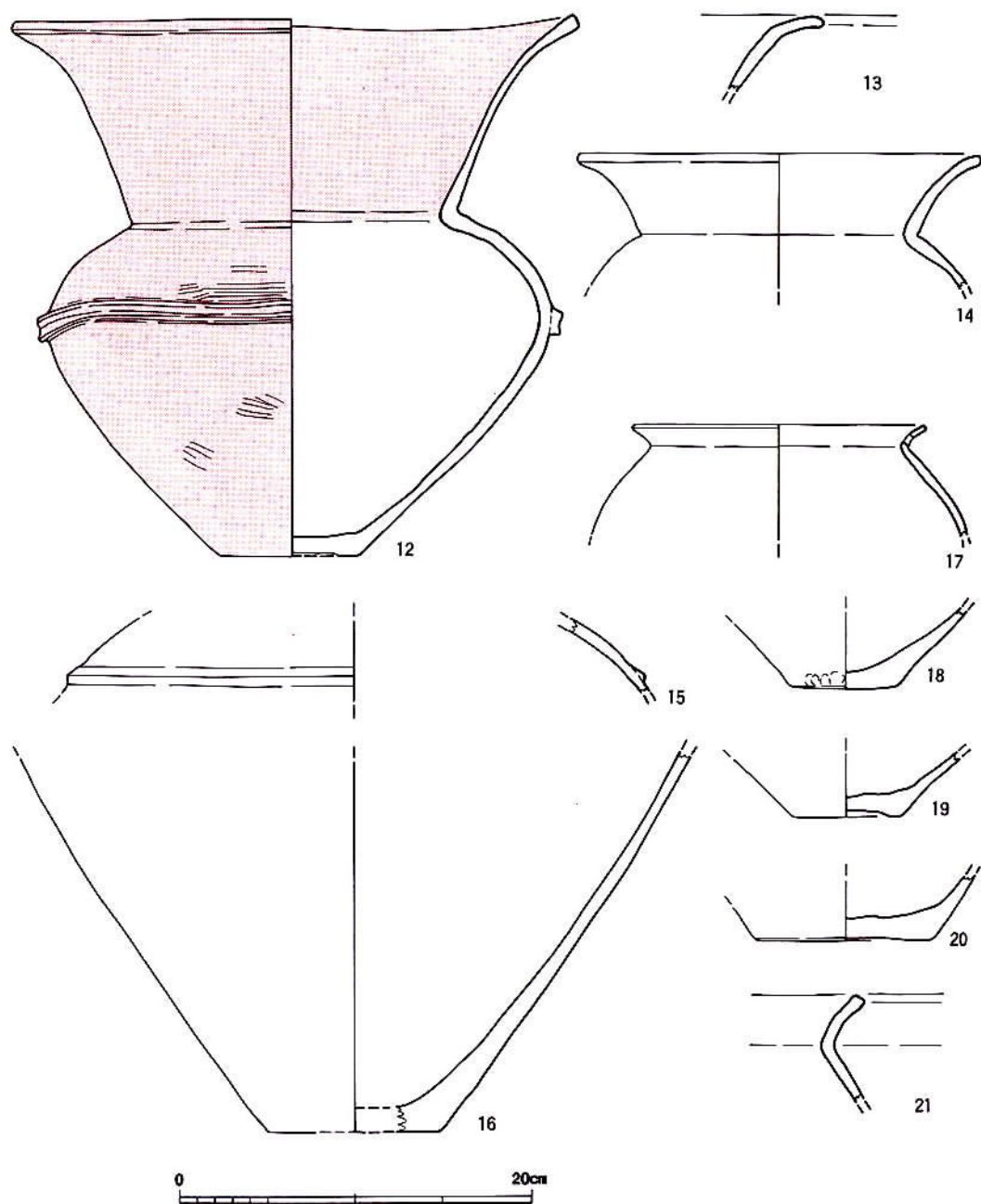
弥生土器（図版67・68、第41～43図）

壺（2～20） 1～9は鋤先状口縁をもつ広口壺の口頸部で、口縁部が厚く短いもの（2～4・8・9）と、薄く長いもの（4～7）の2種がある。3～5は内側の突出がほとんどない。9は口縁部上面の5箇所に沈線状の暗文で集線文を描き、また頸部内面には横・斜め方向の篋磨ぎが残る。12は胴部の肩が張った器形で、最大径部分に断面M字形突帯1条を付す。口頸部は長く大きく開いて、口径が胴部最大径を上回る。外面全面と口頸部内面には丹塗りを施すが、ほとんどが剥落している。13は口頸部破片で、口縁部で屈曲して開く。14は口頸部が短く外反して開く。15は肩部で、断面三角形の低い突帯を巡らせる。17は短頸壺で紐孔を有する。

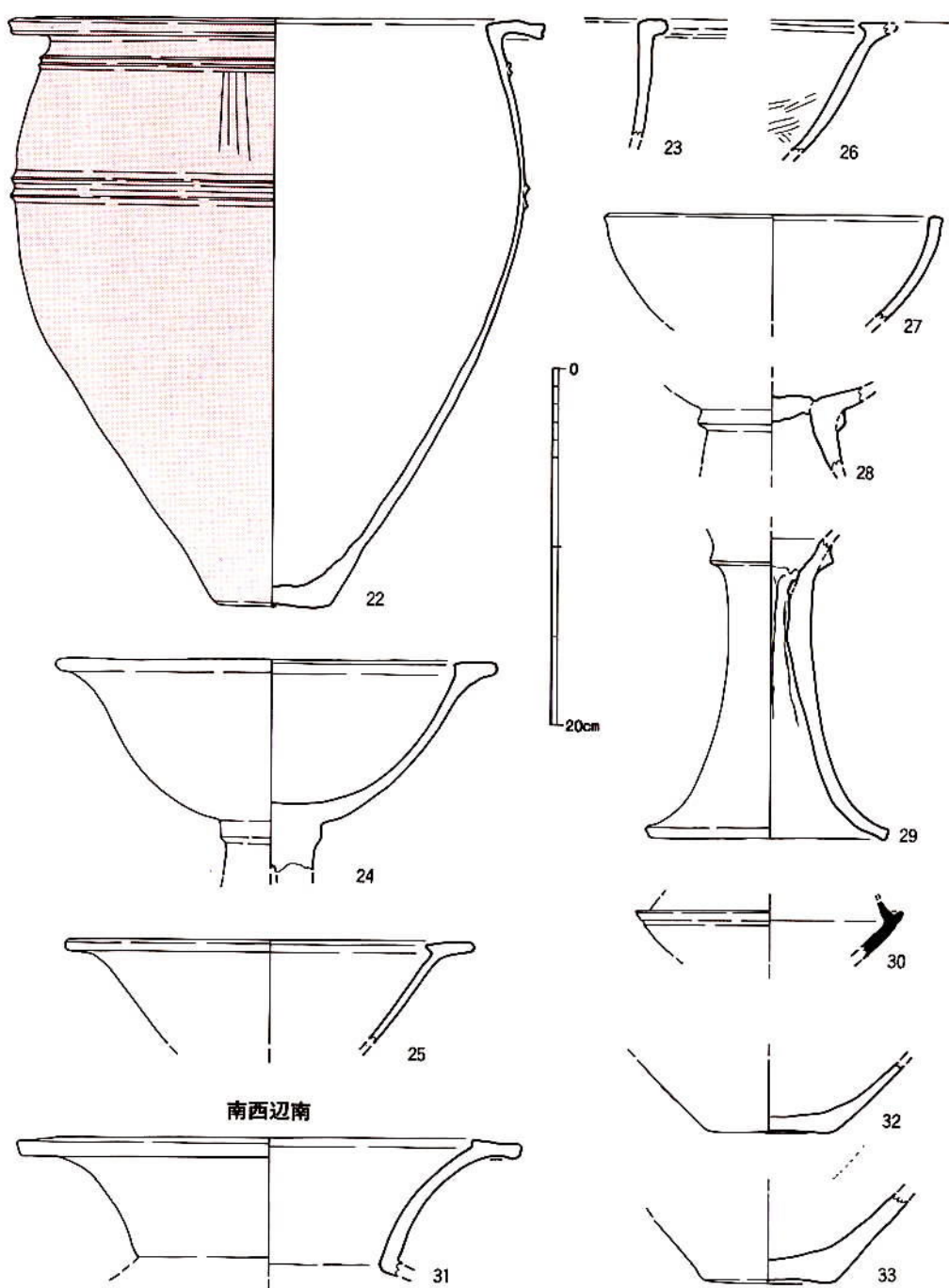
甕（21～23） 21は器壁が薄く、口縁部がく字形に屈曲して胴部は丸味をもつ。後期のものか。22はほぼ完形に復元できる丹塗りの甕。口縁部は鋤先状口縁で、内側に張り出さず外側に



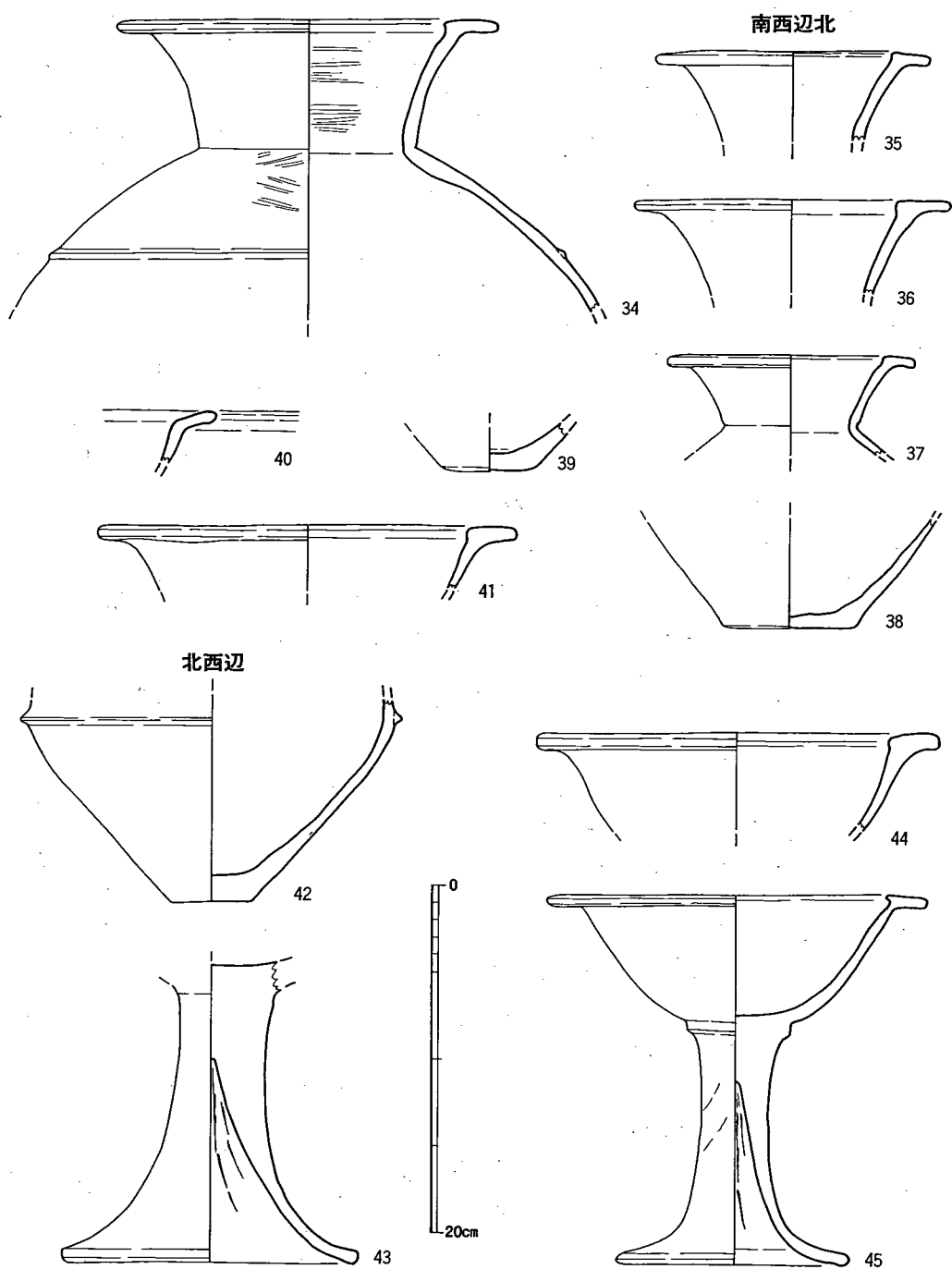
第41图 1号墳丘墓周溝出土土器实测图① (1/40)



第42图 1号墳丘墓周溝出土土器実測図② (1/40)



第43図 1号墳丘墓周溝出土土器実測図③ (1/40)



第44图 1号墳丘墓周溝出土土器実測図④ (1/40)

長く延びて中央部が膨らむ。胴部は丸味をもつが、口径は上回らない。胴部最大径部分はきわめて薄くつくり、この部分と口縁部下に各2条の断面三角形突帯をもつ。また、突帯間には沈線状の暗文で縦方向の集線文を数箇所に描く。丹塗りは外面と口縁部上面に施す。23は短く直角に屈折する口縁部をもつ。

高杯 (24~29) 杯部は半球形を呈し、鋤先状口縁のもの (24~26) と、素口縁のもの (27) がある。26の内面には篋磨きの痕跡が残る。28・29はともに脚部から杯部を連続してつかった後に杯部底を充填して完成させるもので、29は底部が剝離している。2点とも杯部・脚部の境に突帯1条を付す。

須恵器

杯 (30) たちあがり部は内傾し、灰褐色を呈してやや軟質。復元受け部径15.0cm。

南西辺南側出土土器

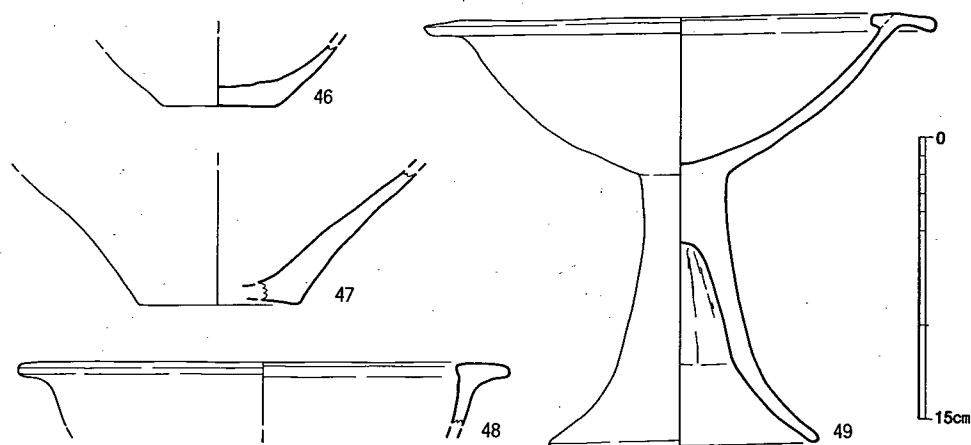
弥生土器 (図版68、第43・44図)

壺 (31~34) 31・34は広口壺で、鋤先状口縁を有する。34はなで肩の器形で、肩部に低い突帯1条を付す。31は器面の風化が激しいが、34は口頸部内面と胴部に横・斜め方向の篋磨きが残る。

南西辺北側出土土器

弥生土器 (図版68、第44図)

壺 (35~39) 35~37は小型広口壺の口頸部で、鋤先状口縁を有し、口縁部上面は水平かや



第45図 1号墳丘墓周溝出土土器実測図⑤ (1/40)

や外傾する。

高杯 (40・41) 40は口縁部が屈曲して開く。41は鋤先状口縁をもち、杯部は半球形になるのであろう。

北西辺出土土器

弥生土器 (図版68・69、第44図)

壺 (42) 胴部最大径部分には断面三角形突帯1条があり、底部は厚めである。

高杯 (43～45) 44・45は杯部が半球形で、鋤先状口縁は44が厚く短くて内傾し、45は比較的薄く外傾する。43・44の脚部は上部が中実になる。

その他出土土器

弥生土器 (図版69、第45図)

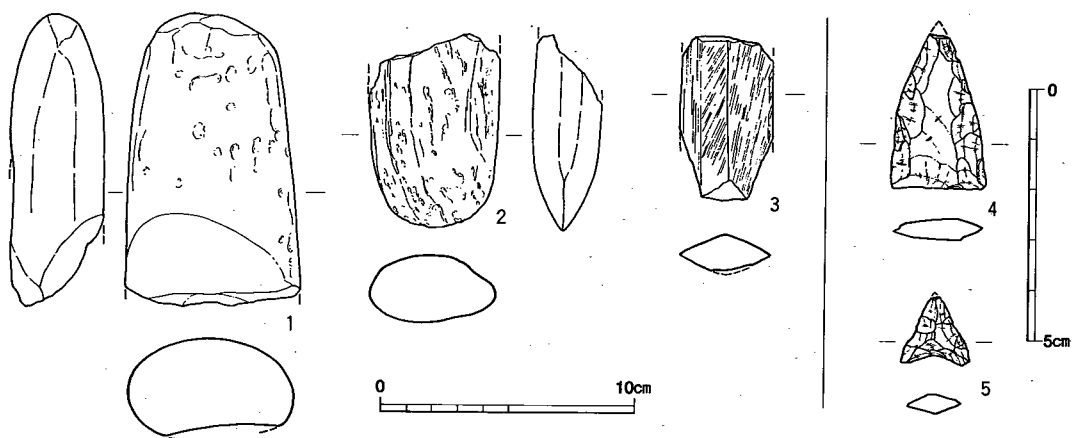
周溝内出土ではあるが、出土位置の不明なもの。

壺 (46・47) 46は小型壺、47は中型壺の底部と思われる。47は若干上げ底気味になる。

高杯 (48・49) 2点とも鋤先状口縁を有し、杯部は半球形になるが、48は口縁部が厚く短い。49は口縁部が薄く延びて外側が若干低くなり、杯部は浅い。

石器 (図版69、第46図)

石斧 (1・2) 1・2とも南東側周溝内から出土した。太型蛤刃石斧で、刃部を欠く。現状で長さ11.5cm、幅6.7cm、厚さ3.3cmで、463.2g。玄武岩製で、風化が激しい。2は蛇紋岩製の磨製石斧の刃部破片で、同じく風化が著しい。7.4cmが残存し、最大幅5.1cm、厚さ2.7cm。縄文時代のものであろう。



第46図 1号墳丘墓周溝出土石器実測図 (1/3・2/3)

石剣 (3) 南東側周溝内から出土した。剣身部分の破片で、6.5cm分が残存する。片面は失われているが、両面に対称に鑄をもつものである。幅3.5cmで、厚さは現状では1.4cmだが、復元すると1.55cm。緑灰色を呈し、凝灰岩であろうか。

石鏃 (4・5) 2点とも打製石鏃。1は南西側周溝内出土で平基式。先端部をわずかに欠き、安山岩製、2.3g。2は北東側周溝内出土で、凹基式の小型のもの。姫島産黒曜石製、0.4g。

3. 古墳時代

1) 古墳

下野地 2 号墳 (図版30～34、第47・48図)

古墳は大塚本遺跡内のⅡ区北東端部分に所在するが、福岡県教育委員会が1976年に作成した『福岡県遺跡等分布地図 (豊前市・築上郡編)』に周知の遺跡として記載されているため、これを使用する。この場所は調査以前は水田として使用されており、古墳の墳丘はすべて削り取られて石室の石材だけが露出した状態で残存していた (図版31)。石室は横穴式石室で既に開口しており、内部は埋土に混じって床石に使用されたと考えられる河原石が散乱しており、攪乱を受けていることが予想された。

周溝 調査の結果、墳丘は既に失われているものの、周溝が辛うじて残存しており、古墳の規模を知ることができた。周溝は石室の南側から北東側までが連続しており、ここでいったん途切れるが、現在農道として使用しているため調査のできなかった部分を挟んで北側で周溝の一部と考えられる落ち込みを確認し、また西側でもわずか4.5m²の範囲を調査した結果周溝の一部を検出した。周溝の幅は最も残りの良い南東側で2.5mで、深さは現状で25cm程が残存する。また周溝の形から古墳は円墳で、墳丘は周溝の内側で測って径14～15m、周溝まで含めた古墳の規模は径19～20mである。周溝は南側で墓道と接続し、石室内へと続く。

石室 石室は南側に開口する横穴式石室で、主軸はN-15°-W。大型の自然石を使用して構築しており、玄室の中央部がほぼ墳丘の中心に当たる。玄室奥壁には長さ2.1m、幅1.6m、厚さ0.9mの巨石を縦位に立てて鏡石とし、左右の側壁は長さ1.2～1.6m、幅0.9～1.2m、厚さ0.5～0.7mの石材各3個を同じく縦位に立て並べて腰石とする。石材を立てるときは、先に溝を掘り、ここに石材を立て並べて下部の溝との隙間に前後から石を詰めて固定する。側壁腰石上部には、これより小型の石を1段分小口面を内側に向けて平積し、天井石を受ける。石の隙

間には人頭大までの小型の石を充填する。玄室は両袖で、左右の袖石は側壁から各40cm程内側に張り出しており、羨道側壁を兼ねる。

羨道部側壁腰石は現状で右側が5個分、左側で4個の石材またはその抜取り痕を確認できる。しかし、玄門から3個は羨門部に向かって徐々に石材が小さくなる以外は玄室と同様に縦位に立て並べているが、それより外側は石材を平置しており構築法に違いがある。閉塞石がこの平置きした石材部分にまで及んでいないことを考えあわせると、羨道は左右各3個の立て並べた石材部分まで、これより外側は前庭部側壁とでもいうべきものであろう。

天井石は4個が残存しており、左右の側壁に掛け渡して並べ、その隙間には小形の石を詰めて塞ぐ。天井部は左右の袖石から40cm程奥壁寄りの部分から外側が一段低くなっており、玄室内からだと楕円石状に見える。

床面は、玄室内は徹底した攪乱を受けてほぼすべての床石がはぎ取られている。床石は玄門から羨道にかけての部分に辛うじて残っており、それによると径20～30cm、厚さ7～8cmの扁平な河原石を敷き並べるこの地域に通有の構造である。また、玄門部には梱石が無い。

羨道部の床石より手前側の床面には床石より厚味のある河原石を使用した閉塞石を積上げており、現状で床面から約50cmが残存する。

石室の規模は、玄室長2.9m、幅は奥壁側1.7m、中央部2.0m、玄門側1.9mで中央部がわずかに膨らむ。羨道部は長さ2.4m、幅は玄門部が1.1m、羨門部では1.4mと若干広くなる。石室高は、玄室部で1.7～1.9m、羨道部で1.3～1.4m。

出土遺物

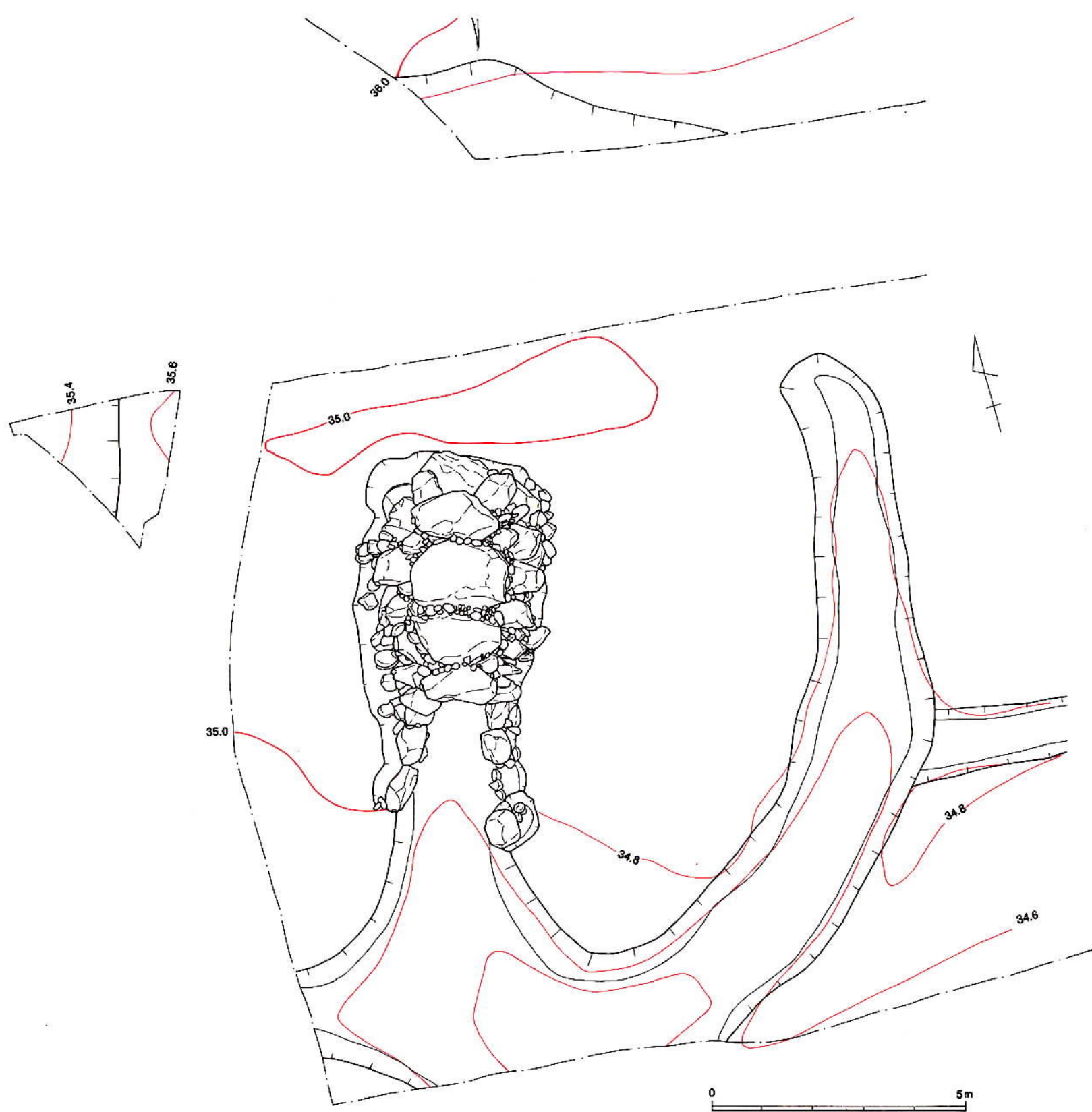
須恵器（図版69～72、第49～51図）

11・16・23・25・28・29は石室内および羨道部分から、その他は墓道から周溝南側部分から出土した。

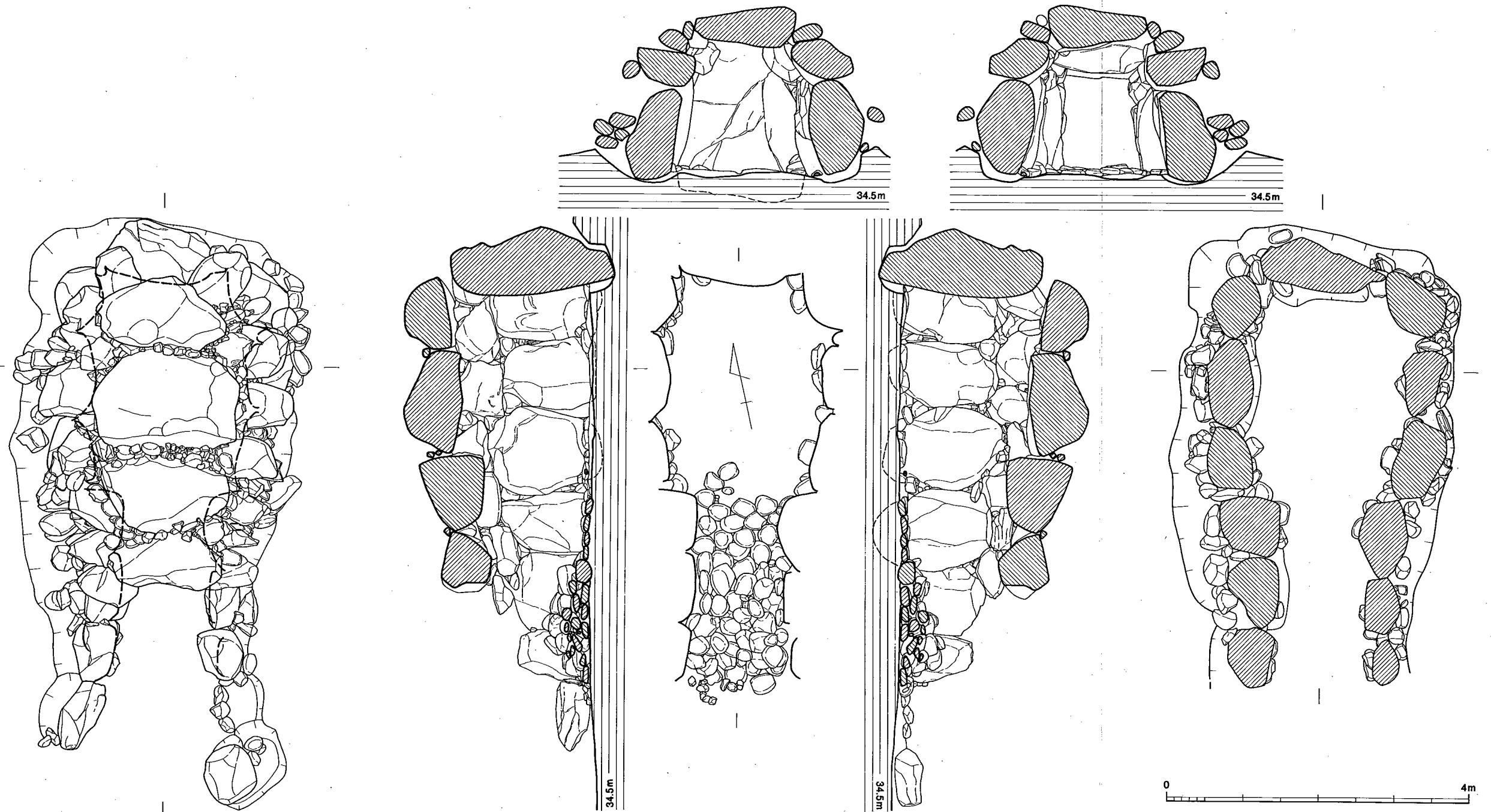
蓋（1～5） 5点とも内面にかえりを持つ。1は天井部につまみの剝離痕が残り、口径12.3cm、受け部径14.0cm。2～5はつまみを持たず小型で、口径9.2～10.2cm、受け部径10.2～11.7cm。2・3は天井部に丸味があるのに対して、4・5は平らで器高が低い。すべて焼成は堅緻で、青灰色から黒灰色を呈する。

杯（6～9） 6～8は小型で、2～5のタイプの蓋を伴うのであろう。底部を平らに作り、体部は中位で緩やかに屈曲して立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切り、その他はヨコナデ・ナデ調整で仕上げる。口径10.0～10.8cm、底径5.0～5.4cm、器高3.6～4.0cm。9は大型で高台を持つ。高台は高く、直線的に「ハ」の字に開く。体部は丸味を持って立ち上がるが、中位には稜がありわずかに屈曲する。口径13.3cm、高台径9.7cm、器高6.0cm。

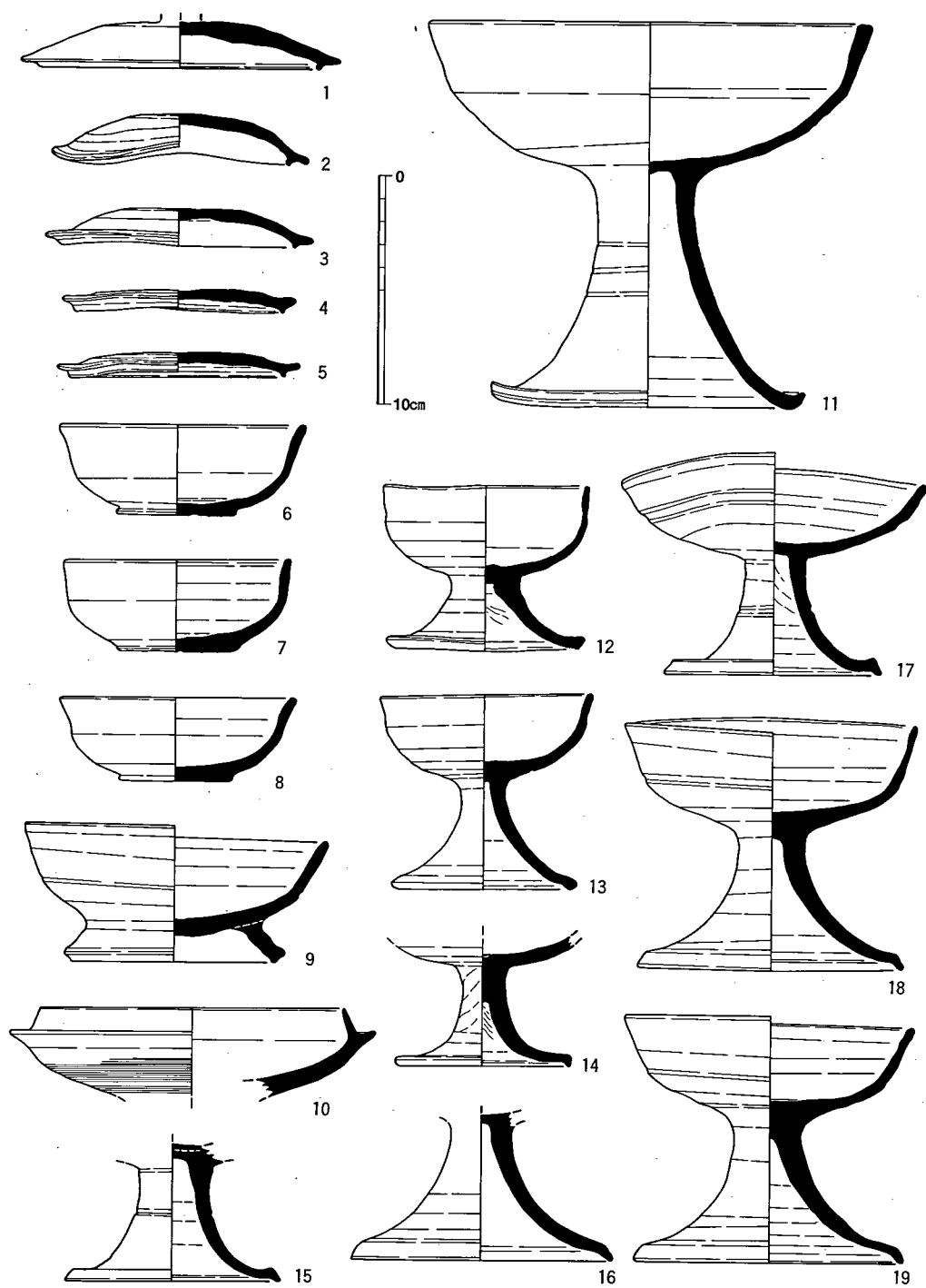
高杯（10～22） 10は有蓋高杯の杯部。たちあがり部は長く、端部を薄くシャープに仕上げ



第47図 下野地 2号墳地形測量図 (1/100)



第48図 下野地2号墳石室実測図 (1/60)



第49図 下野地 2号墳出土土器実測図① (1/3)

る。底部はカキ目調整、その他はヨコナデ・ナデ調整。復元口径13.2cm、復元受け部径16.0cm。11は大型の高杯。杯部は中位で屈曲して立ち上がり、口縁端部は四角く仕上げる。脚部は中位に3段に沈線を巡らし、脚端部は斜め上方に跳ね上げる。復元口径19.2cm、復元底径13.6cm、器高16.8cm。

12～14は小型品。12・13の杯部は6～8の杯と同様の形状を呈するが、それよりも小さく復元口径9.0～9.3cm。3点とも体部下半以下は回転ヘラ削り調整。脚部は、12は短く「ハ」の字に、13・14は比較的長く外反して開き、端部は短く下方に折り曲げる。14は灰黄色を呈し、軟質。脚端部径7.6～8.6cm、器高は12が7.1cm、13は8.5cm。

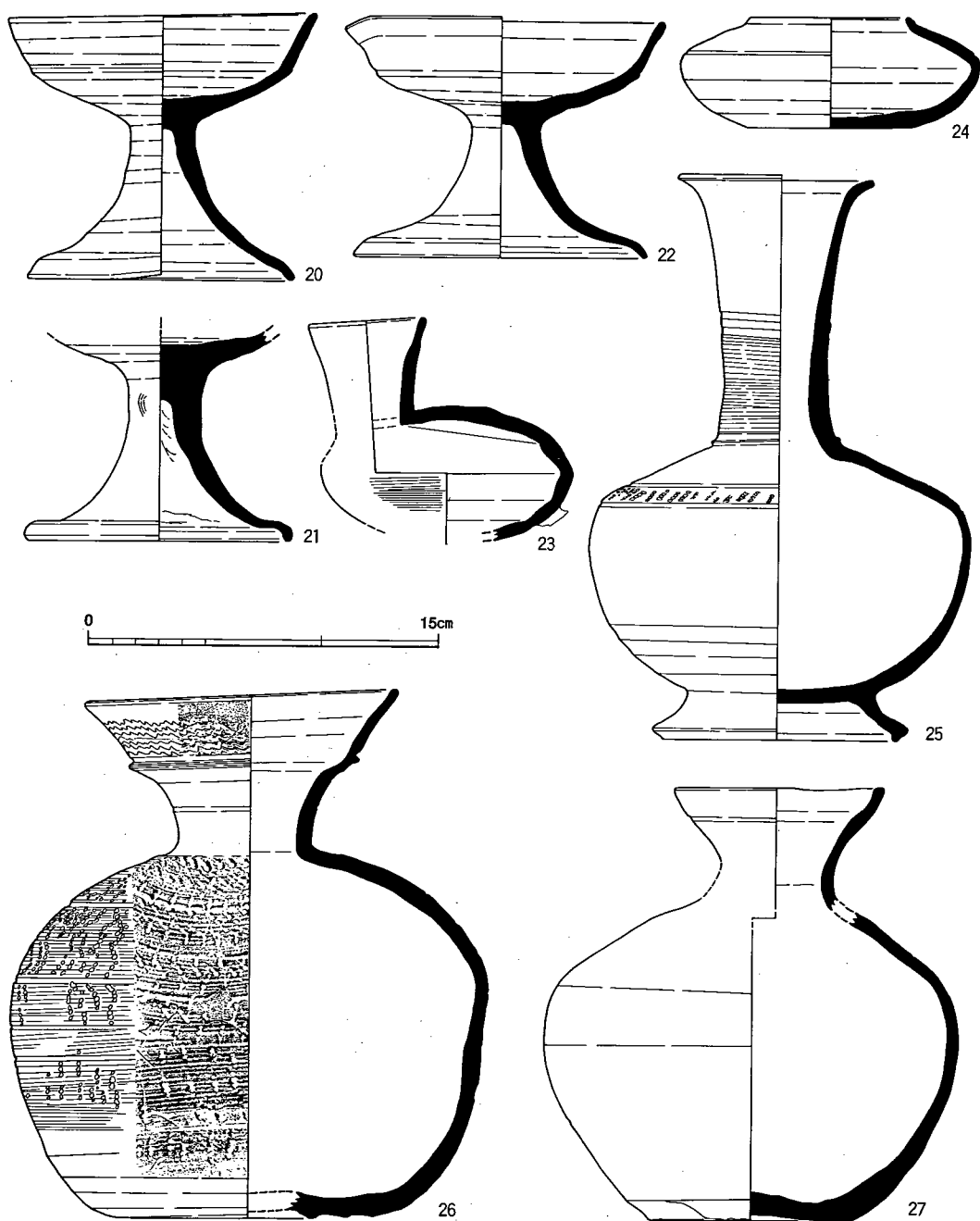
15～22は中型品。杯部は下位で稜または沈線を持って屈曲し、底部と体部とを分ける。脚部は「ハ」の字に外反して開き、端部は比較的長めに斜め下方に折り曲げて開く。17は杯部の歪みが激しい。16・18～21は小豆色を呈し、また15は淡灰色を呈して軟質。口径12.6～13.7cm、脚端部径9.4～12.4cm、器高10.3～11.4cm。

平瓶 (23) 小型の平瓶で、体部は低く、中位に最大径があり稜を持って屈曲する。体部下半には刷毛目状の粗いカキ目を施し、底部はその後ヨコナデ・ナデ調整。土器の上面には自然釉が厚く掛かって黒色を呈し、焼膨れも見られ、また体部下半には土器片が融着している。復元口径5.0cm、体部最大径10.8cm。

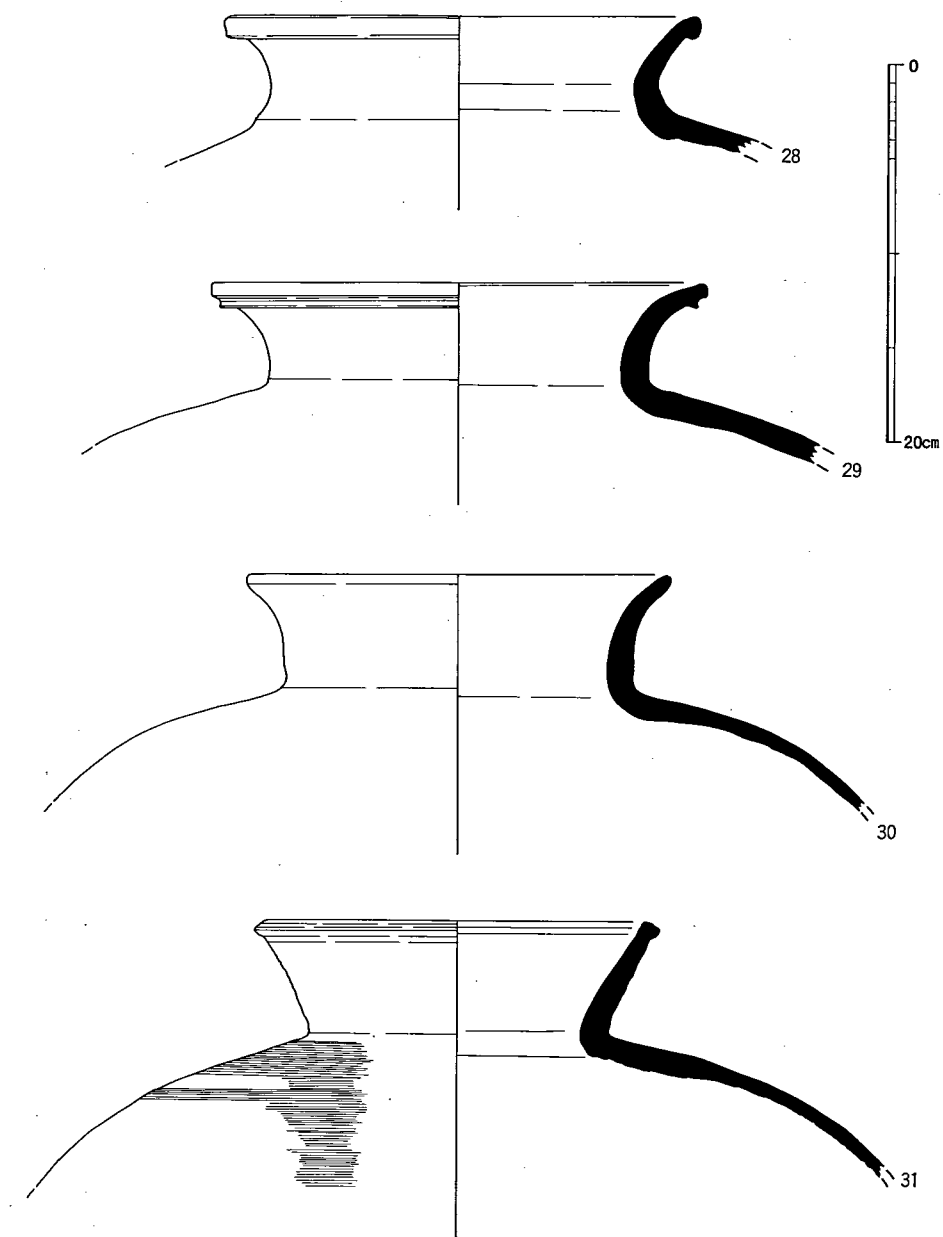
壺 (24～27) 24は器高が極端に低い器形の短頸壺で、底部は平底になる。肩部には沈線が1条巡り、体部下半は回転ヘラ削り調整を行う。胎土は精良で、淡小豆色を呈する。復元口径6.8cm、体部最大径12.8cm、器高4.7cm。

25は長頸壺。体部は丸味を持ち、肩部には2条の沈線が巡りその間に櫛状工具による刺突文を施す。口頸部は中央に2条の沈線があり、それ以下にカキ目調整を行う。また口頸部と体部の境には断面三角形の突帯1条が巡る。高台は高めで「ハ」の字に開き、端部は下方につまみ出す。体部下位は回転ヘラ削り調整、その他はヨコナデ調整で仕上げる。口径8.3cm、体部最大径16.3cm、高台径10.9cm、器高24.2cm。

26の体部は肩部がなだらかで、底部は広く平底だが凹凸の残る、ずんぐりした器形である。口頸部は下半が外反し、中位で突帯を持って屈曲してそれより上方は直線的に開く、臙の口頸部を想わせる形状を示す。体部は下部を除いてカキ目調整を行い、その上に沈線を6段に巡らせ、櫛状工具による刺突文を粗く綾杉状に施していく。下部は回転ヘラ削り調整で仕上げる。口頸部は上位に櫛描波状文を2段に巡らせ、下半部には1条の沈線がある。復元口径13.4cm、体部最大径20.4cm、器高22.6cm。27は26に似た器形だが、肩が下がったので肩で底部も小さく締まる。口頸部には沈線が1条巡り、口縁部と頸部とを分ける。底部はナデ調整、体部最下位が回転ヘラ削り調整でそれ以外はヨコナデ調整。胎土は精良で、暗橙色を呈する。口径8.9cm、体部最大径17.7cm、底径8.5cm、器高18.6cm。



第50図 下野地 2 号墳出土土器実測図② (1/3)



第51図 下野地 2号墳出土土器実測図③ (1/4)

甕 (28~31) 28~30は、口頸部が短く外反し、口縁部は28は玉縁状に肥厚させ、29は口縁部に突帯を付し、30は端部を丸く納める。31は口頸部が直線的に開き、口縁部は外側をわずかに肥厚させて四角く作る。口径21.4~26.0cm。

玉類 (図版72、第52図)

表2 下野地2号墳玉類計測表

石室内から14点が出土した。瑪瑙製丸玉1点の他はすべてガラス小玉であるが、ガラスには赤褐色、青緑色、青色、濃青色、黄色の各色がある。1の瑪瑙丸玉は一部を欠損するが、端部が磨滅して丸くなっており、このままで使用された可能性もある。ガラス小玉はすべて細管切断法で作ったもので、糸通し孔に平行する気泡や不純物の筋を観察することができる (巻頭図版2)。

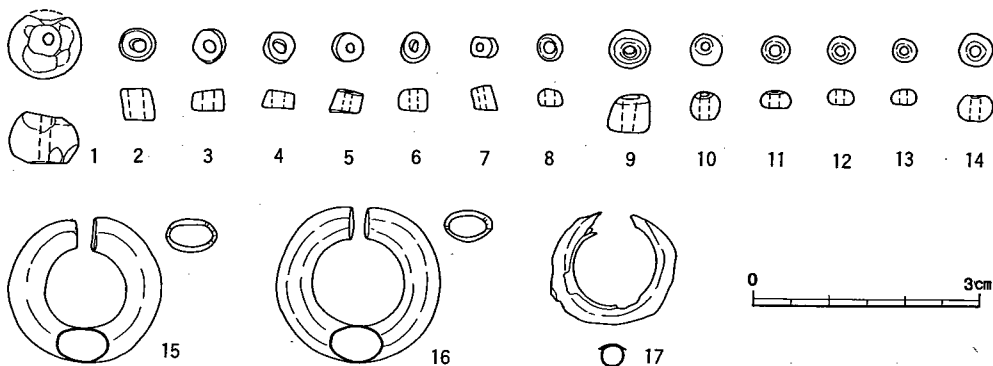
番号	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	色	備考
1	9.6	6.0-6.6	1.5	乳赤色~赤色	瑪瑙
2	4.2-4.6	4.1	1.5-2.0	赤褐色(不透明)	ガラス
3	4.3-4.5	2.4-2.6	1.5	赤褐色(不透明)	ガラス
4	3.9-4.2	2.1-2.7	1.5-2.0	赤褐色(不透明)	ガラス
5	3.8-4.0	2.9-3.1	1.0	赤褐色(不透明)	ガラス
6	3.7-3.9	2.4-3.0	1.0-1.5	赤褐色(不透明)	ガラス
7	2.7-2.9	3.2-3.8	1.0	赤褐色(不透明)	ガラス
8	3.4-3.5	2.0-2.3	1.5	赤褐色(不透明)	ガラス
9	4.8-5.4	4.2-4.8	1.5	青緑色(透明)	ガラス
10	3.7-4.0	3.2-3.5	1.0	青色(半透明)	ガラス
11	3.6-3.9	1.8-2.0	1.5	濃青色(透明)	ガラス
12	3.4-3.6	2.0	1.0	濃青色(透明)	ガラス
13	3.0-3.3	2.0	1.0	濃青色(透明)	ガラス
14	4.3-4.5	3.2-3.5	1.5	黄色(不透明)	ガラス

3~5・7はほぼ切断したままの、角がほとんど取れていないもの。

耳環 (図版72、第52図)

1は石室内奥、2は墓道、3は羨道部からそれぞれ出土した。本来は3点とも石室内にあったものであろう。

1・2は金箔張りの耳環で、1のひび割れ部と小口部に緑青が見えることから銅芯に巻き付けたものであろう。芯の両端小口部分にはあらかじめ別の金箔を被せておき、この上から芯全



第52図 下野地2号墳出土装身具実測図 (1/1)

体に金箔を巻き付けて最後に小口部分に巻き込んだもので、金箔の端部が残る（図版72-15・16）。この部分以外は丁寧に磨いており、金箔の合わせ目は観察できない。金銅製と違い表面が風化していないため、2点とも往時の輝きを失っていない。1は外径が縦19.0mm、横20.4mm、断面は楕円形で長径6.6mm、短径4.9mmで、4.5g。2は外径が縦20.3mm、横21.5mm、断面長径6.7mm、短径5.0mmで、4.2g。重量から銅芯は中空と考えられる。1・2はセットである可能性が高い。

3は銅芯に銀箔を張ったもの。銀箔は大半が失われており、一部が銅芯に辛うじて付着している。銅芯は中実であるが、風化のため痩せ細り本来の形状を留めていない。現状で外径は縦14.3mm、横16.4mm、断面は銀箔の残存した部分で測って3.8mmで、重量1.0g。

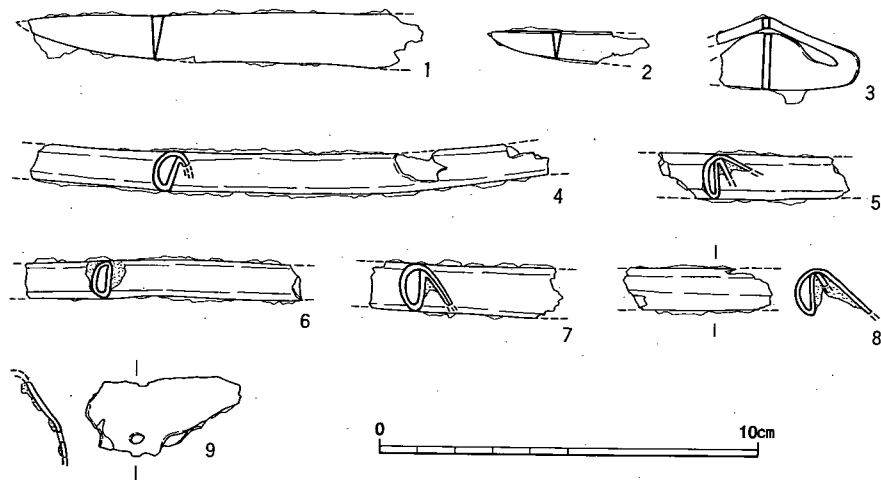
鉄器（図版72、第53図）

すべて石室内から出土した。

刀子（1・2） 2点出土した。ともに刀身部分の破片で、1は切っ先を失っているが10.5cm、2は4.2cmが残存する。

不明鉄器（3～9） 3は本来は左右対称の隅丸二等辺三角形の製品ではないかと思われる。上部には透かし孔がある。

4～9は同一個体で、何かの製品の縁金具ではないかと考えられる。鉄板を二つ折りし、折り返し部分から1cm程の所でさらに山形に折る。本体とは9の様な目釘穴を通して釘等で固定したものであろう。



第53図 下野地2号墳出土鉄器実測図（1/2）

2) 住居跡

1号住居跡 (図版35、第54図)

I b区西端で検出した。削平を受けており、残りの良い部分でも深さ10cm程度で、西側と北側の約半分は失われている。規模は南北方向が中央部で測って2.45mで、東西方向もほぼ同様になると思われる。遺構の北東隅には径70~80cmで円形の浅い掘り込みがあり、埋土に焼土と炭化物が大量に含まれていたことから、この場所に炉またはカマドがあったものと考えられる。遺構の南北中軸上の2ヶ所で小穴を検出したが、支柱穴とするには北側の穴などは浅いように思われる。

出土遺物

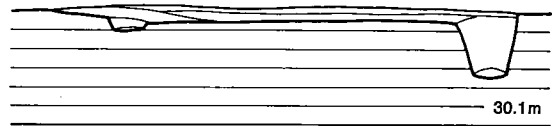
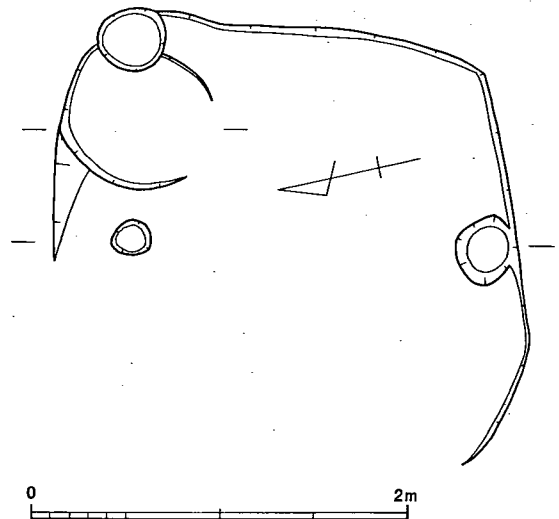
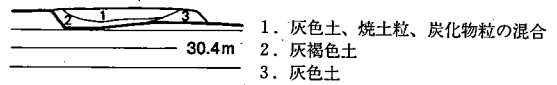
須恵器 (図版72、第55図)

高杯 (1) 杯部はなだらかに内彎して立ち上がる。脚部は「ハ」の字に開き、端部を下方に折り曲げる。淡灰色を呈し、軟質。復元口径15.7cm復元底径10.0cm、器高9.3cm。

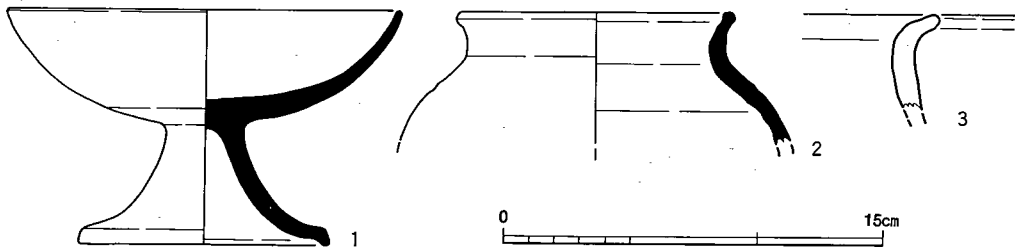
壺 (2) 下半部を欠いているが、なで肩の器形である。焼成は良好で、灰色から暗灰色を呈する。復元口径10.8cm。

土師器 (第55図)

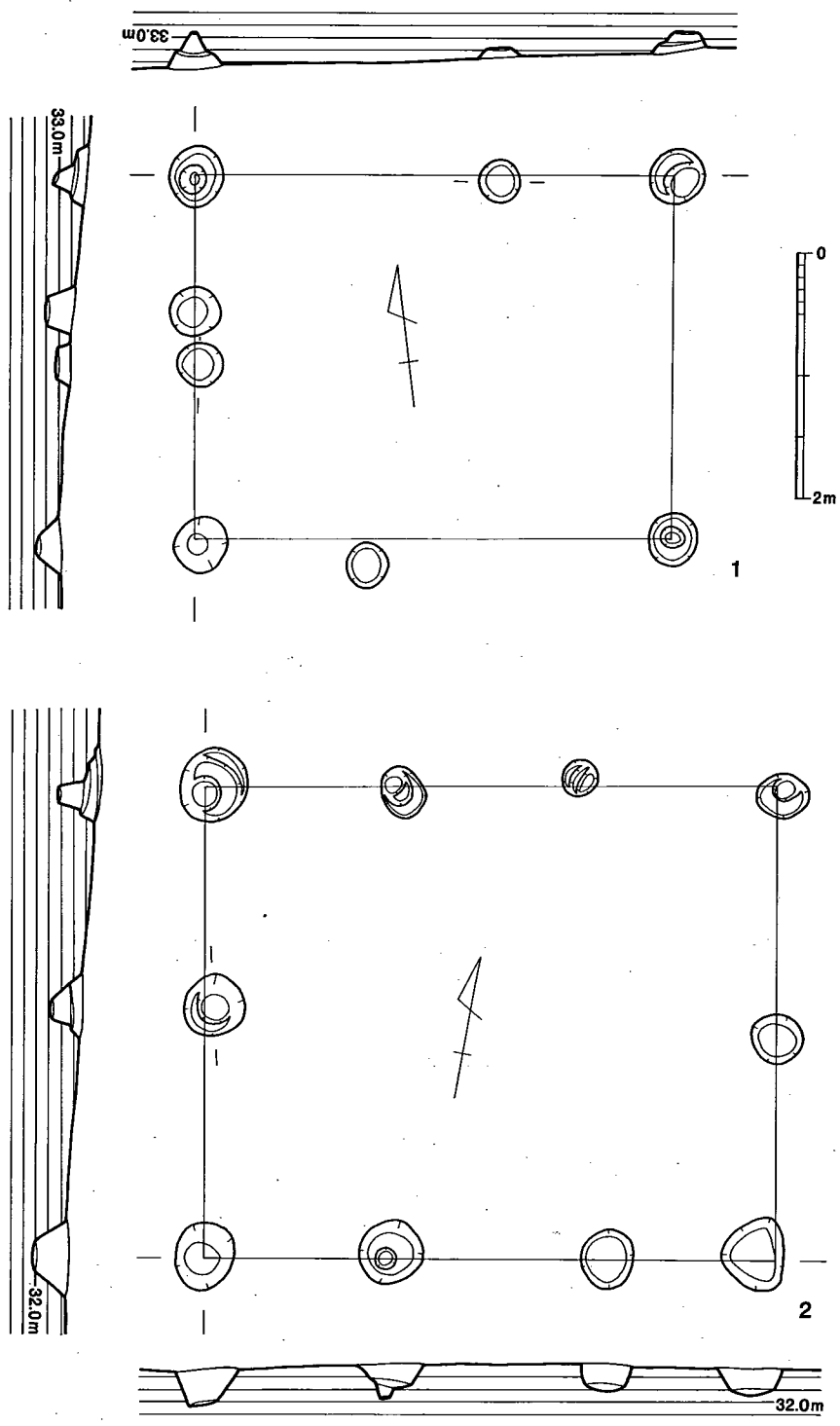
甕 (3) 小型の甕と思われる。口縁部は短く外反し、端部は薄く仕上げる。



第54図 1号住居跡実測図 (1/40)



第55図 1号住居跡出土土器実測図 (1/3)



第56图 1・2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

4 歴史時代

1) 掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡の柱掘形から7世紀中葉から後半の須恵器杯が出土しており、遺構の時期はそれ以降であろう。しかし1・3号掘立柱建物は遺物の出土が無く、時期は不明である。1号掘立柱建物跡は、2号掘立柱建物跡と近接することと、建物や柱掘形の形態の類似から、時期差はそれほど無いと考えられる。3号掘立柱建物跡については不明であるが、一応歴史時代としておく。

1号掘立柱建物跡（第56図）

Ⅱ区の中央部にある。柱掘形は削平のため失われたものがあるが、桁行3間、梁行2間の東西棟建物と考えられる。建物の規模は桁方向で3.9～4.0m、梁方向が2.9～3.0mである。柱掘形は四隅のものが径40～45cm、それ以外は径35cm程の円形で、柱間は3ヶ所の柱掘形が失われ、また揃っていない部分もあるが、設計上は桁行が1.3m等間か、あるいは両側の柱間が1.4～1.5mで中央の柱間が狭くなっていたものと考えられ、桁行は1.5m等間であろう。

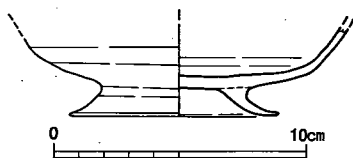
2号掘立柱建物跡（図版35、第56図）

Ⅱ区南側にあり、1号掘立柱建物跡との間隔は約7mある。1号掘立柱建物跡と同様に桁行3間、梁行2間の東西棟建物で、建物の規模は桁方向が4.5～4.7m、梁方向が3.8mと1号掘立柱建物より一回り大きい。柱掘形は失われたものはないが、径30～60cmとばらつきがあり、柱間も不揃いで、桁行は1.2～1.8m、梁行は1.7～2.1mである。南西隅の柱掘形の埋土から須恵器杯が出土した。

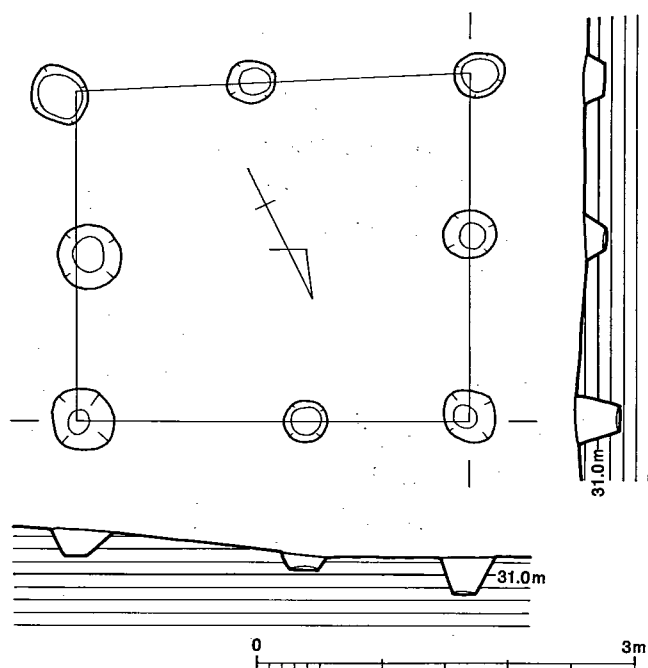
出土遺物

須恵器（図版72、第57図）

杯 底部と体部の境で屈曲して立ち上がる。高台は、大きく外反して「ハ」の字に開き、端部は薄くシャープに仕上げる。復元高台径8.2cm。



第57図 2号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）



第58図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

3号掘立柱建物跡 (図版36、第58図)

Ⅵ区で検出した。2×2間の建物で、建物の規模は北西-南東方向が3.1~3.3m、北東-南西方向は2.6~2.7mで、前者が長い。柱掘形は径30~50cmの平面円形で、深さは10~35cmが残存しており、柱間は北西-南東方向が1.3~1.8m、北東-南西方向は1.3~1.45mとばらつきがある。

(小川)

2) 近世墓

近世墓は調査区内に3カ所で、一群をなして検出された。

検出された区は、Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区で、調査された墓の数は相違する。

墓地については一般に、聚落を離れた山、野辺、海辺に設けられることが多い。近くに小さな無人島を持つ海村では、そこに墓地を選ぶ例が珍しくない。また、農耕生産地から外れた地区が選ばれる。このことは古い遺骸隔離の観念に発するものと考えられる。

墓地の墓標は、庶民の場合土饅頭のままか、その上に人頭に人頭大の丸石を乗せておくというのは近年の通例である。3年忌・5年忌に墓碑を建てるのが、江戸後期には一般化している。江戸時代の町家部で石を墓石として使用し、個人墓ができるのが17世紀末で、農村部まで

浸透するのは18世紀半から後半に一般化する。

では、検出されたⅢ区・Ⅳ区・Ⅱ区の順で説明を加える。

Ⅲ区近世墓（図版37、第59図）

地形からみると道端で狭い土地に密集している。形態的には同族墓で、血縁者が中心のものと考えられる。切り合い関係は5カ所で、番号を上げると21号墓が22号墓を、19号墓が18号墓を、14号墓が15号墓を、9号墓が10号墓を、3・4号墓が2号墓を切っている。

平面形からみると円形・隅丸長方形と楕円形・正方形・不整形を呈する。五形態に分類できる。

近世墓の規模（内法・深さ・出土遺物）についても、表3で示す様に一覧表にしている。

※（なお、深さについては、20～30cm加えること。表土層を一枚はいでいるため。）

1号近世墓（図版38、第60図）

墓地の北端部にあって、床の平面形は隅丸長方形を呈している。床面は若干の凹凸がある。棺は箱形のものである。長軸が78cm、短軸が60cmである。

2号近世墓（図版38、第60図）

1号の南側にあって、3号から切られ、その上4号からも切られている。4号→3号→2号となり、当該墓が一番古くなる。床の平面形は円形を呈し、長径1尺5寸の早桶を入れたものと思われる。

3号近世墓（図版39、第60図）

2号の南側にあって、2号切って、4号から切られている。床の平面形は隅丸長方形を呈している。箱形をなしている。

4号近世墓（図版39、第61図）

3基切り合った中で、一番新しいもので、床面の平面形は隅丸長方形を呈し、北西に六道銭が検出している。長軸が113cm、短軸が77cmである。棺の中で長さは一番長い。

出土遺物

六道銭（図版73、第82図）

寛永通寶5枚が検出されている。布の付着がみられ、胸元にまとめられて入れられたもので、銭は全て、新寛永である。銭は天保6年製のものが一番新しいため、それ以後に埋葬されているため、時期的に江戸期の幕末期と考えられる。



第59图 III区近世墓配置图 (1/100)

表3 近世墓一覧表

		平 面 形	形状規模 (cm) 長軸×短軸×(深さ)	床面形状	出土遺物	土火葬	切り合い (古→新)	備 考
Ⅲ 区	1	隅丸長方形	78×60×35	隅丸長方形		土		
	2	円 形	64×55×31	円 形		土	2→3→4	
	3	隅丸長方形	95×57×20	隅丸長方形		土	3→4	
	4	隅丸長方形	113×77×53	隅丸長方形	六道銭	土		
	5	隅丸長方形	92×60×12	隅丸長方形		土		
	6	正 方 形	45×45×5	正 方 形		土		
	7	隅丸長方形	80×45×30	長 方 形	六道銭	土		
	8	円 形	49×48×20	円 形		土		
	9	隅丸長方形	86×60×18	隅丸長方形		土	9→10	
	10	隅丸長方形	100×60×8	隅丸長方形		土	9→10	
	11	隅丸長方形	82×58×37	長 方 形	六道銭	土		墓石一部残る
	12	隅丸長方形	95×70×35	長 方 形	六道銭 土器片	土		
	13	隅丸長方形	105×65×23	隅丸長方形		土		
	14	楕 円 形	52×40×8	楕 円 形	六道銭	火?	15→14	
	15	隅丸長方形	135×62×30	隅丸長方形		土	15→14	
	16	楕 円 形	89×45×15	楕 円 形		土		
	17	楕 円 形	101×67×9	楕 円 形	六道銭	土		
	18	隅丸長方形	83×50×26	長 方 形		土	18→19	
	19	隅丸長方形	79×52×20	隅丸長方形		土		
	20	楕 円 形	101×77×15	楕 円 形	六道銭	土		
	21	隅丸長方形	93×55×15	隅丸長方形		土	22→21	
	22	不 整 形	90×25×5	不 整 形		土	22→21	
	23	円 形	42×37×46	円 形		土		
Ⅳ 区	24	不 整 形	墓墳不明	不 整 形	六道銭・人骨 ガラス玉・銅	土		
	25	隅丸長方形	92×62×32	隅丸長方形		土		
	26	不 整 形	62×42×16	不 整 形		土		
	27	不 整 形	78×52×5	不 整 形		土		
	28	楕 円 形	89×60×17	楕 円 形	六道銭・人骨	土		
	29	隅丸長方形	80×70×18	隅丸長方形		土		
	30	隅丸方形	90×60×15	隅丸方形	人骨	土		
	31	不 整 形	82×75×35	不 整 形	釘	土		
	32	楕 円 形	100×50×22	楕 円 形	人骨	土		
Ⅱ 区	33	円 形	45×40×25	円 形				標式アリ
	34	不 整 形	60×52×30	円 形	蔵骨器			標式アリ
	35	円 形	23×24×7	円 形				

5号近世墓（図版40、第61図）

6号の西側で、8号の北東側に位置し、床面の平面形は隅丸長方形を呈している。

6号近世墓（図版40、第61図）

5号の北東側にあるもので、床面の平面形は正方形を呈している。長さは45cmで、深さが非常に浅い。

7号近世墓（図版40、第62図）

4号の南側で、8号の西側に位置し、床面は隅丸長方形を呈し、北側に六道銭を検出している。小形の棺である。時期は江戸期の幕末のころの埋葬。

出土遺物

六道銭（図版74、第82図）

寛永通寶が7枚検出されている。すべてが新寛永で、鉄銭を含み残り具合はボロボロであった。江戸後期のものが大半であった。

8号近世墓（図版41、第62図）

7号の東側にあって、9号の西側に位置するもので、床面は円形を呈している。棺は1尺5寸の早桶と思われる。

9号近世墓（図版41、第62図）

10号を切って、床面の平面形は隅丸長方形である。

10号近世墓（図版41、第62図）

9号から切られているもので、床面の平面形は隅丸長方形である。

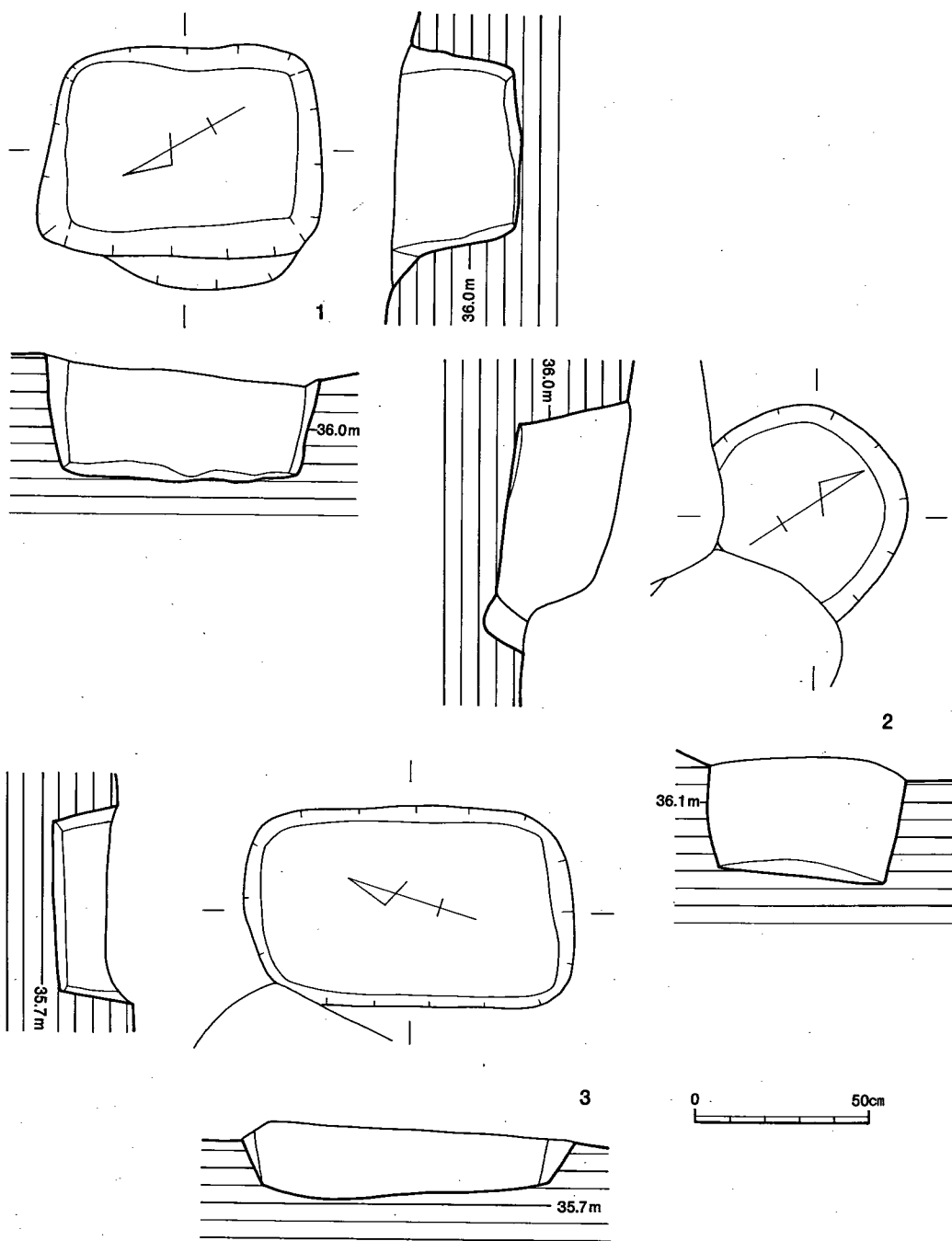
11号近世墓（図版42、第63図）

7号の南西に位置するもので、墓壙内に人頭大の河原石が4個組み合っていた。床面の平面形は長方形で、床面直上から六道銭が検出されている。箱形のものである。時期的には幕末期の埋葬か。

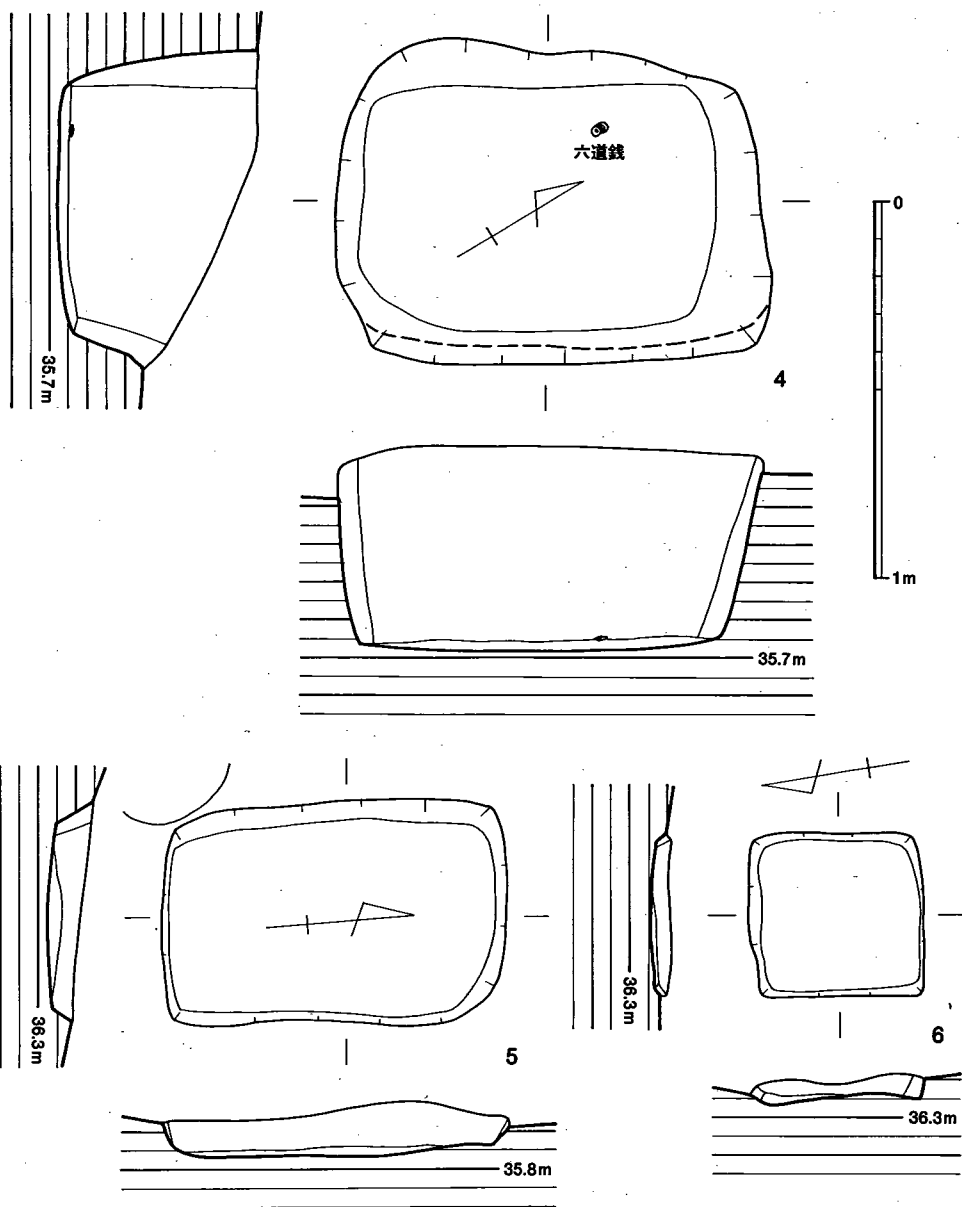
出土遺物

六道銭（図版75、第82図）

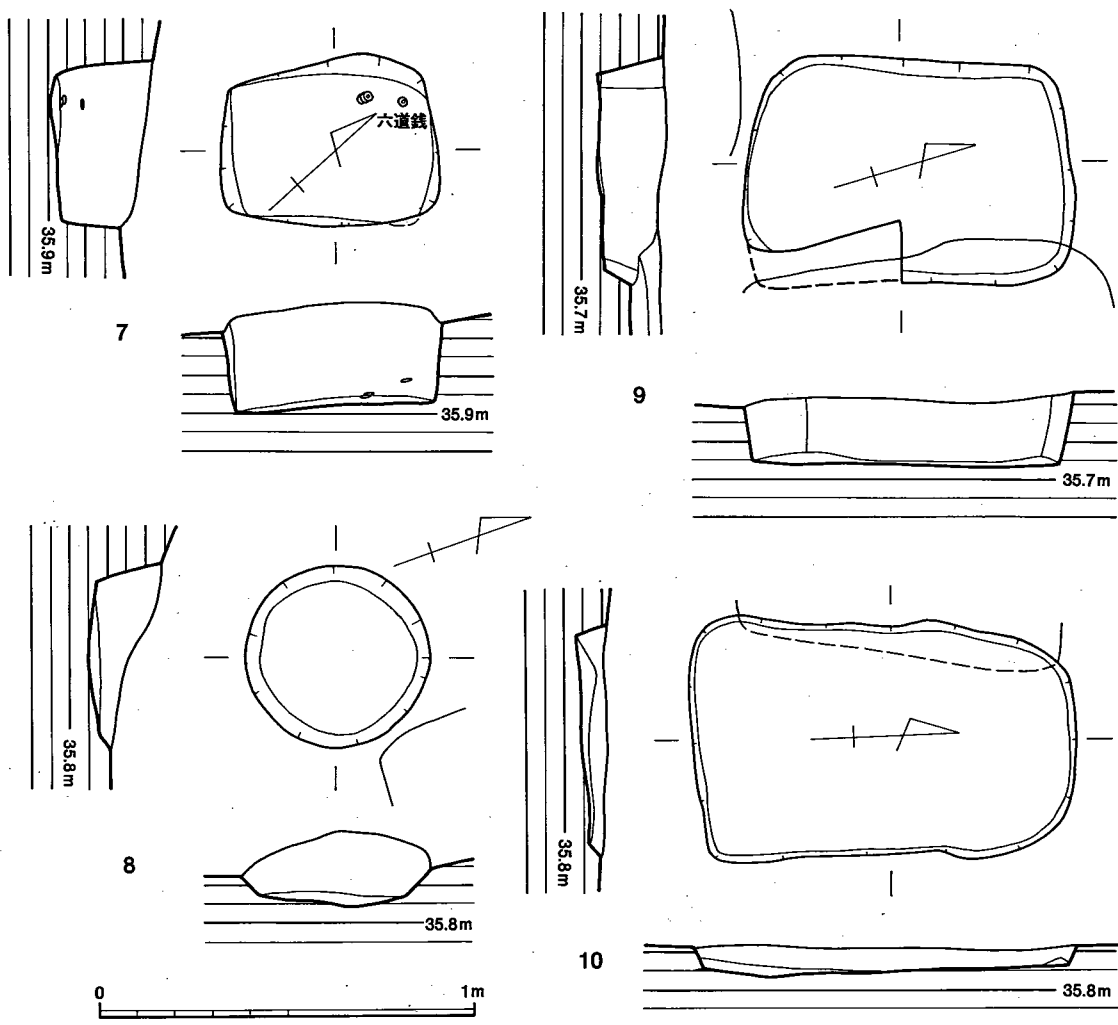
寛永通寶6枚ひと固まりで錆着したもので、剥がす時に1枚はバラバラになってしまった。1枚が古寛永を含み、他は新寛永であった。残り具合が悪かった。



第60図 1～3号近世墓実測図 (1/20) ※右下の番号は近世墓番号



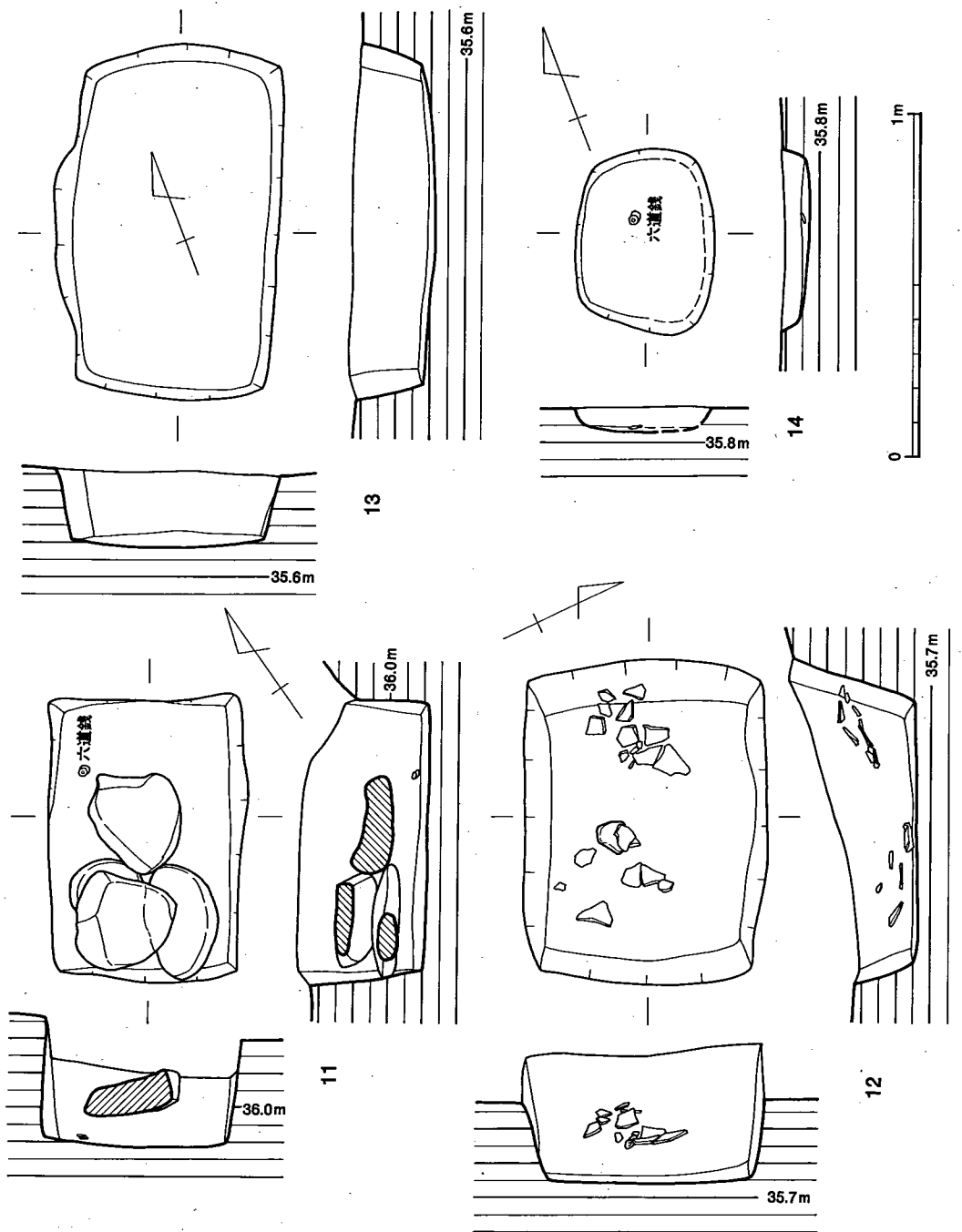
第61図 4～6号近世墓実測図 (1/20) ※番号は近世墓番号



第62図 7～10号近世墓実測図 (1/20) ※番号は近世墓番号

12号近世墓 (図版42、第63図)

13号の西側に位置するもので、床面の平面形は長方形を呈し、墓壙中より、土師質土器の破片と六道銭が出土した。



第63図 11~14号近世墓実測図 (1/20) ※番号は近世墓番号

出土遺物

土師質土器 (第65図①②③)

①は胎土に細粒砂を含み、焼成は軟質である。

二次的に火を受けている。底部破片で、底径28cm前後と推定される。②は口縁直下と思われるが、一条の指痕が器面にアクセントをつけている。胎土に細粒砂を多く含み二次的に火を受けている。焼成は①と同じである。③は胴部破片で焼成・胎土は前者と一致する。①②③は火消壺の破片で、第65図で番号を付しているものは同一個体と考えられる。他の破片もその一部と思われる。

六道銭 (図版76、第83図)

寛永通寶が5枚床面よりひと固まりとして検出された。残り具合は良好である。古寛永1枚と他は新寛永である。新寛永の中でも、天保年間に鑄造されたものもある。裏面に砂粒が付着しているため、拓影にずれがある。埋葬された時期は江戸末期とした方が妥当である。

13号近世墓 (図版43、第63図)

12号の東側で、14号・15号の西側に位置するもので、床面の平面形は隅丸長方形である。

14号近世墓 (図版43、第64図)

15号の墓壙の西北部を切っているもので、平面形は楕円形を呈し、床面直上から六道銭が検出されている。火葬墓としては疑問を持つが？火葬した骨を拾骨して、六道銭を入れたものと考えた方が良いと思われる。その理由は墓壙が小さいからである。

出土遺物

六道銭 (図版77)

寛永通寶の銅銭3枚がボロボロの状態で検出された。ボロボロであるため拓本も取れなかった。銘文の観察は不可能である。

15号近世墓 (図版44、第64図)

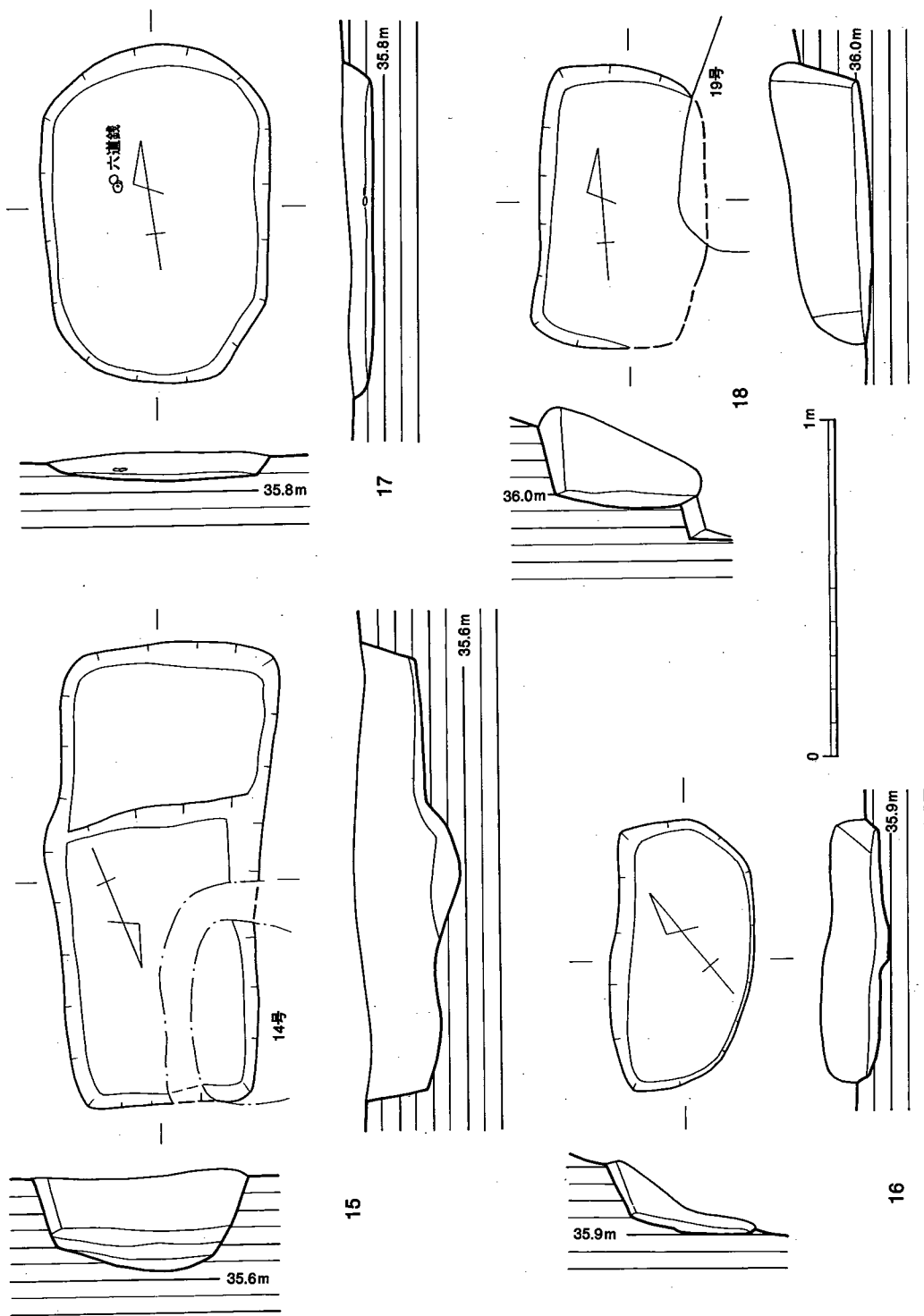
14号の東側にあって、平面形は隅丸長方形を呈している。中央部が一段落ちている。

16号近世墓 (図版44、第64図)

17号の西側で、19号の北側に位置し、平面形は楕円形を呈している。

17号近世墓 (図版44、第64図)

16号の東側で、20号の北側に位置しているもので、床面の平面形は楕円形を呈し、西北側に



第64図 15～18号近世墓実測図 (1/20) ※番号は近世墓番号

六道銭が出土している。寛永通寶の鉄銭を含む。

出土遺物

六道銭（図版78、第83図）

寛永通寶がひと固まりとなって出土したもので、布の付着が見られ、胸元におさめたものと思われる。銭は6枚検出されたが、銹着がひどいため、剝離する時に、鉄銭はバラバラになってしまった。他の1枚も剥げないためにそのまま拓本を取った。新寛永が中心で鉄銭を含んでいるため、江戸後期から末期が、埋葬時期と考えられる。

18号近世墓（図版45、第64図）

19号に切られているもので、平面形は長方形を呈している。

19号近世墓（図版45、第67図）

16号の南で、18号の東側に位置するもので、平面形は隅丸長方形を呈している。

20号近世墓（図版45、第67図）

17号の南側にあって、墓域の南端に位置するもので、平面形は楕円形を呈し、西北部に六道銭を検出している。

出土遺物

六道銭（図版78・79、第83・84図）

寛永通寶6枚がひと固まりになって、検出されたもので、すべてが新寛永で、黄味を帯びた布が付着していた。頭陀袋か布につつまれたものと考えられる。寛永通寶の拓影から見ると江戸後期の天保年間のものが一番新しく、埋葬された時期は幕末期と考えた方が妥当である。

21号近世墓（図版46、第67図）

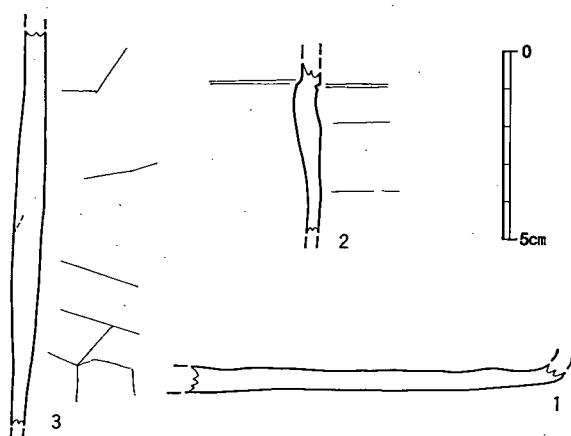
墓域の東南端に位置し、22号を切っている。平面形は隅丸長方形を呈している。

22号近世墓（図版46、第67図）

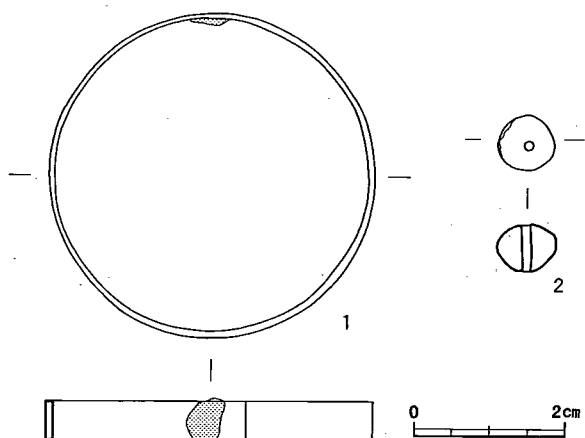
21号に切られているもので、平面形は不整形を呈している。

23号近世墓（図版46、第67図）

墓域の西端部に位置し、平面形は円形である。径1尺の早桶を入れたものと考えられる。



第65図 12号近世墓出土遺物実測図 (1/2)



第66図 24号近世墓出土遺物実測図 (1/1)

珠玉で、棗玉状のものである。風化して白色を呈する。重量0.6g。

埋葬された時期は出土遺物から江戸の幕末期と考えられる。

25号近世墓 (図版48、第69図)

27号の南で、26号が西側に接する。平面形は隅丸長方形で、床面から頭頂骨の破片と大腿部の一部が残っていた。人骨は成人骨である。

Ⅳ区近世墓 (図版47、第68図)

遺跡の西側に位置するもので、近世墓群はⅣ区の中央部で、方形の溝に囲まれた部分の中にある。近世墓は9基(24号～32号)を数える。表3に規模や形状等は記している。

24号近世墓 (図版48、第69図)

ほぼ、中央部に位置し、墓壙は不明である。人骨の頭頂骨若干と大腿骨の一部等が残っている。副葬品としては六道銭と銅輪1点・ガラス玉1点が骨の周辺部より検出されている。人骨は男性成人であった。

出土遺物

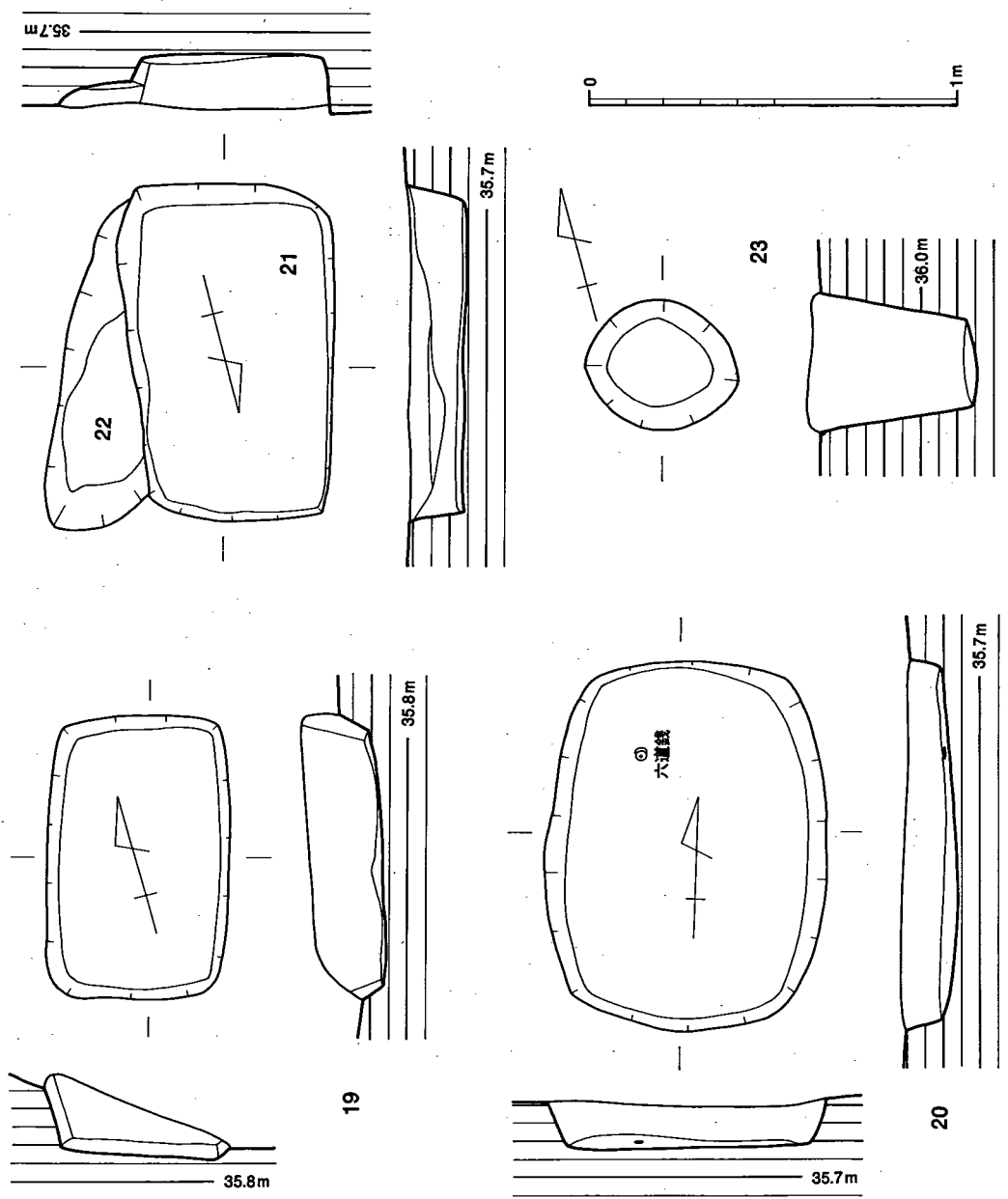
六道銭 (図版79・80、第84図)

寛永通寶6枚が銹着して検出されている。新寛永通寶4枚、古寛永 銭が1枚入っていた。1枚は銹着して剝離ができなかった。

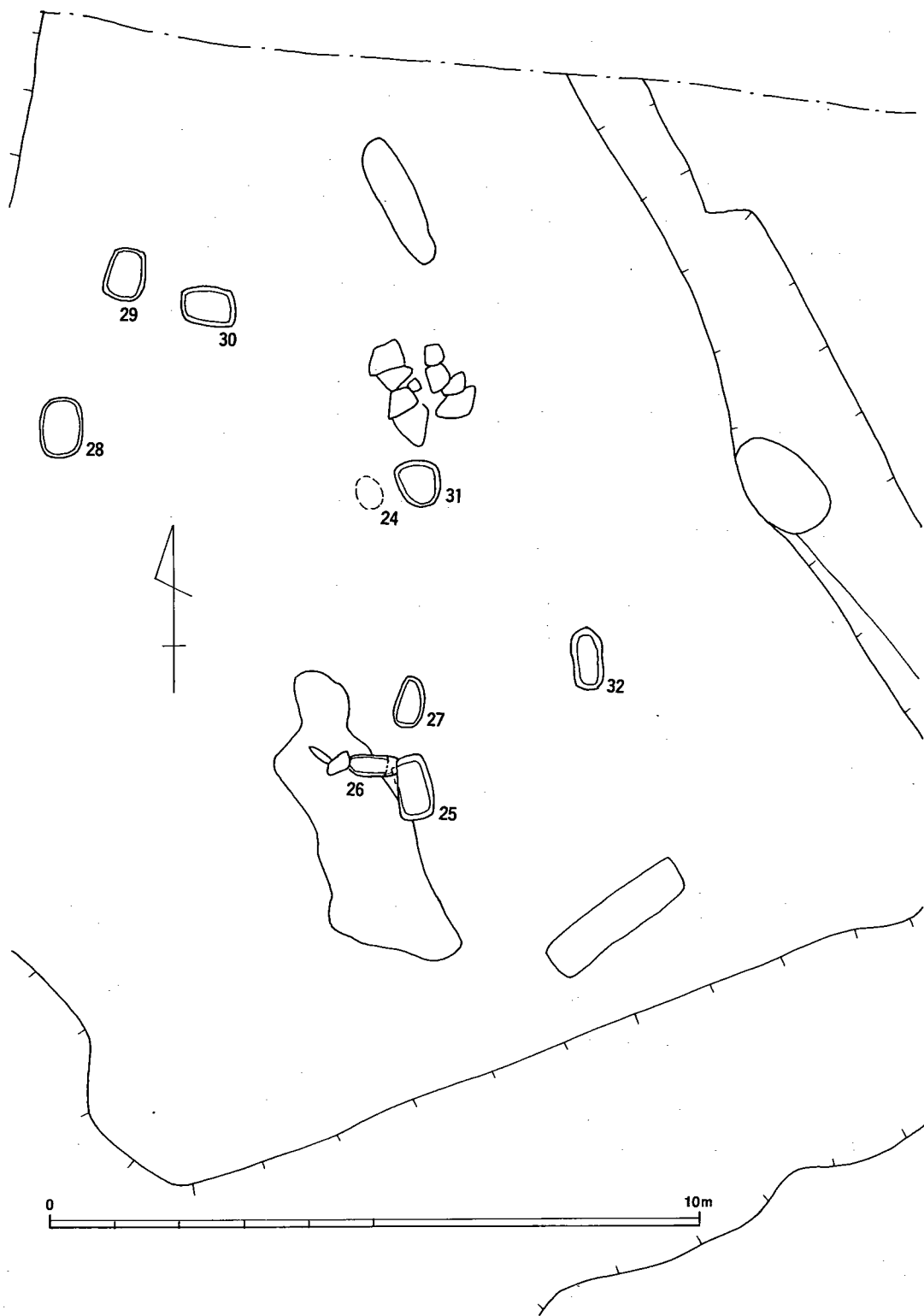
銅輪 (図版79、第66-①図)

銅製に銀メッキを施している。直径が4.2cmで厚さ1mmで、幅5mmである。腕輪として使用されたものであろう。

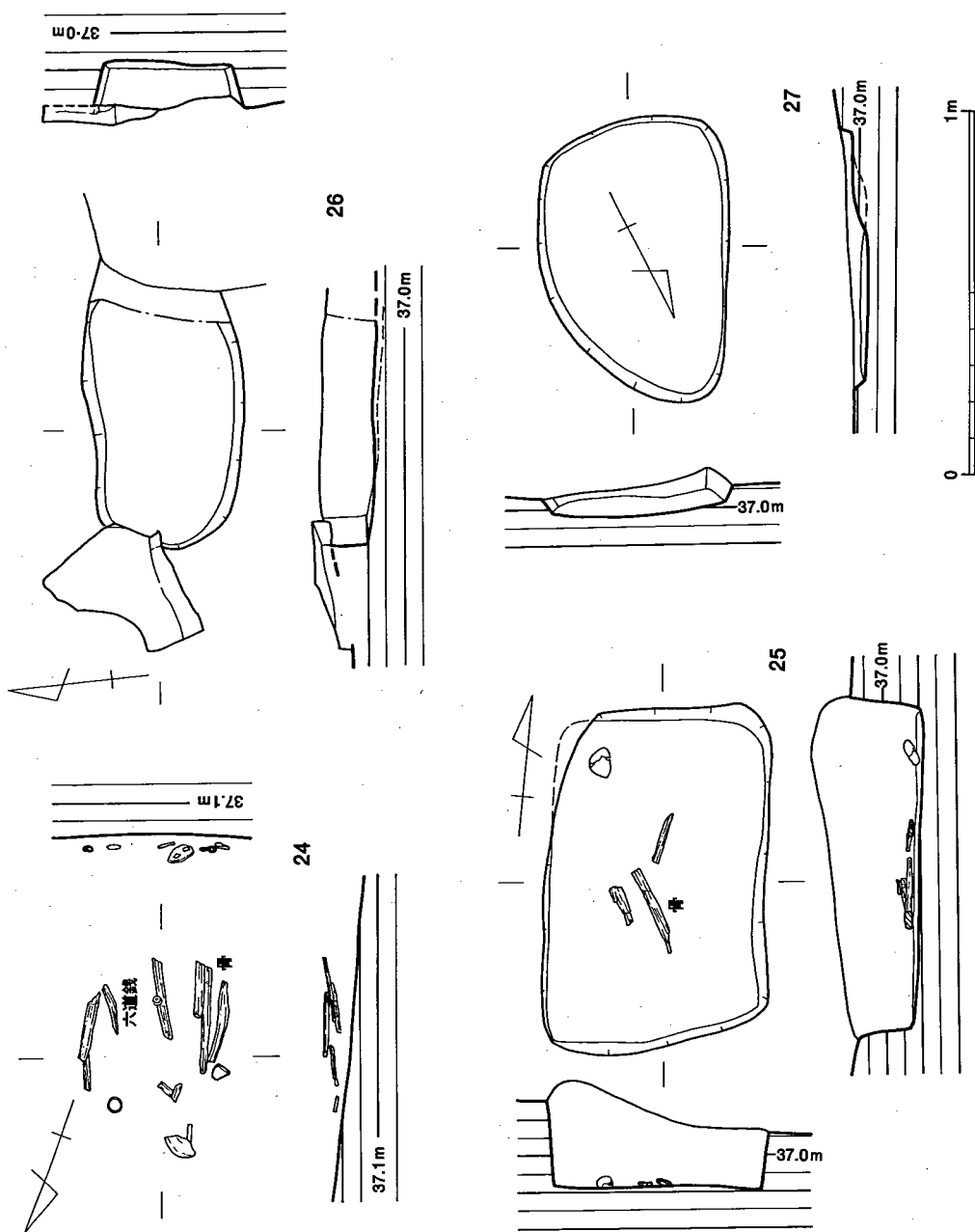
ガラス玉 (図版79、第66-②図)



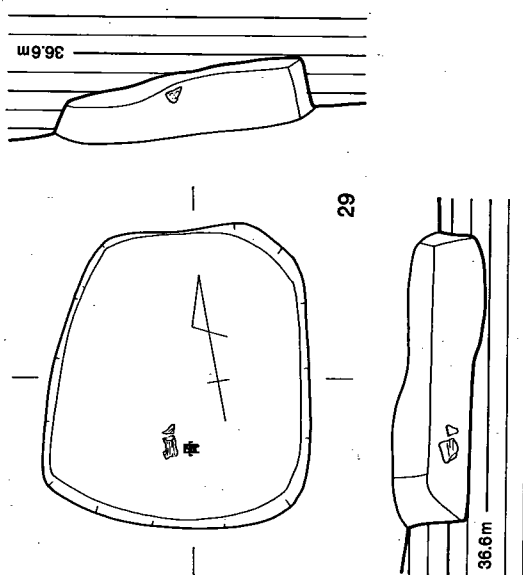
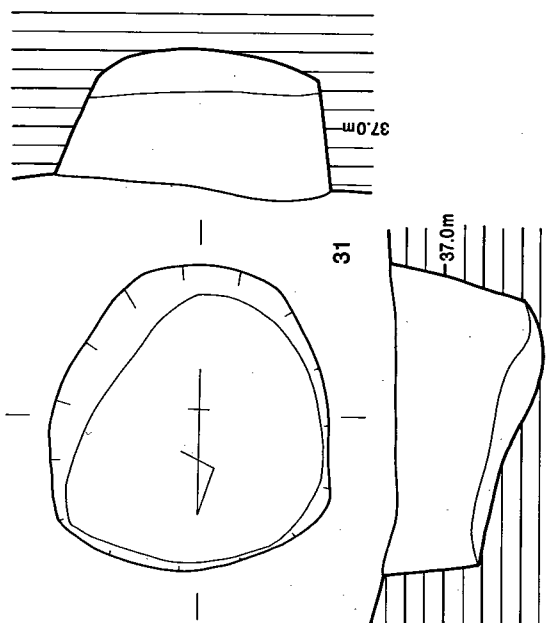
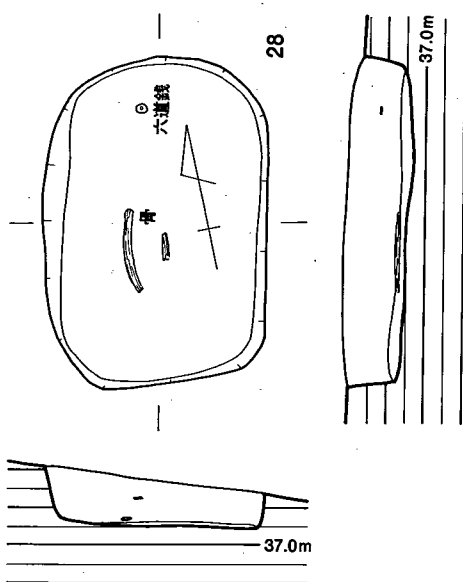
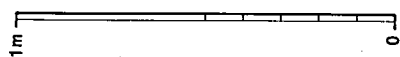
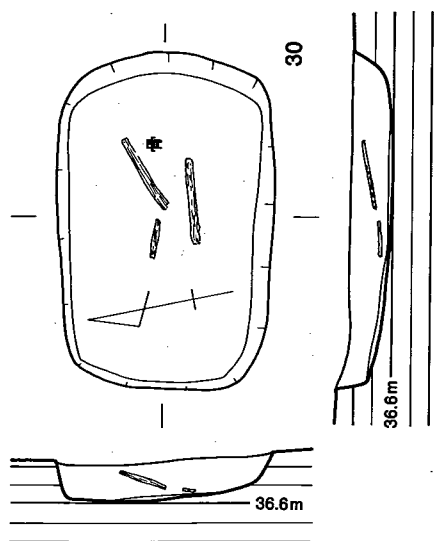
第67図 19～23号近世墓実測図 (1/20) ※番号は近世墓番号



第68图 IV区近世墓配置图 (1/100)



第69図 24~27号近世墓実測図 (1/20)



第70図 28～31号近世墓実測図 (1/20)

26号近世墓 (図版49、第69図)

25号の西側にあって、27号の南に位置する。平面形は不整形のもので、西側に切石をコーナーの一部として使用している。長軸は東西方向である。

27号近世墓 (図版49、第69図)

26号の北側に位置する。平面形は不整形を呈する。長軸は南北で、床面までの深さは5 cmを計測する。

28号近世墓 (図版50、第70図)

29号の南に位置し、平面形は隅丸長方形で、楕円形に近いもので、六道銭を北西側に位置し、大腿骨の一部を床面より検出している。埋葬者は頭を北に位置している。

出土遺物

六道銭 (図版80・81、第84図)

寛永通寶が6枚、ひと固まりで検出されたもので、古寛永が2枚、新寛永が4枚であった。新寛永は天保年間に鑄造されたものもみられ、埋葬された時期は、江戸後期末と考えた方が、妥当である。

29号近世墓 (図版50、第70図)

30号の西側に、28号の北側に位置している。平面形は隅丸長方形で、方形に近い。墓壇内に小石が2点落ち込んでいた。

30号近世墓 (図版51、第70図)

29号の東側にあって、平面形は隅丸長方形を呈している。長軸を東西方向で、短軸を南北に取り、床面から大腿骨の一部が検出されている。

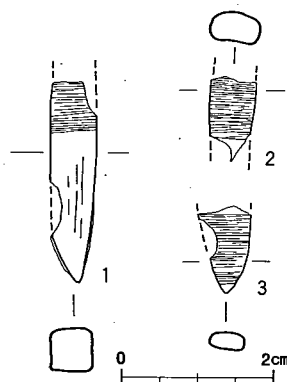
31号近世墓 (図版51、第70図)

24号の東に位置し、平面形は不整形で円形に近いもので、南側が一段落ちる。早桶を使用してもいいものである。釘が床面より出土していた。

出土遺物

釘 (第71図)

床面より出土しているもので、①は切先で、上部



第71図 31号近世墓
出土遺物実測図 (1/1)

に木質が残っている。②③にも木質が残っている。棺の材の木質部である。

32号近世墓 (図版52、第73図)

近世墓27号の東側にあつて、平面形が楕円形を呈し、床面から大腿骨の一部と北側に歯が3本ほど残っていた。埋葬者は北を頭にしていた。

Ⅱ区近世墓 (図版52、第72図)

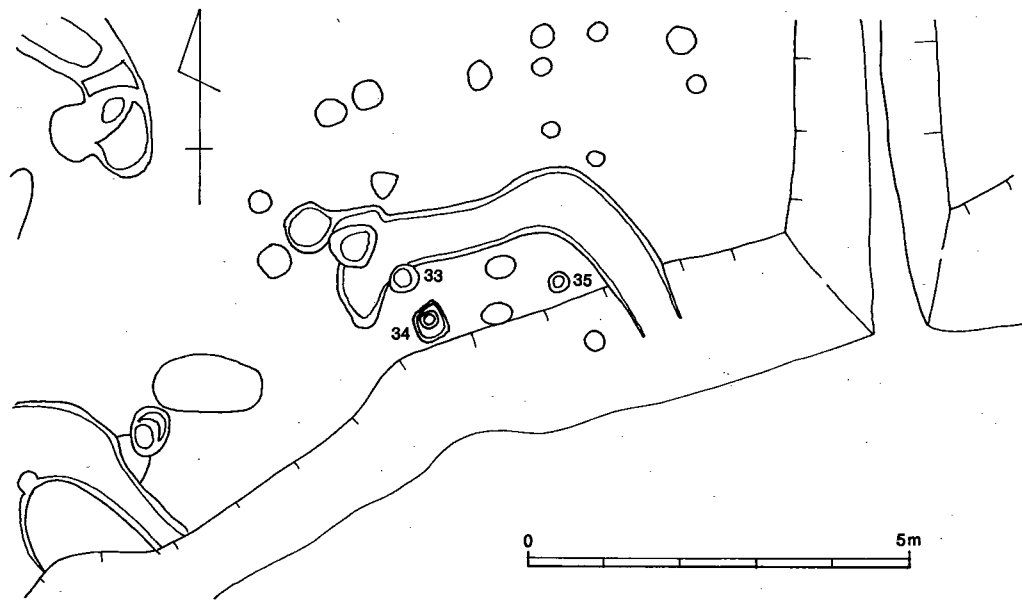
Ⅱ区には東端部に3基を検出している。

33号近世墓 (図版53、第73図)

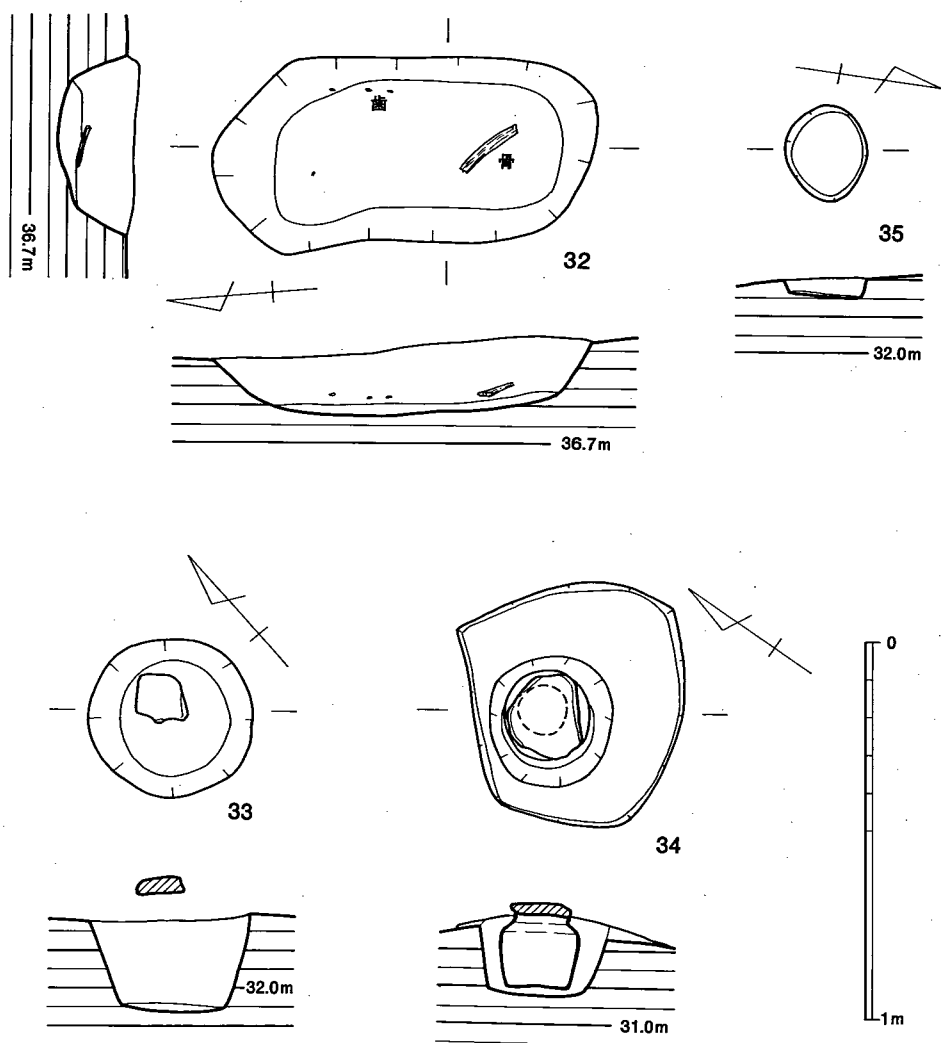
標式をもったもので、平面形は円形を呈している。底面も円形で早桶を入れたものと考えられる。

34号近世墓 (図版54・55、第73図)

33号の南側に位置し、外側の土壌は不整形を呈し、蔵骨器を検出した墓墳は円形である。蔵



第72図 Ⅱ区近世墓配置図 (1/100)



第73図 32～35号近世墓実測図 (1/20) ※番号は近世墓番号

骨器には偏平な河原石が蓋として使用されていた。この蓋石が標式となっている。埋土は黒褐色土で、灰層と人骨片が混入していた。

出土遺物

蔵骨器 (図版81、第74図)

瓦質で、火消壺から転用されたもので、口縁部は直口し、胎土に細粒砂を含み、焼成は良好で、色調は黒味をおびた灰色である。口径15.2cm、底径15.4cm、器高19cm前後を計測する。胴

部下半に焼成後に穿孔している。器面の調整はケズリが中心で、内面はナデ仕上げである。蓋はかぶり蓋になるもので、蓋の代わりに河原石を使用していた。石材は安山岩である。

35号近世墓（図版53、第73図）

34号の東側にあつて、平面形は円形で、床面までの深さは7cmである。

表採資料（図版82、第75図）

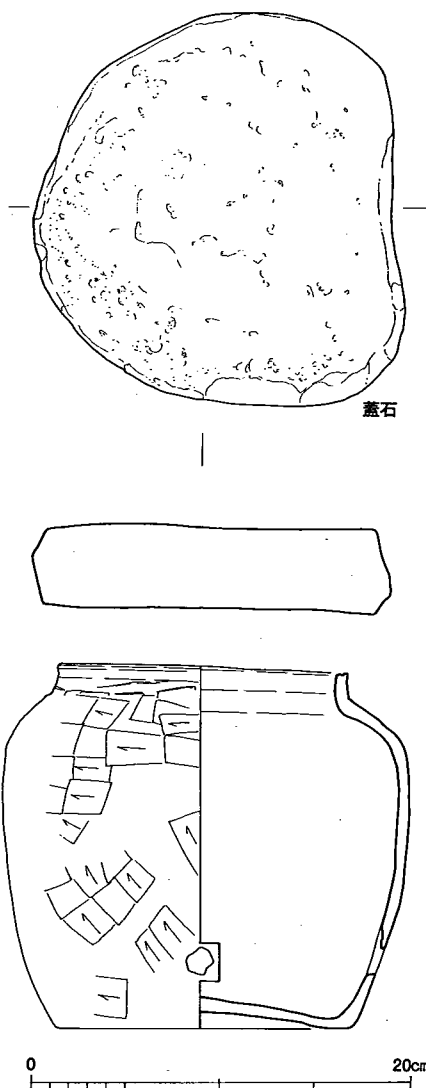
周辺部の表採資料としては、陶磁器の破片でいわゆる“くらわんか”手のものと、小石原の刷毛目の皿形の口縁部破片等が見られ、江戸後期の所産のものである。

古墳の石室の中に投げ込まれた形で、墓石の棹部分と基台部分を見出した。

墓石（図版82、第75図）

墓誌名は桃顔禅定尼（中央）、左側面に安永五丙年、右側面に申三月初三日の名が彫られている石材は硬質砂岩である。

基台石については、線香立の彫り込みがあつて、大きさは縦32.5cm、横30.7cm、厚さ14cmを計測する。線香立の彫り込みは13.7cm×5.0cmで深さ2.3cmであつた。



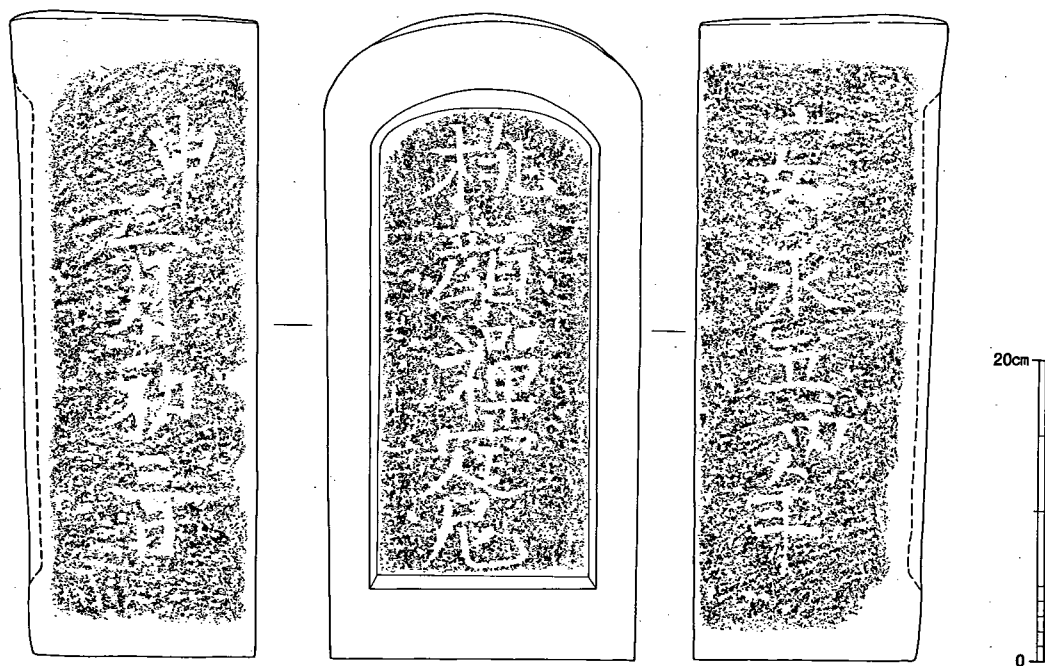
第74図 34号近世墓出土遺物実測図（1/4）

3) 焼土壙（図版56～59、付図）

大塚本遺跡では8基の焼土壙が検出されている。

付図で見られるように、Ⅱa区に3基、Ⅱc区に1基、Ⅲ区に2基、Ⅳ区に2基というように散発的に検出されている。

焼土壙の特徴は、平面形が隅丸方形から楕円形まで、丸味をもっていて、底面に炭化層をもつものである。



第75図 表採遺物実測図 (1/5)

時期的には、不明な点が多いが、堆積している土の感じは、近世墓の埋土によく似た感じである。

8基の焼土壙を一覧表にまとめたのが、表4である。

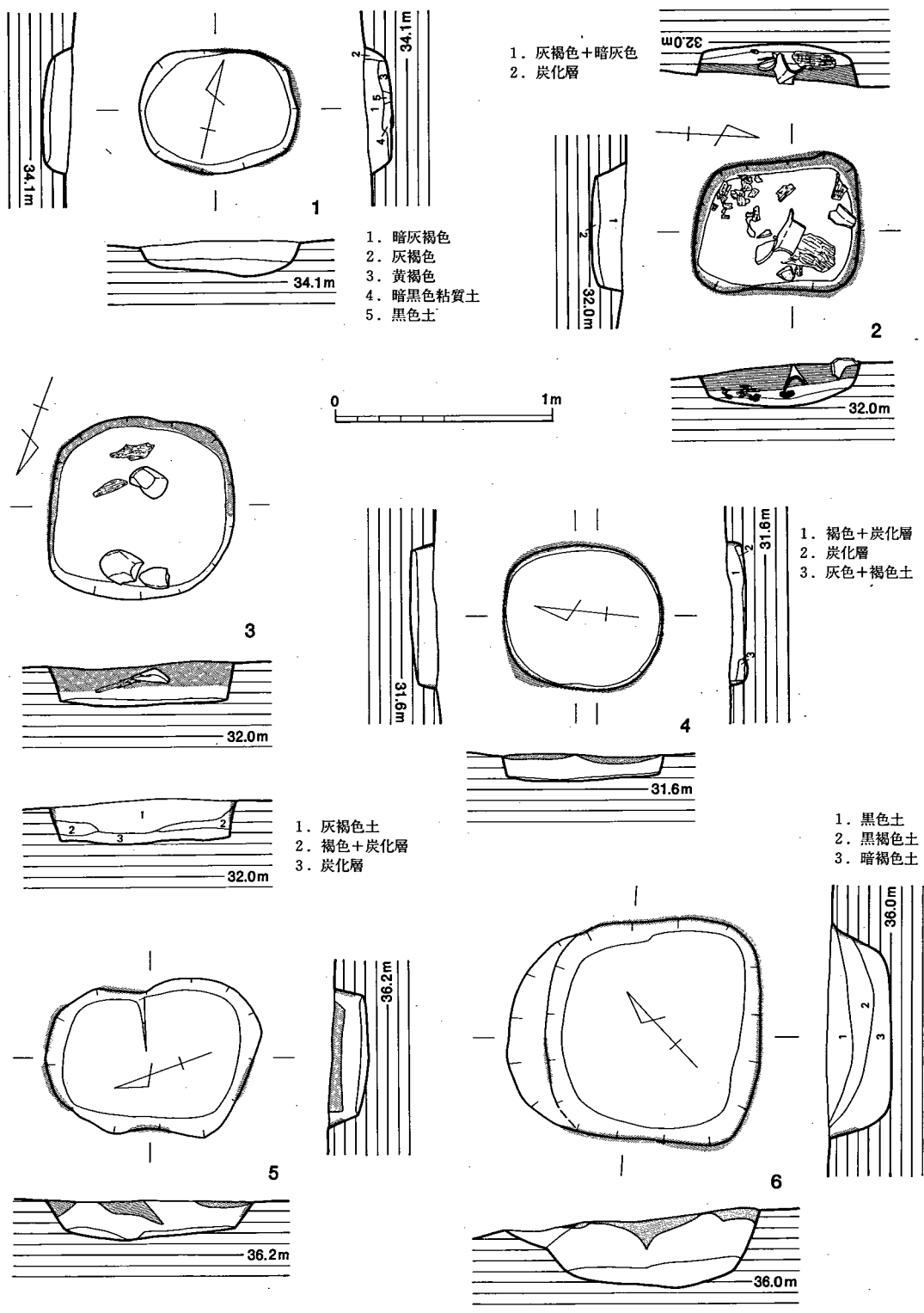
1号焼土壙 (図版56、第76図)

Ⅱc区の中央部で、検出された土壙である。平面形は楕円形を呈するもので、標高34m前後に位置し、壁面が焼けている。底面には炭化物層が3cmほど堆積している。覆土中より近世陶器の底部破片が1点出土している。

出土遺物

陶器 (第78図)

日常雑器で、向付と思われる。胎土に細粒砂を含み、よく漉されている。色調、赤味を帯びた灰黄色で、釉調は長石釉である。内外面とも釉をかけて、高台内面の削りはおもしろい。上



第76図 1～6号焼土坑実測図 (1/30) ※数字は焼土坑の番号

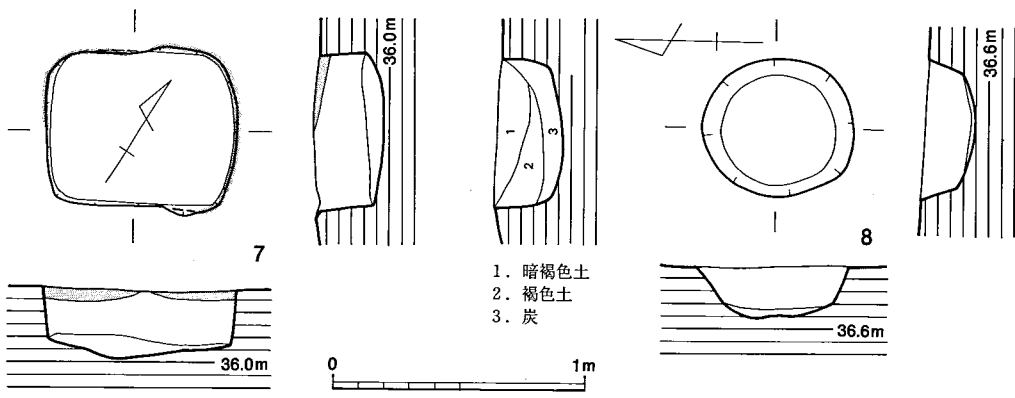
表4 焼土塋一覧表

出土区	焼土塋	平面形	形状規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	底面形状	出土遺物
Ⅱc区	1	楕円形	73×57.5×14	楕円形	陶器片
Ⅱa区	2	隅丸方形	78×63×19	隅丸方形	須恵器片
Ⅱa区	3	不整円形	85×85×18	不整円形	
Ⅱa区	4	不整円形	74×68×12	不整円形	
Ⅲ区	5	隅丸長方形	96×64×16	隅丸長方形	
Ⅳ区	6	隅丸方形	116×100×29	隅丸方形	
Ⅳ区	7	隅丸方形	76×60×26	隅丸方形	骨片混入
Ⅲ区	8	円形	61×55.5×19	円形	火葬骨

野系の上手もので、藁灰釉のワラ白が発色している。時期的には江戸後期の所産である。

2号焼土塋（図版56、第76図）

Ⅱa区より検出された焼土塋で、平面形は隅丸長方形を呈し、須恵器の甕形土器の口縁部破片が床面より浮いた状態で3片検出された。土塋の周辺部は、赤変しバリバリに焼けている。塋内には焼き残りの炭化物も残っている。床面は炭化層の堆積がみられた。検出された場所は付図のようにⅡa区の南端部に位置し、出土した甕形土器は同一個体で、流れ込みと考えられる。須恵器の時期は古墳時代後半の遺物で、二次的に火を受けたものではなく、遺構の時期とは相違するもので、埋め戻されたときに混入したものと考えた方が妥当である。周辺部の状況からも判断できる。



第77図 7・8号焼土塋実測図（1/30）※数字は焼土塋の番号

出土遺物

須恵器（図版81、第78図-②）

口縁部破片で1/2残存である。3片が同一個体であった。復原口径は22.4cm、胎土に精良の粘土を使用し、色調は灰色を呈し、一部に頸部の黒味を帯びている。焼成は良好で、器面の調整は口唇部に凸帯文を有し、頸部下半はヨコナデで、頸部と胴部の接点はタタキを加えている。内面は口唇部から頸部下半までヨコナデ、胴部は青海波文である。丁寧に調整を行っている。型式はⅢbである。二次的な火勢なし。

3号焼土壙（図版57、第76図）

Ⅱa区の南側で、2号焼土壙の北側にあって平面形は不整円形を呈し、土壙内で河原石と炭化物が底面より15cmぐらい浮いた状態で出土している。出土遺物は検出できなかった。

4号焼土壙（図版57、第76図）

Ⅱa区の南側で、3号焼土壙の南側にあって、平面形は不整円形を呈し、周辺部の壁は赤変している。底面に炭化層が1～2cm前後堆積している。2尺の早桶は充分に土壙内に設置できる。出土遺物は見られない。

5号焼土壙（図版58、第76図）

Ⅲ区の近世墓群の西南側にあって、平面形は隅丸長方形を呈している。周辺部の壁の一部は赤変している。底面には炭層が全面にあった。遺物の検出は、見られない。

6号焼土壙（図版58、第76図）

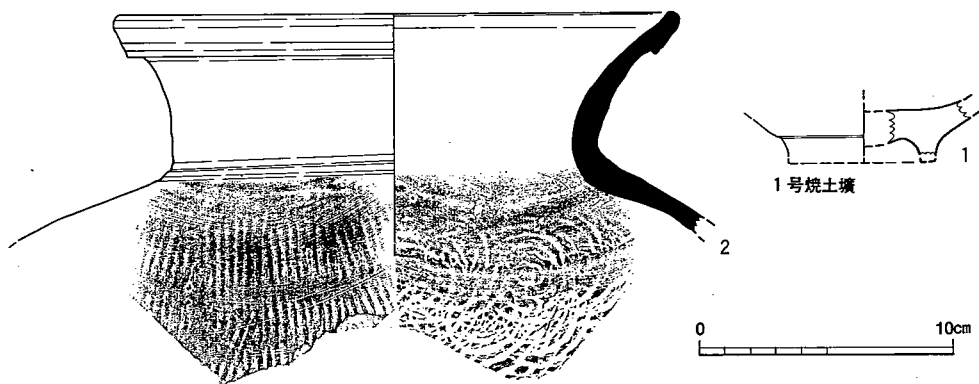
Ⅳ区の西奥部に2基並んでいる。南側に7号焼土壙がある。平面形は隅丸方形で、周辺部の壁は赤変している。底辺の断面もU字形をなしている。遺物は見られない。

7号焼土壙（図版59、第77図）

6号焼土壙の南側にあって、平面形は隅丸方形を呈している。周辺部の壁は東・北壁を中心に赤変している。風の通りによって壁の焼け方が相違する。風は南西の風を入れている。底には炭化物層8cm前後堆積していた。出土遺物は見られない。

8号焼土壙（図版59、第77図）

Ⅲ区の中央部にある火葬骨片が検出された土壙である。平面形は円形を呈し、深さは20cm前後で、底辺にいたっている。標高は約37mを計測する。



第78図 焼土坑出土遺物実測図 (1/3)

4) 小 結

1. 墓所について

墓所いわゆる墓地については、7分類できる。

- (1) 墓が1基しかない墓地
- (2) ある家だけの先祖代々の墓がある家墓（一軒墓）
- (3) 本家分家関係にある家々の墓が一緒にある同族墓地（同族墓）
- (4) 寺の境内に墓が集まっている寺院墓地（寺墓）
- (5) 同じ組合（講）に属する家々の墓がある組合墓地（共同墓）
- (6) 一集落または2つ以上の集落の人々の墓がやや広い範囲の中に集まっている集落墓地（村墓）
- (7) 霊苑 業者による利益追求のためにつくられた墓地、地縁・血縁関係なし。都市部郊外に多し。

明治以後、人口の増加で、それまでの一軒墓や同族墓の用地が狭くなったため、より広い墓域に移したところが多い。

また、都市近郊では墓地公園風の霊苑が今日多く計画され、建設されている。

このことを踏まえて、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の墓地について分類してみると、Ⅱ区はある家だけの先祖代々の墓がある家墓地でいわゆる一軒墓で墓数も少ない。

Ⅲ区・Ⅳ区は、本家分家関係にある家々の墓が一緒にある同族墓地（同族墓）と考えられる。

また、豊前バイパスの第7地点の金居塚遺跡（註1）も同じ大平村大字下唐原にあるが、こ

こからも金居塚1号墳と2・3号墳の間に近世墓A群と4号墳の東側に近世墓B群がある。B群は崖端部に位置している。金居塚近世墓A群は、同じ組合（講）に属する家々の墓がある組合墓地（共同墓）に分類でき、同遺跡の近世墓B群はいわゆる同族墓と考えた方が妥当である。（4）の寺の境内に墓が集まっている寺院墓地（寺墓）については、椎田道路関係の埋蔵文化財関係で発掘調査を実施した福岡県京都郡豊津町大字徳永に所在する鋤先遺跡（註2）の近世墓地群がこれである。

発掘調査によって、検出された近世墓地についても、民俗例（註3）に従って分類できるわけである。

検出された遺物六道銭等によって、江戸後期後半から以降の墓地群と考えられ、墓石等の墓碑の紀年名からも、江戸後期で、墓地周辺から表採されている陶磁器類も江戸後期から幕末期のものであった。一度改葬され、墓石は整理され、今回のものは無縁のものが残っていたと考えられる。

2. 焼土塋について

地域によって焼土塋の形が若干相違する。福岡県の東部いわゆる筑上郡地方でも言えることで、当該遺跡とこれに隣接する金居塚遺跡・上の熊遺跡（註4）等を比較すると出土状況は相違する。

また、筑前の鞍手郡室木中畑遺跡（註5）・糸島郡の奈良尾遺跡（註6）の出土焼土塋の状況等を考えると興味深い例が見られる。

考古学的にみて、火葬された痕跡を大まかに火葬墓と称している。

大きく分けて、火葬骨を蔵骨器、あるいは穴（土塋）に埋納された施設を称したものと、茶毘に付した場所（土塋）をも一般的に火葬墓としてとり扱うことが多かった。

近年の研究では、火葬所と墓との区別の意識が高まり、穴（土塋）を掘った中に焼骨が残存していた場合を称して、火葬塋（註7）・火葬所（註8）・火葬施設（註9）・火葬土塋墓（註10）あるいは他のほとんどは単に火葬墓と呼んできた。

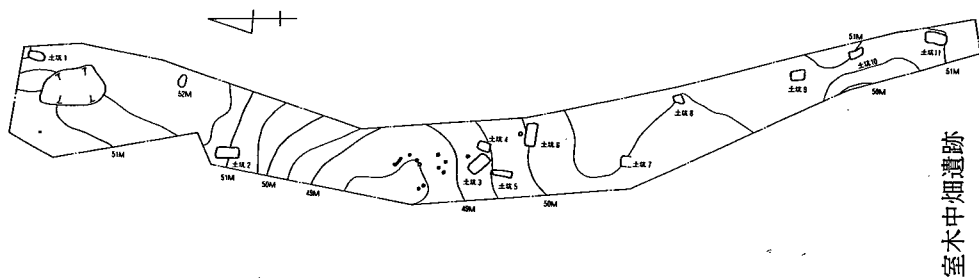
各々の研究者が火葬した場所と墓とを選別しようという意識をもってきている。

このことを踏まえて、考えると、いわゆる当該遺跡から検出された焼土塋についても整理する必要性が生まれてくる。

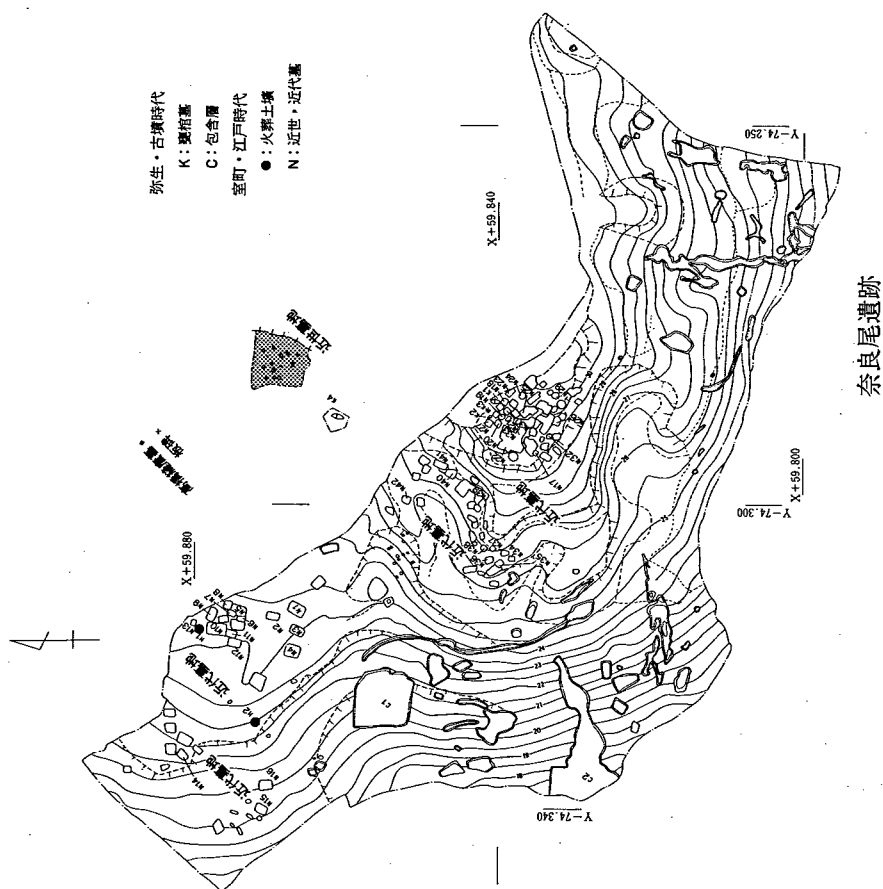
焼土塋（火葬土塋）茶毘に付すために穴を掘って、原則として1回のみ使用され、焼骨は拾骨されて他所の墓に収められる。当該遺跡はこれにあたる。近くに墓所が必要となる。

これが、筑上郡でいわれる“野焼き”と言う葬儀である。このことについてはⅣまとめの中で民俗例を入れて述べることにする。

焼土塋の例で、前述の奈良尾遺跡では火葬土塋として記述されている。



室木中畑遺跡



奈良尾遺跡

第79図 火葬土坑実測図 (1/1,000)

それによると、

「…（前略）火葬土壙は墓ではない。このことは、当遺跡で、かなり焼骨が残存しているも、全骨格が残るものは無く、頭骨も部分的にしかみられず、歯は全く皆無であったことから言える。他遺跡例でも、報告書で見る限り、火葬骨の残り易さを考えると、上記のような残り方が殆どであり、墓と見なし得るものはない。土壙壁が焼けていないから火葬骨を納めた墓であるという報告も多々あるが、当遺跡例で見ると、底面や土壙壁下半部まで焼けているのは数少なく、それでも上半壁は火熱の痕跡を留めている。つまり、火のまわりは上方へ強く、床面に炭が多いものに限って下半は焼けていない。…（後略）」

と観察されている。

このことは、当該遺跡でもいえることで、火葬した場所即墓場となったわけではなく、一定の儀式が行われ、拾骨され、他の所に埋葬される。これがⅡ・Ⅲ・Ⅳ区の近世墓群の火葬骨が入った墓となるわけである。

同じ様な様相であるが、鞍手郡の室木中畑遺跡では、木炭窯の可能性を説明されている。

原始的で簡単な炭焼き方法の一種とされ、周辺部の西山山系全域に広範囲に炭焼きが行われていた。この様な焼土壙は福岡市早良区大字脇山（註11）で1988年調査で38基と1991年調査で2基の焼土壙内の木炭の組織構造よりその樹種の同定が行われた。

同じ路線上の熊遺跡（註12）も10基の焼土壙が検出されている。報告者は「3.おわり」の中で、次の様な見解を出されている。

「…（前略）類似する遺構が金居塚遺跡の古墳周辺でも検出されている。金居塚やこの上の熊遺跡の分布の在り方からみて古墳との強い結びつきは考えられず、そうすれば古墳と同時期とも考えがたい。

いずれにしても赤変や硬化の度合いから見て、決して長期に使用されたものではなく、むしろごく短時間で廃棄されたものという印象を持つ。あるいは単なる焚火—ごみあなの類であるのかも知れないが、今後の資料の増加・科学的手法での性格解明を期待したい。…（後略）」

と結んでいる。

脇山遺跡・室木中畑遺跡・奈良尾遺跡等は木炭窯等を考慮されている。

当該遺跡はそれとは異なった見解を出したい。いわゆる“野焼き”の葬制儀式の中で、死者を焼く遺構として捉えたい。今後このような遺構が築上郡内の遺跡から検出されることは考えられる。焼土壙の性格解明については今後の課題として残しておきたい。炭焼説・火葬墓説・火葬場としての野焼き説・焚火説・ごみ穴説等がある。これらの性格付は発掘担当者の責務となろう。今後に期待するものである。

（副島）

- 註1 飛野博文・他『金居塚遺跡Ⅱ』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第7集 福岡県教育委員会 1997
- 註2 副島邦弘・他『勤先遺跡』一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書第5集 福岡県教育委員会 1995
- 註3 中村正夫『九州の葬送・墓制—福岡県』1979 明玄書房
- 註4 上野精志・他『桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡』一般国道豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集下巻 福岡県教育委員会 1997
- 註5 池ノ上富恵・他『一室木中畑遺跡』鞍手町文化財調査報告書 第8集 鞍手町教育委員会 1993
- 註6 中間研志・他『奈良屋遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集 福岡県教育委員会1991
- 註7 九州歴史資料館編『太宰府史跡』昭和62年度発掘調査概報 1988 九州歴史資料館のうち第107次調査
- 註8 原俊一『東郷高塚Ⅰ』宗像市文化財調査報告 第21集 宗像市教育委員会 1989
- 註9 狭川真一・山本信夫『篠振遺跡』太宰府市の文化財 第11集 太宰府市教育委員会 1987
- 註10 上野精志『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X X 福岡県教育委員会 1978
- 註11 力武卓治・他『脇山Ⅰ』福岡市教育委員会 1990
- 井澤洋一・他『脇山Ⅲ』福岡市教育委員会 1992
- 註12 飛野博文・他『上の熊遺跡』『桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集下巻 福岡県教育委員会 1997

5. その他の遺構と遺物

1) 落とし穴

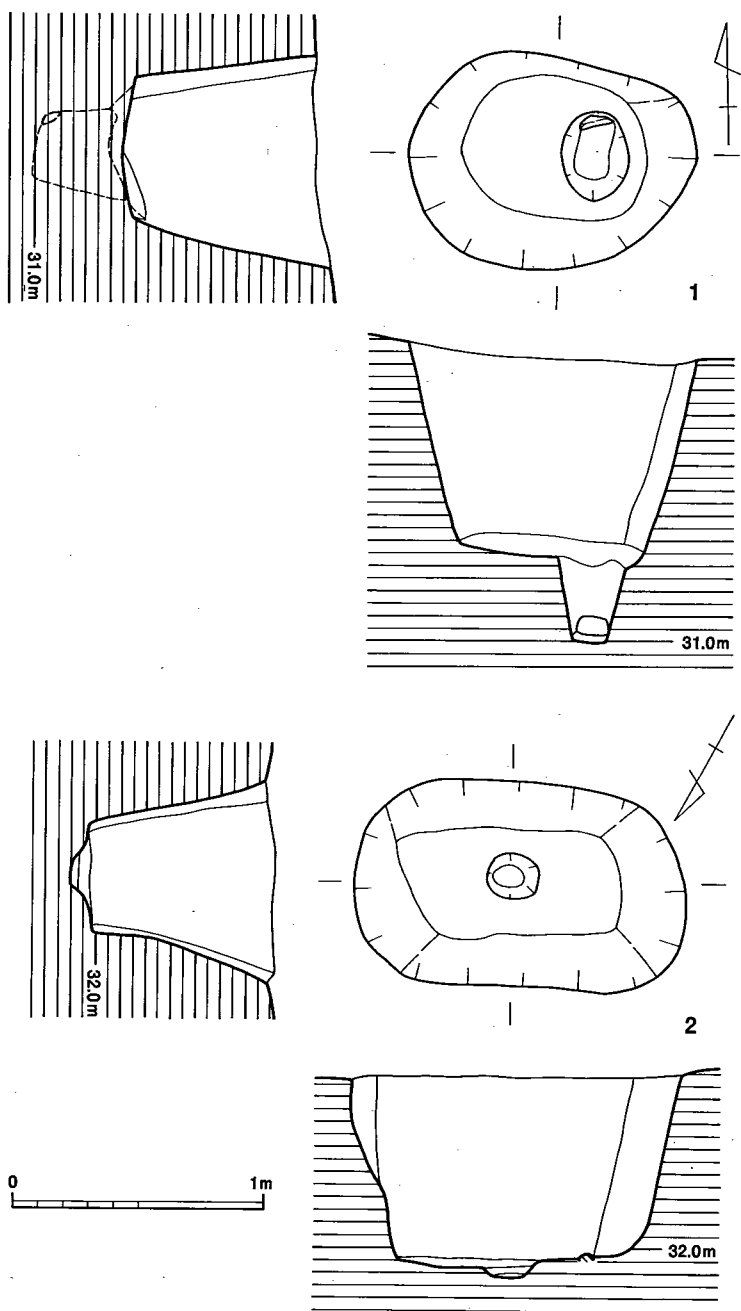
いわゆる落とし穴状の土坑で、遺物の出土もなく、ここでは落とし穴とする根拠は特にない。

1号落とし穴(第80図)

I区西側で検出した。平面形は楕円形で主軸は東西に向け、上縁部で長軸1 m15cm、短軸85cm、深さ80cm。さらに底面の東側には35×25cm、深さ30cmの小穴があり、底の北隅には扁平な石が詰められる。

2号落とし穴(図版36、第80図)

Ⅱ区南寄りに位置する。平面形は楕円形で主軸は東西方向。長軸1m30cm、短軸80cm、深さ75cmで、底面中央には平面20×15cmで深さ5cmの小穴がある。



第80図 1・2号落としと穴実測図 (1/30)

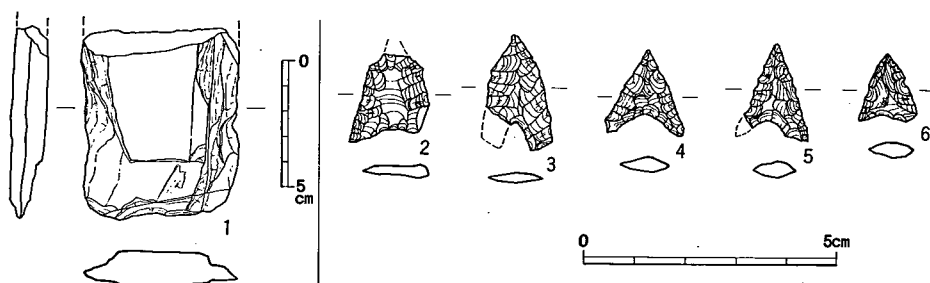
2) その他出土の遺物

石器 (第81図)

打製石斧 (1) I区から出土した。緑泥辺岩製で、短冊形の打製石斧。基端部を欠き、現状で長さ7.5cm、幅6.2cm、厚さ1.5cmで。

石鏃 (2~6) すべて凹基式の打製石鏃で、1・2は五角形を呈する。1のみが腰岳系の黒曜石製で、残りは姫島産黒曜石製。

(小川)



第81図 出土石器実測図 (1/3・2/3)

Ⅲ おわりに

1 弥生時代墳墓について

大塚本遺跡では、Ⅲ区からⅤ区にかけての範囲で、低丘陵の尾根筋にはほぼ沿ったかたちで、南南東から北北西方向に幅約10m、長さ約60mにわたって帯状に連続する弥生時代墳墓群を検出した。さらに墳墓群の北北東端には長軸16m、短軸14mの長方形で、周囲には幅4m、深さ0.5mの溝を巡らした墳丘墓1基があり(註1)、墳丘と周溝部分から合わせて5基の墳墓を検出した。墳丘墓まで合わせると調査区内で確認した墳墓群の全長は80mを超え、合計37基の墳墓を検出した。南南東端の1～3号墓は調査区境であるため、さらに調査区外に延びる可能性があり、また北北東端については墳丘墓があるためこの部分で完結することも考えられるが、墳丘墓の北東側にある34号墓や、墳墓群の主軸からやや外れて北東側に枝分かれしているように配置する15～18号墓をみると、墳墓群は北東側にさらに拡がりをもつ可能性もある。さらに、調査区内についても全体に削平を受けており、遺構の残存状態は良好ではなかったため、既に失われた墳墓もいくらかはあったものと考えられる。最低でも50～60基の弥生時代墳墓がこの地に群集していたと考えて良からう。

墳墓はほとんどが石蓋あるいは木蓋と考えられる土壙墓で、他に中型の合口甕棺墓1基と小児用箱式石棺墓2基がある。墳墓群はその配置から幾つかのグループに分かれそうであるが、各墳墓の時期を明らかにし得ない現状では差し控えておきたい。

周辺の弥生時代中期の集団墓としては駅館川中流域に集中する宇佐市御幡遺跡(註2)、野口遺跡(註3)、樋尻遺跡(註4)は、大塚本遺跡と時期的にも重複し、また多くの共通点をもつ。しかしながら、御幡遺跡・野口遺跡では帯状に延びる墳墓群全体を取り囲むように祭祀土坑が配置しており、野口遺跡で小児用甕棺墓を墓域の北西端に集中させる以外には、各墳墓間に格差は特にみられない。一方大塚本遺跡では、墓域の一角に長方形に溝で区画した墳丘墓をつくり、この墳丘上に造営された一群の墳墓がある。さらに検出された5基の祭祀土坑はすべてこの墳丘墓の周辺に集中しており、また墳丘墓周溝内から出土した多量の土器をみても、墳墓間で葬送形態に明らかな格差がある。

1号墳丘墓は、北側隅部は調査区外のために未確認であるが、墳丘部分は明確な長方形プランを呈し、周溝は全周すると考えられる。いわゆる方形周溝墓状の墳丘墓の確実なものとしては九州で初の検出例ではないであろうか。残念ながら、墳丘盛土は既に削平されて失われているが、近世墓がここだけに集中して造営されていることから、近年まで墳丘部分が周囲の地形より一段高く残っていたことはまず間違いがないであろう。現在墳丘墓上に残存する30～33号墓が2段掘り状の掘形を持ち、墓壙の深さが1m程あったとしても、墳丘墓周溝の外側にある25～29号墓等も同様に削平されているため、墳丘墓の盛土の高さは1mを超えるようなもので

はなかったと考えられる。周溝を掘削した排土を盛り上げた程度の、周溝底面からの見掛け上の高さがせいぜい人の目線を上回るものであったと思われる。

集団墓の中であってこの部分だけが周溝と墳丘で明確に区画されていることから、この地域に一般集団から隔絶した特定の有力集団（家族）が存在したことを示すものであろう。しかしながら、墳丘上にある30～33号墓からはいずれも副葬品の出土はなく、その意味では一般の墳墓との差は判然としない。4基の墳墓は、成人用2基に対して小児用2基（30号墓は2体埋葬のため合計3体分）と小児墓の比率が高く、またいずれも墳丘上で北隅部と南東端の偏った位置にあり、集団の盟主となるべき人物の墳墓が不在の観がある。本来墳丘上にはさらに幾つかの墳墓が存在したことが推測されるが、いずれにしても削平される程度の小規模なものであったのであろう。ただし、近世以前の不明遺構である1号土坑は、あくまで推測の域は出ないが、その位置と主軸方向から本来墳墓であったものが攪乱を受けた遺構である可能性がある。また、荒らされているが故に副葬品を持っていたと考えられなくもない。

豊前地域の弥生時代中期段階では、豊前市河原田塔田遺跡の土壙墓出土の細型銅戈が現在までのところ青銅器副葬の唯一の例で（註5）、墳墓の副葬品は概して貧弱である。仮に1号土坑が首長墓であったとしても、北部九州地域のように青銅製あるいは鉄製の武器や前漢鏡・玉類等の豊富な副葬品を持っていることは期待できない。墳丘墓の規模などから判断して青銅器1～2点程度を副葬品として所有していた可能性はあり得ないことでもないが、首長墓自体も未発見である現状では不明といわざるを得ない。周溝内から出土した石器（磨製石斧・磨製石剣・打製石鏃）も、本来はそうした副葬品の一部であったのかもしれない。

さて墳墓群の時期であるが、出土した土器の器種構成は壺66%、甕8%、高杯26%で、壺が圧倒的に多く、高杯がこれに次ぎ、甕の出土はわずかである。

広口壺では、1号祭祀土坑1・2号祭祀土坑1・周溝9・31は鋤先状口縁部が未発達で厚く、須玖Ⅰ式と考えられる。2号祭祀土坑3・周溝34もこの範囲内であろう。周溝34の頸部が締まり、なで肩になっている点も須玖Ⅰ式の要素であろう。これに対して37号墓1の口縁部は内側の張り出しが強く口縁部上面が外傾しており、須玖Ⅱ式と考えられる。また、口縁部内側の張り出しが強く上面に浮文を持つ3号祭祀土坑1や、同様に発達した鋤先状口縁部を持つ5号祭祀土坑6・14、口縁部が薄く長く延びる5号祭祀土坑1・3・15・周溝4～7もこの時期のものであろう。素口縁の広口壺では、3号祭祀土坑4と比較して4号祭祀土坑3は頸部の締まりが緩く、また胴部最大径が上がった肩の張った器形で、より新しい要素を持つ。4号祭祀土坑4・5・5号祭祀土坑8・周溝12の頸部が広く、口頸部が長く延びる器形の壺は、遠賀川以東地域系統の壺で、すべて須玖Ⅱ式のものであろう。

高杯は、須玖Ⅰ式と考えられる鋤先状口縁が未発達な35号墓5・1号祭祀土坑4・2号祭祀土坑2・15・3号祭祀土坑11・周溝24・44・45・48は杯部が半球形を呈して比較的深く、杯・

脚部境には突帯1条を付す。一方、鋤先状口縁が長く発達した須玖Ⅱ式の1号祭祀土坑5・8・3号祭祀土坑12・4号祭祀土坑8・周溝49は杯部が浅く、また杯・脚部境には突帯を持たない。ただし、1号祭祀土坑6と5号祭祀土坑9は特殊な器形で、この傾向をそのまま当てはめることはできない。

5号墓の甕棺は、大きさから判断して棺専用に使われたものであろうが、器形の特徴は一般の土器と大差ない。2点ともほぼ同形同大で、底部が厚いことは古い要素であるが、口縁端部を跳ね上げ、口縁部内面の屈曲が明瞭で、胴部の最大径が口径を上回る丸い器形は新しい要素であり、須玖Ⅱ式と考えて良いのではないか。2号祭祀土坑12・13、周溝22の甕も須玖Ⅱ式のものと考えられ、いずれも器壁がきわめて薄いのが特徴である。

土器の大半は1～5号祭祀土坑と墳丘墓周溝内出土のものであり、このうち祭祀土坑については埋土の土層は単純なレンズ状に堆積しており掘り直した痕跡がないことや、土器の出土状況から、長期間に渡って使用されたものとは考えられず、若干の混じり込みはあるにしても一括遺物と考えて差し支えない。古い要素と新しい要素を持った土器が混在するのは、時期差というよりも同一時期のバリエーションと捉えたい。1号祭祀土坑3のジョッキ形土器は特殊な器形であるが、口縁部・底部の角部分・把手の外表面が磨滅しており、同様に張り出している胴部中央部にはそれが見られない。このことから、磨滅は埋没段階ではなく使用時のもので、ある程度繰り返して使用されたことを示すものと考えられる。あるいは古い土器が新しい時期まで残ることもあったのではないか。

以上のことから、出土した土器は2型式におよんでいるものの、かなり近接した時期が考えられ、中期前葉から中頃の時期に墳丘墓を築くと同時に墳墓の造営を開始し、中期後葉には周溝を切って37号墓が作られることから、既に周溝の埋没が始まっていたものと考えられる。

(小川)

註1 1号墳丘墓は、形態的には方形周溝墓と呼んでも差し支えないものであるが、現状では盛土は削平されて失われているものの、本来は墳丘を伴うことはほぼ確実と考えられ、方形周溝墓という用語自体もそうした観点から見直されようとしている。また、古墳時代に入ってこの地域でも採用される方形周溝墓とは系統的にも別種のものと考えられ、混乱を避けるためにもここでは墳丘墓とした。

註2 宇佐市教育委員会 1982 『御幡遺跡』

註3 宇佐市教育委員会 1987 『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』

註4 宇佐市教育委員会 1986 『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』

註5 平成8年度圃場整備事業に伴い豊前市教育委員会が発掘調査を行った。棚田明仁氏の御教示による。

2 常世の国へ

俗に三途の川の渡し賃といわれる“六道銭”は、死者を葬るさいに棺内あるいは墓墳内に副葬する銭貨のことである。

実際に近世墓から検出される六道銭は、重なりあって銹着していることが多い。また布が付着したり、布に包まれて出土するものがかなり存在している。このことから銭貨を頭陀袋に入れて副葬する習俗をも窺い知ることができる。

発掘調査の対象となる近世墓については、墓標を伴わない被葬者不明のものが大半で、時期決定が困難であることが一般的である。

しかし、副葬された六道銭が存在した場合、その組み合わせに注目して墓造営期の推定が可能となる。現在のところ、六道銭は、最も有効な時期判定の指標となっている。

六道銭としての寛永通寶は、江戸幕府によって銭貨の鑄造は寛永ないし寛文期に大量に発行された。この寛永通寶によって渡来銭や悪銭、鏹銭も一掃された。ただし幕府は寛永ないし寛文期以後も、いくたびか銭貨を増鑄しているがたいいはいは、その年号にかかわらず、「寛永通寶」という銭文を踏襲せしめた。この銭貨は、はじめ一文銭として通用の銅銭であったが、江戸中期以後になると、素材の不足から鉄で造った鉄一文銭や四文に通用の真鍮四文銭も現れ、さらに幕末には鉄の四文銭も鑄造された。一律に寛永通寶といっても、じつに雑多なものを含む銭貨となっている。この特徴から、近世墓の造営期を推定するために、寛永通寶鑄造以前の渡来銭、又寶銭とよばれている寛永18年（1636）初鑄の古寛永通寶、寛文8年（1668）初鑄の背面に「文」字を有するいわゆる文銭、ハ寶銭とよばれている元禄10年（1697）初鑄の新寛永通寶、元文4年（1739）以降に鑄造された素材が鉄である寛永通寶鉄銭の5つに大別できる。

（註1）

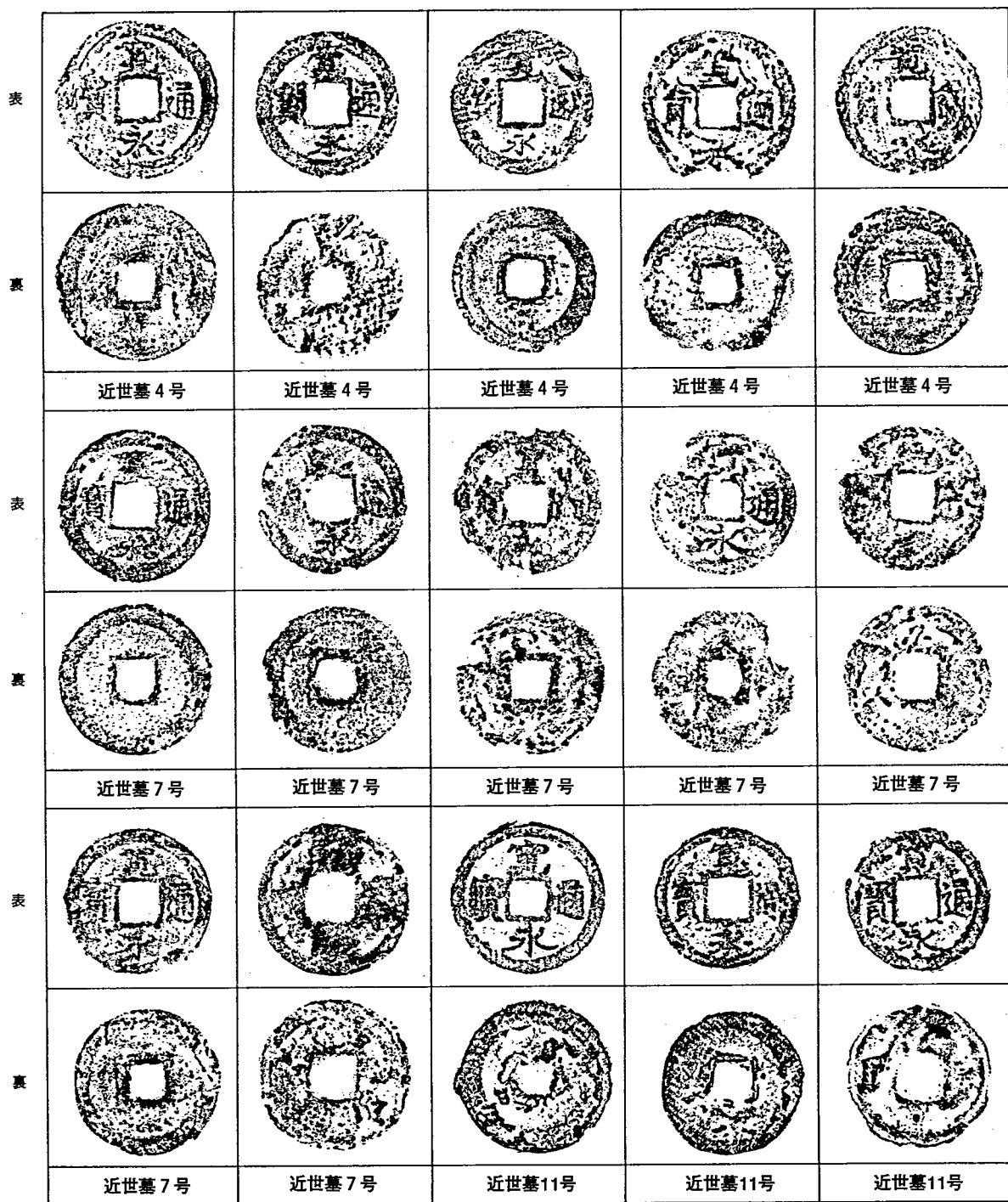
このことを踏まえ、今回の分を一覧表にすると表5になる。

表5を基に図示すると第82～84図となる。渡来銭が流通市場から全んど姿を消すのは、江戸幕府が寛文10年（1670）に渡来銭通用禁止令を発令した以後駆逐されてしまったと考えられる。

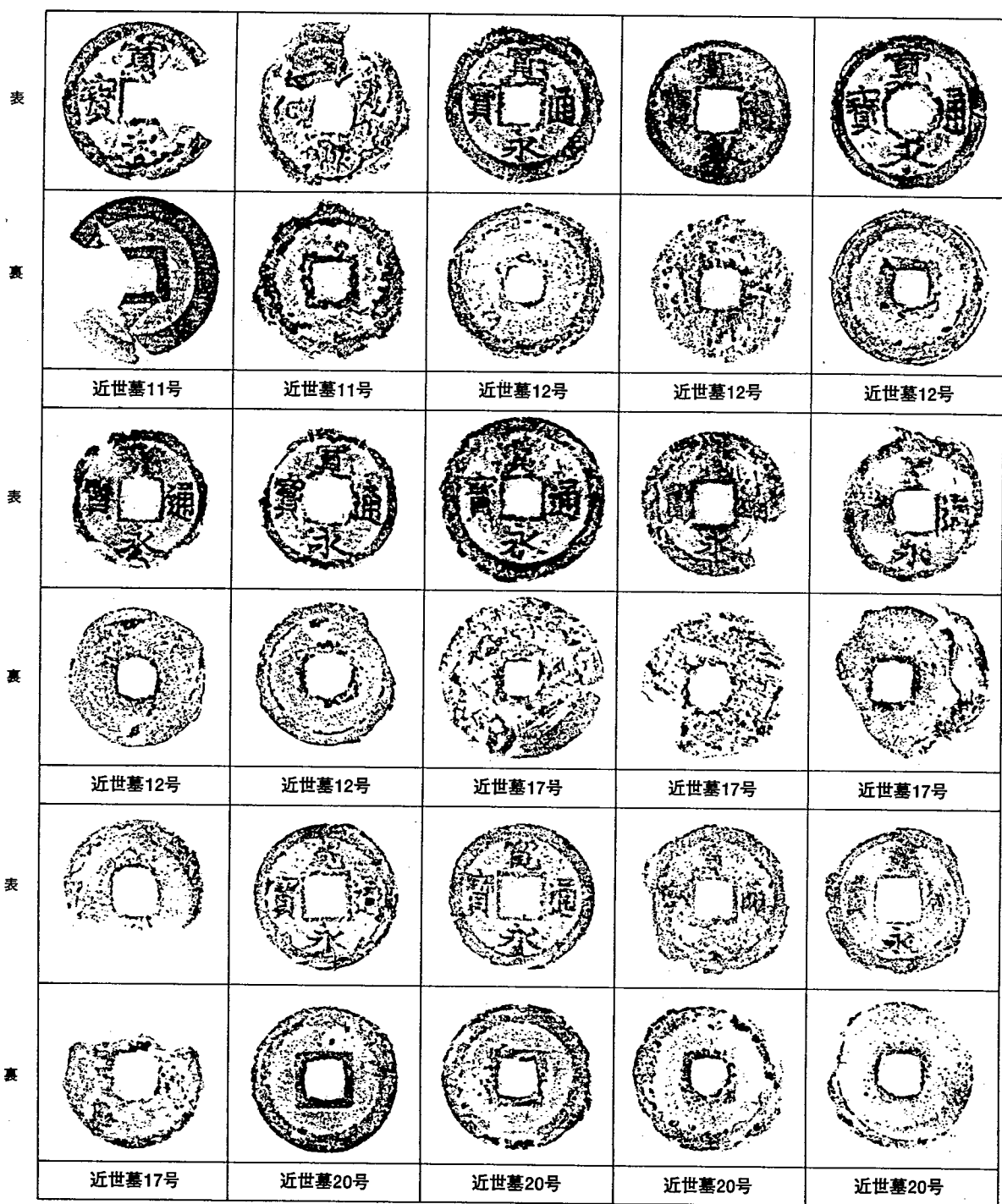
本遺跡の近世墓群は3地区に分かれているが、この周辺の墓地を概観すると、血縁を中心の

表5 六道銭出土土壙一覧表

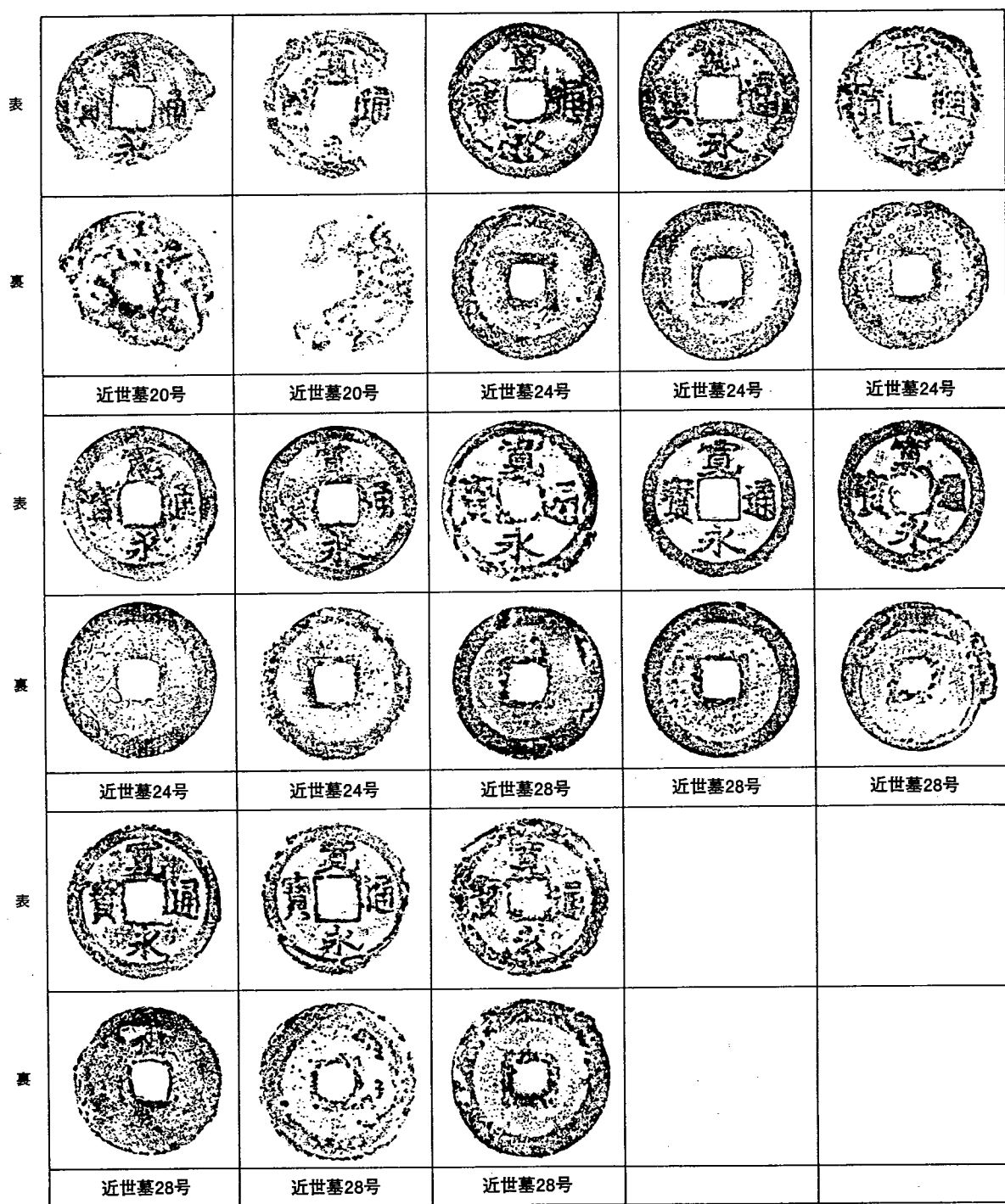
出土区	近世墓番号	平面形	形状規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	床面形状	土火葬
Ⅲ区	4	隅丸長方形	113 × 77 × 53	隅丸長方形	土
Ⅲ区	7	隅丸長方形	80 × 45 × 30	長方形	土
Ⅲ区	11	隅丸長方形	82 × 58 × 37	長方形	土
Ⅲ区	12	隅丸長方形	95 × 70 × 35	長方形	土
Ⅲ区	14	楕円形	52 × 40 × 8	楕円形	火?
Ⅲ区	17	楕円形	101 × 67 × 9	楕円形	土
Ⅲ区	20	楕円形	101 × 77 × 15	楕円形	土
Ⅳ区	24	不整形	墓墳不明	不整形	土
Ⅳ区	28	楕円形	89 × 60 × 17	楕円形	土



第82図 出土六道銭拓影図①



第83図 出土六道銭拓影図②



第84図 出土六道銭拓影図③

墓地が成立している。基本的には、丘陵地の山際で耕作できない場所、北側の日影で耕作が不適当な場所等が見受けられる。このことは農村共同体の中からも言えることで、この周辺の民俗調査からも類例が多い。

近・現代の葬儀の中では、紙に印刷された銭貨を副葬している。しかしながら、遺体を火葬するために残っていない。

葬儀の儀式の中で、故人に対して、守刀を棺上に、草履を棺内に、そして故人の懷にいれる六道銭（印刷されたもの）を筆者は確認している。

民俗例から、この周辺部の葬送の習俗を若干記述してみたい。佐々木哲哉氏の研究（註2）では、死は魂が肉体から遊離することと考えられていた。

息の絶えた後も、しばらく生でもない死でもない状態が続き、魂が再びその肉体に戻ることがないとわかって死が確認される。

従って、臨終に近いとき、あるいは息の絶えた直後に、肉体を遊離しようとする魂を呼び戻そうとする魂呼びが各地にあった。

県内でも、枕許で臨終の者の名を呼んだり、井戸をのぞきこみ底に向かって、あるいは屋根の上に上がって、タコンバチ（田植え笠）をたたきながら、名を呼び「帰れ！帰れ！」と絶叫したりすることもあったという。

臨終の者の口に鳥の羽に浸ませた水を飲ませる“死水”も、水の呪力で蘇生を願おうとする魂呼びの一種であったのかもしれない。

臨終を見送るとすぐに枕飯を炊く。死者の分だけを別竈で炊いて、茶碗一杯の盛り切りとし、上に一本箸を立て、杉の小枝を徳利にさしたものととも枕許に供える。一本花に一本線香というところも多い。死者の顔に白い布を掛けて北枕に寝かせ、着物を逆さに着せ、そのまわりを逆さにした六枚屏風で囲む。猫が入るのを嫌って屏風の上にゴザをかぶせ、上に剃刀を置くところもある。

死の直後に僧侶を招いて枕経を上げてもらうことも各地で共通している。

神棚を白紙で覆い、戸口には“忌中”と書いた紙を貼るのは死忌みを意味し、それから忌明けまで、家内中で喪に服することになる。これを“ヒガカカッテイル”と称している。

服喪の最初の段階がお通夜で、“ヨトギ（夜伽）”と呼ぶ。死忌みを被る近親者が、死者との共食の中で、最後の夜を過ごすのが本来の意味で、親類縁者がヨトギ米か握り飯・煮しめ・大豆などを持参して集まり、僧侶に読経してもらい、死者と同じ部屋で夜食を取りながら一夜を明かす。ヨトギ米を“棺敷き米”と呼ぶところもある。蠟燭と線香を一晩中絶やさないことになっている。夜伽の晩にカドウチが寄って葬儀の詳しい係り分担を決めることも一般化していた。

近隣で組織される葬式組はコウウチ（講内）コウグミ（講組）とか無常講・念仏講などと呼

ばれ、近隣組織の小组がそのまま葬式組になっているところと、別個に葬儀のために講が組織されているところとがある。

その係の分担も地域によって若干の相違はあるが、代表的な形を示すと、おおむね次の通りである。

タヨリ（告げ人）……親類縁者や知人への知らせと葬儀の連絡トウテイとも呼ぶ。

テラユキ……檀那寺の僧侶への連絡と出迎え道具運び。

アナホリ……墓穴掘り。火葬になってからは、役場への届け出と火葬場への連絡。

ドボリともいう。

カンサシ……棺および野辺送りの道具一切の準備。

カイモノ……お斎の材料、その他の買い物、お斎米の米搗きなど。

コウウチの女は全員でお斎の準備にあたる。告げ人は必ず二人で行くものとされているが、先方では家の内に上がってはならないというところと、知らせを受けた家で酒肴を出してねぎらうというところもある。

納棺 死者を納める棺は、土葬のときには甕棺か木製の桶が用いられていたが、火葬になってからは木製の寝棺になっている。

納棺の前にする湯灌は、近親者のみで行われる。

納棺の時の死者の装束は、男は越中ふんどし、女には三尺三寸の腰巻きを充て、白帷子を左前にして着せる。帷子は晒一反を用い、身内の女たちで一針ずつ縫うが、物差しとはさみを用いず、糸の結び目はつけないものとされていた。襟なしの着物で、襟になる部分の布は帯にした。それに白の脚絆・白足袋・草履（男は草鞋）をはかせ、穴ほげ銭（六文銭）を入れた頭陀袋（サンヤブクロともいう）を首にかけ、頭には三角頭巾をつける。死者の手を合わせて数珠を掛け、寝棺に寝かせ、座棺には坐ったままの姿勢で納棺する。副葬品には死者が生前に愛好した品々のほか、近親者の切り爪、手ばさみ・毛抜き、女であれば糸巻き・鏡・櫛・一本針、夫が死んだときには切り髪を入れる。そのまわりには茶殻や花柴などを紙に包んで入れる。

野辺の送り 出棺にあたって行われる儀礼のうち、最も重要なものが死者との永別を告げるためにとる共食で、オトキ（お斎）という。

オトキの賄いは全てカドウチの主婦の手でなされ、会席膳の精進料理で、味噌汁、中づけ（白和え）・ヒラ（レンコン・コンニャク・揚げ豆腐・ゴボウ）に飯がつき、酒をともなうが、一膳飯は忌まれている。オトキの膳枕はほとんどの葬式組で常備していて、家回りで保管されていた。

葬儀のことをトムライ・モドリなどと呼んだ一部にホネカミと呼んでいたところもある。墓地に斎場を設けて行うのが古い形で、墓地まで葬列をつくって送る野辺の送りには各地でさまざまな形があった。

出棺は死出の旅路を意味する。家族・近親者が死者に永別を告げたのち、棺に蓋をし、甕棺の場合は麻で編んだ棺カラゲ（担ぎ綱）で縛り、木棺の場合には近親者が一人ずつ釘を丸石で打ちつける。棺を縁側から庭に出し、左回りに三度回す。この時、死者が生前に用いていた茶碗を割り、死者が寝ていた座敷と土間を同時に掃く。

野辺の送りには、米の粉で作った野辺の団子を用意し、手桶に入れた水、花などを位牌とともに家族が持って葬列に従う。

男は麻袴に白足袋・草履、女は精進髷を結って黒の喪服、妻女の場合は綿帽子を被る。

葬列はモトダイと呼ぶ藁たいまつを送り火として、六道（ローソク六本立てる）、線香、紙で作った傘または旗、シカバナ、蛇口（竜立）と続き、アコヤ（霊屋）を棺の上のにのせ、もしくはアコヤに棺を入れてかつぐ。そのあとに白木綿一反の端を棺に結いつけた“善の綱”を近親者がもった。

墓地に営けられた斎場に着くと、僧侶の読経があって埋葬となる。

土葬の場合は、穴の深さは5尺（約1.5m）ほど、カドウチのアナホリの手で長方形か方形に掘られ、杉の葉を竹に挟んで穴の上部の四隅に置く、棺の舁き棒を穴の縁のにのせ、棺カラゲの縄を緩めながら穴の底に棺を据え、蓋の上に大きな石をのせる。葬列についてきた蛇口（竜立）を逆さに突っ込み、身近な者が土を少しずつ入れた後、カドウチの者で穴を埋める。蛇口の竹が地表に出ているのを息抜き竹ともいう。

野辺の送りに履いていった草履は道端に捨てて裸足で帰る。

最近では火葬が一般化したため、自宅や寺、斎場などで葬儀が行われ、野辺の送りは近親者みんなで付き添って遺骸を火葬場まで送る様なことに型式を変えている。

しかしながら、旧築上郡の村々では、明治28年3月、墓地埋葬火葬取締細則（県令19条）の公布以前に、かなり早くから火葬が実施されていた形跡がある。当地は浄土真宗本派の影響化が強い地域で、異常葬制の火葬が行われた。（註3）

ノヤキと称し「ノー行き」といって、講組内がこれに任じられ、焼き場は、ほぼ集落ごと（講組内）多くは山麓の原野にあった。

これが遺構として、残っていたのが、金居塚遺跡（註4）で、行政的には築上郡大平村下唐原1816-9番地で、山国川が形成する河岸段丘の縁辺に位置する。

検出された焼土坑について、報告者はⅥのまとめの中で次の様に述べている。

「焼土坑

今回の調査区で、埋土に炭・焼土を含み、壁体が焼けて赤変する小型の土坑を19基検出した。大部分は壁体のみが焼けるが、一部に床面まで焼けて硬化する例がみられた。多くの例は床面に灰などを敷いて火が直接床に接しない状態で使用したことを示すものと思われる。ことさら

に、火が床面に接することを避ける理由は想定できず、着火しやすいように床面に草葉を充分に敷いた上で使用したまったく偶然の結果かと想像される。

これらの分布はⅠ-1・Ⅱ-3号焼土坑を除いて遺跡の中央部、尾根線付近に集中する傾向が窺える。また、古墳や土坑墓群などの特定の遺構に偏重するといった状況でもない。

一方で、これらの遺構がすべて近い時期に使用されたという根拠はない。使用された時期については、推定できる遺物はわずかⅡ-2号焼土坑から出土した高杯片のみであるが、それも上限を示すだけと考えている。この土器は弥生時代末～古墳時代初頭頃に属するものであるが残片であること、中層から焼けた状態で出土すること、そして、何よりもほぼその所に営まれた墓地群と無関係の状態で分布するなどがその理由である。

したがって、現段階ではこの種の遺構の性格を云々するには資料が乏しく、単なる焚火の跡とするもやぶさかではない状況である。ただ、埋土は決して新しいものではなく、近世以前に遡るのはほぼ間違いないと考えている。」

と、述べている。

これを焼土塋のみだけ拾って図示すると第85図となる。これに当該大塚本遺跡を入れて、比較すると大塚本遺跡の方がまばらである。遺跡の立地状態が相違する。大塚本遺跡は村内にあって、金居塚遺跡は前述のごとく、河岸段丘の縁部の山麓部にあたる。両者とも墓域から若干離れている。

福岡県の民俗例では、江戸時代の葬制では土葬が中心となっている。火葬については、飢饉・伝染病等の異常があった場合に行われたものである。この地区は宗教色が強いために、近世以前から火葬が行われたもので（註5）、野辺の送りをかねて、ノヤキと称し、この地域では「ノー行き」といって講組内が、これをまかされていた。焼き場は、ほぼ集落ごと、多くは山麓の原野にあって、各戸より「三把藁」を集めて、サカドモ（カサ状のワラ製品）をかざしたコモカブリの中に棺を入れていた。コモカブリを安定させるために不整円形状に土塋を浅く掘って、藁を敷いた上に棺を設置し、焼いたもので、これが遺跡に点在する焼土塋の正体ではなからうか。

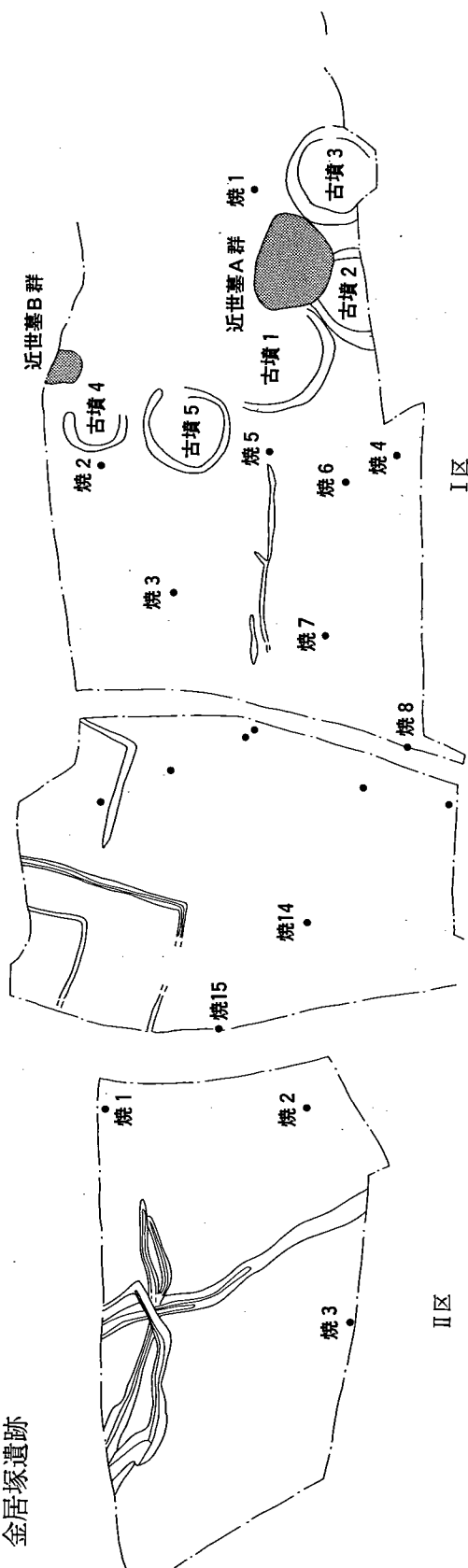
このことを詳細に記述しているのが、昭和61年刊行された『大平村誌』である。それを引用すると、

葬儀 死人が出ると、コーワイの者が集まって、それぞれの役割によって、葬儀の準備をする。

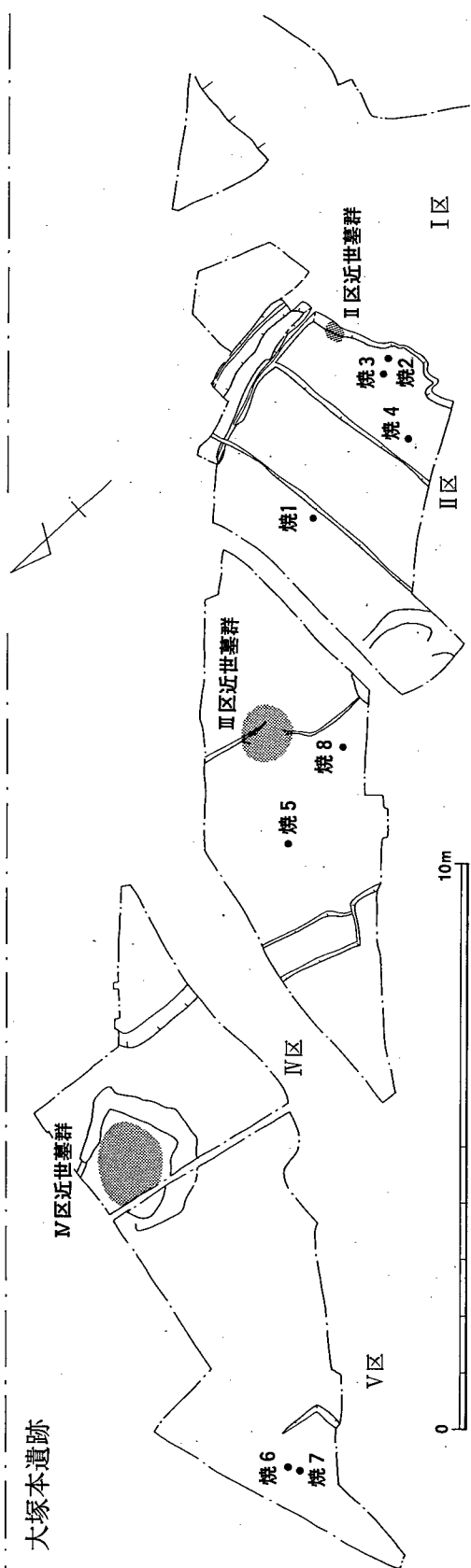
男は「ノ」が主で、お寺・親類・役場などへの連絡や式場の準備、野ごしらえであった。

女は「ナイショ」方で、「お斎」の準備・調理などが主な仕事で、お通夜が終わると元家と献

金居塚遺跡



大塚本遺跡



第85図 大塚本遺跡・金居塚遺跡焼土墳・近世墓配置図 (1/1,250)



第86図 ノヤキ コモカブリ

立や人数を相談して店などに注文をする。

親類に連絡に行く者は、かなり遠い所でも歩いて行き、必ずお茶を呑んで帰るという風習があった。そうしなければ不幸が重なる（お茶をよばれな負ける）ということだそうである。

お寺へは米一升（お斎米）を持って行き、葬儀のお願いと日時のと きめをした。

その他は中津の町などへ葬儀の買い物に行く。

一番大切な仕事が「野ごしらえ」である。今のよう に火葬場で焼くのではなく、所定の場所でコーワイの人達が火葬していた。

藁（モチ藁は不可）、三駄（一駄は小束4把をくくった大束6把）、割木（薪）20把（カキ・ナシ・ナノミなどを主に使用）がだいたい標準で、その他に一度に燃え上がらないように水で濡らした大きな逆トビを準備する。

出棺すると、「モトデ」（藁を束すぐって中に灰を入れ、何カ所もくくったもの）に火をつけて、焼場までいく。

焼く準備ができると、「ネジワラ」に「モトデ」から火を移し、死んだ家の人が四隅に火をつける（野に火を入れる）。その時は風下から火をつけないと燃えが早く棺がはじいてよく焼けない（野くずれ）。棺は腹を下にして置いた。コーワイの者は夜何べんか見に行き、翌朝完全に焼けておればアクキリ（灰切り）をして骨を拾いやすいようにして連絡する。

また、葬儀の日の食事（お斎）の準備もコーワイの仕事である。もとは死んだ家でお斎をしていたようであるが、現在は近所の家でするようである。それに使う食器類（シジュウワン）はコーワイで共同で購入しているところが多い。

前述のごとく、当該遺跡の焼土壙の大半は江戸期か明治前期までの火葬場で、この地方特有の「ノヤキ」・「ノヤ行」である。

この遺構が、当該の大塚本遺跡から検出することができたわけである。

骨を拾って骨壺に入れたり、甕・塩壺・火消壺を転用したものに集められて他所の墓地に埋葬された。

墓の上部構造である墓石については、この墓を守っていた人達によって、道路敷買い上げの時に大半が改葬を受けているため、上部構造は不明で基本的には無縁の人達が掘り出されたわけである。村内でも一番古い墓地といわれていた。

最後に、大塚本遺跡から出土した副葬品は江戸時代のもので、六道銭にしても“新寛永”が

中心で、18世紀以降の鉄銭もみられる。しかしながら近・現代に近い墓は見られなかった。

以上のことから大塚本遺跡の近世墓地は江戸後期から幕末期を中心とするもので、血縁関係強い同族墓がⅢ区・Ⅳ区の近世墓群、Ⅱ区は一軒墓である。

これをまとめとして筆を擱きたい。

この近世墓に埋葬された人々の霊が安らからんことを祈るしだいである。

(H9.11.3 副島)

註1 寛永通寶は江戸幕府が1636年(寛永13)以降鑄造した銭。鑄造した年代に関係なく寛永通寶といった。一文銭と四文銭がある。鑄造場所は全国各地の銭座。素材は銅・鉄・真鍮である。数百種類もあって代表的銭貨。

鈴木公雄「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学第61巻第3・4号』1992. 3

櫻木晋一「鋤先遺跡および福岡県下の出土六道銭について」『鋤先遺跡』一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財報告 第5集 1995 福岡県教育委員会 県下の六道銭についてはこれが詳しい。

註2 佐々木哲哉「福岡県の人生儀礼」『福岡の民俗文化』1993 九州出版会

註3 中村正夫「九州の葬送・墓制—福岡県」1979 明玄書房

ノヤキの事については梅林新市「福岡県築上郡東吉富村」『旅と伝説』1933. 7 に詳しい。

大平村編『大平村誌』大平村役場 1986

新吉富村編『新吉富村誌』新吉富村役場 1987

註4 飛野博文「金居塚遺跡Ⅱ」一般国道10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財報告 第7集 1997 福岡県教育委員会

註5 中村正夫「火葬」『福岡県百科事典』1982 西日本新聞社

謝意

文献資料収集の折り、福岡県立図書館の杉谷倫子氏、鞍手町教育委員会の高倉富恵氏、大平村郷土史料館の藤井較一氏には資料についての協力を得た。中村正夫先生には「ノヤキ」のことについて御教示を受けた。先生は11月13日死去された。慎んで御冥福を祈るしだいである。

IV 科学的分析

1. 福岡県築上郡大平村大塚本遺跡出土の近世人骨

中 橋 孝 博

九州大学大学院比較社会文化研究科

はじめに

九州の東海岸を走る国道10号線のバイパス工事に伴って、これまで既に多くの遺跡が発見され、永年に亘って福岡県教育委員会による発掘調査が実施されてきた。1991年度、この関連の調査によって築上郡の河岸段丘上に位置する大塚本遺跡から新たに近世墓が検出され、少数の人骨も出土した。土葬と火葬によるもので、人骨の保存状態が概して悪いため、ごく限られた知見しか得られなかったが、以下にその検討結果を報告する。

遺跡・資料

大塚本遺跡は、福岡県の東北部、築上郡大平村にあり、その近世紀の墓墳から人骨片が出土した。火葬骨2体、及び土葬骨6体の計8体分が回収されたが、蔵骨器に納められていた火葬骨を除いて骨の保存状態は悪く、特に6基の土墳墓人骨の大半は、わずかに骨片の存在が確認できただけに留まった。

所属時代は蔵骨器などに関する考古学的な検証から、ほぼ江戸時代のものと考えられている。

観察所見

1. 火葬骨

表1に、観察結果を示す。なお、その存在が確認された部位には○、一応確認できたがやや不確かな部位には△、確認不能の場合は×でそれぞれ示した。

表1 大塚本遺跡出土火葬骨

	性	年 齡	保存 度(%)	色 相	頭 部	上 肢					下 肢					軀 幹		
					頭 顱	下 齒	上 腕骨	橈 骨	尺 骨	手 骨	上 肢帶	大 腿骨	脛 骨	腓 骨	足 骨	膝 蓋骨	骨 盤	
藏 骨 器	♂	熟年～	70%	黃 白	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ × ○ × △	○ ○ × ○ × △	○ ○ × ○ × △	○ ○ × ○ × △	○ ○ × ○ × △			
藏骨器・東	?	成人	20%	黃 白	○ ○ ×	○ ○ ×	○ × × ×	○ × × ×	○ × × ×	○ × × ×	○ △ × × × ×	○ △ × × × ×	○ △ × × × ×	○ △ × × × ×	○ △ × × × ×			

(○：確認、△：確認・不確定、×：確認不能)

〔Ⅱ区-A・蔵骨器〕

ほぼ全身骨が認められ、重複部位が見あたらないので、一体分の火葬骨と見なされる。量的にもかなり多く、骨の大半が回収されて蔵骨器に埋葬された状況が窺える。

乳様突起や外後頭隆起の発達度、あるいは四肢骨、特に大腿骨の骨頭サイズなどから、男性と見なされ、また、縫合の癒着度、脊椎・椎体部の骨増殖の状況から、少なくとも熟年以上の高齢に達した個体と考えられる。

骨は土色の影響もあって全体的に黄白色を呈し、一部の緻密質の内部にやや青灰色を見せるが、ほぼむら無く、十分焼成された状況にある。ひび割れ、歪み、捻れなどの変形も著しく、歯冠部は一片も含まれていない。少なくとも700~800度以上のかかなり高温で焼いたものであろう(池田、1981)。また、歪みなどの著しさは、既に白骨化した遺体を焼いたものではなく、通常の火葬のように、軟部組織を伴った状態で焼かれたことを示している。

一部、下肢の腓骨や、膝蓋骨、あるいは第二頸椎の存在が確認できず、骨盤も殆ど含まれていなかったが、ただ、火葬骨の場合、もともと歪み、ひび割れがあるため、細片化すると部位によっては固定が不可能になる場合が珍しくない。従って、正確にその存否を問うことは困難であり、ここに上げた骨盤や腓骨など、薄い緻密質しか持たない骨が同定困難になることは往々にしてありがちなことだが、しかし第二頸椎の歯突起については、全身の中でも特に保存、同定しやすい部位であり、その存在が確認できなかった点にはやや不自然さを感じる。単なる取り漏らしの可能性が強いが、第二頸椎を特別視して選択的に取り上げる風習も存在するので(中橋・永井、1985)、一応、そうした可能性も考慮に入れておく必要があろう。

〔蔵骨器・東〕

土壙中から検出された火葬骨で、全身の約20%程度が回収された。回収部位に特に不自然な偏りは認められない。また、重複部位もなく、一体分と見なして大過無かろう。

性、年齢判定に有効な部位が見あたらず、一応、骨の厚さ、一部の骨端の状況から成人骨であることは確認できたが、性は不明とするほか無い。

蔵骨器内部のものと同じく、全体に黄白色を呈し、ひび割れなどの変形も著しい。やはり第二頸椎は確認できなかった点を注記しておきたい。

2. 土葬人骨

計6基(24. 25. 28. 29. 30. 32)の土壙墓から人骨が検出された。表2に観察結果を示す。

表2 大塚本遺跡出土の土葬人骨

番 号	性	年 齢	保 存 状 況
24	男性	成人	下肢骨など破片のみ
25	不明	成人	頭片、上肢などの小片
28	不明	不明	小片のみ
29	不明	不明	小片のみ
30	不明	不明	小片のみ
32	不明	成人？	小片のみ

遺存状況が極めて悪く、24号以外は性判定も不可能であった。この24号のみ、かなり屈強な男性であることが窺えたが、他の形態的特徴については不明である。

文 献

池田次郎（1981）：「出土火葬骨について」、太安万侶墓、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊、奈良県橿原考古学研究所。

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。

2. 福岡県築上郡大平村金居塚遺跡出土の近世人骨

中 橋 孝 博

九州大学大学院比較社会文化研究科

はじめに

近世期の人骨資料については、これまで東京や大阪など大都市圏に資料が偏在していたが、近年、各地の開発事業の進展に伴って、地方都市や非都市部の資料も徐々に充実しつつある。福岡県では福岡市や北九州市はもちろん、県下各地から次々と新資料が追加され、九州の東海岸を南北に走る国道10号線のバイパス工事に伴う発掘調査でも、先年、京都郡椎田の鋤先遺跡から65体の近世人骨が出土している（中橋、1995）。その少し南部に位置する築城郡において、1990年度、福岡県教育委員会による発掘調査で新たに近世墓が検出され、かなりの人骨資料が追加された。資料の大半は火葬骨であったため、形態学的な検討は限定されたが、資料数が100体近くに達しており、比較的まとまった数の火葬人骨として当時の埋葬習俗を知る上で貴重なものと言えよう。以下に検討した結果を報告する。

遺跡・資料

金居塚遺跡は、福岡県の東北部、築上郡大平村の山国川に近い河岸段丘上に見出された遺跡で、主に古墳時代以降、近世紀にいたる各種の遺構、遺物が検出されているが（飛野、1996）、ここに報告するのは近世墓出土の人骨群である。

墓壙としては、200基近くが検出され、土葬墓、火葬墓が混在した状況が見られたが、出土人骨の大半は蔵骨器などに納められた火葬人骨が占めている。表1～4に示したように、火葬骨は89体、土葬骨は計39体を数える。一部、六道銭などが人骨に伴って見出されたが、副葬品は概して少ない。

所属時代は蔵骨器など伴出遺物に関する考古学的な検証から、ほぼ江戸時代のものと考えられている。

観察所見

1. 火葬骨

表1に、火葬人骨を一覧する。なお、骨の存在が確認された部位には○、一応確認できたがやや不確かな部位には△（歯については歯根のみが遺存していた場合）、確認不能の場合は×でそれぞれ示した。

表1 金居塚遺跡出土火葬骨

(○:存在を確認、△:確認不確定(ただし、歯については歯根のみ)、×確認不可)

	性	年 齡	保 存 度 (%)	色 相	頭 部		上 肢					下 肢					軀 幹				
					頭 骨	下 顎 骨	上 腕 骨	桡 骨	尺 骨	手 骨	上 肢 帶	大 腿 骨	脛 骨	腓 骨	足 骨	膝 蓋 骨	骨 盤	脊 椎	軸 椎		肋 骨
17	♂	熟年	50	黄白	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	骨壺	
24	♂	熟年	30	青黒灰	○	○	△	△	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○		
33	?	成人	5	黄白	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
35	♂	成人?	5	黄白	○	×	×	×	○	×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	骨壺	
37	?	成人	5	黄白	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
39	?	成人	10	黄白	○	×	△	×	×	×	×	△	○	×	×	×	×	○	×		
40	?	小児	20	青黒灰	○	×	○	△	×	×	×	×	○	△	×	×	×	△	×	骨壺	
41	♂	熟年	60	黄白	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×		骨壺
42	♀	熟~	70	黄白	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○		
43	?	幼児	30	黄白	○	×	△	○	○	○	○	×	○	×	×	△	×	△	×	骨壺	
44	?	?	5	黄青白	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		骨壺
45	♂	成人	20	黄黒青	○	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×		
46	♂?	熟~	40	青黒灰	○	○	×	○	○	△	○	○	○	○	×	○	○	○	×	骨壺	
47	♂	老年	80	黄白	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○		骨壺
48	♀	熟~	40	青黒灰	○	○	△	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○		
49	♀	熟年	40	黒灰	○	○	△	○	○	×	○	○	○	○	×	×	○	○	○	骨壺	
50	?	成人	20	黒青白	○	○	△	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×		骨壺
51	?	成人	40	黄白	○	○	△	○	○	○	○	○	△	×	×	×	○	○	○		
52	♂	成人	20	黄白	○	×	○	○	×	△	○	○	×	×	×	×	×	○	×	骨壺	
53	♂?	成人	20	黄白	○	○	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×		骨壺
54	?	熟~	40	黄白	○	×	×	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	○	×		
55	?	熟~	20	黄白	○	×	×	×	△	×	×	○	○	×	×	△	×	×	×	骨壺	
56	♂?	成人	10	黄白	○	×	×	×	△	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×		骨壺
57	♂	成人	30	黄白	○	×	×	×	△	×	×	×	○	○	○	×	○	○	×		
57北	?	成年	30	黄白	○	○	○	×	×	○	×	×	○	○	○	○	×	○	×	骨壺	
57南	♂?	老年	20	黄白	○	○	△	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○		骨壺
58	♂	成人	40	黄白	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×		
59	?	熟~	50	黄青白	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	骨壺	
60	♂	熟~	40	黄白	○	×	×	×	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	×		骨壺
61	♂?	成人	20	黄白	○	○	△	○	○	○	×	×	○	○	○	○	×	○	×		
61下	♂	熟~	20	黄白	○	○	×	×	○	×	○	×	○	×	○	×	×	×	○	小児大腿骨混入	
62	?	熟年?	40	黄青白	○	×	△	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×	○	×		骨壺
63	?	成人	10	黄黒青	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
64	♂	成~熟	60	黄白	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	×	○	○	骨壺	
65	♂	成人	20	黄白	○	○	△	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	○	×		骨壺
66	♂	成年	60	青黒灰	○	○	×	○	○	△	○	○	○	○	×	○	×	○	○		
68	♂?	成人	30	黄青白	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	×	△	×	○	×	骨壺	
69	♂	成人	40	黄白	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×		骨壺
70上	♂?	成人	30	黄青白	○	×	△	×	○	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○		
71	♂?	熟~	20	黄青白	○	○	△	△	×	×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	骨壺	
72	♀?	成人	20	黄青白	○	×	△	○	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○	×		骨壺
74	♂	熟~	50	黄白	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○		
80	♂?	成人	10	黄白	○	×	×	○	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	骨壺	
81	?	成人	5	黄白	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		骨壺
83	♂	熟年	40	黄白	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○	×		
84	♂	熟~	40	黄白	○	○	△	×	○	×	○	○	○	×	×	○	○	○	×	骨壺	
85	?	成~熟	30	黄白	○	×	△	○	○	△	○	○	○	○	○	○	×	○	○		骨壺
90	?	熟~	20	黄青白	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	×		
91	?	成人?	20	黄青白	○	×	△	×	○	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○	骨壺	

(○：存在を確認、△：確認不確定(ただし、歯については歯根のみ)、×確認不可)

	性	年 齡	保 存 度 (%)	色 相	頭 部		上 肢			下 肢					軀 幹							
					頭 骨	下 顎 骨	上 腕 骨	橈 骨	尺 骨	手 骨	上 肢 帶	大 腿 骨	脛 骨	腓 骨	足 骨	膝 蓋 骨	骨 盤		脊 椎	軸 椎	肋 骨	
92	♂	熟年	50	黄白	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	骨壺	
100	♂	成人	40	黄白	○	○	△	○	○	×	△	○	○	×	×	×	×	○	○	○		骨壺
101	♂	成人	30	黄白	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	○	○	×	○		
102	?	若年	20	黄白	○	×	△	△	×	×	○	×	○	×	×	×	×	○	×	○	骨壺	
103	?	成年	15	黄白	○	×	×	×	○	×	×	○	△	×	×	○	○	×	×	○		骨壺
104	?	成人	10	黑青灰	○	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×		
105	♀?	熟~	40	黄白	○	×	×	○	×	○	○	○	○	○	×	×	○	×	×	×	骨壺	
	?	若~小	10	黄白	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×		骨壺
106	♂?	熟~	40	黄青白	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○		
107	?	幼兒	40	青灰白	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	○	×	○	○	×	○	骨壺	
111	♂	熟~	30	黄青灰	○	○	×	○	×	○	×	○	○	○	○	×	×	○	×	○		骨壺
112	?	成人	10	黄白	○	×	×	○	○	×	△	×	○	○	×	×	×	×	×	×		
113	?	成人	20	黑黄白	○	×	×	○	○	×	○	×	○	○	○	×	×	○	×	○	骨壺	
114	?	成人	10	黄白	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		骨壺
117	?	成人?	10	黄白	○	○	△	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×		
120	?	成人	10	黄白	○	×	△	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	骨壺	
124	♂	熟年?	20	黄白	○	×	△	△	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×		骨壺
125	?	成人	40	黄白	○	○	×	×	△	×	○	×	○	×	○	×	×	×	×	○		
126	♂	熟~	50	黄白	○	○	△	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	×	○	骨壺	
127	?	若年	20	黄白	○	×	○	○	×	○	×	○	×	×	○	×	×	○	×	○		骨壺
128	♂	成~熟	40	黄白	○	○	○	○	△	×	○	○	○	×	○	×	×	○	×	○		
133	♂	成年	20	黄白	○	○	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	○	骨壺	
136	?	成人?	20	黄白	○	×	×	○	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	○		骨壺
139	♂?	熟~	50	黄白	○	○	△	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○		
143	?	熟~	15	黄白	○	×	△	○	×	○	△	○	×	×	×	○	×	×	○	×	骨壺	
146	?	成人	20	黄白	○	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	×	○		骨壺
163	?	成人	20	黄黑青	○	×	×	×	×	×	○	×	○	×	○	○	×	○	×	×		
165	♀	熟~	20	黄白	○	×	×	○	×	×	×	×	○	△	×	○	×	○	○	×	骨壺	
174	♂?	成人	10	黄白	○	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	△	○	×		骨壺
175	♂?	熟~	30	青黑灰	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
176	♂?	成人	40	黄白	○	×	×	○	○	○	○	×	○	×	○	×	×	○	○	×	骨壺	
177	♀?	熟~	20	黄白	○	○	△	○	×	×	×	○	○	×	○	×	○	○	○	×		骨壺
180	♂	熟~	40	黄白	○	○	△	○	○	×	○	○	○	×	○	×	○	○	○	×		
181	?	成人	30	黄白	○	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○	○	×	○	○	○	骨壺	
182	♂?	成年	30	黄白	○	○	△	△	×	△	×	○	○	○	×	×	×	×	○	×		骨壺
183	?	成人	15	黄白	○	×	×	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○		
184	?	熟年?	40	黄白	○	○	△	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	骨壺	
186	?	小兒?	20	黄白	○	×	×	○	×	○	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×		骨壺
E地区	?	成人	10	黄白	○	×	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×		
位置?	?	成人	10	黄白	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	骨壺	

個体数が多いこともあって、焼成状況はかなり多様で、表中の「色相」の項に示したように、生焼けに近い黒～青灰色を呈するものから、黄白色（土色の影響による）を呈したほぼ完全な焼骨まで、様々な状況が見られる。生焼けのものは当然、火熱による変形、縮小が少なく、歯冠も遺存するなどほぼ原型を保っているが、大半の黄白色を呈する火葬骨群は、捻れ、歪み、ひび割れなどの変形、縮小が著しく、歯も歯根のみ回収された状況が見られる。全体的に見て、白骨化した骨を焼いたものではなく、軟部組織を伴った通常の遺体を焼いたものと見なし得る（池田、1981）。

量的にも多様で、蔵骨器に埋納されている場合は、47号のように8割程度の骨が回収、埋葬されているものがあるが、概して回収骨は少量で、小さな破片が少量のみの墓壙も少なくない。また、62号や105号墓で複数個体の破片が認められたが、全体的には、各墓壙（蔵骨器）において、骨の重複部位は見あたらず、単体埋葬が基本であったと考えられる。

表1に示したように、全体的に埋葬されている骨の部位に特に大きな偏りは認められず、ほぼ全身各部の骨が確認されている。火葬骨の場合、歪み、捻れなどの著しい変形を伴うため、細片化すると部位同定が困難になる場合が多く、その影響は特に形態的な特異性の少ない骨や緻密質の薄い骨などに大きく顕れる。従って、表1では、腓骨などで同定頻度がかかなり少なくなっているが、それは火葬場からの回収作業時等に壊れたりして確認困難な状況になった可能性が高く、同定頻度の少なさがそのまま回収頻度の少なさを意味するわけではない。

ただ、第二頸椎の歯突起は、全身の中でも特に保存、同定されやすい部位であり、ここでは89体中、13体でその存在が確認された。古代より宗派によっては第二頸椎を特別視し、選択的に取り上げる風習がかなり広範に見られるが（中橋・永井、1985）、ここで見られた回収頻度（13/89）から判断する限り、第二頸椎（軸椎）を特別に扱っている状況とは言い難い。ただ、骨の遺存しやすさから考えてやや少なすぎる感も拭いがたく、今後とも当地の火葬習俗に関する検討事項としておきたい。

表2 金居塚遺跡出土火葬人骨（性・年齢構成）

年 齢		男 性	女 性	不 明	計
乳 児		—	—	0	0
幼 児		—	—	1	1
小 児		—	—	4	4
若 年		—	—	2	2
成 年		4	0	2	6
熟 年（熟～）		19	6	8	33
老 年		2	0	0	2
成 人		17	1	22	40
不 明		0	0	1	1
計		42	7	40	89

表3 金居塚遺跡出土人骨（土墳墓）

番 号	性	年 齢	保 存 状 態
1	?	?	小片のみ
3	?	未成人?	歯のみ
4	?	?	小片のみ
5	?	幼児	歯のみ
10	♀?	熟年	ほぼ全身の破片
13	?	幼児	歯のみ
15	?	小児?	歯のみ
18	?	?	歯のみ
25	?	小児?	歯のみ
26	♂	成年	歯のみ
27	?	乳～幼	歯のみ
28	?	幼児	歯のみ
29	?	若年	少量の破片
30	♂?	成～熟	歯、四肢小片
32	?	幼児	頭、歯少量
33	?	幼児	頭、歯少量
35	?	幼児?	歯のみ
36	♂	成～熟	歯のみ
56	?	?	小片のみ
67	?	幼～小	歯のみ
70	♂?	熟～	頭、歯、大腿骨、各小片
86	?	?	頭片
89	?	幼児	歯のみ
93	♂?	成～熟	歯のみ
95	?	幼児	歯のみ
96	♂?	熟年	歯のみ
115	♂?	若年	頭、歯、大腿骨、各小片
129	?	?	小片のみ
130	?	?	小片のみ
131	?	小児	歯のみ
144	?	成～熟	小片のみ
145	?	未成人?	小片のみ
147	♂?	成～熟	頭、四肢小片
150	?	幼児	頭、歯少量
151	?	熟年?	歯ほか小片
153	?	若～成	歯のみ
154	♀?	成人	下肢骨片ほか小片
155	♀?	熟年	歯のみ
162	?	熟年	歯のみ

表2に、性・年齢構成を示した。性別では大きく男性に偏っており、注目される。しかし、火葬骨の場合、縮小率が焼成状況によって大きく変化するため、サイズなどから男性と判定することは比較的容易だが、形態的に明確な判定の下せる部位が遺存していない限り、一般にサイズの小さな女性の性判定には大きな危険が伴う。従って、ここで見られた性比率が埋葬状況を正確に反映したものとは言い難く、この数値をそのまま採用するのは危険であろう。幼小児骨が少ない点についても、そうした火葬骨の遺存傾向を考慮する必要がある。

2. 土葬人骨

計39基の土墳墓から人骨が検出された。表3に観察結果を示す。

全体的に遺存状況が極めて悪く、形態的な特徴はもとより、性、年齢が判明したものは少数にとどまった。

表4に、性・年齢構成を示したが、目に付く点として、幼小児骨の多さが上げられる。39体中、半数近い18体が幼児を中心とする未成人骨であった。通常は、幼児より乳児死亡者のほうが上回ることが多く、おそらく骨の腐朽によって失われた乳児死亡者数を考えれば、当時の死亡傾向として半数以上が未成人死亡者で占められていた状況が浮かんでくる。ごく近年になってようやく乳幼児死亡者が激減したものの、こうした高い幼若児の死亡率は前近代においては一般的な現象であり（中橋、永井、1989）、当遺跡もまた、そうした近世期の社会状況を端的に示す好例と言えよう。

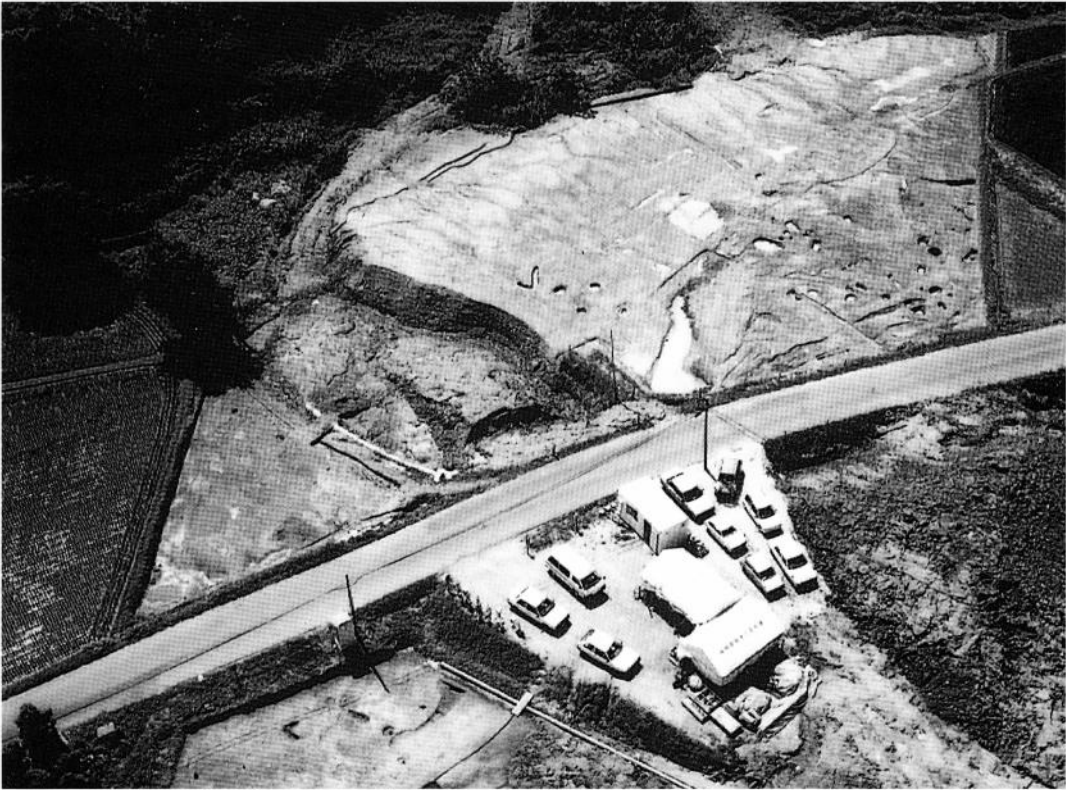
表4 金居塚遺跡出土人骨（土葬）

年 齢	男 性	女 性	不 明	計
乳 児	—	—	1	1
幼 児	—	—	10	10
小 児	—	—	3	3
若 年	1	0	1	2
不 明	0	0	2	2
成 年	2	0	1	3
熟 年 (熟～)	5	2	3	10
老 年	0	0	0	0
成 人	0	1	0	1
不 明	0	0	7	7
計	8	3	28	39

文 献

- 池田次郎（1981）：「出土火葬骨について」、太安万侶墓、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊、奈良県橿原考古学研究所。
- 中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文（1989）：「寿命」、弥生文化の研究1、雄山閣出版。
- 中橋孝博（1995）：「福岡県京都郡鋤先遺跡出土近世人骨について」、椎田道路関係埋蔵文化財調査報告5、福岡県教育委員会。
- 飛野博文（1996）：「金居塚遺跡、Ⅰ、Ⅱ」、豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告4、福岡県教育委員会。

版 圖



1. I区全景（空中写真、北西から）



2. II区全景（空中写真、上空から）



1. Ⅲ～Ⅴ区全景（空中写真、南東から）



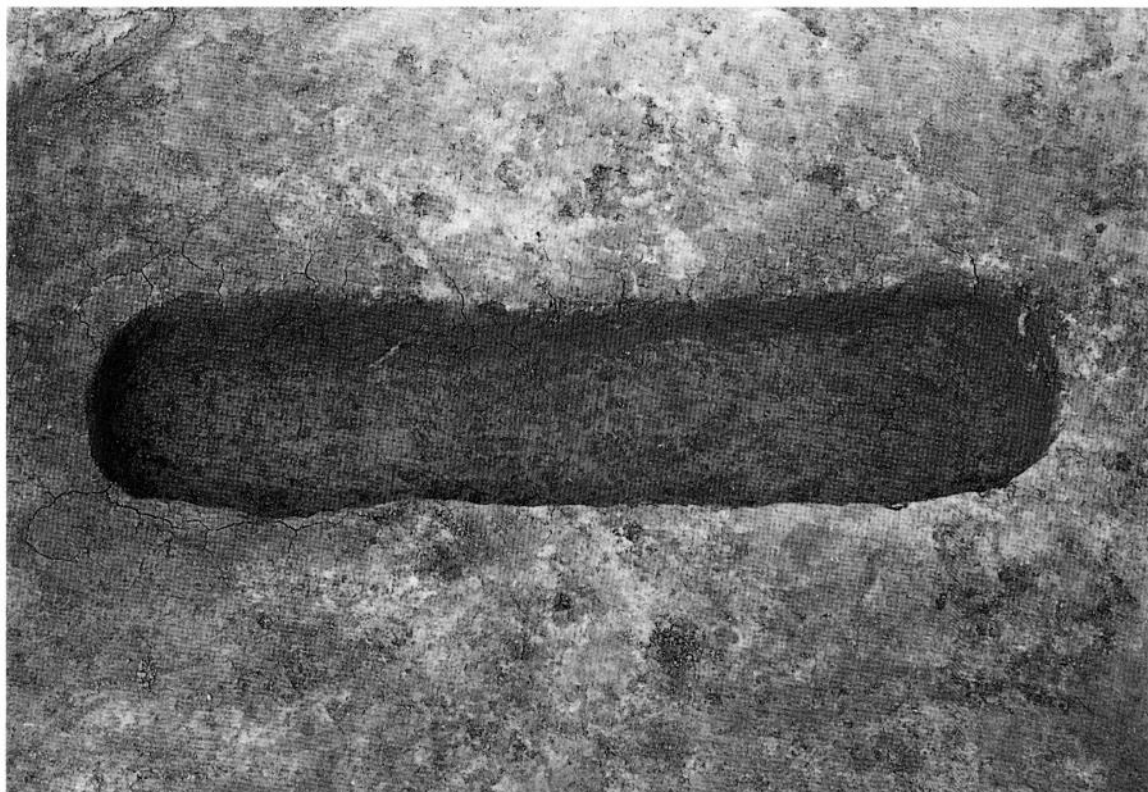
2. 弥生時代墳墓群（空中写真、上空から）



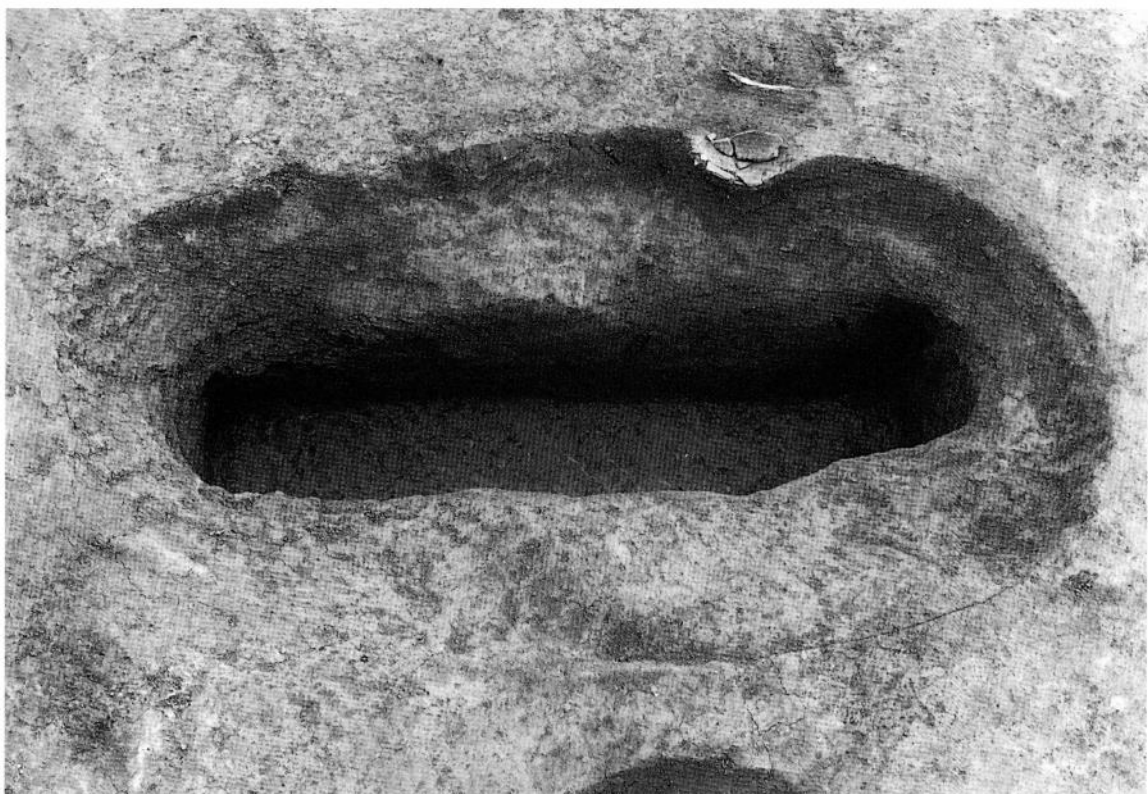
1. 1号埋甕（北から）



2. 1号墓（東から）



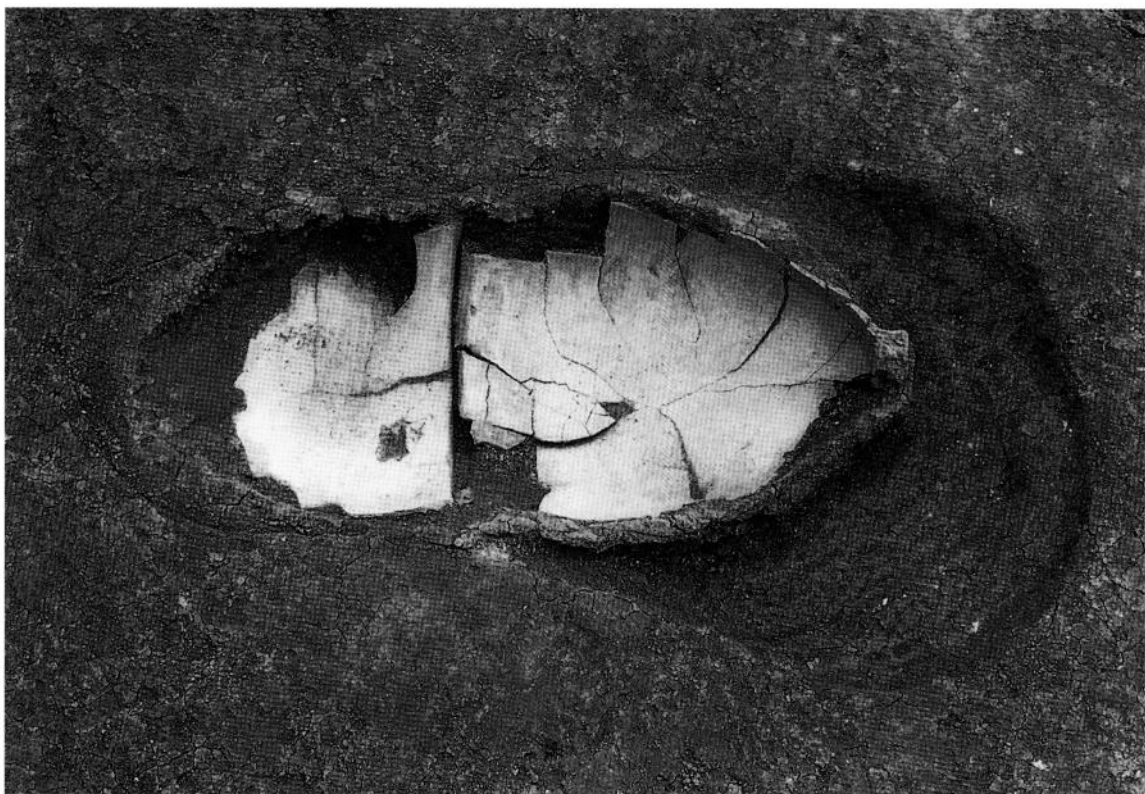
1. 2号墓 (東から)



2. 3号墓 (南西から)



1. 4号墓（東から）



2. 5号墓（南西から）



1. 6号墓（東から）



2. 7号墓（北から）



1. 8号墓（東から）



2. 9号墓（南西から）



1. 10号墓 (西から)



2. 11号墓 (南から)



1. 12号墓（西から）



2. 13号墓（西から）



1. 14号墓（西から）



2. 15号墓（北西から）



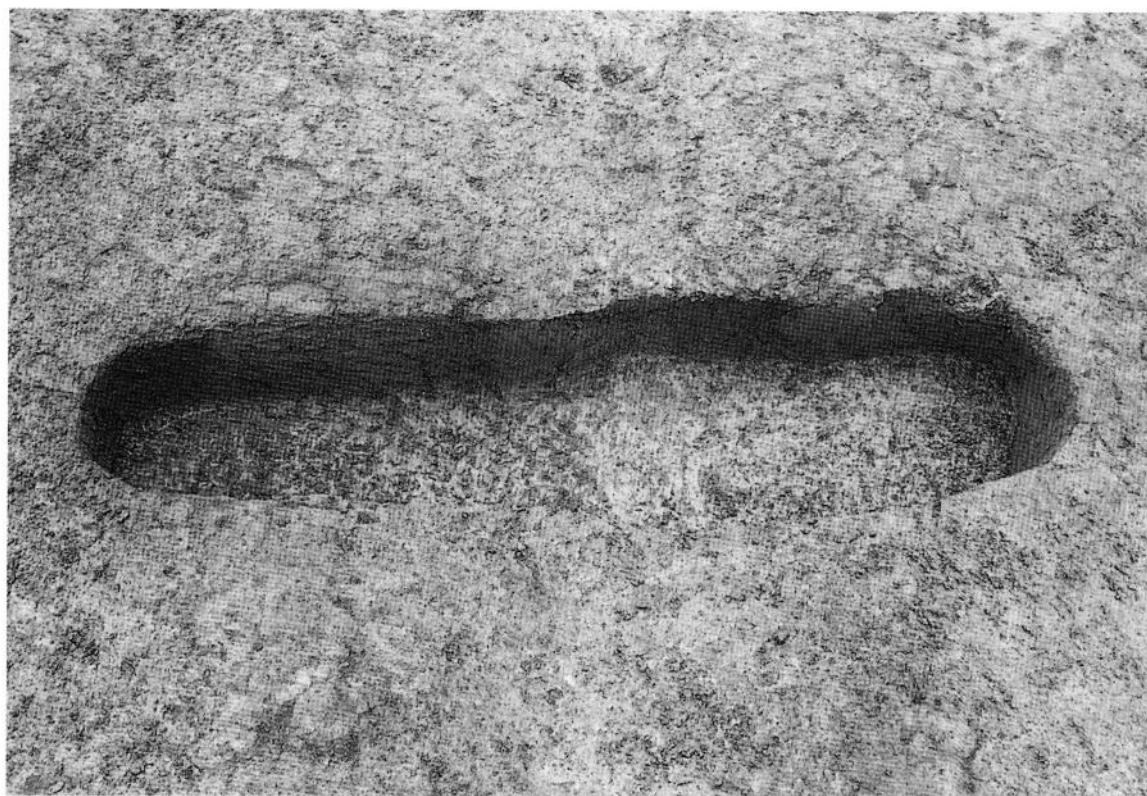
1. 16号墓（西から）



2. 17号墓（西から）



1. 18号墓 (西から)



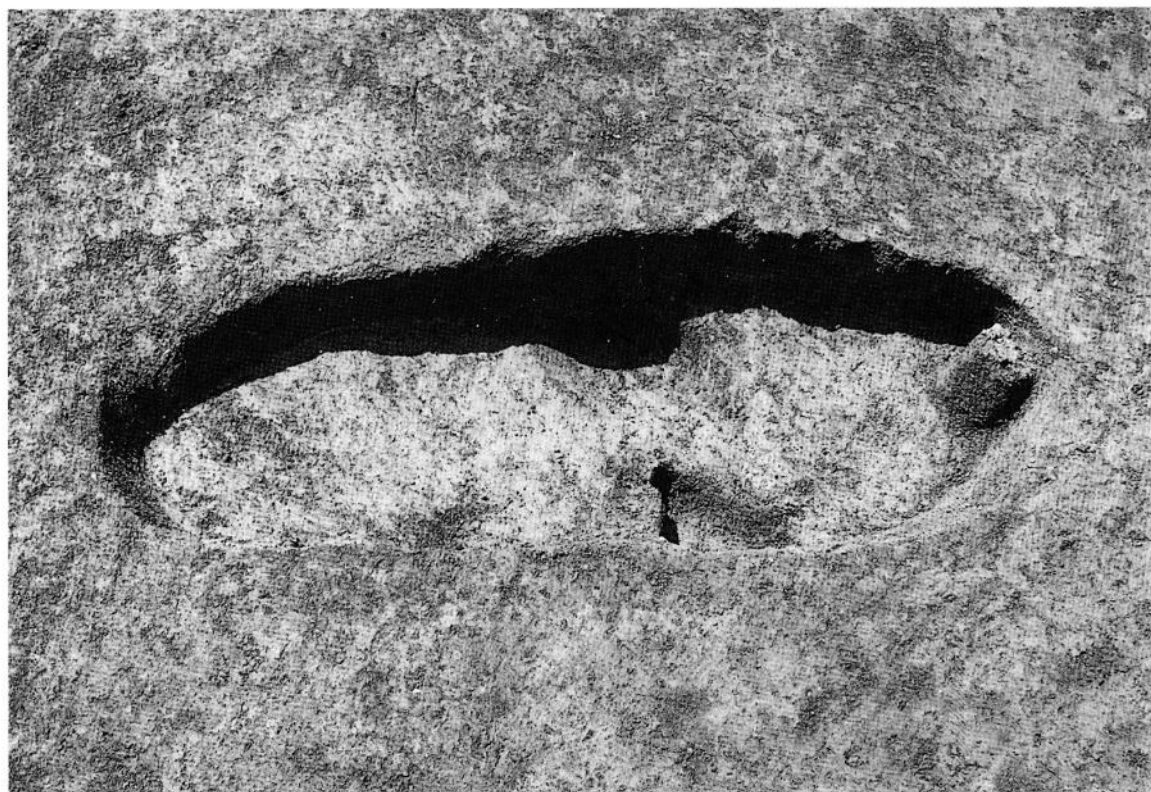
2. 19号墓 (南西から)



1. 20号墓（西から）



2. 21号墓（北東から）



1. 22号墓（東から）



2. 23・24号墓（東から）



1. 25号墓（北東から）



2. 26号墓（北東から）



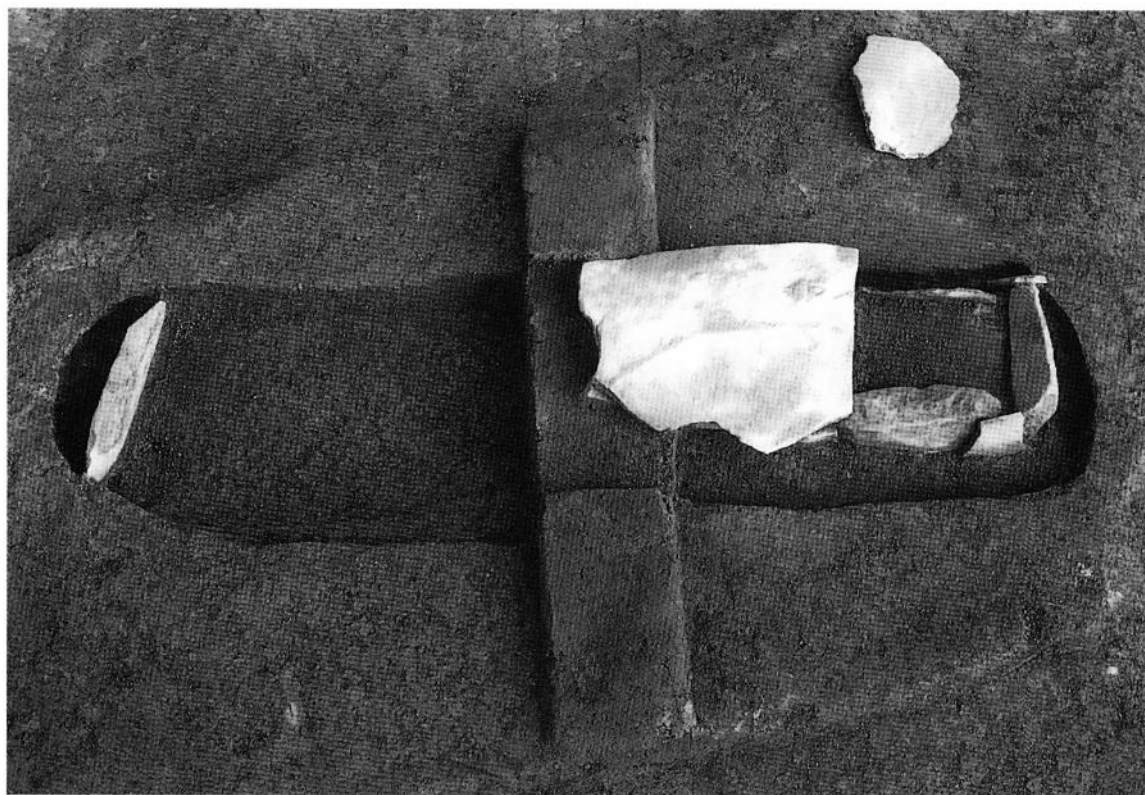
1. 27号墓（北西から）



2. 28号墓（西から）



1. 29号墓（南西から）



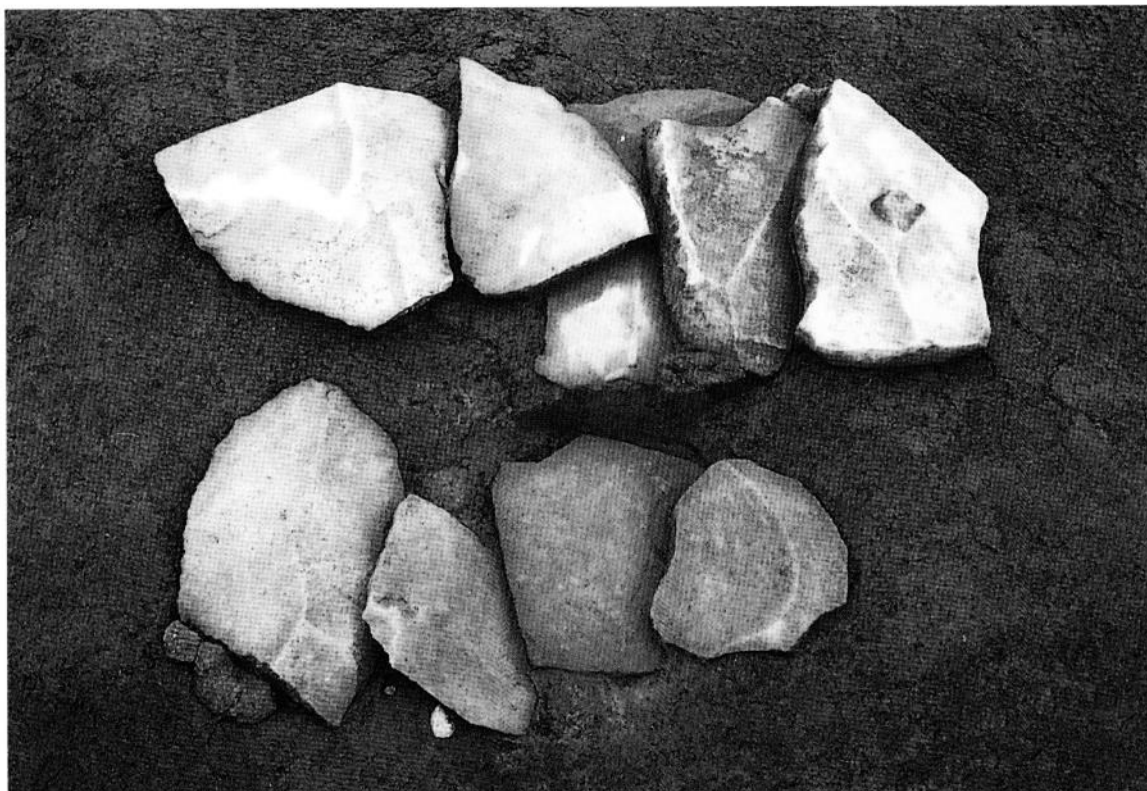
2. 30号墓（北西から）



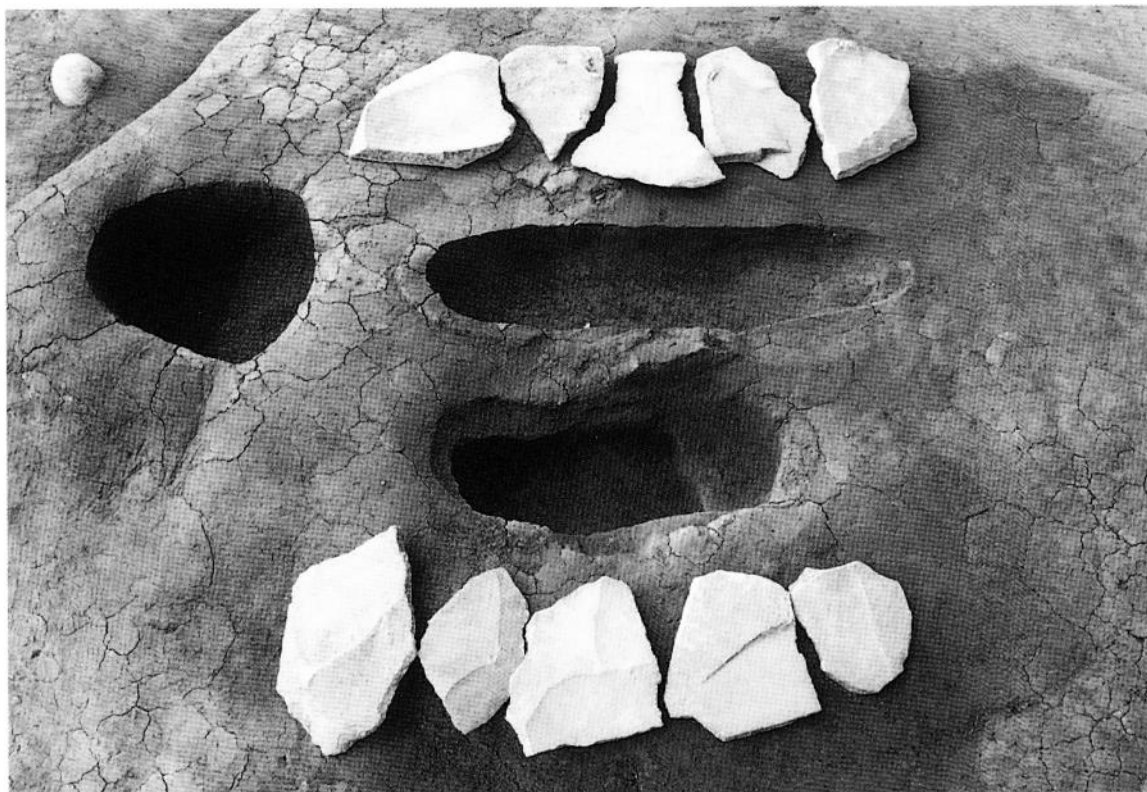
1. 30号墓（蓋石除去後、北西から）



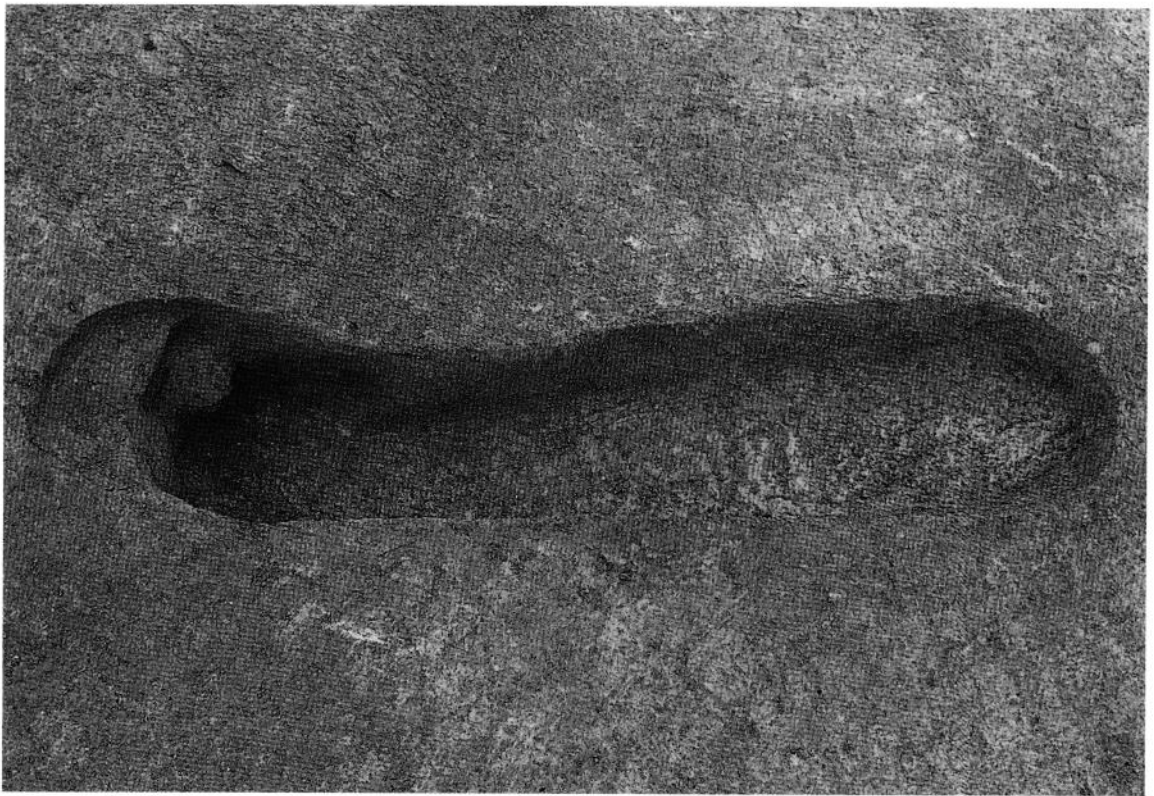
2. 30号墓（石棺部分、北西から）



1. 31・32号墓（北東から）



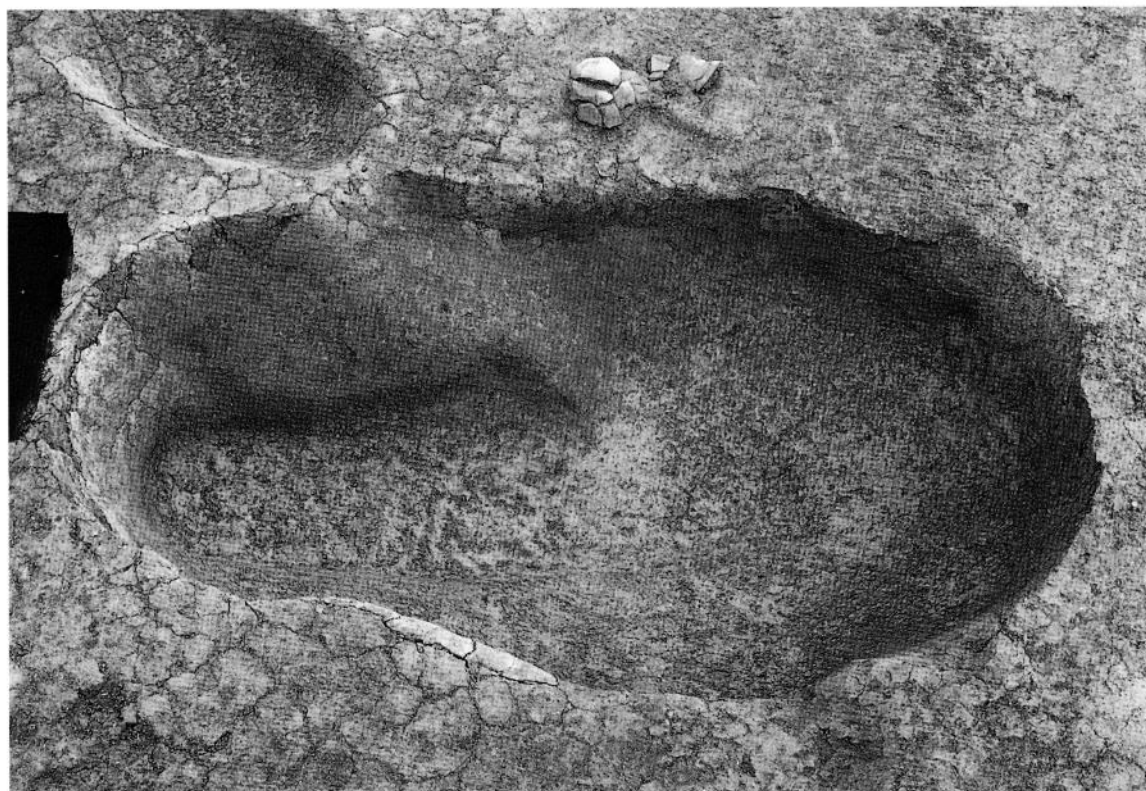
2. 31・32号墓（石蓋除去後、北東から）



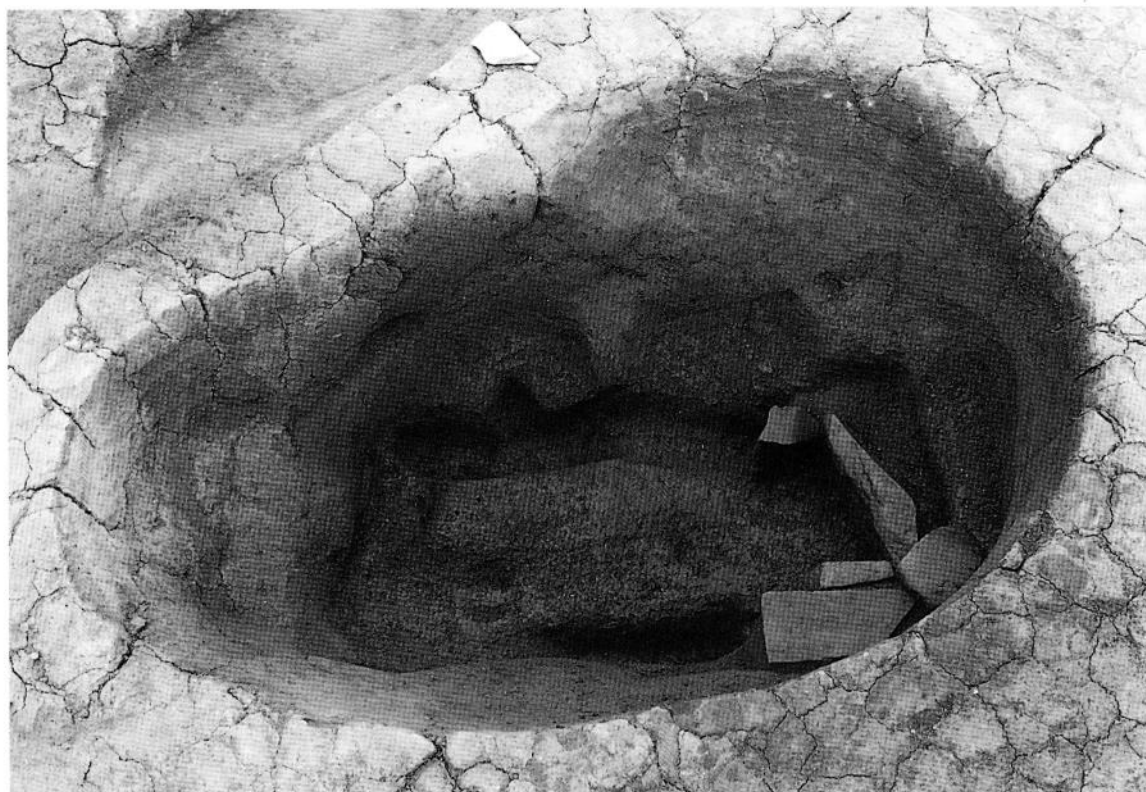
1. 33号墓（北東から）



2. 34号墓（南から）



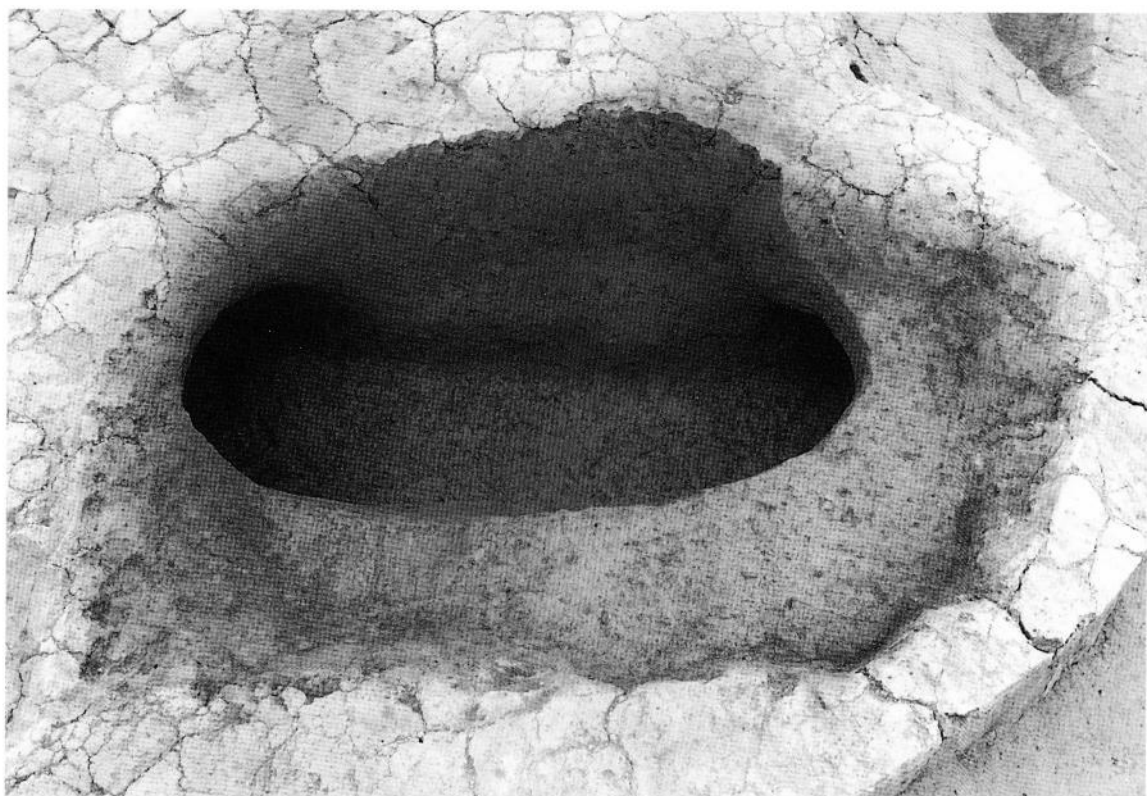
1. 35号墓（西から）



2. 36号墓（西から）



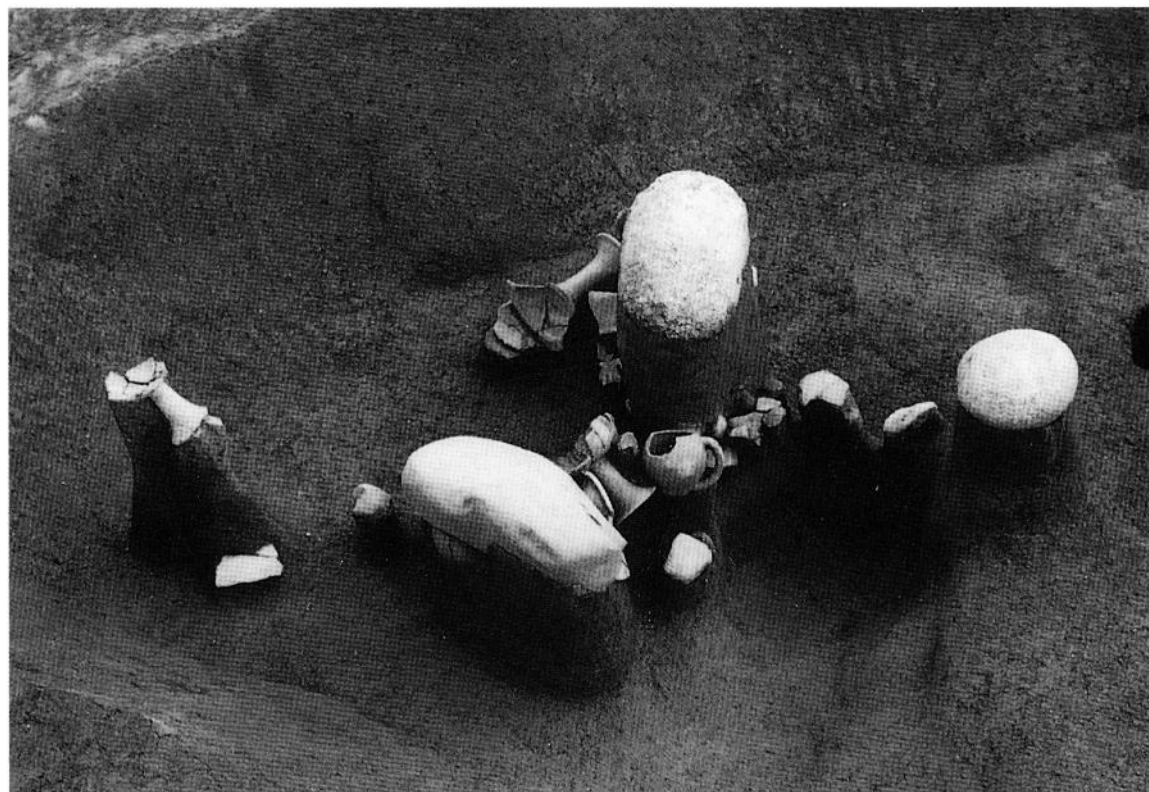
1. 37号墓土器出土状況（東から）



2. 37号墓（東から）



1. 1号祭祀土坑（北から）



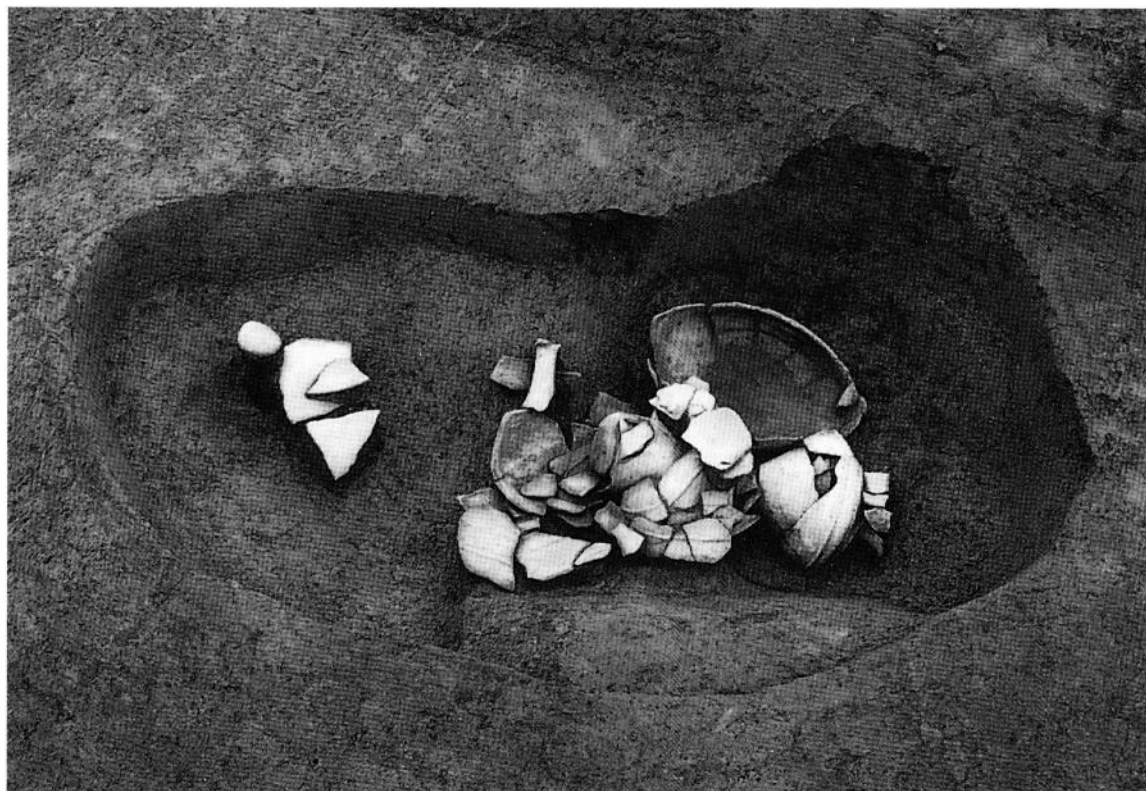
2. 1号祭祀土坑土器出土状況（北から）



1. 2号祭祀土坑（北東から）



2. 3号祭祀土坑（北から）



1. 4号祭祀土坑（西から）



2. 5号祭祀土坑（南西から）



1. 1号土坑（東から）



2. 1号墳丘墓と1～5号祭祀土坑（空中写真、南東から）



1. 1号墳丘墓周溝南東辺（南西から）



2. 1号墳丘墓周溝南西辺（南東から）



1. 1号墳丘墓周溝Cベルト土層（南から）



2. 1号墳丘墓周溝Dベルト土層（北東から）



1. 1号墳丘墓周溝Eベルト土層（南東から）



2. 1号墳丘墓周溝Fベルト土層（北西から）



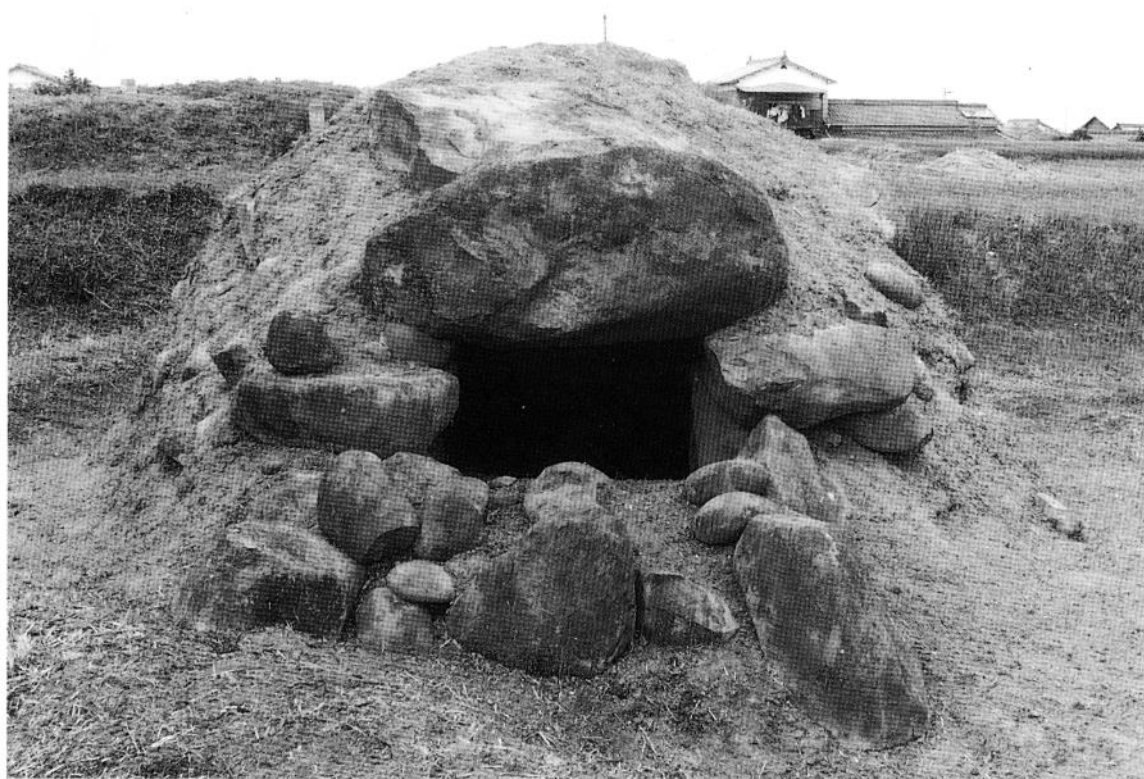
1. 下野地 2 号墳全景 (空中写真、上空から)



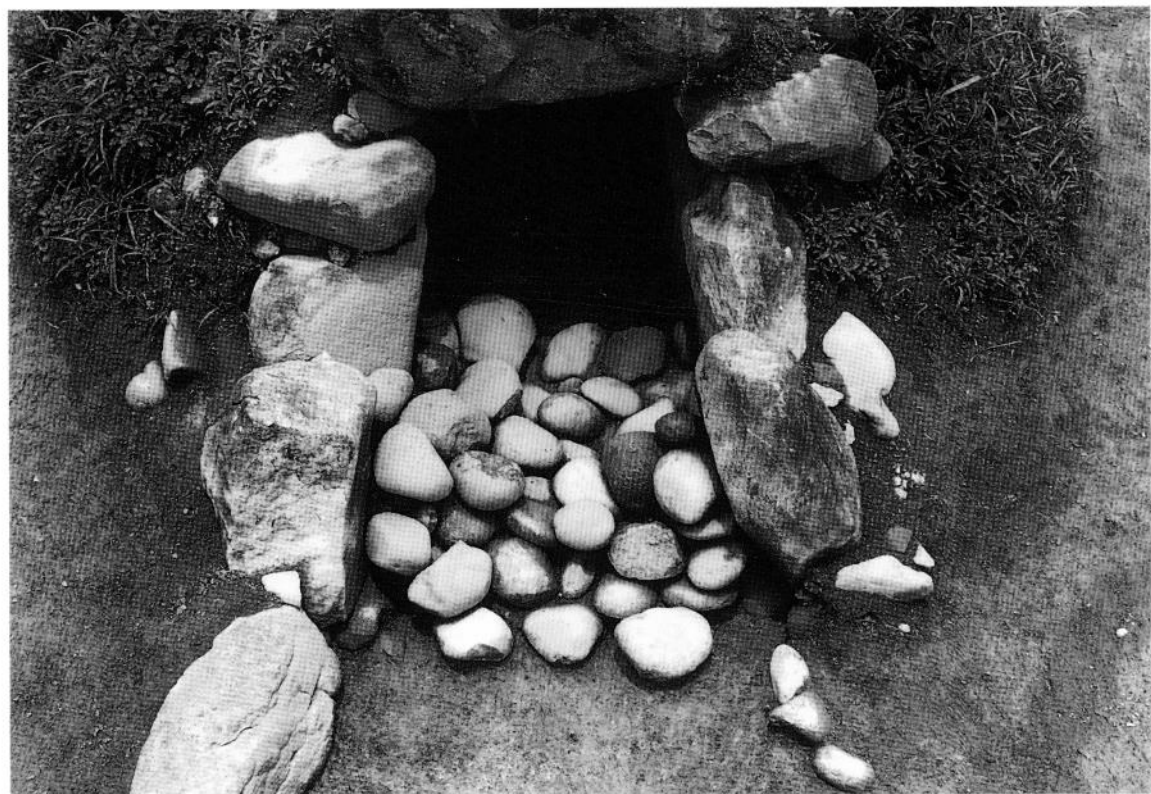
2. 下野地 2 号墳全景 (空中写真、南から)



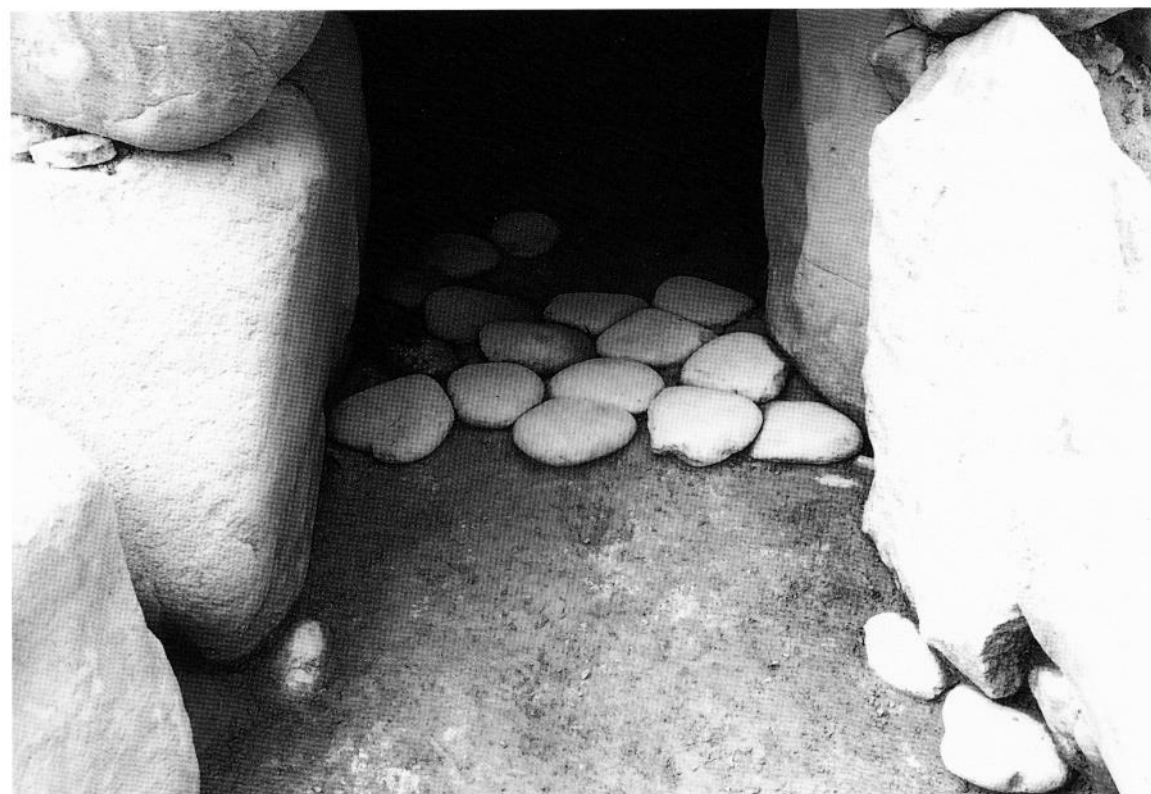
1. 石室全景（調査前、東から）



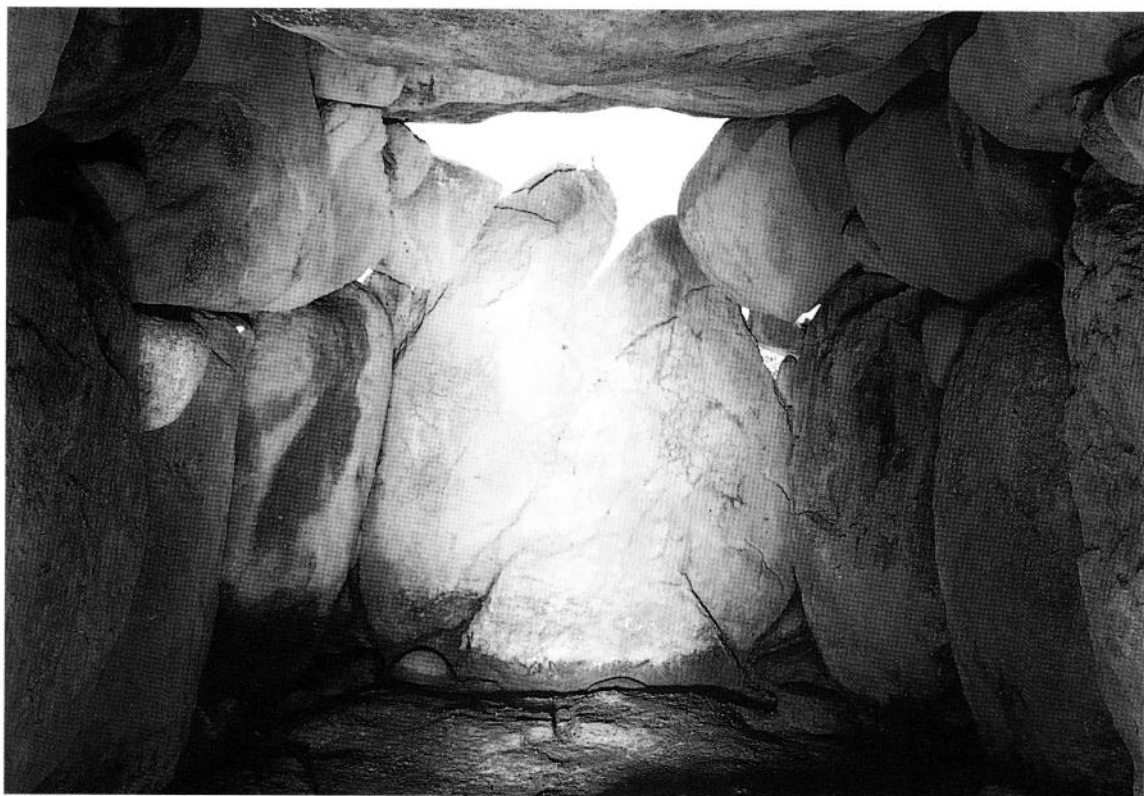
2. 石室全景（調査前、南から）



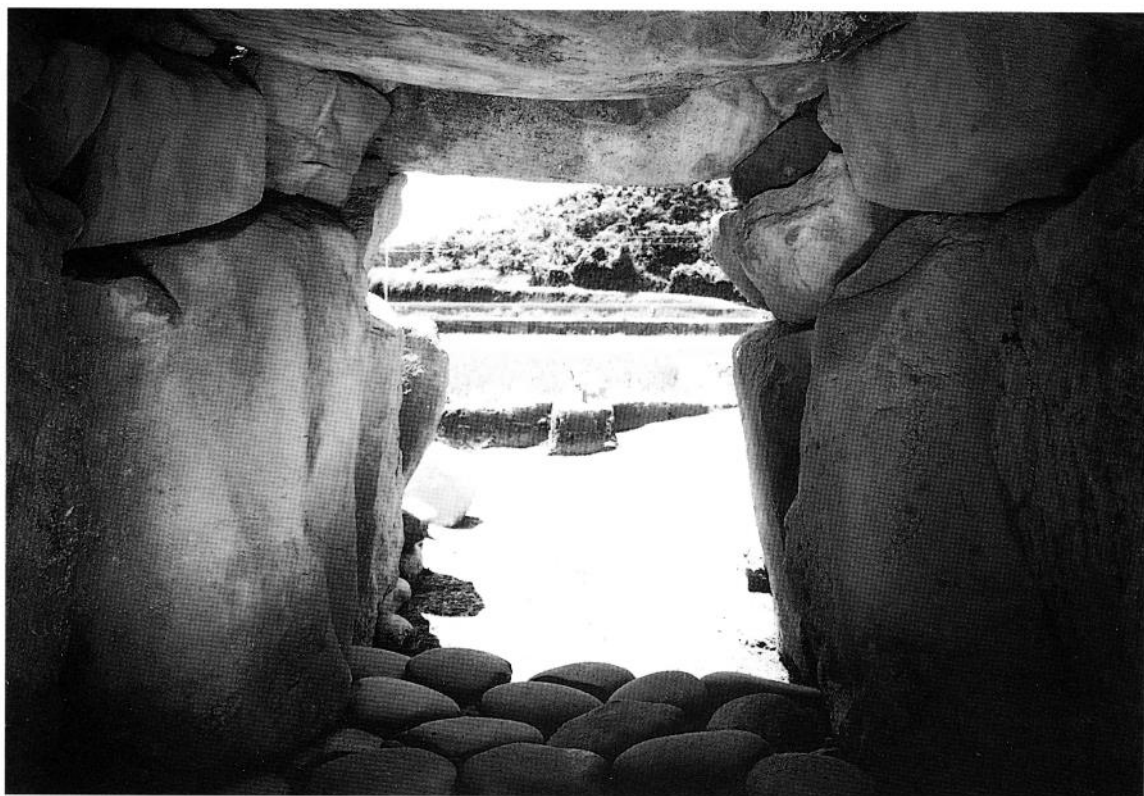
1. 石室入口と閉塞石（南から）



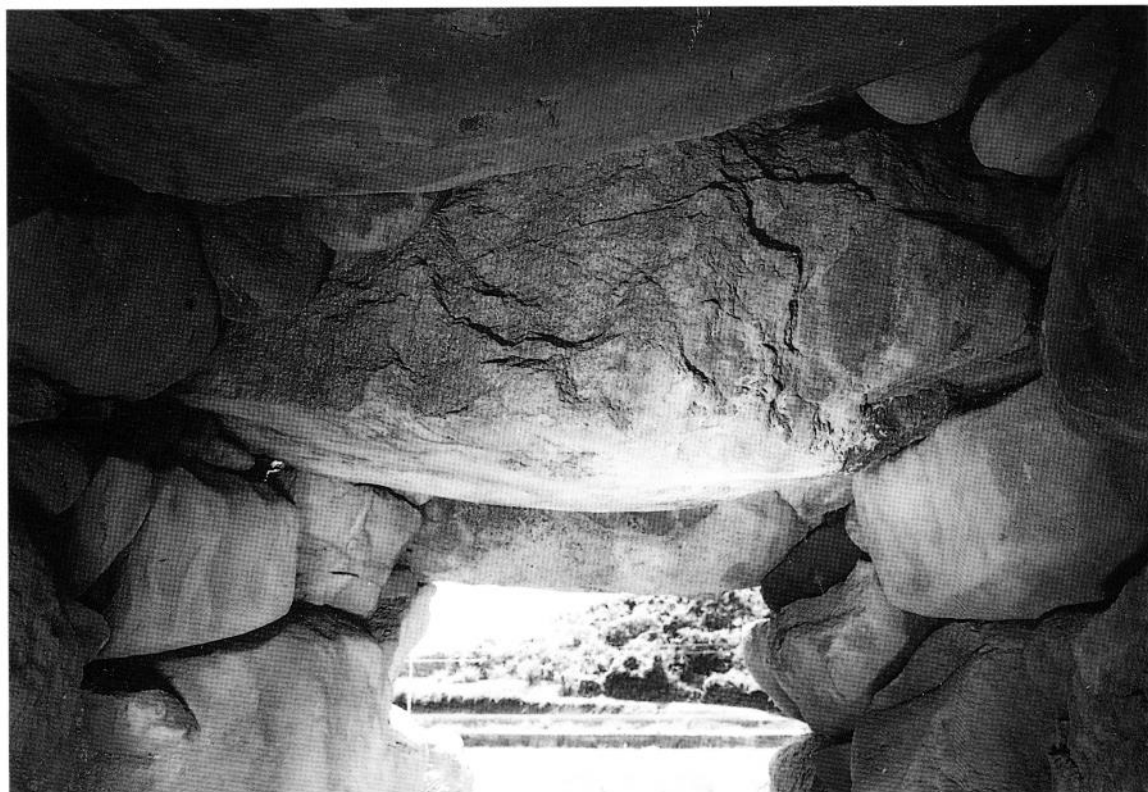
2. 閉塞石除去後（南から）



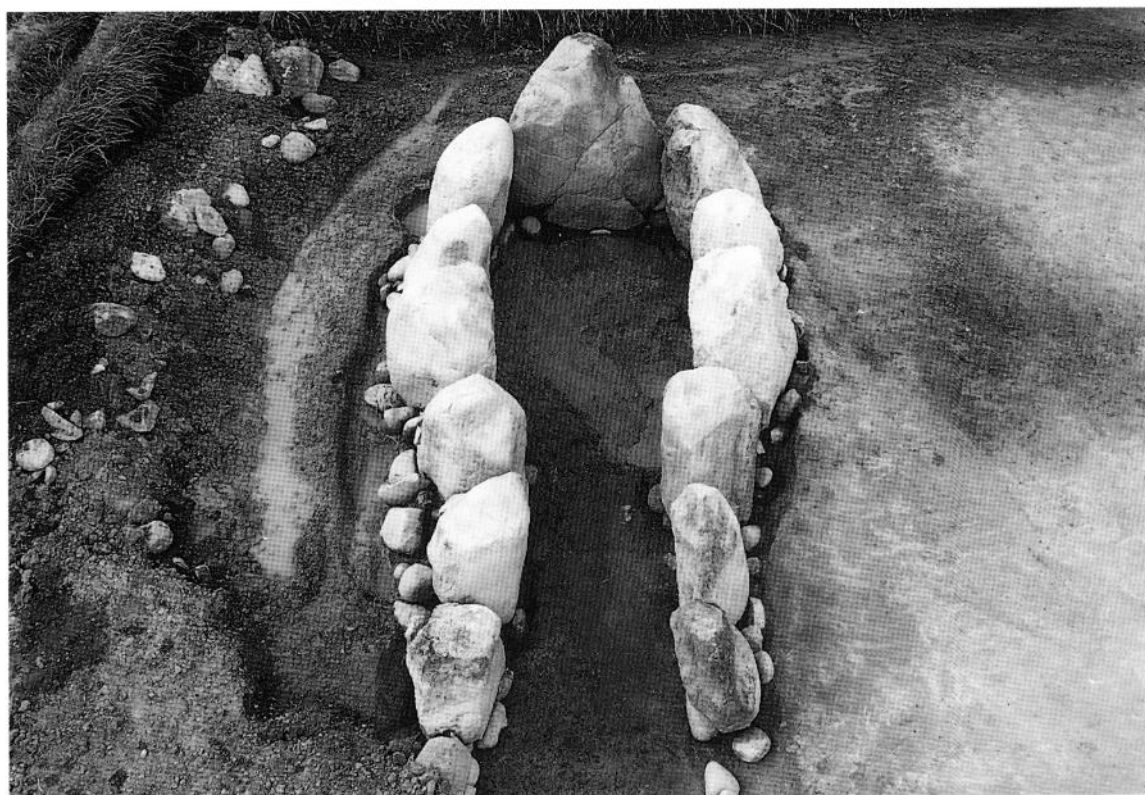
1. 石室奥壁（南から）



2. 石室玄門部（北から）



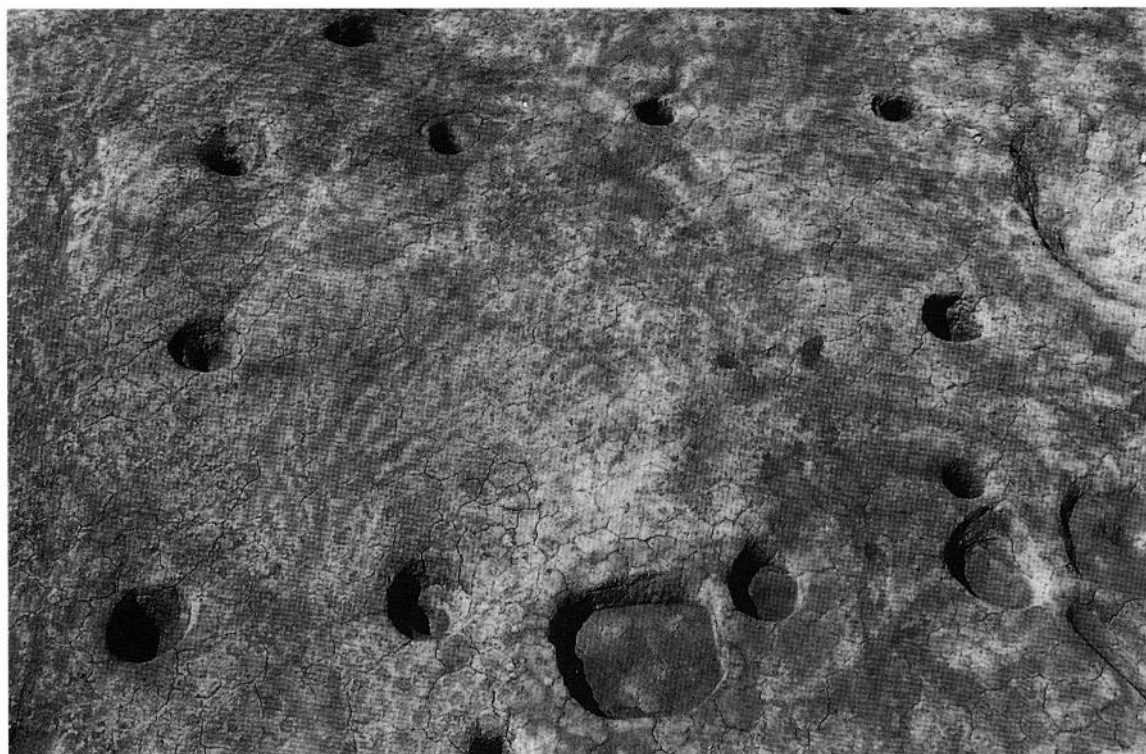
1. 石室玄門上部（北から）



2. 石室腰石と掘形（南から）



1. 1号住居跡（南から）



2. 2号掘立柱建物跡（南から）



1. 3号堀立柱建物跡（東から）



2. 2号落とし穴（南から）



Ⅲ区近世墓群全景（東から）



1. 1号近世墓（南東から）



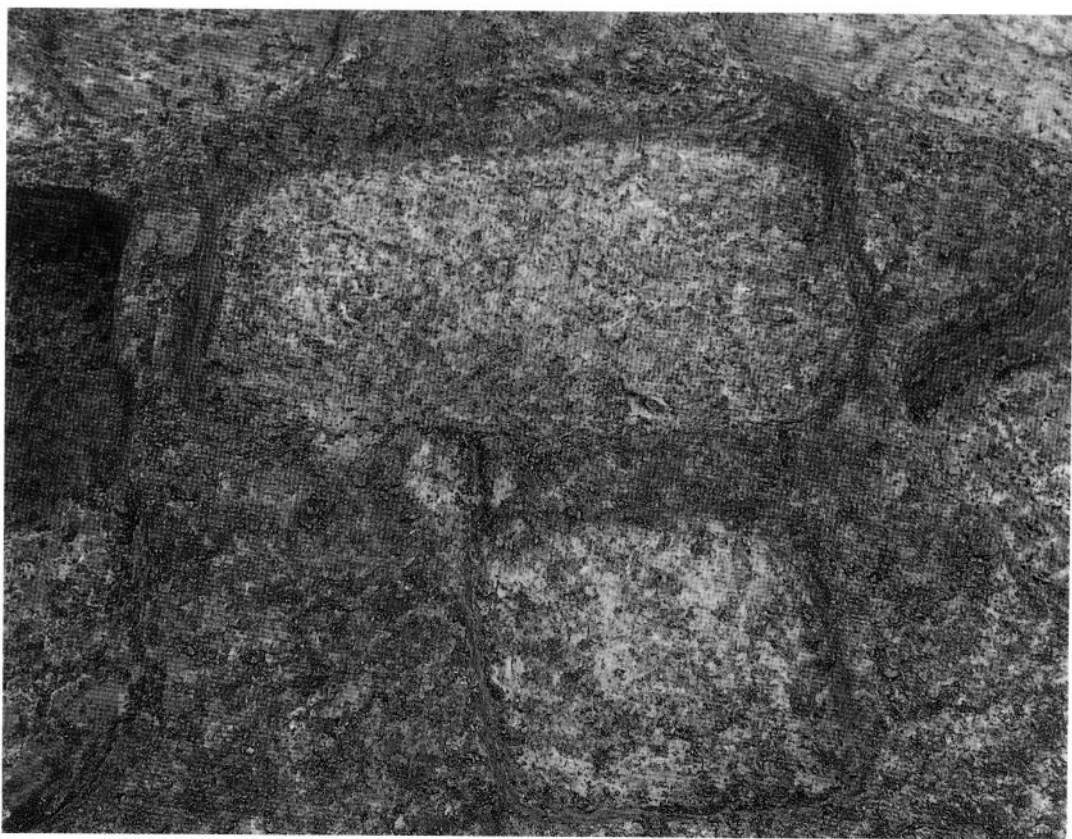
2. 2号近世墓（北東から）



1. 3号近世墓（東から）



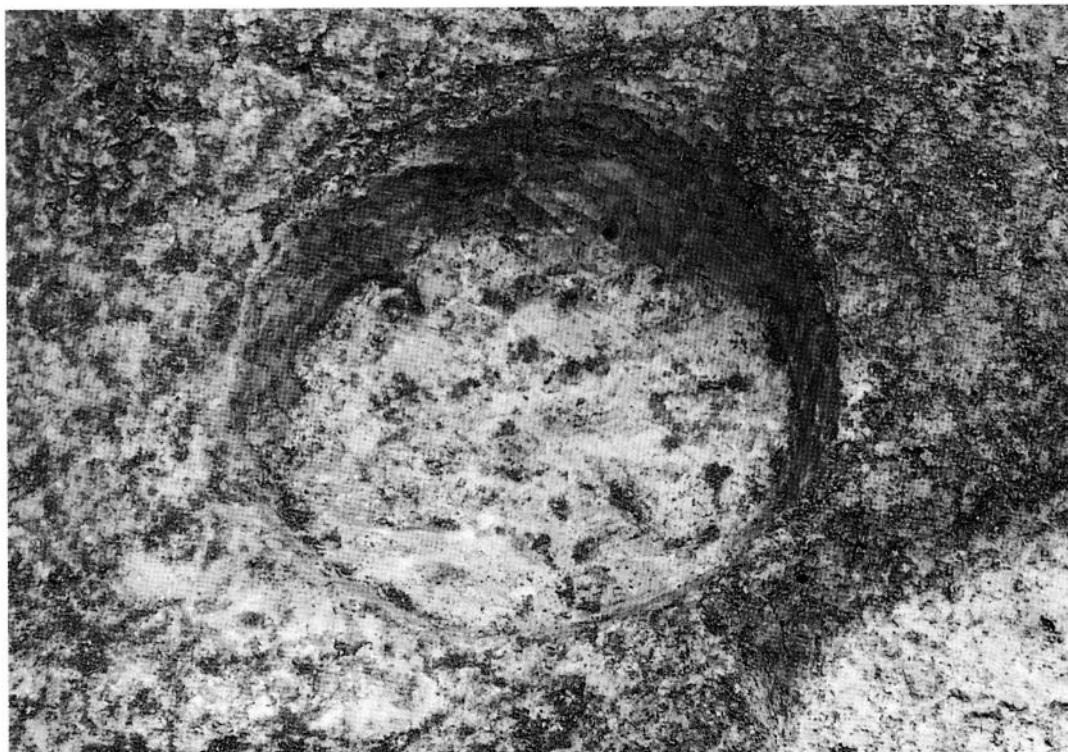
2. 4号近世墓（南東から）



1. 5・6号近世墓（東から）



2. 7号近世墓（南東から）



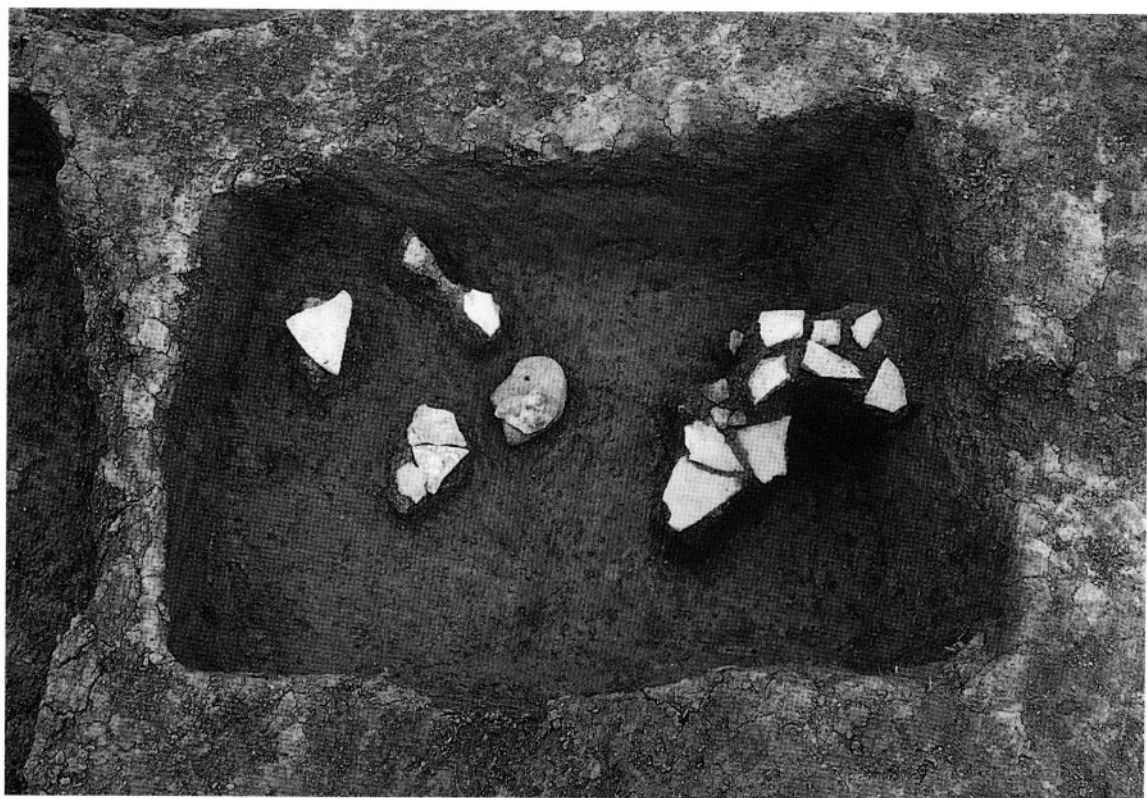
1. 8号近世墓（東から）



2. 9・10号近世墓（東から）



1. 11号近世墓（北西から）



2. 12号近世墓（北東から）



1. 13号近世墓（南東から）



2. 14・15号近世墓（東から）



1. 16号近世墓（南東から）



2. 17号近世墓（東から）



1. 18・19号近世墓（東から）



2. 20号近世墓（東から）



1. 21・22号近世墓（東から）



2. 23号近世墓（北から）



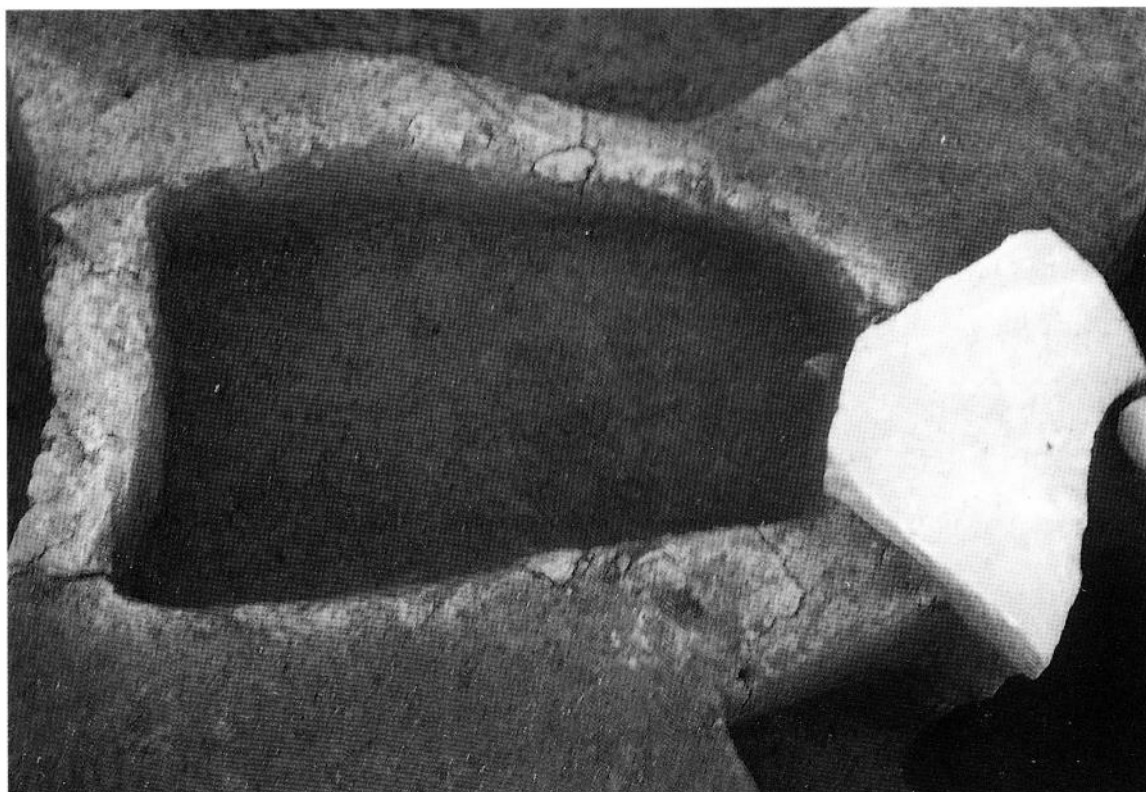
Ⅳ区近世墓群全景（空中写真、上空から）



1. 24号近世墓（南から）



2. 25号近世墓（東から）



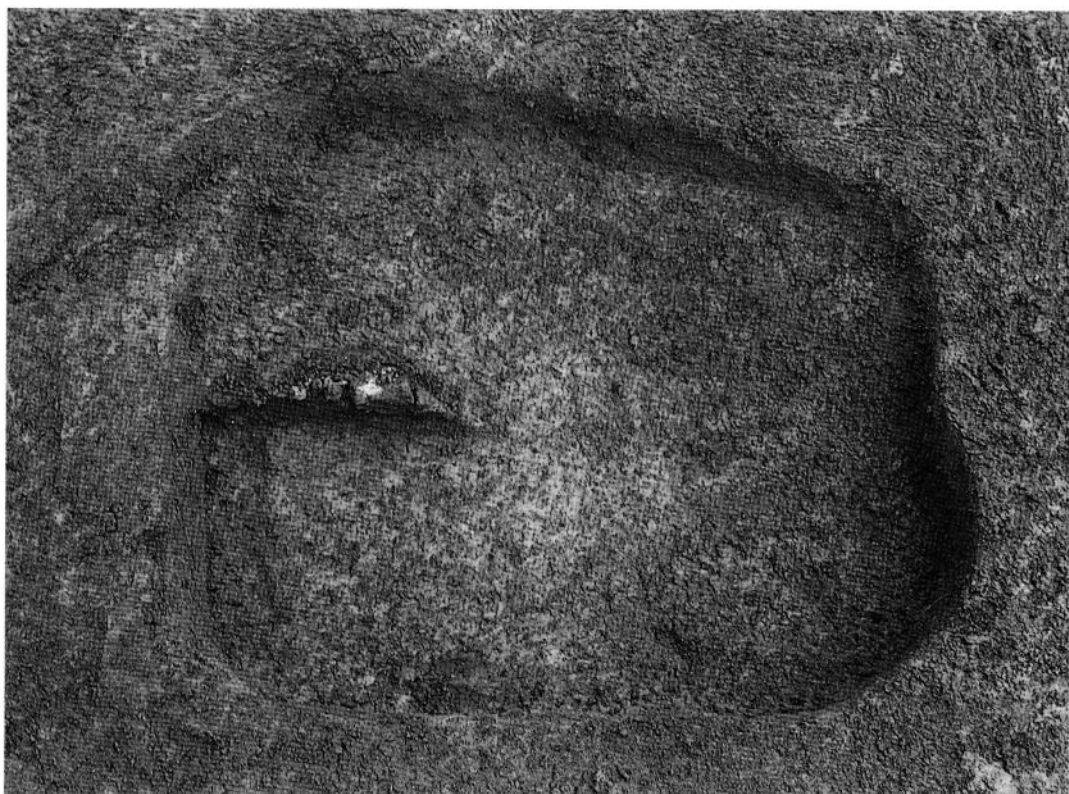
1. 26号近世墓（北から）



2. 27号近世墓（南東から）



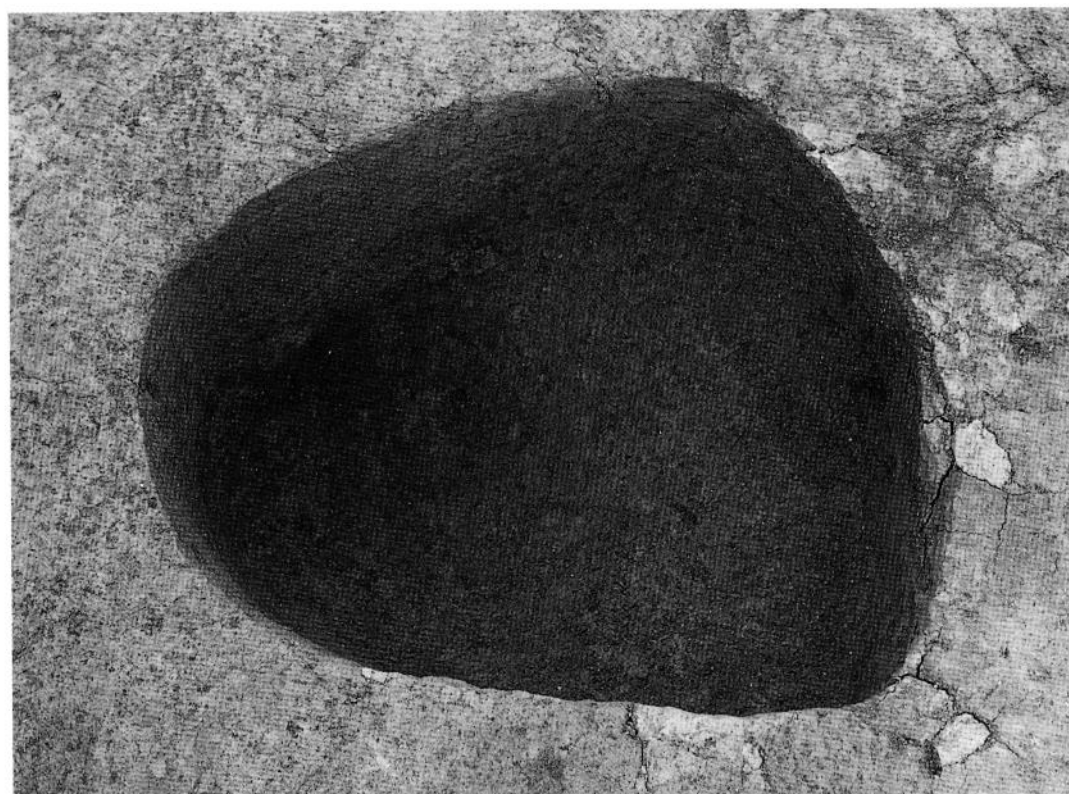
1. 28号近世墓（東から）



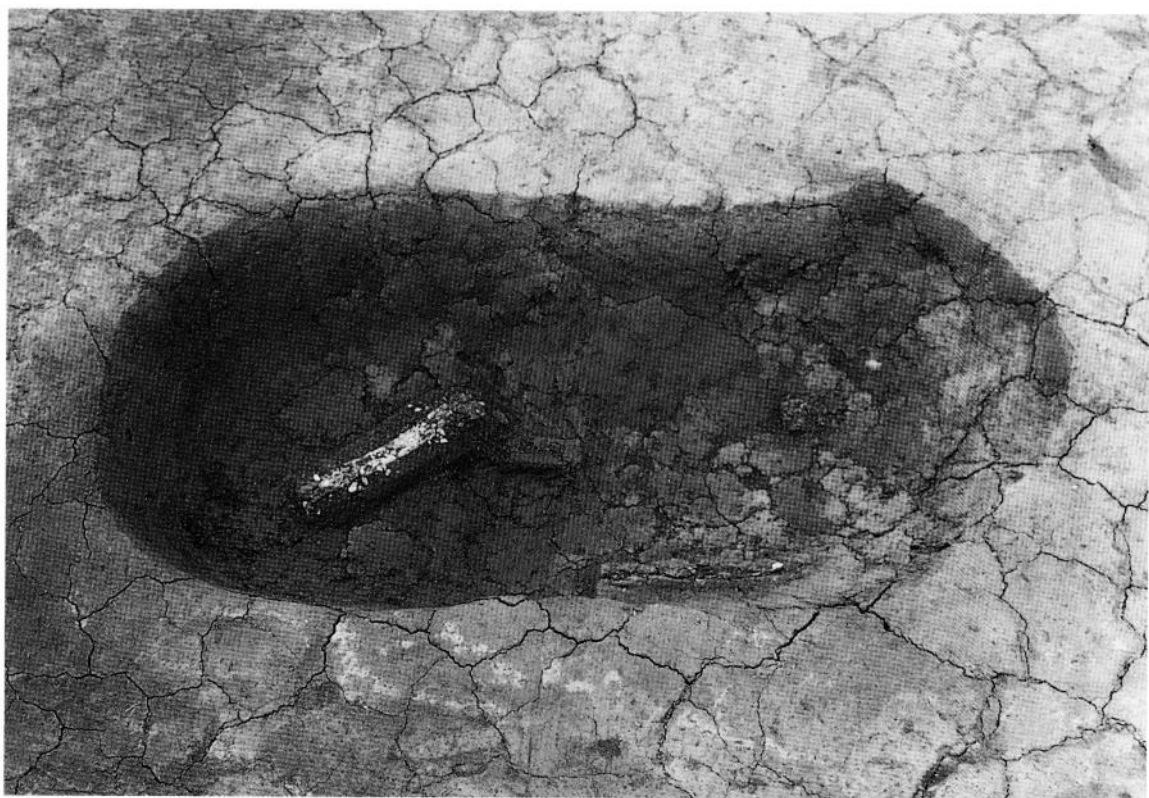
2. 29号近世墓（東から）



1. 30号近世墓（北から）



2. 31号近世墓（南東から）



1. 32号近世墓（東から）



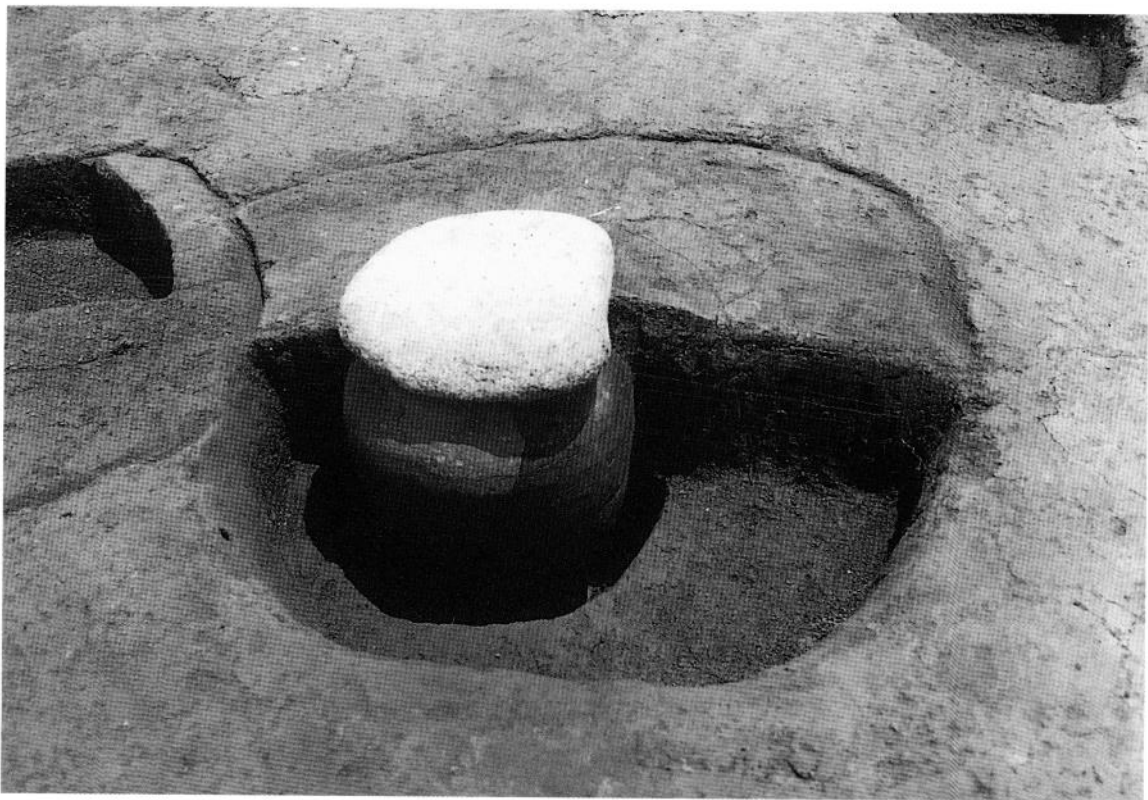
2. II区全景（空中写真、上空から）



1. 33号近世墓



2. 35号近世墓



1. 34号近世墓（南西から）



2. 30号近世墓（蓋石除去後、南西から）



1. 34号近世墓（蔵骨器、南西から）



2. 34号近世墓（蔵骨器内部状況、南西から）



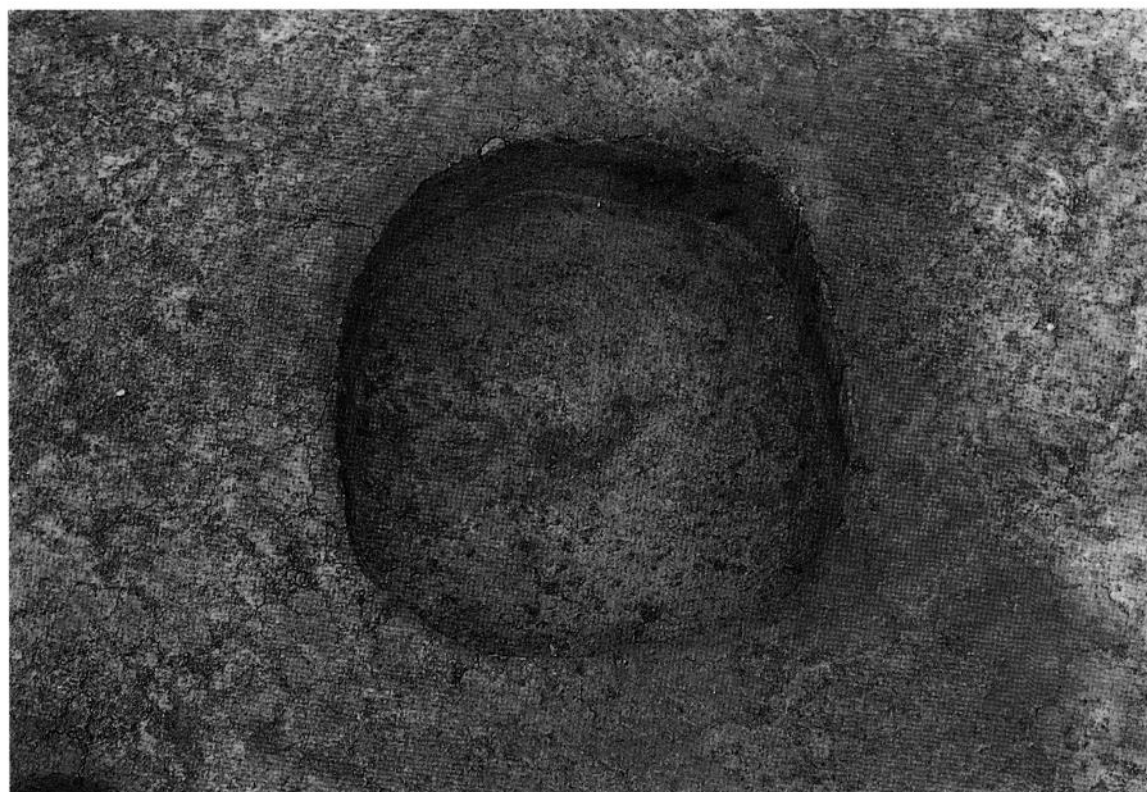
1. 1号焼土壙（北から）



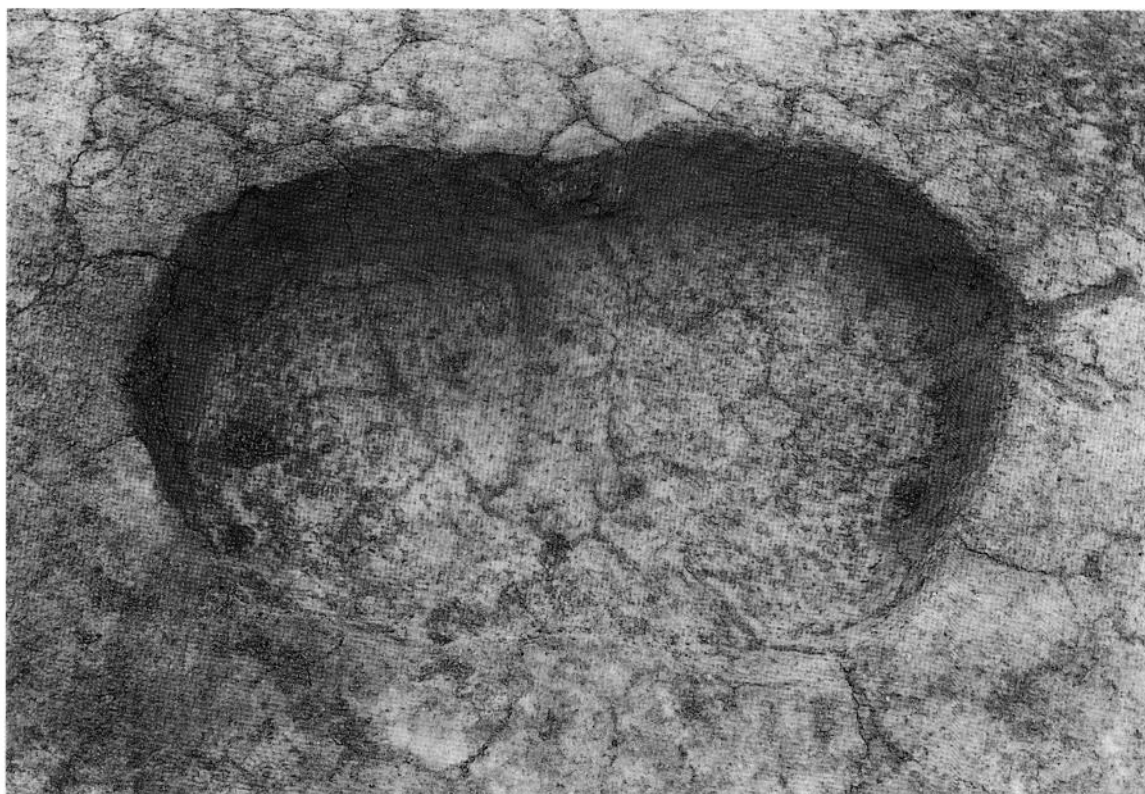
2. 2号焼土壙（西から）



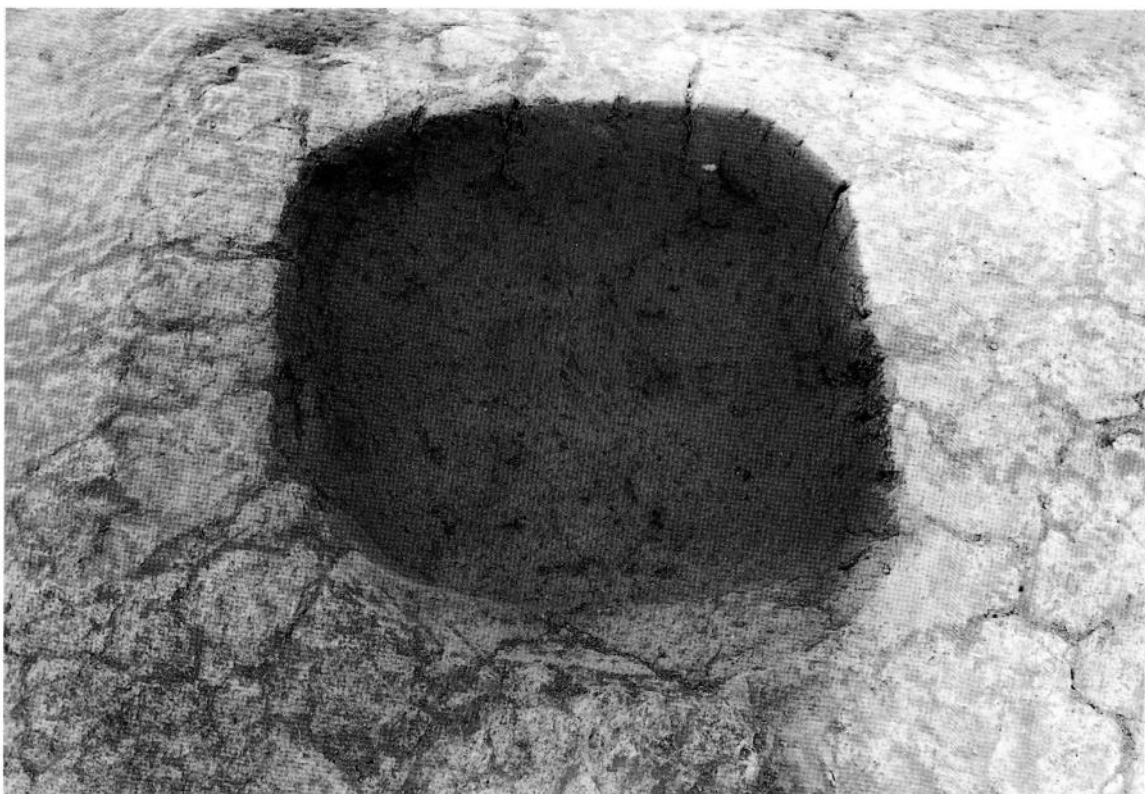
1. 3号焼土壇（南西から）



2. 4号焼土壇（南から）



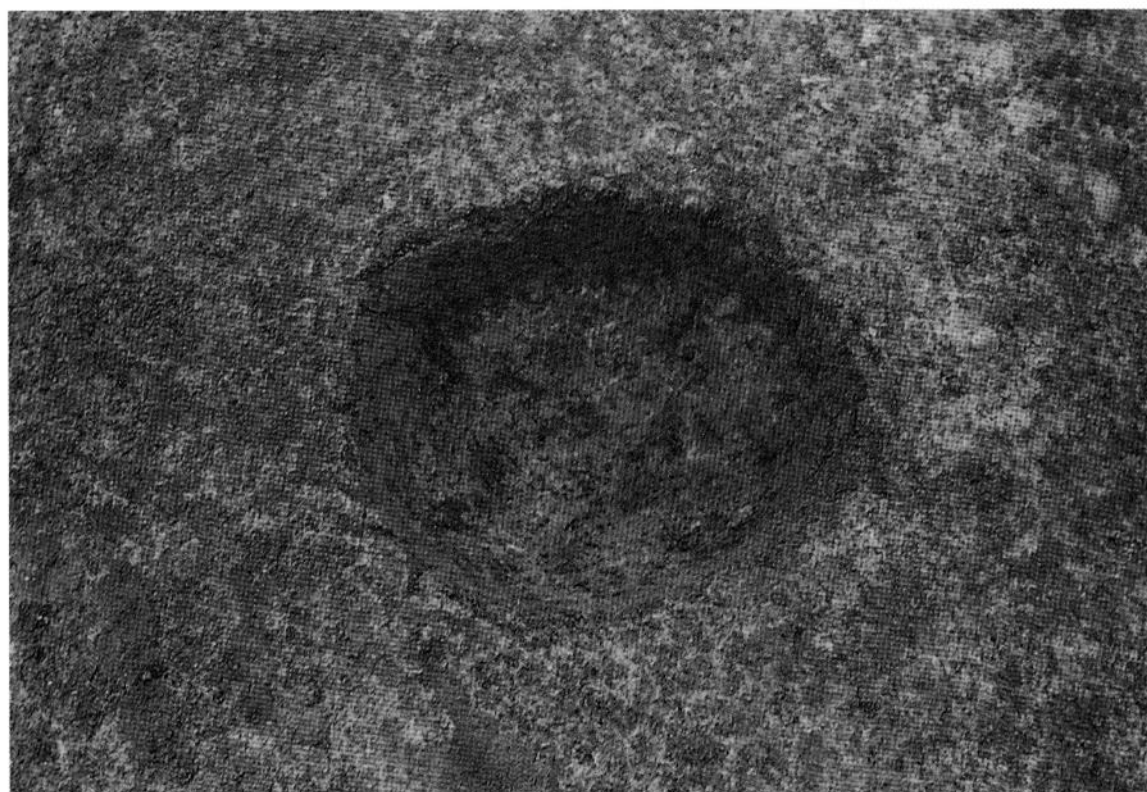
1. 5号焼土墳（西から）



2. 6号焼土墳（北西から）



1. 7号焼土壙（南東から）



2. 8号焼土壙（東から）



1



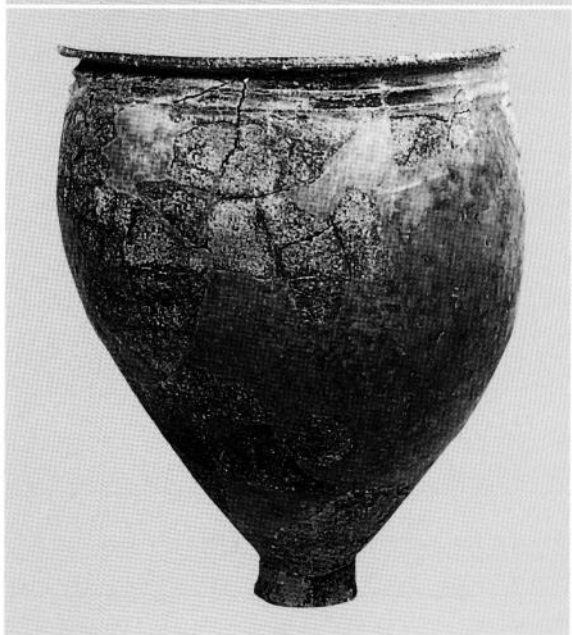
3



5



6



1

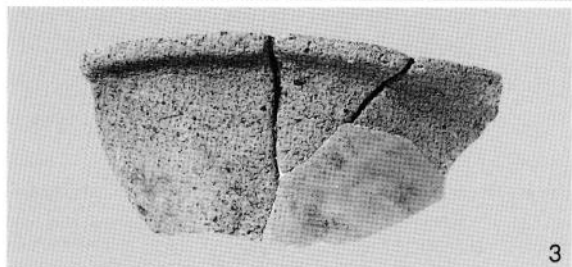


3

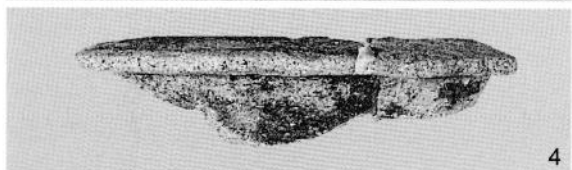
1号埋甕・5・35・37号墓出土土器



1



3



4



5



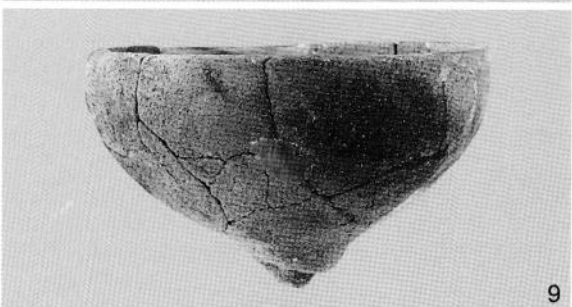
6



7



8

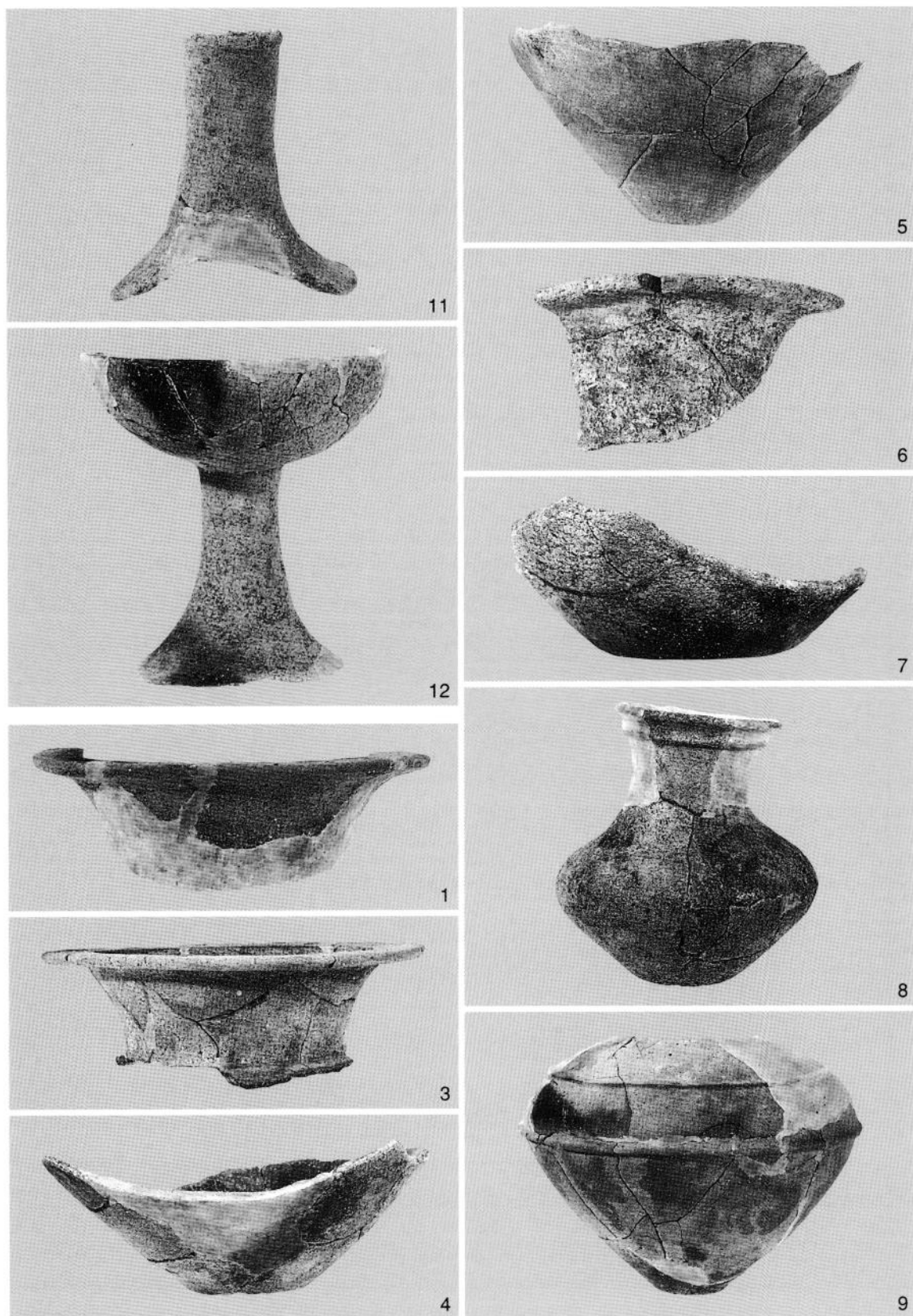


9

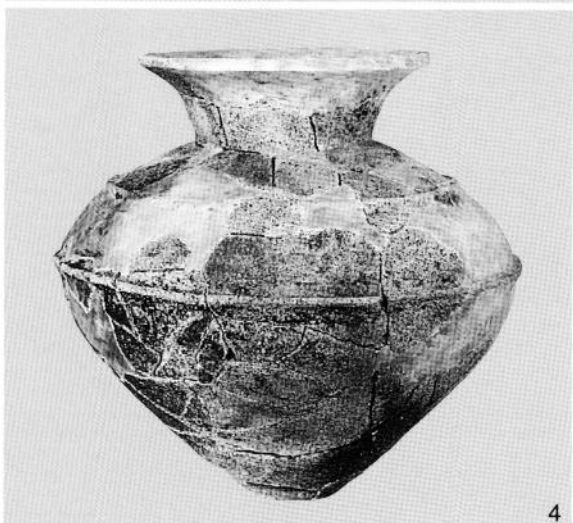
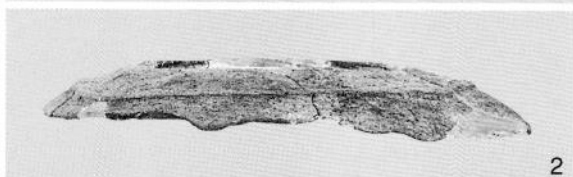
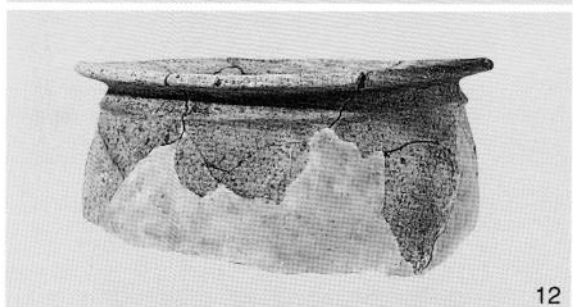
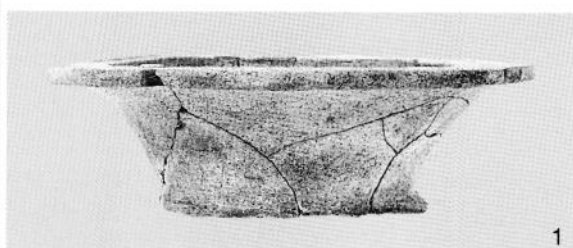
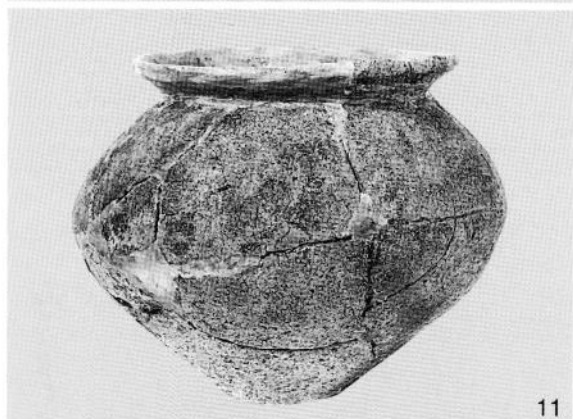
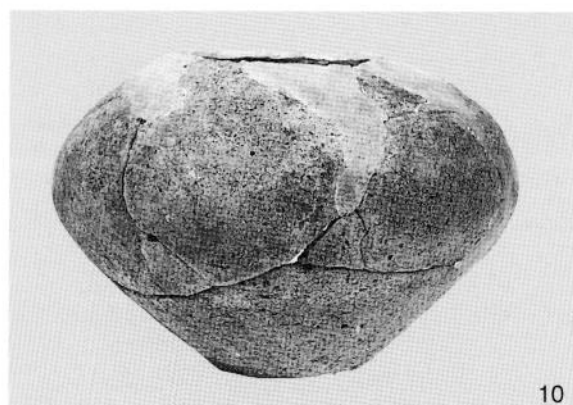


10

1 号祭祀土坑出土土器①



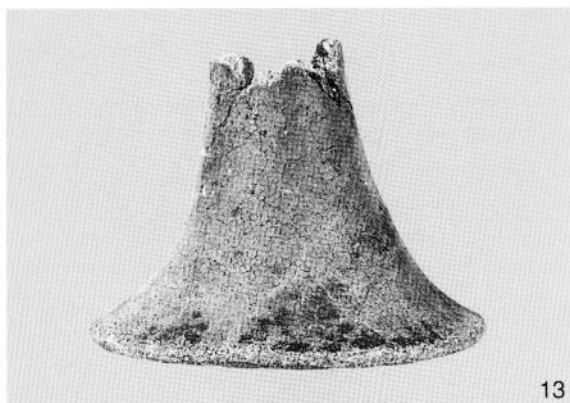
1号祭祀土坑出土土器②・2号祭祀土坑出土土器①



2号祭祀土坑出土土器②・3号祭祀土坑出土土器①



5



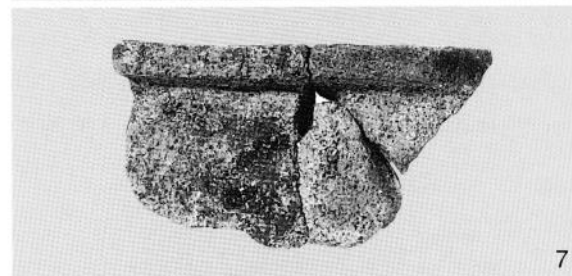
13



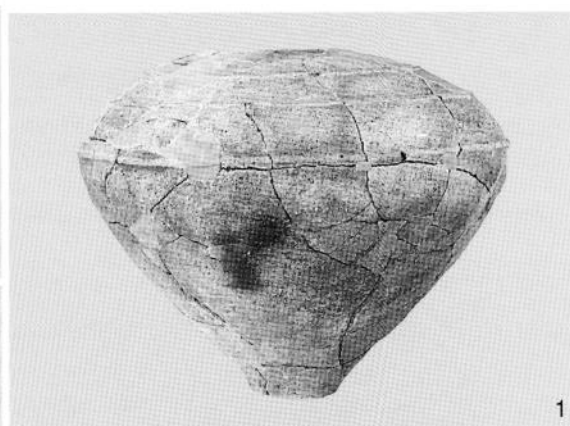
6



14



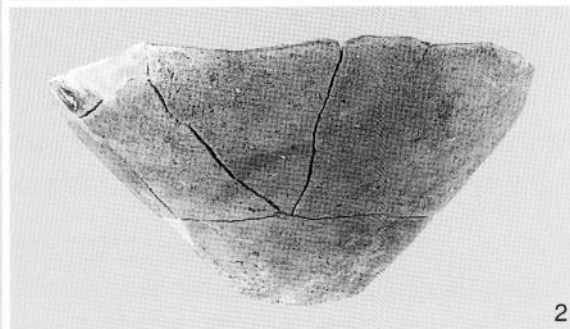
7



1

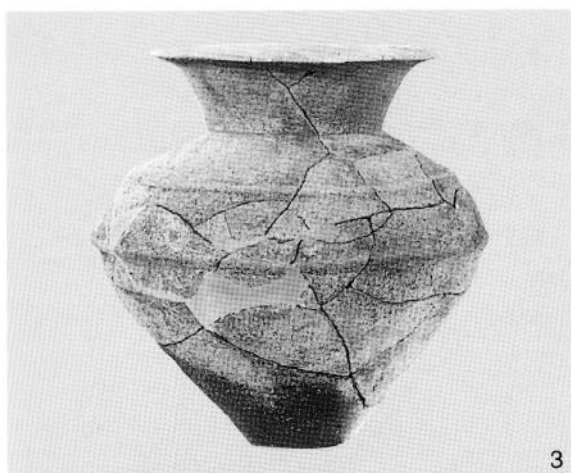


11

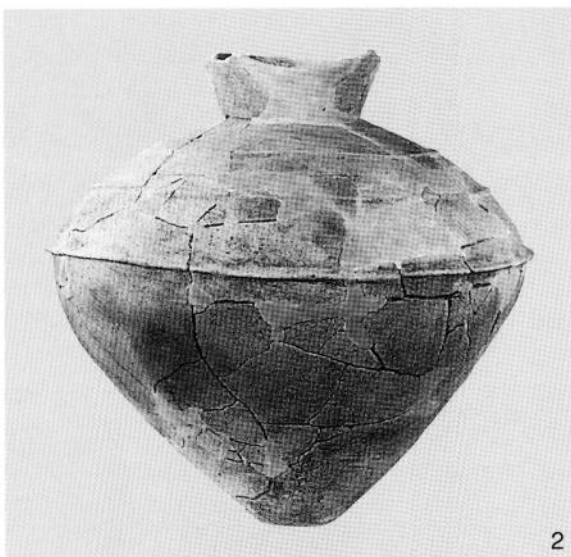


2

3号祭祀土坑出土土器②・4号祭祀土坑出土土器①



3



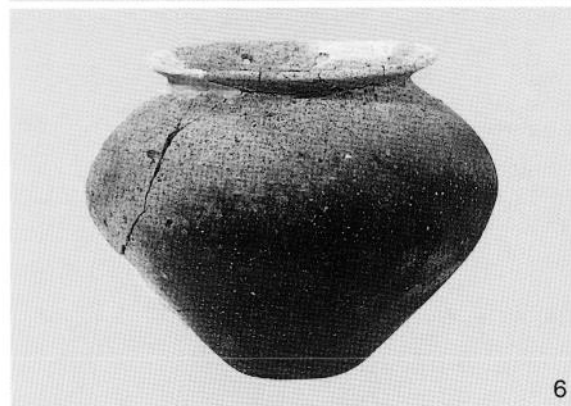
2



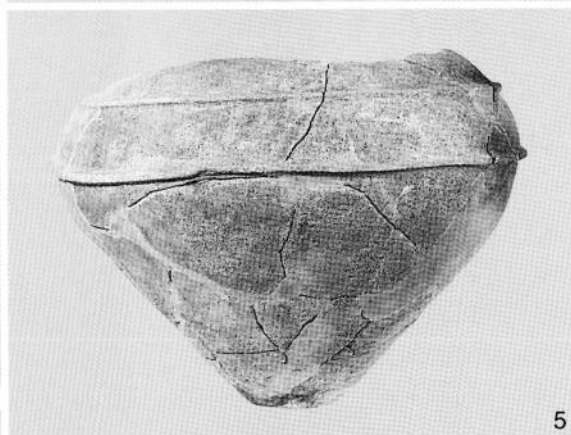
4



4



6



5



1



6

4号祭祀土坑出土土器②・5号祭祀土坑出土土器①



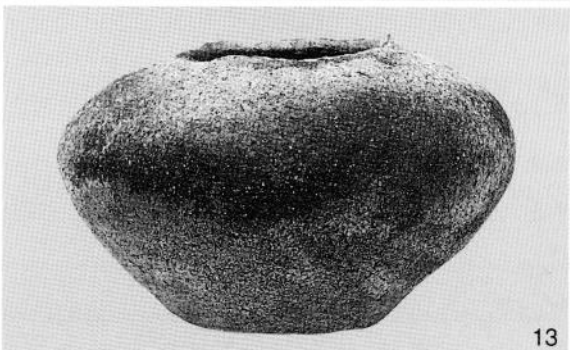
7



8



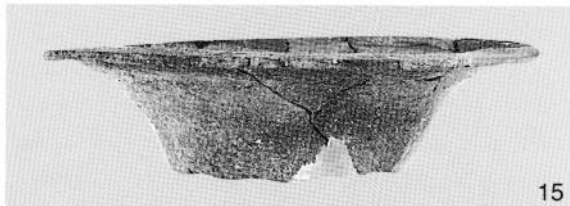
9



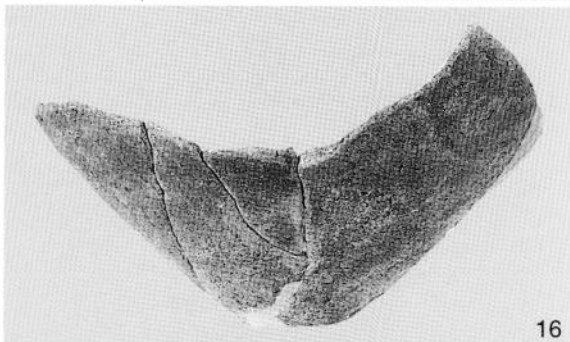
13



14



15



16



17

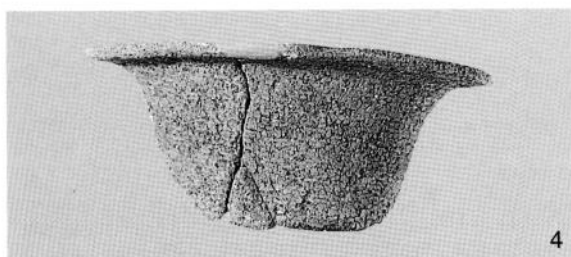


19

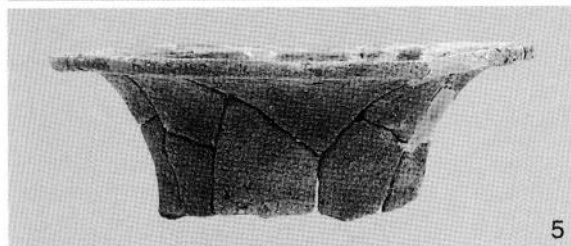


1

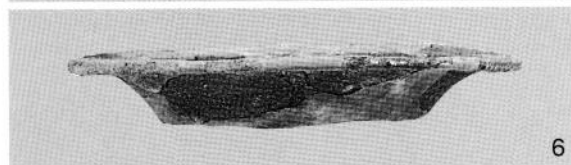
5号祭祀土坑出土土器②・周溝出土土器①



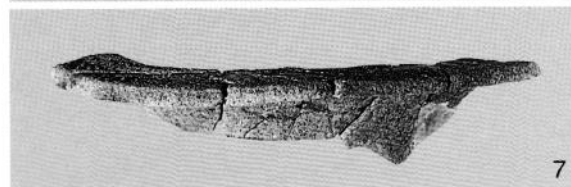
4



5



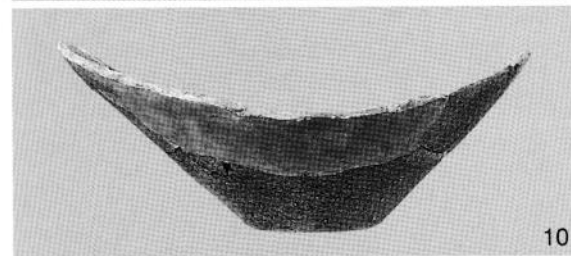
6



7



9



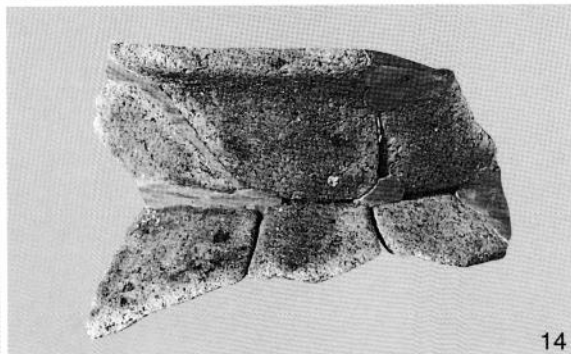
10



11



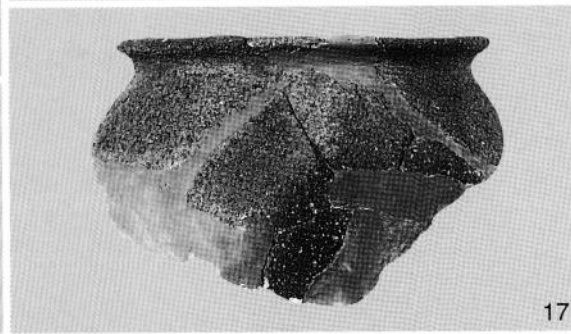
12



14



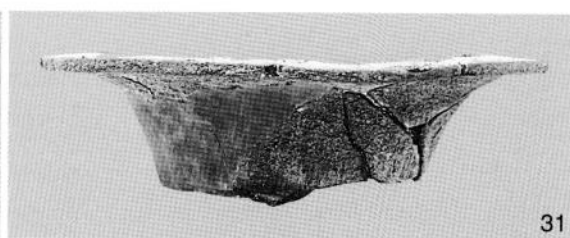
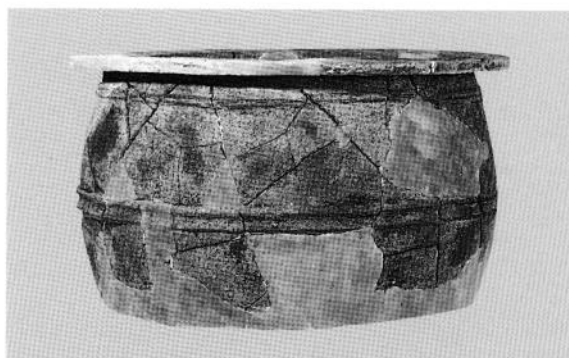
15



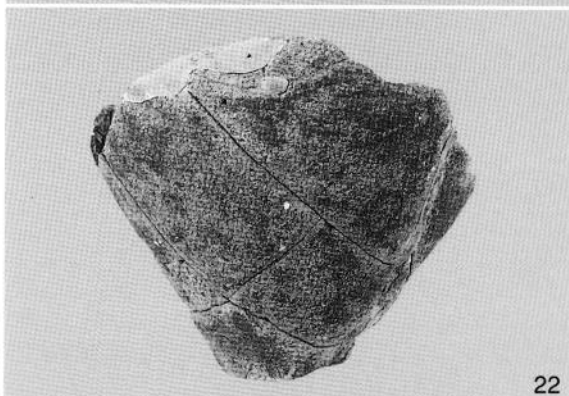
17



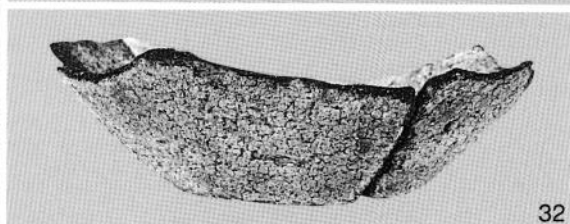
19



31



22



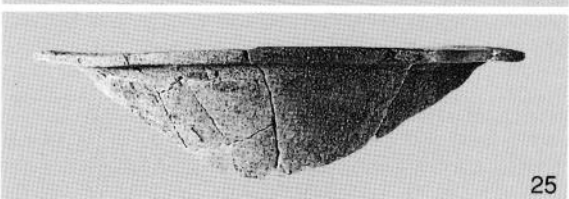
32



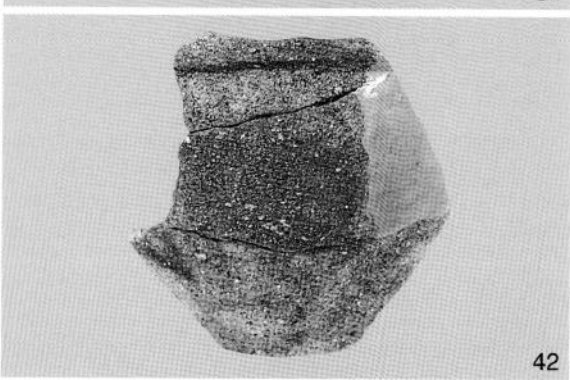
24



34



25



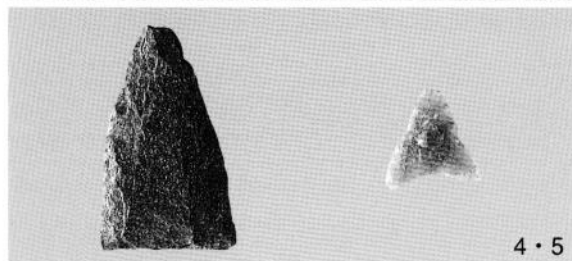
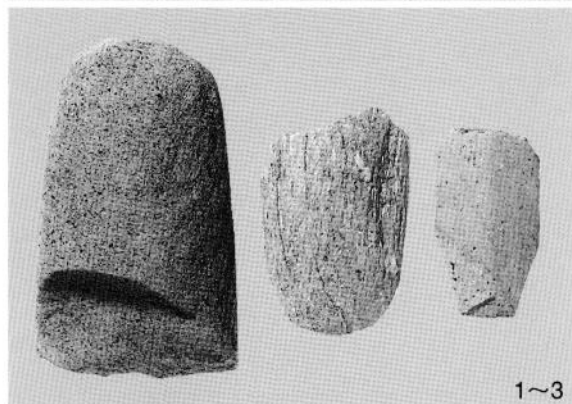
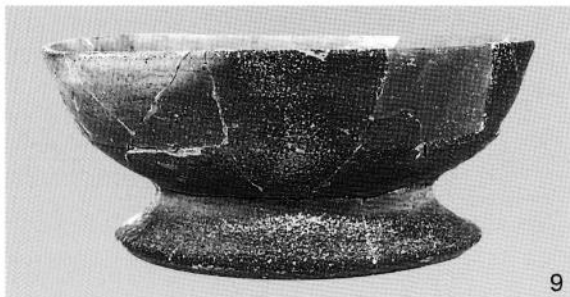
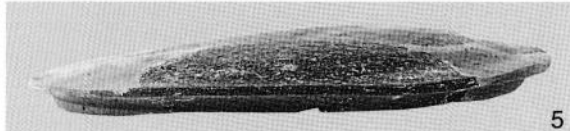
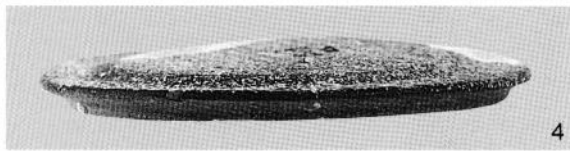
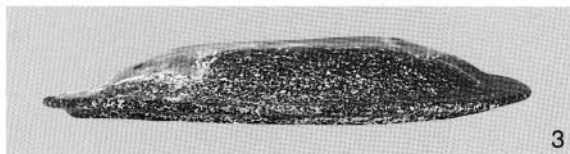
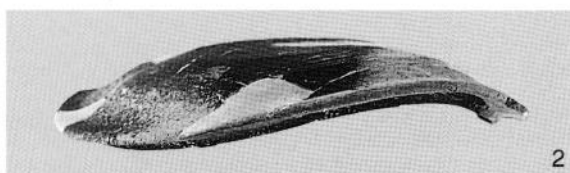
42



29



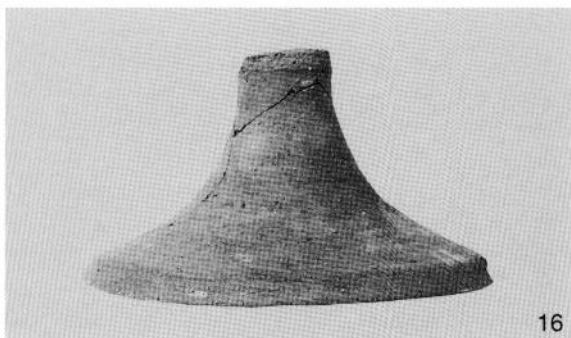
43



周溝出土土器④・石器・下野地2号墳出土土器①



11



16



12



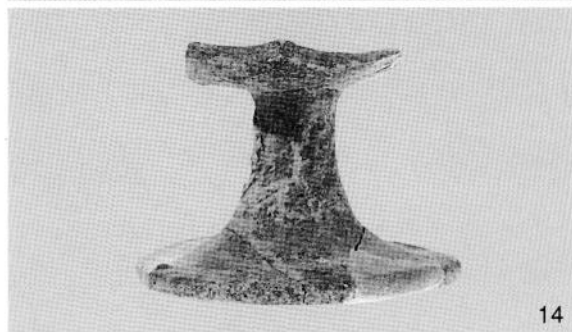
17



13



18



14



19

下野地 2 号墳出土土器②



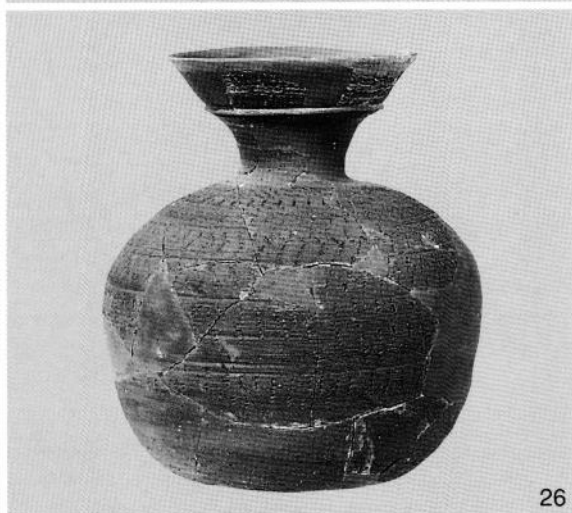
20



25



21



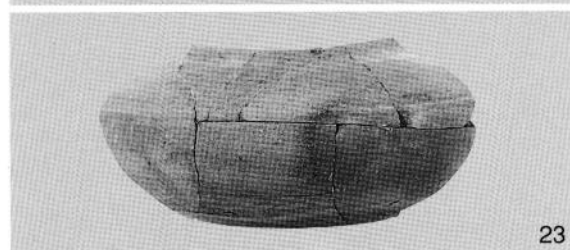
26



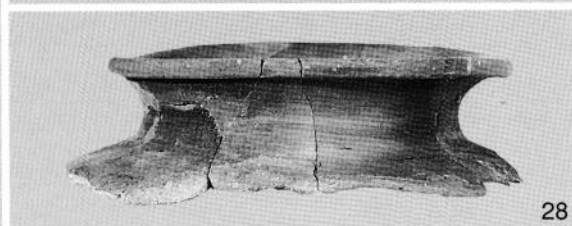
22



27



23

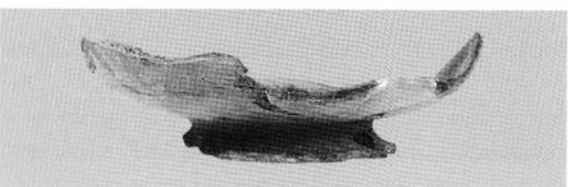
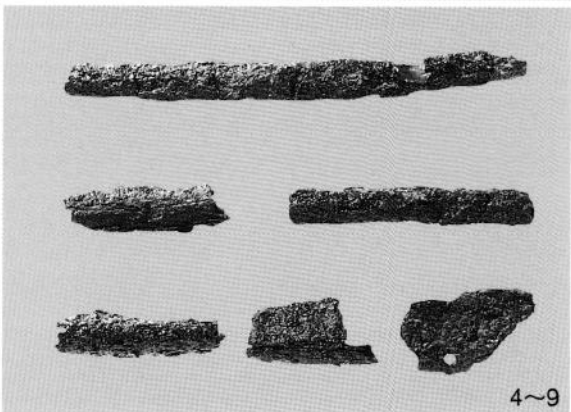
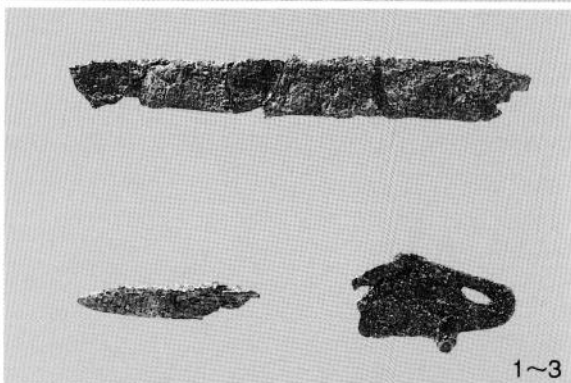
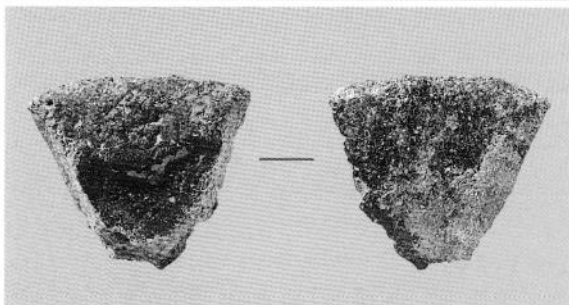
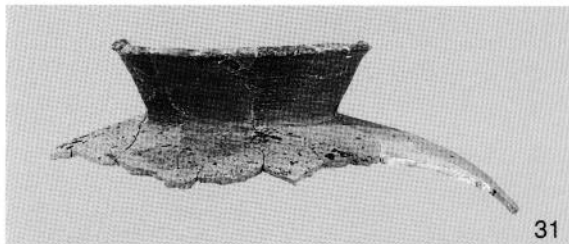


28

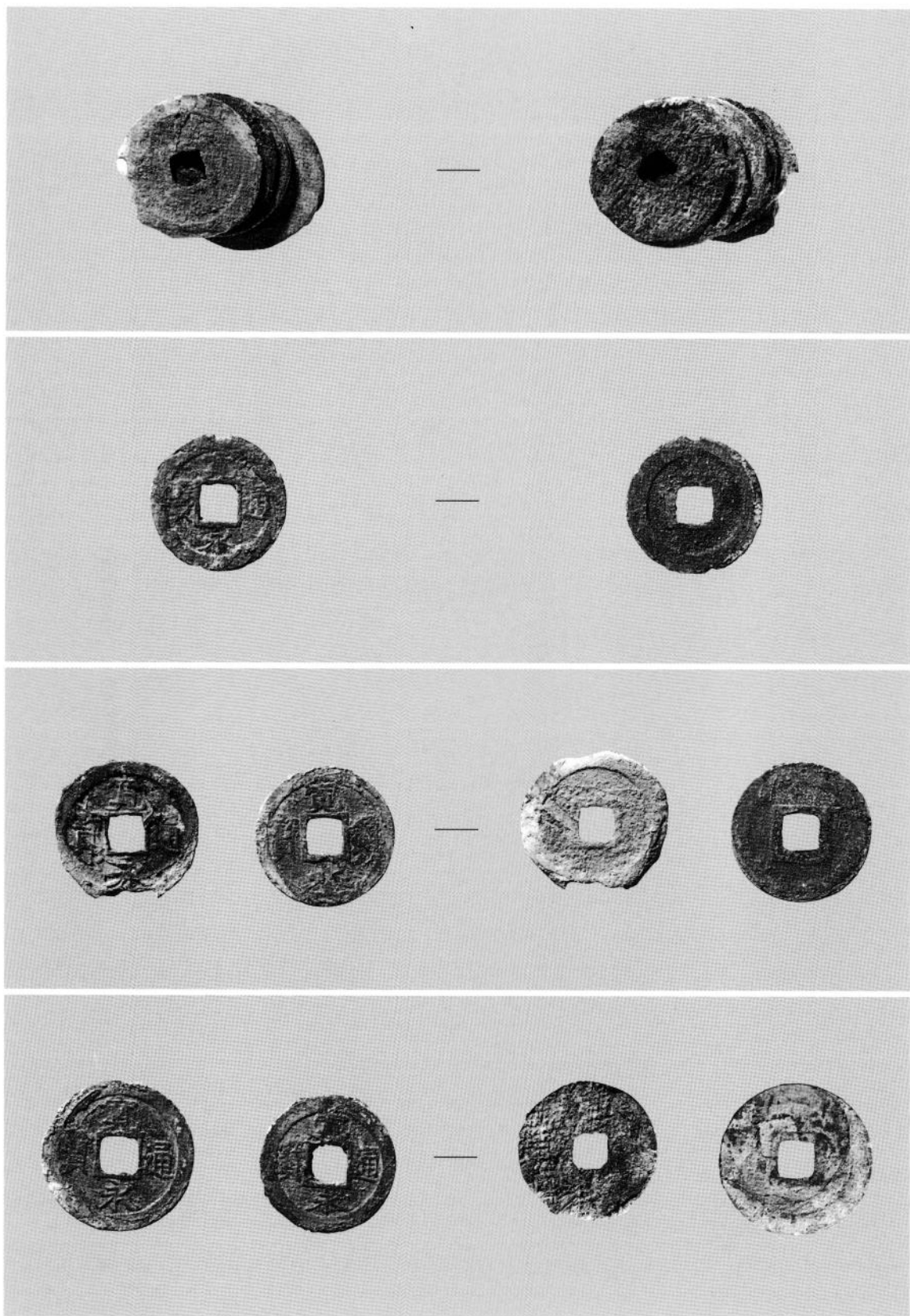


24

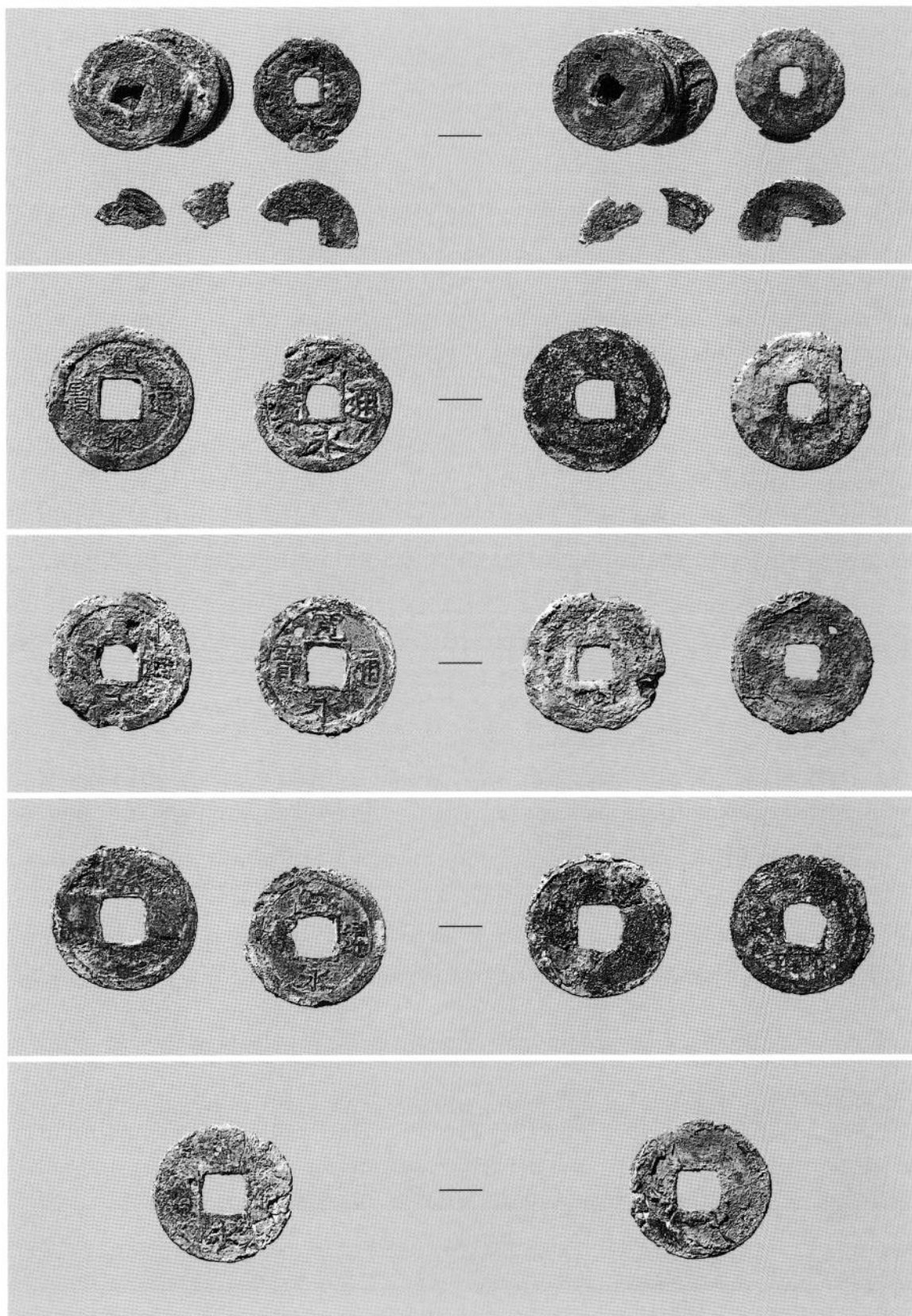
下野地 2 号墳出土土器③



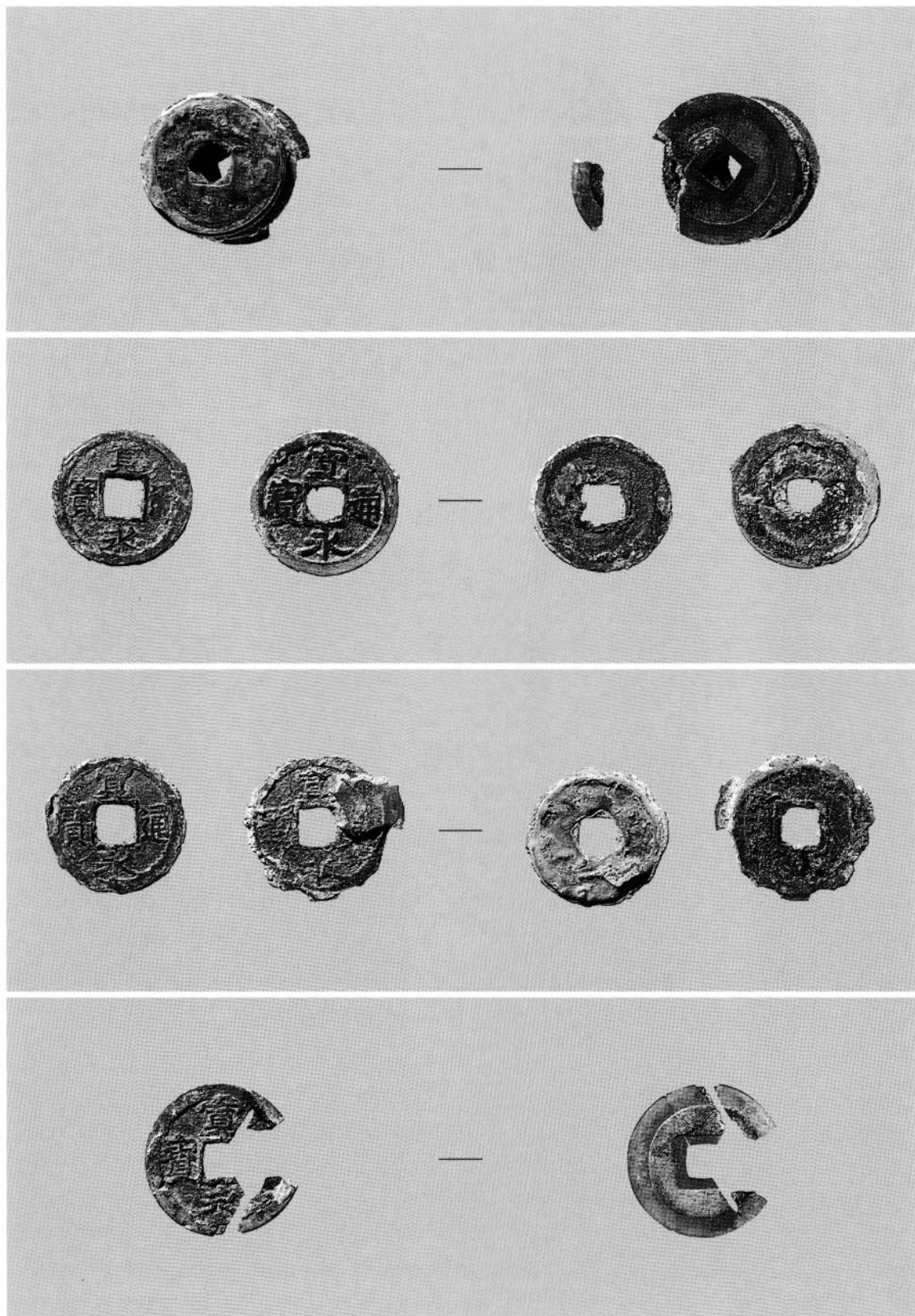
下野地 2 号墳出土土器④・装身具・鉄器・1 号住居跡出土土器・2 号掘立柱建物跡出土土器



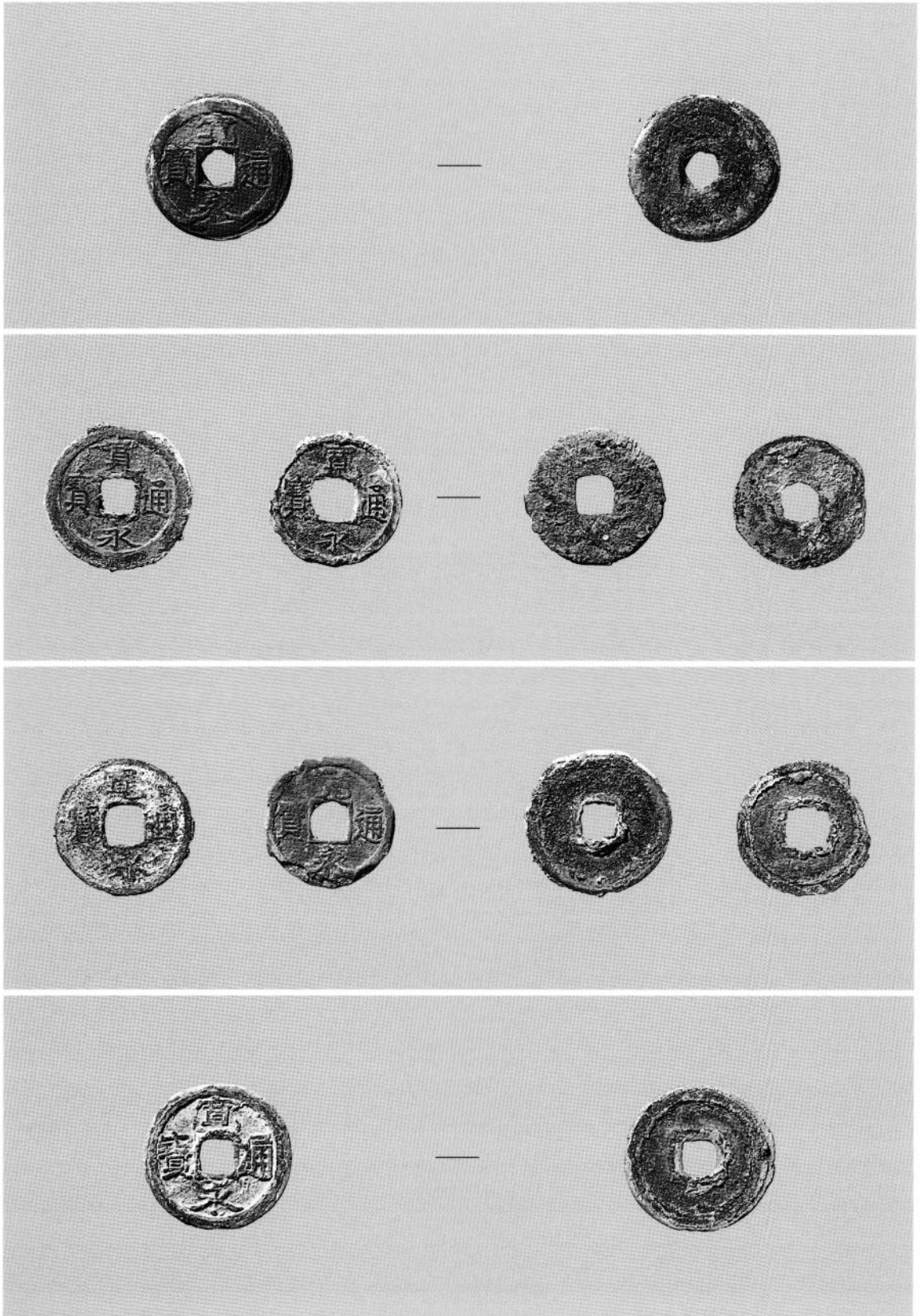
4 号近世墓出土遗物



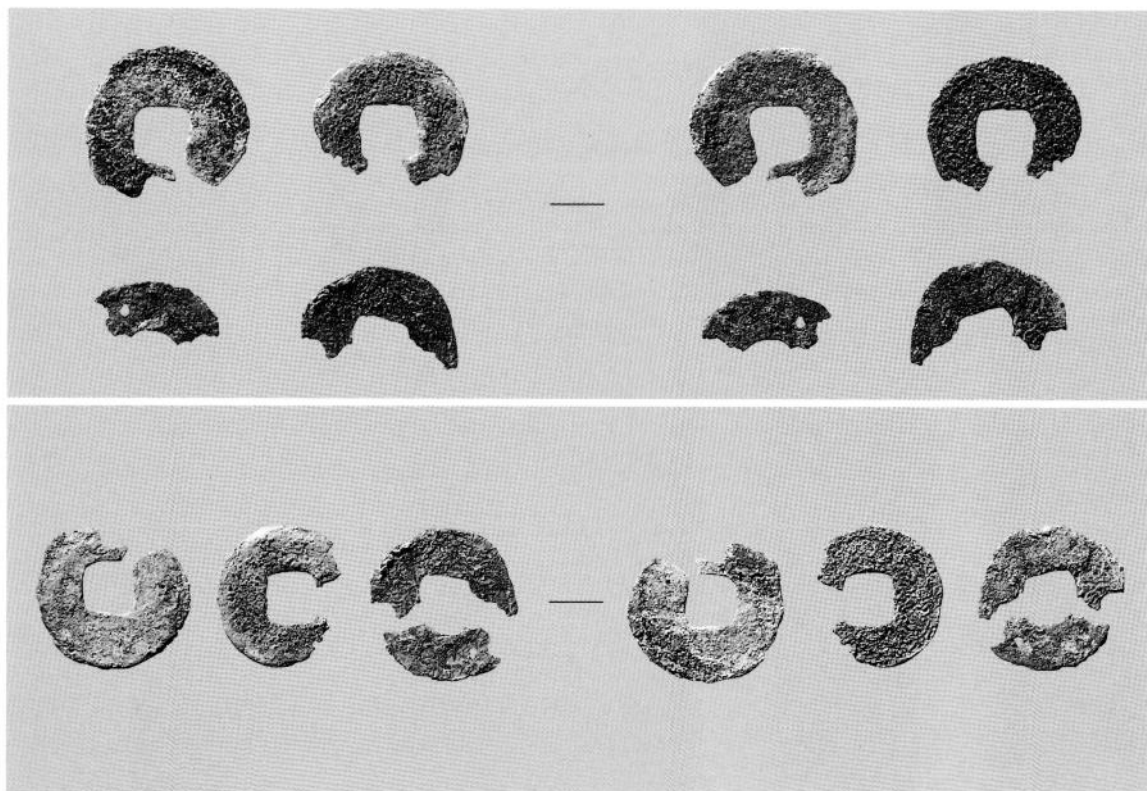
7号近世墓出土遗物



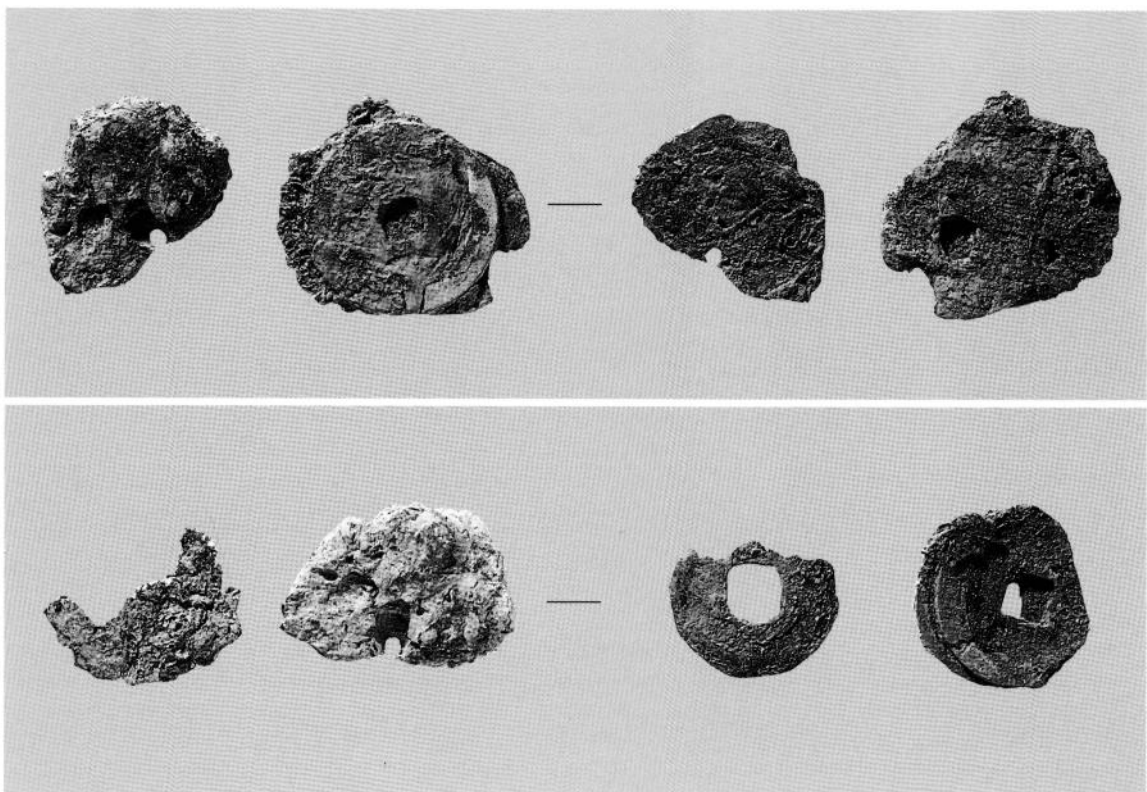
11号近世墓出土遺物



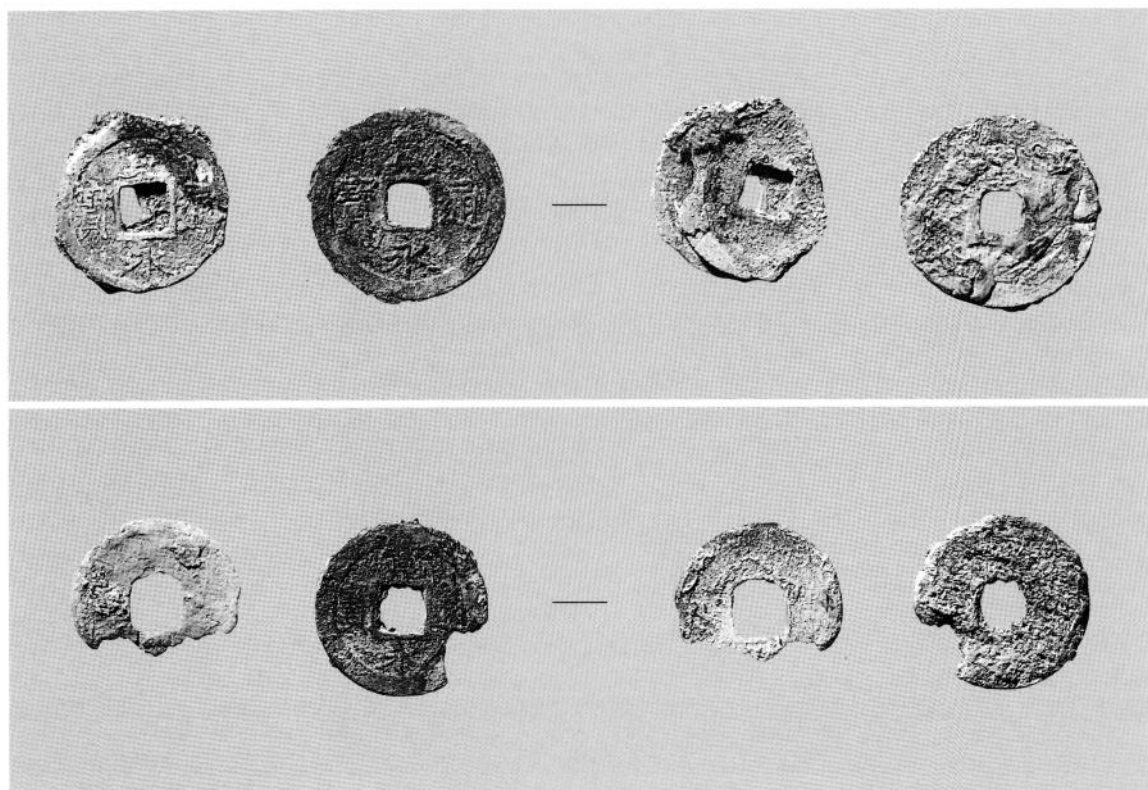
12号近世墓出土遺物



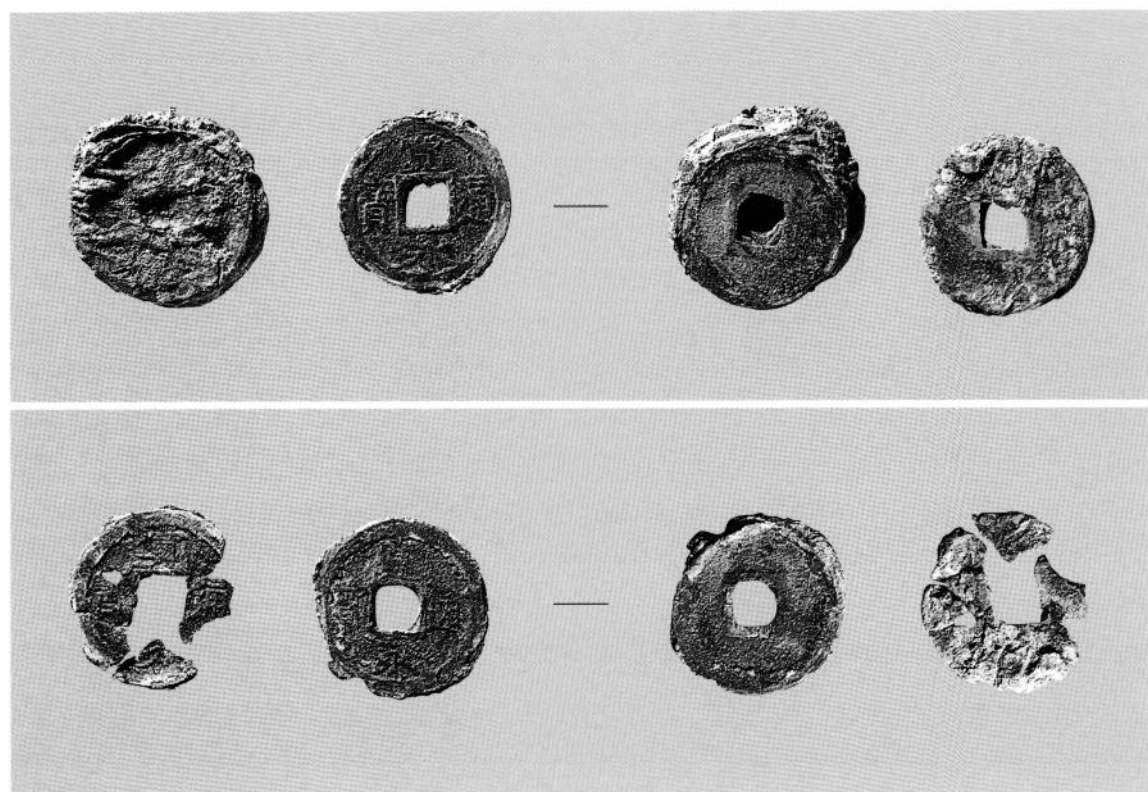
14号近世墓出土遺物



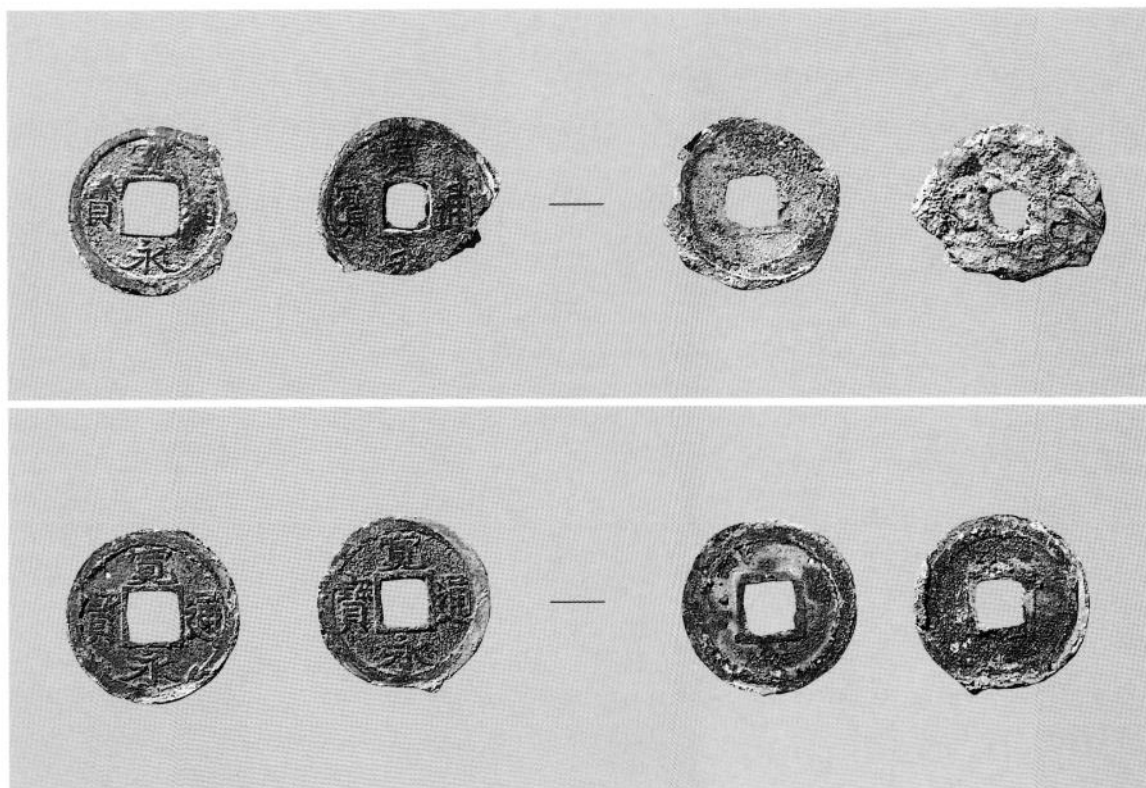
17号近世墓出土遺物①



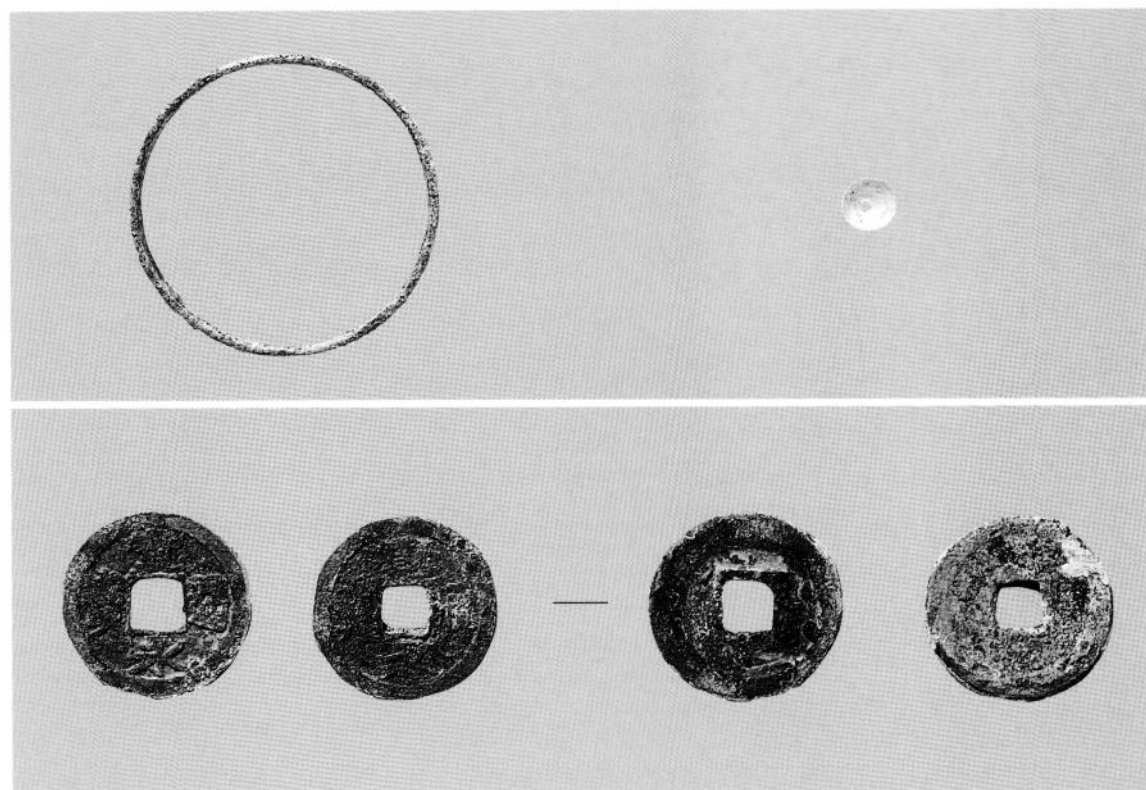
17号近世墓出土遺物②



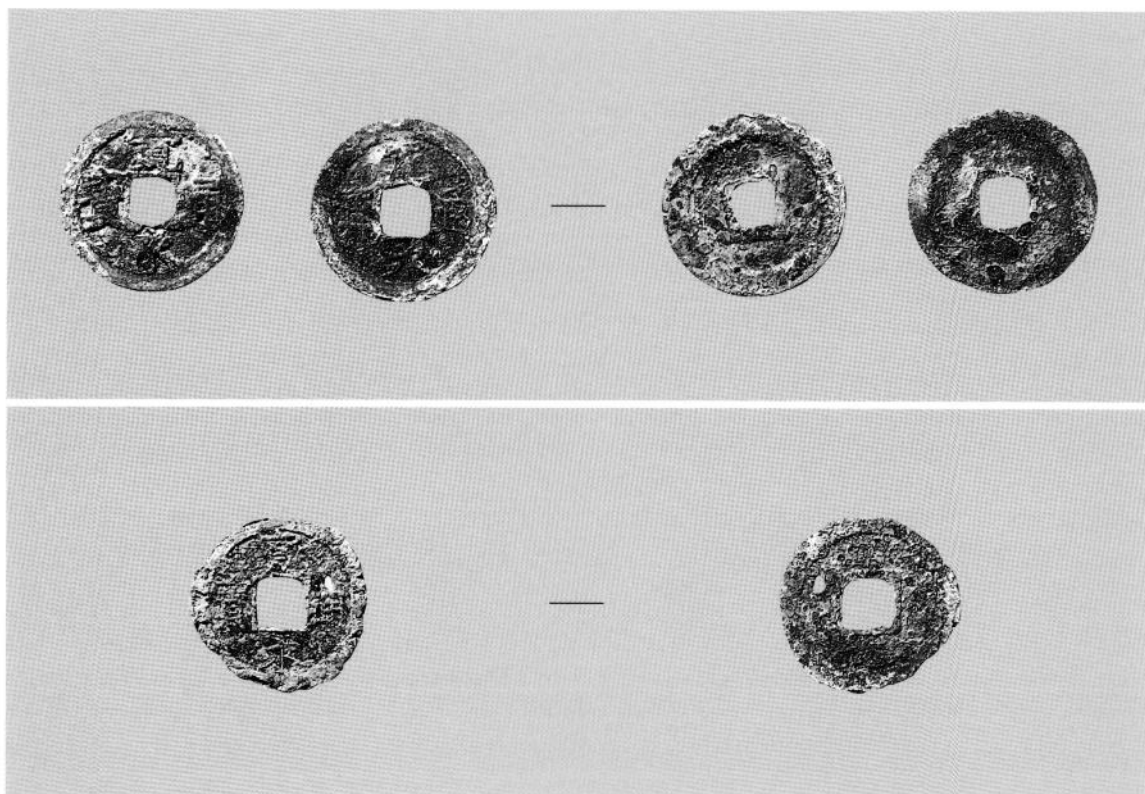
20号近世墓出土遺物①



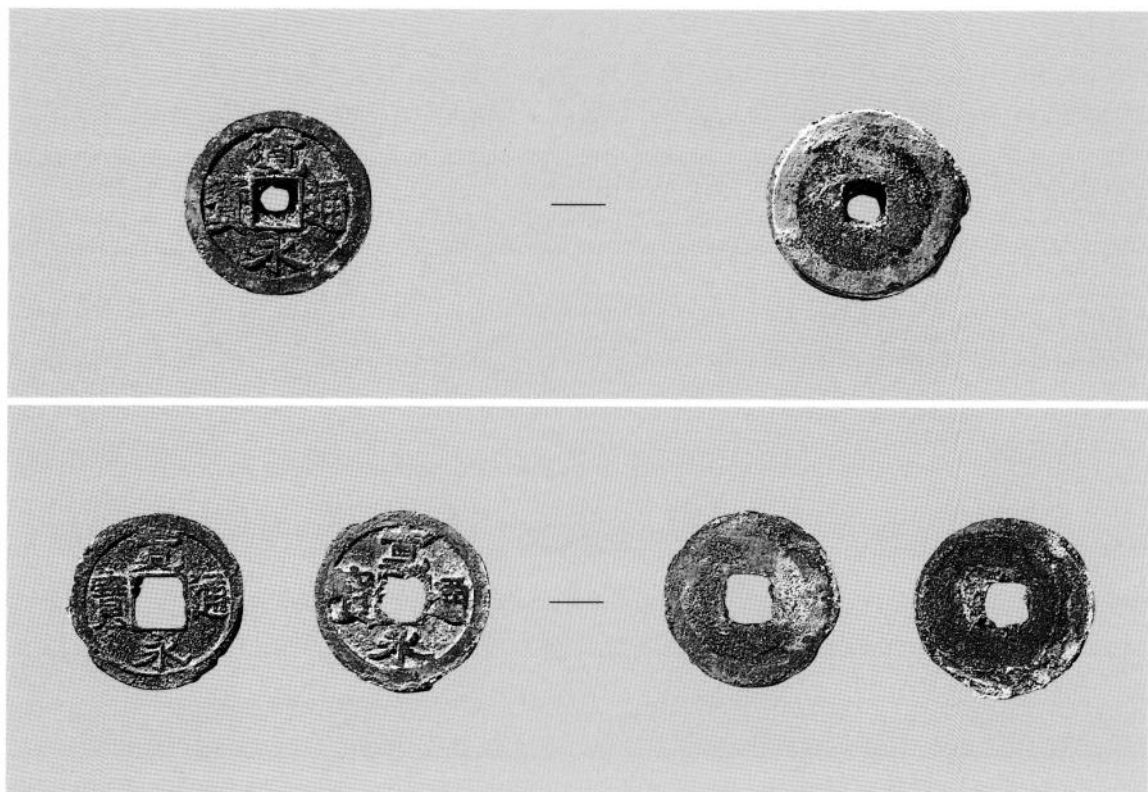
20号近世墓出土遺物②



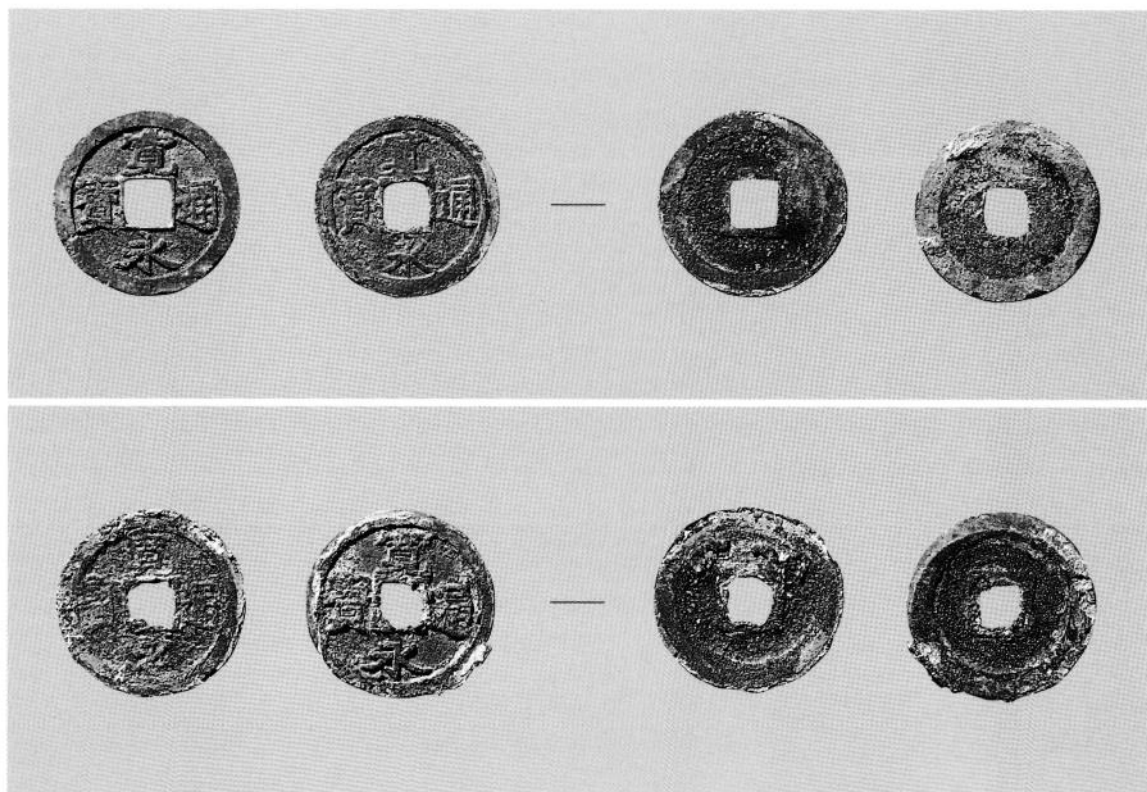
24号近世墓出土遺物①



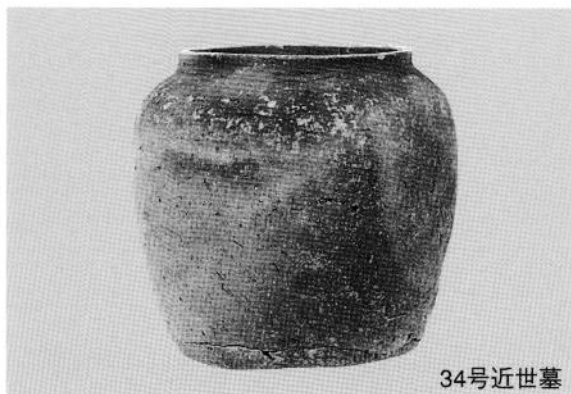
24号近世墓出土遺物②



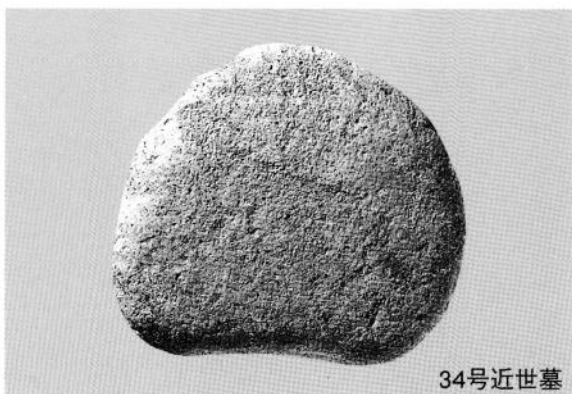
28号近世墓出土遺物①



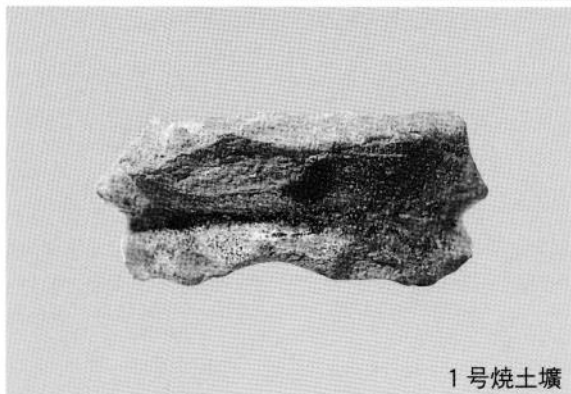
28号近世墓出土遗物②



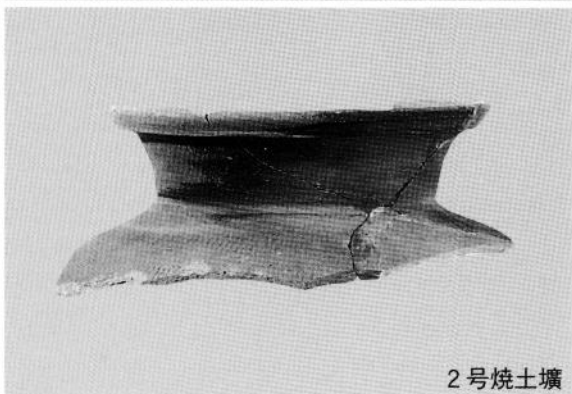
34号近世墓



34号近世墓



1号烧土坑



2号烧土坑

34号近世墓藏骨器·34号近世墓盖石·1号烧土坑出土遗物·2号烧土坑出土遗物



表採資料（墓碑）

報告書抄録

ふりがな	おおつかもと いせき							
書名	大塚本遺跡							
副書名	福岡県築上郡大平村大字下唐原所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	副島邦弘、小川泰樹・中橋孝博							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおつかもと いせき 大塚本遺跡	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 たいへいむらおおあざしもとうばる 大平村大字下唐原 1342他	40645	960183	33度 33分 59秒	131度 10分 24秒	910501 } 911031	9,100m ²	道路（豊前 バイパス） 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大塚本遺跡		弥生時代	土壙墓 34 石棺墓 2 甕棺墓 1 墳丘墓 1 祭祀土坑 5	弥生土器 須恵器 装身具類 鉄器 銅銭 墓碑 蔵骨器 人骨			带状に連なる墳墓群の 一角に溝で長方形に区 画した墳丘墓がある。 単室の横穴式石室を主 体部にもつ	
		古墳時代	古墳(円墳) 1					
		江戸時代	近世墓 35					

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 9	登録番号 13

大 塚 本 遺 跡

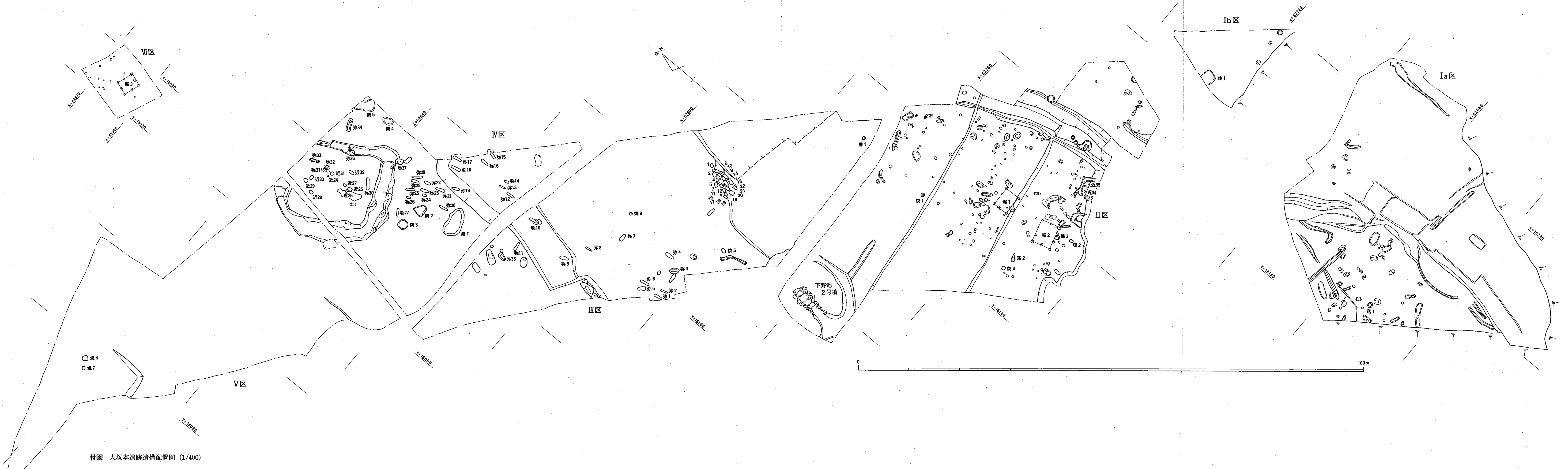
一般国道 10 号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書

第 9 集

1998年（平成10年）3月31日発行

発	行	福岡県教育委員会 福岡市博多区東公園7-7 電話 (092) 651-1111
印	刷	久野印刷株式会社 福岡市中央区天神5丁目5-8 電話 (092) 741-0637

付 図



付図 大塚本遺跡遺構配置図 (1/400)